真名海

弐

尾道市立高等女學校校友會

『またま』第二號目次

◎口繪
○第二回卒業生　○第四回卒業生

◎訓諭
○希望と實現　杉野會長

◎思潮
○御大典に就て　三宅榮
○色彩の表徴　大河內定雄
○裁縫研究に就て　四田テルすゐれん
○タゴール研究に就て　松本智惠
○我が斷片

◎文苑
○教員室と運動場　湘陽
○花に就て　阪本花代
○タゴール（新月）より　仝人
○口語詩追懷　村上下枝
○和歌　俳句
○難点作文　○普通作文　○書簡文
○暑中休業日誌　○冬季休業日誌

◎學校彙報
○學校記事　○朝會訓抄　○現在職員
○生徒原籍府縣別　○生徒原籍都市別
○生徒族籍別　○父兄職業別
○第四回卒業証書授與式　○休格檢查成績

◎校友會報
○廣島修學旅行記　○運動會記事
○卒業生送別會記事　○學級會記事
○學藝大會記事　○閲覽室報告　○役員

◎同窓會報
○哀悼の辭　○第四第五回同窓會總會
○卒業生狀況　○雁のつて

◎消息
○悼長澤先生　阪本廣枝
○御卒業の皆樣に　多富久子
○八王寺より　齋藤ミ子
○卒業生消息

◎會計報告
○校友會會計報告　○同窓會々計報告

附錄　◎同窓會員名簿

第二回卒業生　（大正二年三月）

第四回卒業生　（大正四年三月）

眞たは　第二號

訓諭

希望と實現

杉野三治郎

人一度ひ國に生るれは。先つ其國体を知らさるへからす。人一度ひ家に生るれは先つ其家の性質習慣を極めさるべからす。其國に生れて其國を愛し其家に生れて其家を守るは蓋し人生自然の情なり。國の隆昌と家の繁榮とは。家國の要素たる其人々が家國の成立ち習慣等を歷史的に研究して。長を採り短を捨て。動的社會の進運に後れす。日夜奮勉努力倦ます撓ます一致協力するに外ならさるなり。學校又然り諸子。今籍を本校に置きて本校の生徒たり。既に本校生徒たる以上は須らく本校の性質及歷史を熟知して校風の發揚と校運の發展とをはからさるへからす抑も本校は明治四十二年開校して以來茲に數年時に盛衰汚隆ありしも本校か開設當時に定めし大主義は依然として變る事なく此等變遷か毫も本校の價値を傷ふ事なし。否却て益々其堂固を加へて以て今日に及へり。本校は年尙壯にして意氣亦橫溢せり。徒に舊型を墨守して事無きを貪り惰眠に耽る靜態に非らす。本校は刻々變化し又活動して確に生命あり。夫れ溪流の潺々として流るるや。幾丈の深きも澗底を透して清徹玉の如し。是れ流水は汚物の停滯を許さゝれはなり。抑も物の腐敗し且つ虫の生するや。物体の靜止して變化なく活動なきかためなり。假に例を近きに取らんか。諸子か用ふる袴の多くは毛織物なり。毛織物は兎角虫に侵され易し。然るに諸子か毎日學校の出入に使用し。一日として其使用を怠らされは。何の日にか虫の之を侵すの機あらんや。虫の之を侵すは大切に箪笥の底に仕舞置きて年に一二回稀に用ふるか爲なり。斷へす之を使用せは樟腦ナフタリンを用ひて虫を防ぐの要なきは明なり。人体亦然り。一日一日と徒に偷安安逸を事とし更に身体を勞せされは。一時的安樂を得へきも。將來必らすや元氣消耗して遂に短命に終らん。之れ畢竟偷安は身を亡ほす基なりと云ふへし。本校の大業を成すは前途尙遼遠なり。今日吾人かあらん限りの力を盡し。愼重に注意を拂ふて事に從ふは。之れ將來大業を成す基礎を鞏むるにあり。一時の隆盛を見て之に滿足を表するは心中既に惰氣を萌して本校を靜止の狀態にあらしめ。ついに大成を誤らしむるものなり諸子よ。決して。小成に安する勿れ。本校は目下努力時期なり。行程の中途にあるなり。中途にして挫けんか徒に他人の笑を買ふのみ。吾人は須らく諸子と結束して本校を擁護し。校風の發揚校運の發展に努め。あらゆる業務に砥礪して終に本校遠大の目的に達せん事を心掛けさる可らす。諸子夫れ勉めよ。

御大典に就いて

三宅　素

今秋行はせらるべき御大典は、天皇陛下御一代一度の最大の御儀式で誠に御芽出度い御事であります。それで我等國民は御大典が。

(一)如何なる意味合のものか。

(二)その起源變遷はどんなものか。

(三)御即位の儀式は如何なる風に行はるるか。

(四)大嘗祭はどういふ風に行はるるものか。

といふことの大体を心得ておく必要があります。以下少しく順々に説明を致しませう。

一御大典の根本の意味。

御大典と申し上げるのは御即位の御大禮と大嘗祭とで御座いまして、此の二の御儀式は相互に裏表をなしてゐて、二つであつて實は一つと申してもよい程密接な關係のあるもので御座います。先づ

◎御即位式

は新に位をお繼ぎになつた天子様が、その事を更めて遍く臣民に御示しになる御儀式で、天皇は、非常に美しい高御座《天子様の玉座》にお登り遊されて、臣下の拜賀を受けさせ給ふのであります。天子様の御位には、先帝崩御と同時にお即きに、なつておられる、その御式は踐祚と申上げる。そこで、その御踐祚のことを人民に更めて御示しになる式を御即位式と申して區別せられるのであります。

西洋で我國の御即位式に當るものには戴冠式といふのがあります。是は寺院で宗教的儀式を以て行はれる。そして其の意味は、新帝が僧正によつて、帝たることの承認を人民に求め、僧正が冠を帝に加へるのであります。

然るに我國においては、先帝のお定めによつて御位にお即きになつたに就ては臣民も其の心して、先帝に仕へ奉りしと同樣忠實（マメヤカ）にお仕へ申すことを望ませられるのであります。

此の相違は國體の根本的相違から來る自然の結果でありまして誠に意味深きものであります。

即ち、我國に於ては、皇室と臣民との間柄は、義から申せば君臣、情から申せば、長れ多き事乍ら我等臣民は皇室の御末のいや榮えに榮え給ふて生じたる幾多の御分家の子孫でありまして《勿論歸化人の子孫もありますが是等は大和民族に、血統的にも精神的にも同化されてゐます。》丁度、親の命で其の子

が相續したのを家族の者共が當然の事と致し、其の間に何の不思議もない。そして同樣に分家の者共も是を當然の事として自然其の家に家督相續の祝儀でもありますれば分家の者共、偖は出入の者共も其の席に列り、お祝を述べ、又共々に力を合せて本家主家を守り立てて行く心持を新にするので、誠に其心持は自然で滑らかで、そこに何等の說明や考慮を入れる餘地はないのと同樣の儀であります。

然るに外國では人民の大部分が深い關係のない餘所のものが……時としては昨日までの競爭者若くは敵が……人民を支配するやうになり、從つて人民と君主との間には、深い溝があります。其の溝を氣に致しまして、或は支那のやうに之を。天の命によつて君臨するのであるとし、或は歐洲に多く見るやうに、神の御承認によつて君となるのだとして、人民の服從を要求する、即ちそこに僧侶の取りなしが必要になるので、戴冠式が宗教的になる所以は、實に茲にあるのであります。唯今では各國共君主が幾代か人民を支配して自然愛敬の念が兩者の間に流れるやうになつたには相違ありませぬが、我國と比較にならないのは寧ろ當然であります。

此の意味を深く考へて見ますと、勿體ないこと乍ら、皇室に對し奉りて吾々は心の底から湧きかへるやうに懷しい情が起りどうか微力ながらも皇室の御爲に精一杯盡したいといふ念を新にするので御座います。

以上、御即位式の根本義で、諸子に再讀三讀を要求する點であります。

◎大嘗祭はもとオホニヘと云つたのを後には字音でダイジヤウと讀むやうになつたのであります。是は新帝御即位の初め、秋季に其年に實つた新穀を以て御饌御酒を造り其の他の神饌と共に、天照大神及天神地祇に捧げ給ひ、親らも聞食し給ふ御親祭であります。其の以後毎年十一月に同樣の祭があるのを新嘗祭と云ひます。此のお祭に於ても、天皇が御先祖を大切に遊ばさるると同時に吾等臣民の先祖をも大切に思召し下さる有難き御德の表はれて嬉しいことであります。又御大典の後大饗として文武の大官を召されて宴を賜はりますのは、吾等一般人民の總代として列せしめらるゝのであります。

二御大典の起源變遷。

即位禮大嘗祭の御儀式は共に時代を經て追々に整頓して來たもので、上古に於ては、踐祚と即位、新嘗と大嘗と、それ〳〵區別はなかつたのであります。其の起源は云ふまでもなく國初にあります。

◎即位式に就ては、神武天皇の御時、天富命齋部を率ゐて天璽の鏡劍を捧げて正殿に安置し奉り、天種

子命は天神の壽詞を奏し、可美眞手命は、內つ物部を率ゐて矛楯をたてゝ威儀を整へ、道臣命が來目部を率ゐて宮門を警衛し、其の開閉を司り、いと嚴かに御即位のことを天下に示し給ふたとあります。其後踐祚と即位と區別をせられたのは桓武天皇の御時からだといふことであります。

◎大嘗祭も元は新嘗祭だけで、天照大神が新嘗祭を行はせられたことは簡單ながら言ひ傳へられてゐます。皇孫瓊々杵尊の御時には御儀式の程も稍悉しく傳へられてゐます。愈即位後第一の新嘗を大嘗といつて區別をするやうになつたのは天智天皇の御時だそうであります。斯くの如く、御即位の禮も大嘗祭も我國の最古の禮式であつて、國初以來、祭政を掌る家即ち齋部、中臣二氏、その式を司り。軍事を掌る家即ち大伴、物部二氏が警衛を致して式の莊嚴を力めたので、此の型をくづさぬやうにせられてゐたが、隋唐の制を採用せらるるに及んで、餘程變つて參りましたが、其れでも、國風を重んぜらるる所よりして、大嘗祭は全く純日本式で、その場所でも《悠紀殿主基殿等》萱草葺、黑木柱《皮もはがない丸木》で葛を以て組み立てられるのであります。

三御即位禮

御大典を行はせらるる場所は、先帝陛下の深き思召によつて、京都に於て之を行はせられることに定められてあります。そして御大典前の御儀として、

一、賢所（宮中溫明殿奉安の神鏡）に期日奉告の儀

二、皇靈殿（御歷代の御靈を祭れる神殿）神殿（天神地祇を祭りある神殿）に期日奉告の儀《以上宮中にある三殿》

三、神宮神武天皇山陵竝前帝四代の山陵に敕使發遣の儀

四、齋田（大嘗祭にお供になる新穀を作らるる御田）點定の御儀（京都以東以南悠紀地方京都以西以北主基地方）

五、齋田抜穗の儀

六、京都に行幸の儀

がある譯でありまして、一、二、は本年四月十九日に、三、は仝廿一日に、四、は昨年三月五日に御擧行になりました。（悠紀地方愛知縣主基地方香川縣）

京都行幸の御儀は御大典當日少し前にあるので三種の神器の中、御劔と御璽とは常の行幸にでも必ず奉じて行かれるが、御鏡《賢所》は此の度の如き非常特別の場合の外、陛下と共に渡御遊ばさるることはないのであります

偖、即位禮當日《十一月十日》には春興殿に於て賢所大前の儀があり、次に紫宸殿に於て、御即位式が執り行はれるのであります

即位禮當日賢所大前の儀

先づ春興殿（京都皇居內南正面に紫宸殿あり、其の東に御新築になるべき賢所奉安の御場所）の御裝飾があり、兩陛下は宣陽殿《紫宸殿の東》に渡御遊ば

されて、天皇陛下は御束帶帛御袍に御召替になつて御手水を召し御笏を執り給ふ。皇后陛下は御五衣御唐衣御裳を召され御手水を召し御檜扇を執り給ふ。皇太子殿下を始め奉り各宮樣方以下參列の諸員服を替へる。男子は束帶、女子は五衣唐衣裳、《男子の束帶には卷纓（マキアイ）、緌（オヒカケ）の冠に闕腋（ケツヲキ）の袍（ホウ）と垂纓の冠に縫腋の袍との二樣があり、色も縹色、緋、黑など種類があります》そしてそれ〳〵鉦、皷、衛門、など定めの場所に着きます。又威儀物と云つて、錦の袋に入つた太刀、弓、胡籙桙、盾、を捧持するものあります。次に賢所の御扉が開かれ、神饌幣物を供へられ掌典長祝詞を奏し訖ると、

天皇陛下　には式部長官宮內大臣の御先導皇太子殿下、親王、王、各殿下、內閣總理大臣、內大臣、大禮使長官の供奉にて春興殿に出御。侍從は劍璽を奉じ侍從長以下供奉、次に

皇后陛下、式部次官皇后宮大夫の御先導にて親王妃內親王王妃、女王、各殿下、大禮使次官の供奉にて出御。內陳御座に着御。次に

天皇陛下　賢所に御拜禮、御告文を奏し給ふ。次に皇后陛下御拜、皇太子殿下を始め奉り宮殿下順次御拜、終りて　兩陛下御入御《先導供奉等出御の時に同じ》次に諸員拜禮、神樂歌を奏する間に神饌を撤して御扉を閉ぢ、諸員退下するのであります、

即位禮當日紫宸殿の儀、

紫宸殿の裝飾が當日早旦から始められる。先づ本殿の南榮（ミナミノキ）に日像に五彩の瑞雲を繡した帽額《短き垂幕》が懸け渡され本殿の中央南面に三段の黑漆塗の繼壇を立てて、其上に天皇陛下の御座なる高御座（タカミクラ）を置き高御座の東方に皇后陛下の御座を設けられる、

皇太子殿下以下男子各殿下は高御座の前面壇下に席を設けられ、親王妃內親王以下女子各殿下皇后陛下の御座の前面壇下に席を設けらる。

紫宸殿南庭には東に左近の櫻と西に右近の橘と相對して立つてゐる其南方に錦の大中小旛兩樹を基準とし相對立して樹てられる、

かくて尊き紫宸殿は吾等微臣の想像さへし得ぬ程莊嚴な有樣となります。と、鉦皷の合圖で參列諸員各定めの位置につき、次に皇太子殿下男子各官殿下、高御座前面壇下に御着、

天皇陛下出御、高御座の北の階から壇上にお昇りになり、侍從は高御座の御左右の案上に御劍御璽を奉安し、又御笏を奉る。內大臣は高御座の壇上に昇つて御帳の外の東北隅に祗候し、侍從長侍從、及び侍從武官長侍從武官は壇下後方に侍立す。次に

皇后陛下出御、御帳臺の北階から御昇りになり女官檜扇を奉る。皇后宮大夫女官は御帳臺壇下に侍し。次で親王妃內親王王妃女王各殿下は御帳臺の前面壇

下に御着、
次に諸員最敬禮、
次に內閣總理大臣は紫宸殿の西階を降つて南庭に北面して立つ
次に陛下敕語を賜ふ。
次に內閣總理大臣南階を昇り壽詞を奏し訖りて南階を降り、次に萬歲旛の前面に參進、萬歲を稱ふる三聲、諸員之に和す。訖りて紫宸殿西階を昇りて座に復す。
次に天皇皇后入御《警蹕出御の時に仝じ》
次に鉦鼓を擊つ。各員退下。
即位禮一日後賢所御神樂あれども說明を略す。

四大嘗祭

大嘗祭を行はせらるる前に鎭魂の儀、神宮皇靈殿、神殿、並官國幣社に敕使發遣の儀あり。當日は神殿に奉幣の儀、賢所大御饌供進の儀がありますが說明は之を略します。

大嘗祭を行はせらるる場所は昔は紫宸殿南庭の南をお充てになつたこともありますけれど餘りにお手狹でありますから、大宮御所《皇居の郭外東南、仙洞御所の北に接す》に悠紀主基の兩殿をお建てになるのかも知れぬとのことであります、

悠紀殿では夕の御饌を主基殿では朝の神饌を、陛下御親ら供せられて、天照大神地祇をお祭り遊ばさるるのでありまして、何れも太古の建方《材料は皮附の本萱葛を用ゐ堅魚木をのせ千木を出す》で大嘗祭前僅か四五日間で仕上げる例になつて居る程質素なもので、太古の風をどこまでも殘してある點は特に注意せねばなりませぬ。

儀大嘗祭當日の御服裝は、御卽位禮の時と同樣にて其の上に、忌衣《又は齋衣》をつけ日蔭の蔓を冠につけられるのであります。《女子は日蔭の絲》

皇太子殿下を始め奉り親王親王妃、王、王妃以下各殿下、賴宮に御先著、次に
天皇皇后兩陛下着御、大禮使高等官等、衞門威儀物其他本位につくや、掌典等
神座を奉安、神座の東北方に御座を設ける。次に繒服竝麁服を兩殿の神座におき、各殿に齋火の燈燎を點ず。

悠紀殿供饌の儀、
天皇陛下廻立殿に渡御、御祭服を召され御手水を召され、御笏を執り給ふ。《此間供奉諸員服裝を易へらる》

次に皇后陛下廻立殿に渡御、御服を召され檜扇を執り給ふ。《此間供奉諸員服を易へらる》

次に大禮使高等官悠紀殿神門外の幄舍に參進各定めの位地につく

次に膳屋にて神饌の調理あり《此間稻舂歌を奏す》

次で掌典等御供物をなし掌典長本殿に參進祝詞を奏す。次に

天皇陛下出御、廻立殿より悠紀殿に至らるる御道には白布を敷き其上に葉薦を布き侍從は劍璽を奉じて定めの案上に奉安す、

御先導、供奉、卽位禮の時の如し、

次に皇后陛下御着《御先導供奉、卽位禮の時に同じ》

樂官は國栖の古風を奏し悠紀地方の風俗歌を奏し訖ると、皇后陛下拜禮ありて御還幸になる。

膳屋で調理せられた神饌は此時次第に南庭の廻廊に竝べられる、

次に　天皇陛下は御手水を召されて親ら神饌を御供へになる。其れを訖はらせられると、御拜禮があつて御告文を奏し給ひ、次に御直會卽ち御相伴の御膳に就かせ給ふ。訖つて女官は神饌を撤し、天皇陛下は御手水を召され、進御の時と同樣皇太子下殿以下供奉の諸員を從へさせ給ひて廻立殿に入御あらせられ、次には主基殿に神饌御供進の儀を執り行はせられるので御座います、時刻はお定めはありませぬけれども、古例によると、悠紀殿の御儀は午後八時頃から十一時まで、主基殿の御儀は午前四時から六時までですから、此度の御儀も略御同樣であらうかと拜察せらるるのことであります。

御大典後の御儀として

一、大饗（第一日豐樂殿に於て第二日及夜宴二條離宮に於て）

二、神宮に御親謁の儀

三、神武天皇山陵並前帝四代の山陵に御親謁の儀

四、東京御還幸の儀

五、賢所、溫明殿《宮城內》に還御の儀

六、東京還幸後賢所御神樂の儀

七、仝、皇靈殿神殿親謁の儀

を行はせらるるのでありまして、何れも重大な御儀式でありますけれども茲に餘り長くなりますから說明を省きます。

結　語

唯最後に此の御大典の御儀式は明治天皇の深き思召により明治四十二年にお定めになつたもので、第一、御質素の御精神、第二、國粹發揮の御精神のよく表はれてゐることであります。第一第二の御精神の程の表はれたる事項は數限りもないことで御座いませうが、今一二を申すならば、大極殿時代には御卽位式は大極殿で行はれたのでありますが、唯今の京都皇居は里內裏と申して大內裏が炎燒して後仮皇居としてお用ゐになつてゐましたままの御場所で、大內裏と比べては大層御手狹で大極殿其他大きな建物が多く不足してゐます。唯今は幕府時代とは違つて、御再興の御事など、思召のままであらせらるる

にも拘らず、其御事もなく、所謂里内裏の紫宸殿を其まま大極殿代としてお用ゐになるのは、誠に畏多いことであります。又即位にお用ゐになる冠、御服なぞ唐の制のものであり又纛旛、帽額などの模様も全く支那風のものであつたのを、それ〳〵改めさせ給ふて、旗は國初の史にある八咫頭烏、金鵄、又は菊花章、五彩の瑞雲に日像、月像、の模様などにお替へになり、御服の模様も支那風の龍などを排し桐の御模様にお改めになりましたことなぞ御國風の發揮に意を用ゐ給ふ程が窺はれて有難い事で御座います。

以上解し難い事も多からうと思ひますが、兎に角よく讀んでおいて、他日說明を聞く時の助けとせられんことを希望します。

色彩の表徴

大河内定雄

暖色と寒色と。

色彩には暖色と寒色の區別があることは既に御承知のことゝ思ひます。即ち三原色、黄、赤、青の內黄赤は暖色であつて青は寒色であります。吾々が見る色は隨分澤山數がありますが其れを分解して見ますと皆此の三原色から成り立て居るものでありまして黄に近いものは暖色、青に近い色は寒色の方に這入ると云ふ譯になります。

ですから色彩は必ず暖、寒此の二つの何れかに這入るものでありますが此の暖とか寒とか曰ひますのは之は色の感覺から曰ひますと決して直接的のものではありません。何故なれば色に暖いとか寒いとか云ふ性質があるとすれば此れに觸れて見ると暖みを感ずるか寒さを感ずるかと云ふに決してそんな事はありません。全体暖とか寒とか云ふことは皮膚の感覺であつて色は目の感覺であります。暖とか寒とか云ふのは目の感覺の言で云つたのであります。此の様に或る一の感覺を他の感覺の言で表はすと云ふことは屢々有ることで俗に云ふ『金切り聲』とか云ふ高い調子の音を黄色い聲だと云ふ様な譯で聲に色が見える譯はありませんが此れは耳の感覺と目の感覺とを結び付けて曰つた事であります。如何して黄色に近い色は暖で青に近い色が寒であると決つて來たかと尋ねて見ますと、此れは太陽の光から來る處の色の感覺によつて出來るので、つまり太陽の光の當つた所は多く黄、赤を含んで暖であります此れと反對に太陽の光から反對の方は青い色を多く含んで寒い色となるのであります。ですから、あらゆる色彩の暖寒何れに屬するかを決定するには黄、赤に近い色を暖、青に近い色を寒と考へればよいのであります。勿論黄、赤、青を含む其の量によつて暖寒に程度の有るのは言ふまでもありません。

進む色と去く色。

各種の色彩を見ますと、其の色の種類によつて、或は遠く見えたり、近く見えたりするものでありまして、進む色、即ち近く見ゆる色、去く色、即ち遠く見ゆる色とがあります。例へて見ますと赤、橙、黄等は極く近く見ゆる色でありまして青等は遠く見ゆる色であります。此の關係は丁度暖色と寒色の區別とよく似て居ります。此の關係に不注意なりし爲め往々畫家が人物を描く時、衣服の模樣と人物とが離れ離れになる場合があります。進むとか去くとか云ふ此の原因を尋ねて見ますと種々ありますが主に光の屈折の度が異つてゐる爲に青は網膜の後方に現はれて來ますので遠く見え、赤、橙、黄等は前の方に現はれて來ることが多い爲めに近く見ゆると云ふ譯なのであります。ですから此う云ふ原則を定むることが出來ます。即ち暖色は寒色より近く見ゆると云ふことであります。此の樣に色が暖いとか、寒いとか、遠い色だとか、近い色だとか云ふことは色の感覺以外のものを人間が勝手に附けたものであつて此れを色彩の主觀性と云つて居ります。其れに對して色彩の個々の性質を色彩の客觀性と云つて居ります。要するに色彩には主觀性と客觀性との二つがあると云ふ譯であります。此の色の主觀性と云ふことに付て最も大切な事がありますが。本文でお話しやうと思ふ事で、それは色彩の表徴と云ふことであります。

色彩の表徴。

色彩の表徴と云ふことは一寸說明が六つかしいのでありますが、例へて見ますと吾々が或る一つの色を見たと致します。すると其の色の感覺から必ず或る何等かの觀念が浮んで參ります。此れは其の色から直接關係して起る所の觀念でありますが、其れ以外に他の或る觀念が結合して來る場合があります。其の觀念を其の色の表徴と云ふのであります。即ち表徴と云ふことには二つの意味があつて其の內の一は全く其の色本來の觀念であつて、他の一は本來の觀念でなく、或る理由の爲めに或る他の觀念が結合して來る場合であります。例へば此處に十字架がある此れは形狀其のものから曰へば只の十字架に過ぎません。けれども此れはクリストが十字架に掛つて死なれたと云ふ理由の因に遂に十字架がクリスト敎の附号となつた樣なものであります。此の附號とか又は表號と云ふものは古くから多く行はれたものでありまして象を以て亞細亞を意味し敝襤を以て平和を表はすとか、或は圓形を以て無始無終を表はすと云ふ樣な類であります今其の主なる例を示して見ませう。

錨—希望　　アポロ神—音樂
酒神バカス—宴樂　　赤の帽—自由

白旗ー和合、平和
赤旗ー戰爭
犬、牡牛ー警戒保護
矢にて貫きたる心臟ー悲哀
ライアー(古代の樂器)ー音樂
柘榴ー聯合一致、西班牙
新月及星ー土耳古
百合ー佛蘭西
黑鷲ー獨逸
船ー航海
松明ー知識
烏賊ー印刷業者
ランプー勤學
駱駝ー耐忍

半旗ー死
王冠と王笏ー主權
鳩ー平和
月桂冠ー勝利
パレットと筆ー畫家
熊ー露西亞
星と線條ー北米合衆國
獅子ー英國
スフインクスー神祕
喇叭ー新聞社
蹄鐵ー幸運
沙漏ー時
開きたる書物ー勉強

以上は各種の物体を以て表号としたものでありますが次には花を以て自己の思想感情を他人に通ずる表号とすることがあります此れを花語といひまして西洋では盛んに行はれて。花を以て人を慰安し。或は約束を結び。又は親睦を計るなどの習慣がありますが。日本でも近來花卉を贈答品になすことは屢々ありますが西洋の花語の様に明瞭確的な偶意を有するまでにはなつて居りませんから。只に西洋の習慣を模倣し所謂ハイカラを氣取つたと云ふだけで甚だ無意味に用ひられてゐる様です。花を表号とする様になつた原因はやはり色の感覺と性質とから來るので花が種々異つた色彩と性質を備へてゐるので思想感情を表はす表號とするには至極便利だからでありま

す。今其の主なる例を擧げて見ますと

アカンサスー美術或は技術
林檎ー誘惑
躑躅ー節制
椿ー秀高
ダリアー不安定、華美
雛菊ー潔白、無邪氣
忘勿草ー我を忘るな
紫陽花ー汝は冷淡なり
レモンー興味、快味
白百合ー潔白
鈴蘭ー幸福の歸來
桃ー汝の性質と汝の愛嬌とは相當せず
桃の花ー余は汝の奴隷なり
薊ー端嚴、獨立不羈
菫(青)ー誠實
紫蘇ー歡迎
黃百合ー愉快
橄欖ー平和
橘の花ー貞節、新婚の歡樂
棕梠ー戰爭、優勝
楓樹ー貯藏、保存
金盞花ー悲哀
石竹ー大膽なること
柘榴の果ー愚
紫苑ー追懷

アネモネー病氣、豫期
同花ー好愛、選擇
韮蒜草ー悲みの記念
秋海棠ー醜形、畸形
杉葉ー我は汝を愛す
菊(白)ー誠實、眞理
蒲公英ー神託、御別れ申す
月桂樹ー名譽、優勝
ヒヤシンスー遊戲、競技
水仙ー自誇、自尊
松ー憐愍

梅ー誠實、眞摯
櫻草ー少年時代、腕白
薔薇(赤)ー內氣に恥し
菫(黃)ー嫉妬
鶴冠ー不死、不朽
鳳仙花ー我に觸るゝな
百日紅ー雄辯
蔥尾ー使者
三色菫ー思想、思慮
芍藥ー羞恥、內氣なること
鳳梨ー汝は圓滿なり
柿ー余を自然の美中に置け
柘榴の花ー充分なる華美
鬱金香(絞り)ー美なる目附き

以上は色彩でばかり表號となつたのではなく其性質からも色々な意味で定められたものでありますが以下個々の色彩に就ての表徵を說明して見やうと思ひ

ます。

黒と白。

黒は何となく謹直な情を呼び起す色でありまして。白は冷かな。そして爽快な情を呼び起す色でありますが。此の色は共に暖みのない色でありますから暖かき人間の生命を表はす表徴とすることが出來ません殊に黒は運動を失へる狀態を表はすに適當な色でありますから西洋では死とか休止とか黄泉とか云ふ樣な意味に用ひてゐます。支那人は又特別な考を以て居りまして彼れ等は色を五種に分つて青と黄と赤所謂三原色に更に黒と白とを加へて五色と云つてゐます。此の五色を更に天地の方角に當てはめて木火土金水に配當して居ます。此れは支那の陰陽五行說と云ふものと關係して發達して來たものでありますですから黒を北方の色又は『水の精』とか智の表徴としてゐます。佛教では涅槃の色として居ります。チベットのラマ教によりますと黒は地獄の表徴としてあります。白は黒の反對で西洋では精神的な意味に用ひ『光の國』の表徴としてあります。人間的の表徴としては『六根清淨』の意に用ひ又罪却消滅と云ふ意に用ひられて居ります。日本では潔白、支那では西方の色『金の精』とか『義』の意味としてあります。佛教では清淨な色。大日如來の色であるとして又信仰の色として居ります。印度サンスクリットでは笑を表はす色としてゐます。以上黒と白との各が他の色に加はると如何なるかと言ひますと黒が加はると感情は益々悲哀となり白が加はると感情は一層爽快となります。黒と白との間に一色があることを忘れてはなりません。それは灰色でありまして此は一種疑の情を表はす色であります。西洋では哀愁とか力の拔けたとか怠屈とか云ふ表徴としてあります。黒と白との用ひ方が日本と西洋とは異つてゐる所があります。西洋では白を祝ひの儀式服に用ゆるのを日本では喪服に用ひ。西洋では黒を喪服に用ゆるのを日本では祝の儀式に用ふると云ふ樣に全く反對に用ひられてゐると云ふ具合で自然其の用ひらるゝ場合を聯想すると又種々の意味を含んで居ります。然し何れも儀式の服裝に用ひらるゝ點は西洋も日本も同じ事で西洋人の着る燕尾服の黒とネクタイカラーの白とは丁度日本の白襟と黒紋附とに匹適すべきものであります。

黄と紫。

黄は爽快の情を生ずる色で紫は莊重の情を表はす色であります。西洋では黄色を最も高き生命の力を表はし又別の意味で不純。不滿足。或は不義の生活の表徴ともなつて居ります。支那では土の色。或は信の色と云つて居ります。佛教では瑠璃樹王の表徴となつて居ります。又不動。怒の色とも曰はれ。浮世

人道の表徴ともなつてゐます。紫は西洋にては決心或は斷念の色と云ひ、又沈鬱なる情を起す色でありますから心悲しき決斷の意味を持つて居ります。若し此れに愉快の調子の赤色を混じて見ますと一層莊重の情を起して人生の悲慘を嘗めたる結果樂しい思出に耽ると云ふ意味にもなつて來ます。西洋では此の色を憧憬の表徴としてゐます。支那では青、黄、赤に白と黒とを加へて五色と曰ひ此れを正色と曰つて尊んで其の他の色は間色として余り尊ばない傾きがあります。故に支那では紫を正色に入れずに余り好い色として居りません。

橙と青

橙は暖色で非常に爽快な情を起す色でありますから人情的の色と云ふことが出來ます。此の色は健實な理想を表はすに最も都合のよい色で時として崇高な印象を與へる色でありますから、往々權力とか王侯的とか、すべて威權を表はす色となつて居ります。次には青でありますが青は沈靜な色で彼の青空の樣に人の逆せる頭腦を沈靜ならしむるが故に此の色を利用して學校などの修身の教室、作法室とか或は宗教的の說教所などの壁色等に用ふると人の精神を沈靜ならしむるに至極適當であります。此の色は紫と同じ樣に莊重の情を起す色で寒色でありますから非人情な色と云ふことが出來又靜止的の色でありますが靜止と云つても黒の樣に死の靜止と云ふ樣なのとは余程異つて靜止の内にも人の血潮が通つてゐると云ふのであつて、西洋では冷やかな思考の表徴となつてゐます。支那では此の色を東方の色として木の精とか憂の色としてゐます。佛教では新禱の色としてあります。チベットのラマ教では阿修羅の色として凶惡な色としてあります。

赤と綠。

此の二つは色彩の王に擬せらるゝ色でありまして、赤をキング、オフ、カラー、綠をクヰーン、オフ、カラーと曰はれてゐる位であります。赤は最も人の目を引き興奮性の色でありまして、此の色を暫く見つめた後血行の具合や呼吸の具合を試驗して見ますと其の有樣が全く異つて來ると云ふ程であります。又赤く塗つた板屏に接した植物は能く繁殖するそうであります。兎に角感情を興奮させる色として人の目を引き附けるので人情の溢れたる色とか又野心を呼び起す色などゝしてあります。人間で曰へば青年的の色、西洋では熱情の表徴となつてゐます。又怒の色、爭鬪の色とも言ひ、支那では赤は南の色で火の精と云ふてあります。色の内では正直の色と云つてあります。此の赤い、興奮性の色を利用して音樂堂とか劇場とかに淡紅色を施すと云ふ樣な事も至極面白い事であります。綠は赤に比較すると人情に欠けた色

であつて吾人の世界を包む色でありますが眼には柔かな靜かな色でありまして柔和の表徴となります。此の色に黃色を混ぜると生活に新らしみを感ずる色となり赤と同樣に青春の表徴となります。然し赤に比較すると少しばかり男性的の長所を有して居ります。又此の色は希望の表徴ともなります。

裁縫研究に就て

西田テル

卒業生の皆樣、月日の立ちますのは誠にお早いもので御座います。皆樣とおわかれ致しましてから數月又は一年餘りにもなります。折り々卒業生の方から御樣子承り心うれしく存じます。之に代へて何か一筆認めて皆樣の御參考になる事あらばと存じ些か裁縫研究に就きまして御話して見たいと存じます。總て研究と申しますものは何事の上に於ても必要と存じますけれども殊に婦人として最も大切と存じますのは裁縫と存じます。何となれば裁縫は世の風俗に伴ひ變遷につれて遷らねばなりません。然るに明治維新後風俗の變遷は實に有史以來未曾有の事で御座いますけれども、裁縫界は之に伴ふ能はずと云ふ始末で御座いまして、實際に於ても專門家の諸先生の御話になります事で御座います。故に私は研究と云ふものは一つは知識を廣むる爲め、一方に於ては見聞を強くし技術の發達を計り、善を取り惡を去り、研究致したいと存じます。此所に些か研究致しました部分を示し御參考に致したいと存じます。

(1)引合せ

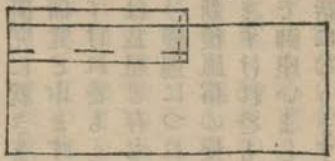
衣服を巧みに仕立上げんとせば先づ引合を巧みにせよと云ふ事なり。木綿はさなくとも絹物になれば殊更必要にて、假令ば此に甲乙の者ありて全時に銘仙の袷を縫ひ上げたとせんか、甲は百点以上の出來榮えとし、乙は五十点以下の上りとせば、之に於て甲乙の差異はどこにあるかと云ふ疑問が起る。即ち甲は引合完全にして注意行き屆きたる点である。例へは衽附にて說明せば、身頃一尺衽一尺上りたる所に待針を打たんとせんか、不注意の者あり、身頃一尺衽一尺三分の割合にて我知らず待針を打ち縫へば此に於て三分の弛みを來たす、故に小皺となる。皺が寄りたりとて鏝を當てば一時は効あれども暫らくすると元の皺となる。斯樣の有樣なれば引合せに注意なし、仕立物をせば著しき上手下手のあるものなしと信ず。羽二重斜子等を縫ふ上に於ては殊更左の要点に注意し、時間を要すれども抄ひ縫ひにてなし仕上げをせば下手の鏝を當てるよりも遙にきれいと思ふ綿入の袖に就て

仕立上寸法

袖丈一尺六寸、袖口六寸、袖付六寸五分、袖巾八寸

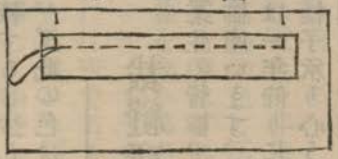
五分、袖ラキ一分、右標附に付て、

第一圖

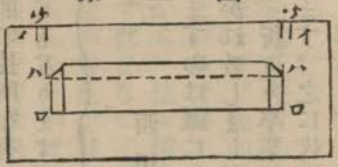


注意 袖裏の幅狭き場合袖口切を二分より三分迄持出す事を得、普通にても一分位持出したる方宜しと思ふ。

第二圖



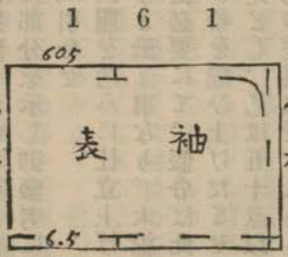
第三圖



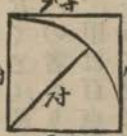
袖口切を掛け終らば両端の縫代を第三圖の如く折り横を先に次に縦の縫代を單衣の裾先の如く而してイとロとを合せて新け弛みを平均せしめて躾を掛くべし

《イ》の説明

イは袖口切の丈標より五厘外の方に向つて印をなす故にイとハとは五厘布目が斜になる故なり、されば袖口切のロとロとの間の長と袖裏のイとイとの間の長とは一分の差なり即ち袖裏の方が一分の弛みに期するなり何故一分弛るくするかと云へば此所に三合の米袋あり其の米袋に三合の米を入るれば適度なれども三合より多く入るれば米袋は張るに違いなし故に両端のイとロとを合せて新け躾を掛くる所以なり之れ即ち袖口を完全に仕立てんとする一の基礎にして縮緬の袖口切と紅絹の袖裏秩父の袖口切と紅絹の袖裏又毛繻子の袖口切と木綿の裏等最も此心掛必要なり。



標附け方



袂形の作り方（一寸の丸みとして）

二寸位の厚紙を切り作るべし

袂の丸みは形を當て標を附けるべし

袖　底

三分の縫代　八七五（即ちソデフキの二倍加へたるもの）

注意　紅絹類又は甲斐絹は五厘より多く詰める

袖底の幅標と袖山の幅標の異なる説明

異なる所以は袖口の方にて布目を正しくして綿を含むる故なりされば袖附より一寸餘り下りたる所より袖山の巾標に袖フキの二倍を加へたる寸法を附け標より一寸餘り下りたる巾標《實際の巾》とに尺を當て中間に標を附くべし

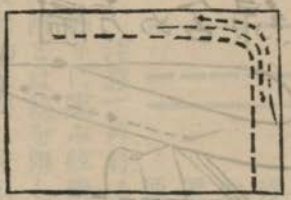
振の所にて五厘詰めたる理由は表振りと裏振りとを縫合はす引合せの加減なり

次に縫方及び綿の含め方

(1)縫方

表裏共に單衣と異なる事なし但し裏袖口標より一寸餘り普通より小針に縫ふべし《折目を掛けざるが爲なり》

丸袂の仕方

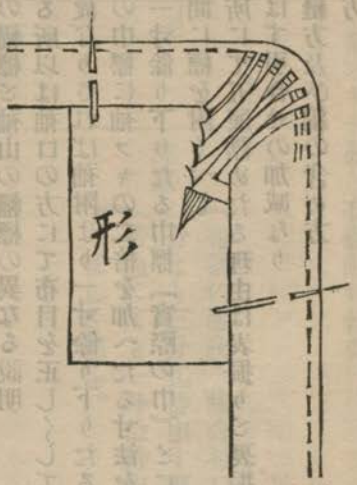


圖の如く一分づつ離して二度縫ふ其の時下の針目に習ひて縫ふべし

明記せば次の圖の如し

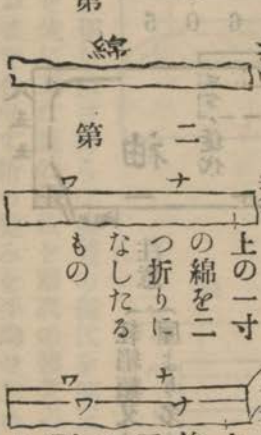
一寸五分程糸を殘すは形を當て糸を縫ひしむるが爲なり

右の如く縫ひ終らば形を當て待針を打ち左圖の如く襞を平均せしめて鏝を置き表に返して躾を掛くべし



綿の含め方

先づ普通の厚みの綿を一寸巾に切り袖口明の二倍に一寸五分餘り加へ作るべし次に其の綿を二ツ折りになしワナとす。ワナとなしたる五分巾の綿を又わなより三分に折る即ち圖の如し

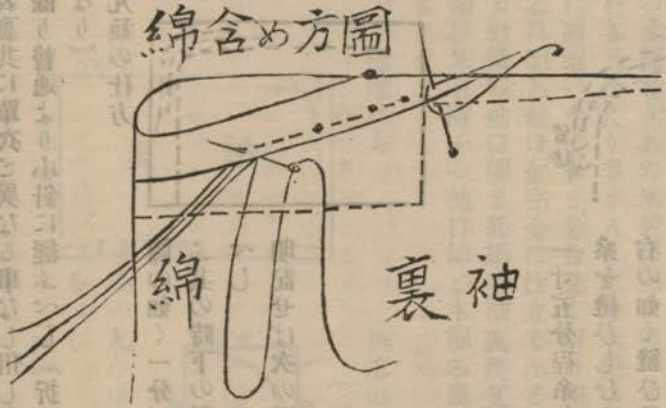


上の一寸の綿を二つ折りになしたるもの

上の五分巾の綿をワナより三分の巾に折る即ち上四枚下二枚の厚みになる

斯の如く綿を作り終らば圖の如く掛針に掛け綿を弛めに袖口標より三分袖口下よりフキを出し又袖口標の所にも出し次に一分五厘位の針目にて縫代裏袖綿のみを抄ひ一寸二三分毎に綿。縫代裏袖袖口切を抄ふ即ち圖にて示せる黒點は一寸二三分毎に袖口切の方に出す印なり

終りも始めと仝じ

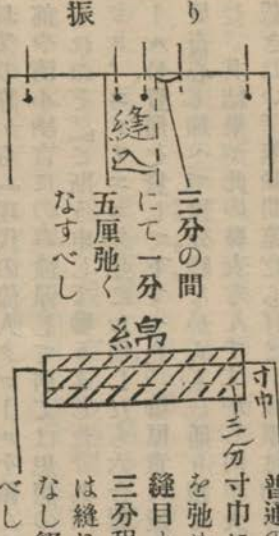


注意

前記したる如く縮の弛みと裏袖口切と引合せ加減とにて完全に調和すれば注意なし仕立つるべし

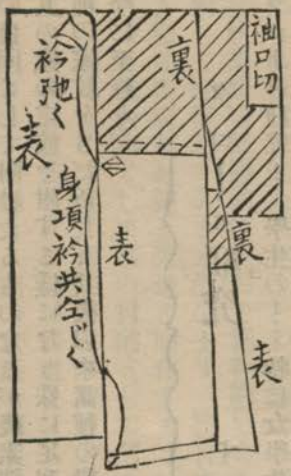
○振りの縫方及び綿の含め方第一表裏の縫目を合せ待針を打ち其の時一方に於て六枚の厚み又一方は二枚の厚みなれば二枚の厚みの所にて三分の間にて一分

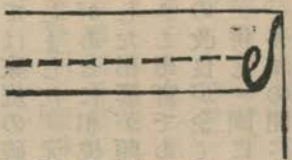
五厘餘り弛くなし其他は稍表八ッ口を弛めに打ち掛針に掛け抄ひ縫にてなすべし斯の如く縫ひ終らば圖にて示せる如く綿を振り口に當て綴ぢ附け躾を掛けべるし



待針の打ち方　綿の含め方

羽織衿附け方





六分の二分の一即ち三分の折目より一分五厘上りし所に待針を打ちかけ針に掛け抄ひ縫ひになし下より四五寸の間は半返になし附けるべし

待針の打ち方の加減は上圖に知せる如くなし打つべし附け終らば平鏝を置き折はなるべく淺くして衿先は普通に縫ひ絎け附くべし

注意　衿肩は他より小針に絎けるべし。

終りに臨み紋附に就きて

紋附とは紋を附したる衣服をいふ又紋服とも稱す男女老幼を問はず日本服には儀式の時には凡て紋を附したるものなり紋には定紋日向紋表紋とて代々定まりたる家の紋あり紋には五紋。三紋。一紋あり近來は一紋稀なり儀式に用ふるは五紋にして三紋は稍略したる方なりされども婦人服は餘り嚴格なるに依り普通には三紋を用ふ紋の大さは流行に依り異なれども大抵男物は一寸。一寸一分一寸二分を越えず女物は普通九分とす小紋染江戸褄模様の紋は三紋になすべし

紋の由來

紋は元織紋より起りたるものにして菊桐の御紋章も又御袍の紋より出でたるなり又家紋と云ふ事は保元平治の頃よりありしものにして主に武家の旗或は幕

の目印として附けたるものなるが後素襖直垂小袖に其の家の定紋を附する様になり殊に足利時代より諸種の家紋をさだめたり其後以來諸種の變化をなし現今に至れり。

タゴール研究

すゐれん

タゴール研究！　學生の……特に女學生の……柄にも無い現代の偉人印度の哲學者詩人タゴールを研究して而かも之を公衆に向つて發表しようといふのは何たる大胆な行爲でせう。實をお話しますと在京の叔父の許から『現代の偉人クゴールを讀んだか紫式部や清小納言にのみ憧憬して居ては思想の進歩は見られぬぞ。』と斯う申して參りました。其所で學校のミス、エッチエス先生にお伺したら六合雜誌のタゴール号壹冊を貸して下すつた。御厚意に感じ多少の好奇心も加へて沒分曉（ワカラズ）なからも一通り讀んで見ました。其結果が此の發表なんですから何卒大目に見て戴きたい。無論間違だらけといふ事は初めから承知して居ますから宜しく御訂正御示導の程を願つて置きます。

近來歐洲から日本へ渡來した思想は旧物打破でありますす。猶少しく詳述しますれば。旧社界の制度法律規則といつた様なものから旧習慣旧道德旧風俗といつた様なものに至るまで悉く之に反抗的態度を取つて一切打破しなければ止まない而して其所に新らしい或物を建設しようとして居ます。トルストイにしてもイブセンにしても皆んなそうです。試に一篇のノラを取つて御覽なさい。又試に復活を一讀して御覽なさい。旧人を捨てゝ其所に新人を迎ふるといふ事には些の躊躇をも持たないではありませんか。そして彼等は其れを以て新生活に入るのだ復活したのだと誇つて居るではありませんか。ノラにしてもカチユウシヤにしても風敎上餘りよくない學生の到底目にすべきものでないと言はれて居るのは之が爲です。然るを歎はしいではありませんか。此等西洋の文物の輸入によつて我が日本の青年淑女は悉く之に眩惑し之に感化せられて。進み好んで皆この洗禮を受けて居ます。其の結果としては道德の革命も叫はれるし新らしい女も發生しました。猶ほ甚しきに至つては家庭の破裂を來し學校のストライキをも惹き起しました。元より一事件の發生にはそれ相當の原因があるに相違ありませんが。兎に角近代思想の齎らした影響が頗る大なるものあるは決して疑ふへからざる事實であります。勿論時勢の進歩に伴うて社會の改良が企てられるのは理の當然では御座いますが。併し一國には一國相當の國体があり歷史があつて。多年の間に現今の世態といふものが形成せられ

たのでありますから。一朝一夕に之を變改する事は出來ないのであります。歐洲の內でも別けて北歐は年中灰色に曇つた天氣で陰鬱な事といつたら何とも形容の出來ない程ださうです。さういふ地方に住居して居る者は是非とも自然と戰つて生息しなければならないでありませう。自然と戰ふ極が自然の征服となり。やがて其れが異人種の衝突となり征服となり。異宗教の蹂躙となり撲滅となるのであります。トルストイやイブセンの思想は想ふに此の地理氣候の上に深く〳〵其の根抵を立てゝ居るに違ひなからうと存じます。然るに我が東洋の樂園ともいふべき此の日本に。即ち氣候温和地味豐腹人情淳撲なる此の日本に。直ちに之を移植しようといふに至つては驚かずには居られないではありませんか。要するに近代歐洲の思想は破壞的蹂躙的であつて我が日本の國体とは相容れなかつた様に思はれます。

然らば現代の偉人タゴールの思想はと顧みますれば近代思想の征服的に對して調和的であり。蹂躙的に對して抱擁的であると思ひます。換言すれば自然と人類との調和を圖り天地と同化するといふ事を以て其の主義教典として其の目的として居る様に考へます。諄くも申す様ではありますがトルストイやイブセンは其の主義とする處が何處までも人間臭味を帶びて居ります。卽ち人間の智慧を以て自然を征服しようと心掛けてますから其の教育主義なども勉めて國家有用の材を作るに汲々として居ます。有用の材も宜しう御座いますが人間やがて神といふ事を忘れて專ら生命の無い器械を作るといふに至つては驚くではありませんか。陸海軍を強くするも自然に對しての勝利者たらん事を希求して居るのであります。近時歐洲の戰爭に見ても十分御了解になる事と信します。斯ういふ目まぐるしい生活情態で誰かゆつたりした人意味を味はう事が出來ませう。誰が神を認め神を生識する事が出來ませう。私は今の世界を人間臭いと言うよりも寧ろ動物臭ひと言つた方が適當だらうと存じます。之に反してタゴールは神臭いとでも申しませうか。私達は人間であると同時に其れ以上の者にならなければなりません。實にタゴールは調和主義の哲人で平和を好む詩人であります。頗る情味に富んで極めて纖麗な色彩を有して居ります又タゴールは婦人の様にやさしみのある人に伺はれます。其の擧止の柔和な事其の言語の典雅な事其の風丰の愛に滿てる事凡そ神の子イエスの持てる風姿容貌は悉くタゴールが持つて居ります。或る繪畫を見ますと稍々後向きに擡げた其の頭。靜かに瞑目した。其の横顏。緩く膝頭に組まれた其の手。巍々たる其の顎髯。まあ何といふ敬虔な相でせう。タゴールの渾身は凡て愛を以て滿たされて居ります。

然らは此のタゴールの愛の思想は何處に根ざして居るかと申しますと、今から二千五百年前印度に生じたウパニシャットと其の後に起つた佛教とに根抵を生じた様であります。元來印度の思想はウパニャット以來常に幾分つゝの厭世的思想を持つて居て、動もすると現世を厭ふ風習があつたもので、佛教の教義に見て十分之を窺ふ事が出來ます。然るにタゴールの思想は現生活を此上もなき尊いもの意味あるものとして居りますから、所謂樂天家なんです。此が印度に生ひ立つた哲人として、タゴールが他に優れた處であります。以下少しく其の思想の由來する所を探求して見ませう。

ウパニシャットは西紀八百年以前から佛教發生の頃まで印度人を支配したバラモン思想であります。此の世の中の主宰者を梵といひます。而して我々個人の本性は此の梵と別物で無い全く同一である。と斯ういふのでありますが、此の思想の欠点とする所は梵を見るに哲學的冷靜的で頗る理智にのみ馳せたものでありまして、即ち道徳とか博愛とか説くに至らなかつたのです。

之を救ふのが佛教であります。佛教の教義とする所は慈悲博愛を主眼として梵我同一論の歸結を説いて居ります。即ち凡夫も悟れば佛なり人間何れも佛性を具して居るのに迷ふこそ哀しけれと訓して居りまして、タゴールが道徳を説き無限の生命を實現しようとしたのは確に此處に萌芽を生じて居ります。

ウパニシャットの哲學的なのに引換へてこの梵を人格的の者として説き之が宇宙の原理であると同時に我々個人の本性であると觀じ又之と同時に此の梵を恐るべき神の如くに見やうとしたのがバカバットギーダーであります。

次に又、世界も靈魂も元來神から離れて來たものであるけれども離れた以上は各々其の範圍内に於て自分自身の法則によりて働かなければならぬ。といふ説が生しました。之をラーマーヌヂヤと申します。言ひ更へますると父たる神が子たる私達に私達の爲し得る範圍内に於て若干の自由を許されたといふのであります。譬へば夫婦は別々であるが夫々自身の取るへき責任があつて夫々踏むへき當然の道があるが、其の異りたる道を踏み任務を果す事によつて夫婦の目的にも合ひ同心一体の實も揚るといつた様なものと存します。他面に於ては即ち斯くする事によりて神は再び自己より分離された人間を、神に復歸せしめ給ふ無限の愛を持つて居らつしやるといふのであります。

只今より百年以前に、此等の説を基礎として基督教や猶太教の教義を參酌して唯一神教を組立てた聖者があつて其の教義の發達に伴つて一人の有力な宣傳

者が出ました。之がタゴールの父なんです。此人が根本梵教會といふものを立てゝ其の教義を四ケ條にまとめました。

(1) 宇宙の原理は梵《ブラーマ》である。
(2) ブラーマは圓滿無缺唯一の實在である。
(3) 我等は此の梵より出て梵性を有する。
(4) 我等は此の梵を愛し梵の命令によつて人を愛さねばならぬ。

斯うです。

今のタゴールの思想は以上の系統を引て形成されたもので實に此の根本梵教會の宣傳者であります。故にタゴールの主義とする所は一言以て之を蔽へは愛となります佛教の所謂大慈大悲であります。だからタゴールは申します。『憎むへきものと憎まるへき者との差別は無い、其の爭闘する所以は絶對唯一神ブラアマを知らないからである。私達の人生に悲哀があるといふのは私達がまだ人生を見る明がないからである。』と斯う申して居ります。ですから私達の心靈意識が眼覺める時は私達は凡て此等相對し善惡愛憎毀譽褒貶等……世界から離れて絶對無二の唯一世界ブラアマには入つて行くのであります。ブラアマを見失へる人の哀さは假令は牧者を見失へる小羊の様なもので當てもない廣野をさ迷ひつゝ絶望と煩發とに死を待つより外はないのであります。

然らば其の心靈意識の眼覺める方法は如何と申しますと第一に信仰第二に謙遜第三に相愛相信の情味と温味第四に雜念我欲を取除くといつた様な事です。元來私達は意識の眼を開かなければ何物も見えませぬ。無智の者には何物もナッシングではありませんか。萬物は智あるものにとりてのみ有意味ではありませんか。世界を蔽ふ大空も無智の徒にはナッシングであるけれども智者にとりては一草一木でも皆夫々偉大の意義を含んで居ります。されば私共は凡て私共の持てる個我……貪慾愛憎雜念……を捨てゝ心靈意識の世界即ブラアマの懐に抱かれなくてはなりませぬ。『ブラアマに歸れ。我等の家はブラアマなりブラアマは母の懐なり』といふ考を以て欣求思慕努力奮闘以て此のブラアマに歸らなくてはなりませぬ併し此が仲々苦痛で御座います實に万斛の涙が出る方法なんです。私達は微に神の御聲を聞く事は出來ますが其の姿を見る事は容易に出來ませぬ私達が更に進み進んで神の御姿を見る時に神は更に〳〵遠のき給ふのであります。『あゝ何時も私から逃けて行くあの足速き幻影を見よ。』とタゴールは歌つて居ります。けれども落胆してはなりませぬ。私達の理智が部分的に薄弱に働かず全一に強烈に働く時は私達は愷にブラアマを生擒する事が出來るのであります。即ち信仰を以て、愛を以て、雜念を捨てゝかゝらな

けれはならないのであります。斯くするには『自己放棄』といふ事『犧牲』といふ事が必要であります タゴールは『貪る勿れ』と申しました又『汝の持てる凡てのものを捨てよ』と申されました。

私達が大海から一つの水甕の中に水を汲む時私達は水の重さを感する。されど私達が甕を捨てゝ大海其のもの、中に躍り込む時私達の上には幾千倍の水量が湛へられてあるけれども少しも水の重味を感しない。私達は自己中心の水甕を捨てねばならぬ赤裸々の自分を提けてブラアマの中に躍り込まねばならぬ。』

自己犧牲に就ては斯う歌はれました。

『燭火が油を犧牲にする事によりて光明を放つ。我等はまづ神の爲に自己を捧げねばならぬ。基督のいはるゝ嬰兒の如く。』

之を自己否定と誤つてはなりませぬ。濁世を厭離するといふ佛者の說と同一視してはなりませぬ。自己犧牲。勿論自己離脫ではありますが其れは。より大なる人生を見たいからで有ります。

『嬰兒は其の生前黃金と幸福とに充てる世界に棲めるものであつた。而かも彼は其の母の懷に抱かれんが爲に故意に凡ての所有と幸福とを捨てゝ乞丐の如くに赤裸々なものとなつて現世界に生れ出たのである。私達も亦ブラアマの慈愛と歡喜とに抱かれんが爲に其の持てる凡てのものを捨てねはならぬ。』

『乙女は人形を大事に所有する。けれども彼女が人形以上に成長する時そして彼女が有らゆる点に於て人形よりも偉大なる事を知る時彼女は人形を捨てる。』

私は先生から拜借した六合雜誌から以上自分なから解つた様でもあり解らぬ様でもある出鱈目を書きました。嘸皆様がお笑ひになるだらうと存しますが此が私の病なんです御許し下さい。要するに從來輸入された西歐の文物は旧物打破といふ事にのみ價値を認めて更に少しも調和といふ事に思を致さなかつた様です。ですから我國の人々が之に依つて思想の不具者を生した事は夥しいものでありました。之れ文明の缺陷ではあるまいか。私は此のタゴールの愛に滿てる思想。情味を持てる意見。自己犧牲によつて梵と同化しようとする教義が。如何に現今の生活に調節を與へる緩和劑となるだらうと思つて。菊の花の咲く頃に來朝せられるを待遠しく思ふのであります。蓋しタゴールの此の思想は其の系統の連綿たるものもありませうが印度の地勢の然らしめた所以は多大なものだらうと信します。既にウパニシャットの發生といひ佛教の創始といひ勿論地理的影響を受けて居るには違ひありませんが彼には厭世得脫の臭

味がありますが此れには生活肯定の香味があります千里。眼も遙かなる大森林の中を河流が縦横に流れてガンヂ河の流域には鳥聲階々花香馥郁たるものあるではありませんか。此のベンガル灣頭風物に富める所に何んで厭世思想が發達しませう佛教の教義も大乘教の示す處は煩惱即菩提ではありますまいか。私は土地……自然……と人間と密着の關係を思ふ毎に生の要求を感せずには居られません。最後に私は一言します。私達は婦人の事でありますから結婚なさらないといふ主義をお立てになつて居らつしやる方は格別と致しまして、苟も家庭を作るといふ事を婦人の天職とお心得になられる方には次の一言を御相談致したいと存します。これやがてブラアマに入る道では御座いますまいか。

人間の理想はブラアマであります。我達の理想は良人であります。良人は私達の天とする所であります。良人に向つては宜しく滿腔の愛を捧げねはなりませぬ。自己を放棄せねばなりませぬ。犧牲とならねばなりませぬ。斯くて家庭の調和も保たれ斯くて婦人の本分も盡くされるでありませう。と斯うです。

我が斷片

本四　松本智惠

燕

燕が來た。何所から來た。遙々來た。巢をくつた。子を生んだ。やがて其の子が大きくなつた。間もなく去つた。

私達の生活も。こんなんでは無からうか。

天才教育

私が文學が好きだからつて、先生も其の氣になる。私もやつぱり其の氣になる。好こそ物の上手なれ。

一年又一年。私の特別能力は又特別に發達する。

Mさんは數學が好き。Kさんは習字がすき。そしてBさんはお裁縫が好き。

斯くて皆がゼニヤス肌になつて仕舞ふ。

斯くて世の中に全人はゼロになる。

同情

孤兒院の物貰が來た。

權威を以て同情を命令する。

厭になつちまう。

子を連れた物貰が來た。

感傷を賣つて同情を買ふ。

厭になるではないか。

鉦を叩いて物貰が來た。

神佛を餌に宗教心を釣る。

賤しいと言はうか。
惡むべしと言はうか。
ほんとに。厭になつちまう。

三 姉 妹

私は姉妹が三人ある。
姉さんは美人。
妹は愛嬌者。
中の私がブッキラ坊。
姉さんは屢々來客の話頭に上る。
妹は習俗的に八面玲瓏。
『可愛想にオールドミスにならねばよいが』と。常に母樣は私を痛はる。
『誠者天之道也』つて。噂なのねイ

氣 儘

妹が氣儘をした。
母がたしなめたら。妹がすねた。
私は思つた。氣儘！それが安逸の爲なら妹が惡い。けれども。それか自己の事業に忠實ならんがためなら。惡くは無いと。
服從は時によると好まない事がある。
それは。より大なる或者に服從したいからである。

箇 性 發 揮

作文の先生が箇性發揮を強ゐる。
強ゐるといつては語弊があるが。兎に角文章は箇性の現顯に外ならぬ。
妹が作文をつくる。箇性發揮に汲々たりだ。
意識して事をなす時。其所に衒氣が滿盈する。
妹はそれを知らない。
矢張。強ゐられたんだらう。
箇性の發揮。それは無意識の間に鮮かに活躍する。
強ゐられたものが何であらう
喜んで事業に沒頭する時。其所に箇性の現顯ありだ

人生の意義

親友と連立つて山道を通つたら。
椎の木林のこぼれ日を浴びて。
菫が一輪咲いて居た。いたいけな菫！
私は不圖斯う思つて友に言つた。
人生の意義は生活其のもの〻中にあるのねイ。
友は言つた。
ホントにさうよ。『山の奥にも鹿ぞ鳴くなる。』つて。ネ

針

疊の間からお裁縫の針が出た。
いつ落したものか赤錆にさびて居た。
私は酸化作用の激烈なのに驚いた。
矢ッ張人間もこんなんだらうか。私の心の或者も。
錆びて錆びて錆びぬいて。
さうなつて仕舞へば。最う私は無いのだ。

鉛筆

鉛筆を削る。
軸木が削れて鉛が出る。
軸木は去られて軸心の鉛が用に立つ。
削られる時、軸木は嘸痛かつたらう。
軸心も痛かつたらうが、彼は役に立つ。
役に立たぬ軸木は、誰人も顧みない。

月蝕

オヤ、今夜は滿月だ。
玲瓏たる其の容姿、圓滿なる其の風情、
誰かお前の前途に障害を與へよう、
一時間、二時間、やがて暗闇となつた。
それが月蝕といふ事だ。
併し、それを月が知つて居やうか。
舟の行手には暗礁がある。今にお前が坐礁するのだ
人生の行路には障害がある。今にお前が死んで行くのだ。
それを人間が知つて居ようか。
それを船が知つて居ようか。

手紙

私は手紙を書いた。
封筒に入れる。表書を書く。
もうお前には再び逢はれまい。
斯う思ふて私は泣いた。
私逸の。朝の門出も、こんなではあるまいか。

槿花一朝の榮

『槿花一朝の榮』といふ事を先生から教はつた。
それは斯うであつた。
千歳經る松も、四ッに萎れる朝貝も、一生の榮花としては同じ事だ。
と。私は『人は一代だナ』と思つた。

石壇

私は千光寺の石壇を見てさう思つた。
其の一つ〳〵を誰の手で運んだらうと。
二千六百年の國体も、さうした無名の人に由つて築きあげられたのだ。
國家の忠臣としては、清麿も知つて居る、正成も知つて居る。が、私の知らない人はどれ程あるか解らない。
恐らく私ばかりではあるまい。世間の誰れもが知らないだらう。それよ、永久に知らないだらう。
私の家もさうなんだ。私はお祖父さんの顔さへ知らぬ先祖の顔をどうして知らう。いや代々の人の名さへも知らぬ。
けれども、其の名さへも知ない人々によつて、私の家は建設されたのだ。維持されたのだ。發展されたのだ。
私は斯う思つて、早速佛壇にお燈明をあげた。

文苑

教員室と運動場

湘陽

御晝食（オヒル）の鐘（ベル）を給仕か手早に打ち鳴らすと、是迄靜まりかへつた教室が、一時にどや〳〵つと音がして、四方に足音や、談聲か漸次に賑らむ樣に廣かる。丁度靜かな池に小石を一つ投け込むと、小さき波の輪か夫れから夫へと廣がつて、岸近くへ押寄せる樣である。教員室では誰やら、確に女に相違ない、甲走つた聲で、然も早口に笑聲を混せて、續け樣に物語ると、緩くりと落付いたやさしい調子で、謠曲の先生の樣なさびた聲で、合槌を打つ。理科の先生は晝後の課業準備に忙はしい。主任の先生は用足しに來た生徒に何か言ひ渡して居る。若い元氣のよい先生と見へる、底力のある聲で、早口に『君テニスはどふだ』と、机越しに稍々中腰になつて覗き込む樣に上衣の裾で汲み置きの茶かひつくり返つて居るのも知らすに、熱心に催促して居る。相手の先生は何か氣に入つた書物でも讀んで居たものと見えて、更に返事かない、一向に無頓着である。元氣のよき先生は急に上衣の濡れて來たのに氣か付いて、足音高く其處を飛び去つた。其足音に氣か付いて、無頓着の先生は何事か急に起つたかの樣に見張つた。此樣子を最前から見て居た同僚はどつと哄笑した。青桐の大きな手を廣けた樣な葉蔭かち涼しき初夏の風か室内を颯つと拂つて、先生の方々は皆心に牆壁かない温かき同僚の空氣は永久に失せぬてあらふ。

初夏とは云へはや十日余りも日照續きで暑さは土用の中と變りかない。それに梅雨期前の事だから時にはいやに暑くるしい事もある。晝食後生徒は凡て運動場に出て遊ふ事に極められて居るから、晝休みには余り廣くもない運動場に、生徒の黒き波か打つて居る。一年生と見える柄の低きのか不釣合に大きな球を抱へて幾度となく蹴り損ねて居る。上級生かポン〳〵と高く屋の棟迄蹴り上けると、凡ての事か姉さん方にはかなわぬものと、あきらめ顔に球か上から下へ落ち返る迄見て居る。落ちる球を拾ひ取らふとして照り返す暑さも忘れて飛ひ廻る。三個の球は四方に音を立てゝ斷へす空中に飛ひ上り、時にはぽんやりした生徒の頭上に落ちて、多勢の生徒の笑ひ聲か起る。折〳〵西又東から十數名の生徒か手を連ひて網で魚を追ふ樣に先生を追驅ける。先生か逃る。生徒は追ふ。庸に成つた先生は丸く取圍まれた生徒の

鎖から、免かれんとして猛烈に奇襲を試みる。生徒は中々免さない。若し先生の勢か強くて圍決潰の難を見ようものなら他に遊んで居る生徒も直に應援隊を組織して、十重二十重に圍を嚴重にする。先生はへと〳〵に疲れる。生徒も滿面汗を流して居る。暑さも寒さも此の面白さには奪はれて居る。先生も生徒も是れ以上善き運動はあるまい。疲れきつた先生に、生徒は『もふぞ何か藝當をして下さい、然れば此圍を解きます。』と、其無邪氣に請求する處か面白い。先生には藝當かない、無言で突破を試みる、然し常に不成功である。此永久の重圍は、唯給仕か始業準備に一引の鐘の綱に依つて忽ち潰ゆるのである

花について

阪本花代

ひな菊《デヂー》

ひな菊は英國人の誇りとして居る可愛らしい花です。これはいつでも子供の花で、ヨークシャーのあたりではベエヤンオート《子供の草》と呼ばれ、子供の病氣を療す草と想像されて居りました。大昔には此の花は新しく生れた赤ん坊の花として知られて居りました。古い傳へ譚によると、ひな菊は最初に赤ん坊の魂が地球上にまき散らされたものだ相ですひな菊はきらめく星の樣でございます。此れは私共の眼の樣で、夕方に閉ぢて朝まで開きませんからひな菊を日の目(デーズ、アイ)と呼んで居つたのですが、終にデヂー《ひな菊》と呼ぶ樣になりました。

星が空に上る前ひな菊は床につき、
黄金の胸に輝く小き葉をたゝみ、
かくて夜の明くるまで露繁き夜眠り、
朝まだき囀る鳥の歌と共に喜ばしく目を醒す。

たんぽゝ《ダンデライオン》

たんぽゝはひな菊の第一の從妹で、同じ家族に屬します。時刻を違へないで、花の時計の樣です。晴れ〳〵した黄金色の面ざしを毎朝五時六分に現し、夜の八時九分過ぎに再びかくします。

こんな可愛い花を何故英語では、ダンデライオン《獅子の齒》と云ふのでせう。ノーマンデーのウイリヤム侯と一しよに英國に渡つたノーマン人がたんぽゝの尖つた葉が恰度獅子の齒に似て居ると思ひました。そこで佛蘭西語でダン、デ、ライオンと呼びましたので、今でも英語ではダンデライオンと呼ぶのでございます。

さまで目をとめられないたんぽゝも打ち捨てられません。黄色の花はいつの間にやら四五日たつ間に綿毛の球と變り、喜んで、一時、二時、三時と時計の樣に時を云ひながら吹き飛ばすと、綿毛は皆飛び行き針の刺された跡の樣な小い穴を空の皿の上に殘

す許りです。銀の様なつや〳〵した毛はゆら〳〵と風にゆられて海の上を渡つて行つて。到着地には新しいたんぽゝが生ひ立つでせう。

たんぽゝよ。わた毛の球よ。

汝は村の童の時計と思はれるか。

あだに過し行時を呪ひ返さんと。

なまけ子は力をこめて汝を吹く。

●きんぽうげ《一名金平糖草》《バターカップ》

きんぽうげよ。ひな菊よ。

陽氣な季節を告げんとて。

春出で來る。オヽ、愛らしき花よ。

ひな菊もきんぽうげも子供の花です。

たんぽゝがひな菊の第一の從妹であるなら。きんぽうげは並んで住んで居る最も近いお友達です。英國では野にひな菊もきんぽうげも見受けられ。同家族の樣に見えますが。全く似ては居りません。家族が違ふのみならず種族も違つて居るのです。

きんぽうげはキングスカップス《王の杯》メリーパッヅ《メリーの蕾》ゴールドボールス《金の鞠》など美しい名を持つて居ります。佛人はゴールデンボタンズ《金の鈕》と此の花を呼びます。

人々は牛はきんぽうげが好きで澤山頂くから。バターは黃色なのだと思つて居りました。

然し私共今此の花はあまり苦くて充分乾して味が失せた時でなければ。牛も口を付ける事は出來ないと云ふ事を知りました。牛がきんぽうげを食べると云つても多分私共が食事の際にお藥味に胡椒や鹽やからしを頂く樣に時折食べるだけなのでせう。

夏のきんぽうげは苦い汁の中に非常な毒を持つて居ります。

●すみれ《ヴァイオット》

●三色すみれ《パンヂー》

我れは靜な木蔭に人目にもたゝず宿れる愛らしき花なり。

惠みによりて作られ。飾りもなく只香によりてのみ知らる。

はづかし相に紫のすみれの束の入つた籠を持つてすみれよ。香よきすみれよ。と花賣る乙女の聲は街の隅まで響き渡り。我れも〳〵と先を爭うて買ふので。忽に花は賣り切れとなると同時に。束の數だけいづこかの部屋々々に芳しい香をはなつのです。こんな花を買ふよりも。草の間の可愛い花を自分で採す方がもつと愉快です。

すみれからは不思議な藥が作られるのです。アゼンスの人々は氣の落ち着かない時。この藥を飮みますと頭痛を癒し。氣を優しくし。悲しみ苦痛のある時には。慰を與へると云つて居りました。

春すみれが散つてしまひましても。夏咳くもつと

美しい花がございます。夏のすみれは澤山の名を持つて居ります。此の花から作られた藥が悲しむ人々を慰める事が出來ると云ふので、ハーツィース《心の藥》と呼ばれます。勿論此の名の如く皆樣の涙を拭ひ心を喜ばせるならば、皆さんはいつもお庭にこの花を咲かせ度いでせう。他の方々はこの花が物思はしげにうつむいて居るのに氣が付いて『この花思ひに沈んで居る樣ですからパンヂーと呼びませう。』と申しました、パンヂーとは思ふと云ふ意味なのです。この花は又ツリニテーオーブ《三色すみれ》とも呼ばれます。

私共のお庭のパンヂーも野に咲くパンヂーの曾孫でございます。西洋ではこの花について色々面白いお話がございます。その中の一つ二つを申し上げませう。

黄色の三つの花辨の內、眞中の大きいのが繼母で兩側の小さいのが實の娘で、紫色の二つは繼娘でございます。これに加へて可哀相なお話は、黄色の大きい花辨の繼母さんが恐しい心を以て繼子二人を殺したので、紫色の花辨二つ出來たと云ふのです。

◎おらんだげんげ《クロヴァー》

此の花は名の如くエリザベス女帝の御代、オランダから持つて來られたのです。赤いおらだげんげの渡つて來たのは極々後の事です。

初めてクロヴァーの野を見付けた時、英國の牛はどんなに嬉しかつたでせう。

クロヴァーの三つにわかれた葉は昔から名高うございました。昔人々が魔使女や恐しいお妖けの話などを信じた時代、この葉は惡魔除けの力を持つて居ると思うて、魔除けに此葉を身に付けました。蛇でさへも此の葉によりつかないとまで云つて居りました。

大英國の王旗の御紋章はこの三つ葉のクロヴァーと、英國のばらと、スカットランドのあざみとでございます。三つ葉は何を表はすのでせう。云ふまでもなくアイルランドを表はすのです。

アイルランド人は此の葉を非常に愛し、昔の人の樣にこれは不思議な神秘な力を持つて居る神聖な葉だと思うて居ります。今猶彼れ等が尊敬して居ります聖徒パトリックと云ふ紀元百五十年頃初めてアイルランドに傳道に行きました名高い人は、この三つ葉のクロヴァーを手にして、親切に敎導したと云ふので、必ず彼れの繪では彼れは此の葉を持つて居ります。

昔の人はクロヴァーを愛し、今猶アイルランドの人々は愛し、子供も牛もこれを愛しますので、人々が安樂な境遇に居る時は、クロヴァーの中に住んで居ると云はれる程でございます。此の外蜂も兎もクロヴァーを好きます。

かく皆に愛せられると云う事は。如何許り善い事でございませう。私共もクロヴァーの如くあり度いものです。私共もそれの如く。愛らしく柔和に美しく愛の笑を持つて愛らしく。優しき言葉を持つて柔和に。親切な行爲を持つて。美しくあり度いものです

●野ばら《ワイルドローズ》

英國に於てはばらは花の王であるのみならず。英國の國の花です。ローマ人が始めてブリタニヤ《英國》に來た時。『ブリタニヤは白ばらの土地だ。』とお友達に書いて送りました。今此の花は王冠の飾となり。スカットランドの鋭い劍と。しとやかなアイルランドのクロヴアーと仲よくして。皇室の御紋章になつて居ります。

ばらの種類も色々ございますが。多くの物は野ばらを好みます。綠深い葉の間から。にこやかに笑つて居る様な可愛い花がのぞく其の風情。何ともいへぬ様子です。英國の或る地方では。鶯の宿は梅にあらずしてばらなのでして。方々を鶯がさすらひ居る內。見た不思議な話や。ばらの君の木立ち程好きなものはないなどゝ語りながら夜通し歌ひます。

ばらについて詩的な話がございます。最初ばらは白くて香もない花だつたのだ相です。處が。或る日イヴ《世界の作られたはじめ神様はアダム《男》イヴ《女》の二人をお作りになりました》がエデンの園を散歩して居りました時。ばらの美しさに喜び返つて。この花を接吻しました。すると直に小い花はイヴの息の樣にかんばしくなり。色は彼の女の唇の色の樣に赤くなりました。今でも白いばらもございますが。イヴがこんな事をして以來。この花は赤い花と云ふ意味のローズと呼ばれる樣になりました。

或る所ではばらの花を砂糖漬にして保存し。又支那では大抵大御馳走の時ばらの花のお料理が出ますあなた方は支那人の樣にばらは召し上らないでせうが。ばらから。作られたいゝ香のするばら香水はお好きでせう。英國のケントやエセックスのあたりには廣い〳〵ばら畑がございます。

ばらは歷史上多くの話のある花です。英國の恐しいばら戰爭の時。ランキヤスター家は赤ばらをゑがいた旗をもち。兵士は赤ばらを胸にかざし。ヨーク家は白ばらのゑがゝれた旗を持ち。兵士は白ばらを胸にかざして。戰ひました。恐しい戰場にばらの優しい姿を交へた樣子。考へて見ても悲酸ではありませんか。

昔ローマ法皇に對して忠義をした王樣を稱揚する時。法皇は黃金のばらを與へました。英國のヘンリー六世。ヘンリー八世も。この名譽の印をお頂きになりました。

宗教改革者のルーサーもばらを愛し。ばらを印章

に切りぬいて。巻紙や状袋につけました。

私共がお仕事や勉強や色々の業につかれはてゝ。一寸散歩に野に行くと。可愛いひな菊の次は野ばらと。毎日新になり行く野の様を見ます。老いたる者にも。若き者にも。富める者にも。貧しき者にも。花はいつも喜んで慰を與へんとまちかまへて居るのです。

我れ藍色の輝く空を仰ぎ見る時。

『お前の父さんは貧乏でも悲しむ事はいらないよだがね……お金持の子はお玩具や寶石を持つて遊びますよ。』

と、花は語れど我れは羨ます。

我れ進めば行く手には幾千の玩具あり。

濃きすみれの群。野ばらの冠。

淡き櫻草、旋花(ひるがほ)。ばら、いづれも我が寶玉なり與床しき寶玉は。富者のそれよりも猶美しと我れに見ゆ。

◎つりがね草《ほたるぶくろ》

《ブルーベル又はヘヤーベル》

チリン〳〵　チリン〳〵　チリン〳〵

可愛らしき鐘の聲を聽けよ。

夏の日に魅するが如きつりがね草の鳴り行くなり

美しい蝶はかすかな音を聞いて床しい香いする小路に飛んで參ります。小路に居る主はそも誰れでせう。可愛いつりがね草でございます。風はこの花を破はすのではなくチリンチリンと鳴らすために吹くのです。たまに大風に逢うても害を受けない様にしほらしく頭を低く下げます。莖がしな〳〵して居りますから英語ではヘヤーベル《髮の鐘》と呼びます

つりがね草は一風變つた面白い性質を持つて居ります。住み慣れた場所から動かされる事を好みます。他の場所へ行くと不愉快になり病氣になつて死にます。又特別の種類の場所に許り住む事を好みます。他のどんな土地が好きなのでせう。寧ろ奇体な趣味を持つて居ります。これは石の多い。土地の痩せた。營養物のとれない。他の植物の生長しない様な荒れ地を好むのです。恰度此のつりがね草は。荒々しい人々と共に住み慰安もないが。愛らしい心を持つて粗野な家庭にからみつき家庭を美しうせうと勉めて居る。美しい。優しい。貧乏人の娘の様でございます

つりがね草は花の色は違つて居りますが。世界のあちらこちらに散らばつて居る兄弟を持つて居ります。瑞西のつりがね草は黒い斑点が有つて薄黄色です。印度のは濃い紫色。亞弗利加のは白とばら色との縞のあるすみれ色です。然し私共は古馴染みのつりがね草が一番好きです。どんな事があつても華や

かなのと取變へ度くございません。特にスカットランドの子供は取り變へ度くないでせう。若し取り變へると彼れ等の愛唱する《ブルーベルズ、アヴ、スカットラント》スカットランドのつりがね草と云ふ歌を歌ふ事が出來ない樣になるでせう。又この花を押してその汁から美しい藍色のインクを作る人々も取り變へたくないでせう。

昔は森の中で神を禮拜して居つたものですが雨天の時などこれでは不便だと云ふので、敎會や寺院を建てる樣になつたのです。初めは木の枝と枝とを組み合した樣な天井の家を造りそれから神を讃美禮拜に來よと人々を呼ぶために塔の中に鐘をつりました

小い夏のつりがね草は寺院や敎會の鐘と同じ樣なものです。これ等の花もチリン〳〵と鳴つて、私共に、『行つて壯大な森を見よ。愛らしき花を見。鳥の歌を聞き。自然界に於ける神の善。神の力をほめたゝへよ。』と告げます。

チリン〳〵　チリン〳〵

夏の日終日。美しきつりかね草の鳴る時。

何を彼れ等は告ぐるや。

『來りて神をほめよ。偉大にして善なる神を。來りてほめよ。歌へよ。』

と微風の如く。花の如く。森の歌ひ手の如く。告ぐるなり。

タゴールの(新月)より

阪本花代

近頃タゴールの名は新聞や雜誌でよく御覽になつたでせう。この方は印度の方で當年五十五歲になられます。若い時に法律を勉强する爲めに英國に行かれましたが、文藝に趣味を持つた氏は印度に歸り、散文、小說、戲曲に筆をそめ、遂に一九一三年ノーベル賞金を頂き、世界の文壇に名を擧げたのです。新月（散文詩集）などを讀んで見ますと、家庭的で母や子供の事を單純な言葉で歌つてありまして、その中に雄大崇高な思想の現はれてるので、此の詩人獨特の長所が伺はれます。

海邊にて

果しもなき世界の海邊に子等は集ふ。

頭上の無限の空は靜止し、休まぬ海洋はいと騷しく。

果しもなき世界の海邊に、子等は叫びつ踊りつ寄り集ふ。

彼れ等は沙もて家を建て、空の介殼もて遊び、

萎れし葉をもて小舟を造り、笑みながら廣き海にそれを浮べしむ。

子等は世界の海邊にて遊ぶ。

彼れ等は泳ぐすべも知らず、漁るすべも知らず。

小石を集めては再び播き散らすに、眞珠採りは眞珠採らんと潛り込み、商人は大船にて航海す。

子等は隱れたる寶を探がさんともせず、漁るすべを

も知らず。

大海は高く笑ひながら大波立て、磯邊のにこやかな
波は薄く光り、
母が搖り籃の赤子を眠らす如く、死をも與ふる大波
意味もなき葉唄歌ふ。
大海は子等と遊び、磯邊のにこやかな波は薄く光る

果しもなき世界の海邊に子等は集ふ。
暴風は路なき空をさすらひ、大船は路なき海に難破
し、死は遠くにあれど、子等は遊ぶ。
子等の盛なるまとゐは果しもなき世界の海邊にあり

商　人

母さんは家に居り、僕は外國に旅行すると想像して
御覽なさい。
僕の船は一つぱい荷物を積んで、今に埠場を離れる
處だと想像して御覽なさい。
サァー母さん僕が歸る時何をお土産に持つて歸るか
仰しやる前によく考へて御覽なさい。

母さんは金の塊をいくつも〳〵欲しいの。
金の河の岸の畑には澤山な金の收獲れ物がありま
森の道の木蔭には金チャンパの花が地に落る許りに
澤山咲いて居ります。

僕は母さんのために何百と云ふ籠に其の花を採つて
入れませう。
母さんは秋の雨の雫程大きい眞珠が欲しいの、僕は
眞珠の島の岸に渡りませう。
其處では朝の光で眞珠が牧場の花の上によろめいて
居り、眞珠は露の様に草の上に宿つて居り、又眞珠
は荒い海の浪の泡のために磯にまき散らされて居り
ます。
母さんに雲の間を飛ぶために羽を持つてる馬を二疋
あげませう。
父さんには智慧がなくても書ける様な魔法ペンをお
土産にしませう。
母さんには七ケ國の王様と同じ様なねうちのある尊
い手箱や寶石をお土産にしなければなりません。

同　情

母さん、若し坊が母さんの赤ちやんでなくて小い狗
であつて母さんのお皿から食べ様としたら母さんは
『いやよ』と云うでせうか
『いたづら狗よ。あつちに行け。』と坊やを逐ひのけ
るでせうか
そうだと坊は行つてしまひますよ。行つてしまひま
すよ。母さんが坊を呼んでも坊は歸つて來ないでせ
うよ。そうして母さんにおまんまも食べさせて頂か
ないでせうよ。

母さん　坊が母さんの赤ちやんでなくて小い青い鸚鵡だつたら飛ばない様に母さんは坊やに鎖をつけるでせうか

『恩知らずの悪い鳥、晝も夜も鎖を咬んで……』と母さんは坊やを叱るでせうか

そうだと行つてしまひますよ。坊はお森の中に走つて行つて母さんに二度とだつこして頂かないでせうよ。

口語詩　追懐

第三回卒業生　村上下枝

懐かしいおかつさん、
あなたに別れてからもう日日、
百日といへば一年の彼是三分一だ。
なつかしくなくつてどうしませう。
なつかしいおつかさん、
あなたに對する愛着の追懐が、
いろ〳〵の有様を眼前に髣髴させます。
講堂、普通教室、裁縫室、
朝貞の咲く花園、
グラウンドのポプラー、
何一つ懐かしからぬ物はありません。
春は春で櫻が咲く、桃が咲く。
矢場の後の欝金櫻は、
悲観のシンボルだと皆さんは言ひますがさういつて下さるな。
私はこの木にぞれ程のシンパシーを持つたでせう。
ねィ、おつかさん、
なつかしいおつかさん、
お友達の一人は、
『悲しさを泣きに寄る』と仰しやたが、
誠のない浮いた花より、
淋しい處にぞんなに赤心が籠つてるでせう。
私にとつては追懐の、寧ろ深いものです。
やがて夏の初めになると、
西國寺山の新緑、
よく圖畫の先生が仰しやつた、
『僕は花より若葉だ』つて。
萌黄から赤へ、
赤から薄緑へ、
薄緑から深緑へ、
時候の移り行くまゝに、
木々によりて千種万様、
これが皆んな運動場の眺めですもの、
ねネ。おかつさん、
なつかしいわねィ。
フットボールの三つもあつて、
『松山さん〳〵』、

『伊藤さん〳〵』、
ポンポン　ポーン、
なんてまあ。愉快でせう。
それから夏になると、
炎天の日盛りなんか、
人ッ子一人外へは出ず、
割烹室の廊下に集る。
三々五々面白いお笑草に、
永き日も短き思い、
やがて吸上ポンプのハンドル取つて。
ギー〳〵〳〵、
瀧の如く流れる井水、
丸で水晶を碎いたやう。
オ、、思出してよ、
いつも私は跣足になつて、
お友達にサ、、、、とかけて貰うて、
足の先きが冷たァくなる迄、
冷した事があるのです。
いゝえ、これぱかりではありません。
ボプラーの木の下涼み、
淨土寺から吹き卸す風が、
スウと右の袂から懷を抜けて、
左の袂をふくらます時、
嗚呼、何ともいはれぬ趣がしました。

ねィおつかさん、
どうして忘れてよいもんですか、
秋晴れの運動會、
私共の在校中は、
國家諒闇の二度もあつたが、
それでも相當の歡樂はありました。
其外寒空の日向ぼこ、
幾分思索的な考も出ぬではないが、
斯うした團欒に相應しい昔語り、
隨分人々の心をそゝつたものです。
智的方面になると、
競点作文に早縫競爭、
展覽會に學藝會、
ズット面白いのは音樂會、
ピアノのキィに先生の御手が觸れると、
全校生徒のコーラスがはじまる。
唄ひ了るとパチ〳〵〳〵、
拍手の鳴りも止まない內に、
これは又全校のチャンピオン、
ステージに立つて心持のうつむき加減、
嬌音王を轉がす獨唱、
會場は丸で水を打つた樣です。
斯う書いて來ると追懷はそれからそれへ、
小田卷の絲繰る樣に、

盡きる瀬はございません。
それは中には、
つらい哭しい事の無かつたではないが、
私に取つては樂しかつた事が大部分。
なつかしくなくてどうしませう。
お別れしてから百日餘、
山王樣のお祭りに、
一寸覗いた事がありました。
用といつて別にないが、
お門を通ると懷かしさがこみあげて、
寄らずには居られません。
五年が間の春秋、
受けた御恩は海山です。
何で忘れてよいものですか、
おしいおつかさん。

和歌

歌反古　本三　河野絹江

○物言はでかたみに顏を見合せぬ今地震ありし暫が間
○顏美きは幸多きかな吾が友は電車に乘るも席讓られぬ
○朝ばらけうがひし居れば黃鳥の裏の小籔に啼くが聞えつ
○書讀むにものうき朝の小窓陰獨し居れば鶯の啼く
○夢覺めて寒み知る夜をいづこにか鐘の音聞ゆ火や出てにけん
○夜や更けぬ道や凍しぬる行く人の足音高く聞えける哉
○雨が降る秋の夕を雨か降る母樣まさば胸語らましを
○徒らの背丈ばかりの伸び來つゝ乙女十六年暮れんとす
○師の君によきもたらしをきかばやと教室に入るしばしの心
○師の君のチョークにまみれ日もすがらみ諭し給ふ尊き姿
○蝙蝠の飛ぶ夕幕に友ごちと唱歌唄へば月は出でゝあり
○病む友の背擦りつゝすや〳〵眠る友見るに故里戀し
　數ある中に　本三　松本智惠
○悲しさを我が泣きに寄る校庭の的屋の裏の墨染櫻
○書に飽きしうらぶれ心窓に寄りカ！テン引けばロンテニス見ゆ
○燈を消して夜具引きかぶり寐る間あらず前髮に集ふ百千の心
○なつかしき春の待たれて新調の衣手にすれば春の

香ぞする
○師の君に友に連れ立つ春の旅斯る時こそ我が命延ぶ
○師の問に答ふが嬉し師の君のみ胸に我の生きんと思へば
○グラウンドの塵をな浴びそ花陰に共に語らん寂しき人々
○ベル押せば舎監の君の春寒き顔して出たり寄宿舎の窓
○業卒へて嫁きし友を見てしよりなどか心の痛み覺ゆる
○我が友の元服姿ジッと見る妬ましき心いつかつきけん
○雨よ風よ痛くな觸れそ我庭の虞美人草咲きぬ乙女のごとも
○姿見に息吹きかけて守らへば秋風寒し頬の痣見る
○朝明の薄ら冷たき枕絹涙のしめりうすら冷たき

俳句

秋　雜　　本科第四學年

秋日和子守集まる御堂かな　　佐々木豐野
夕映や文讀む窓に鴈の聲　　毛利エキノ
雁鳴いて月は入りけり夜や更けぬ　　小西ハル

朝寒や雜巾掛にさす日脚　　熊毛ミツエ
朝の戸に花賣喚ふや庭の霜　　末田ヒサノ
朝寒の戸に牛乳罎の置かれてあり　　仝　人
古里の有様語れ渡る雁　　伊藤ミチ
萩尾花朝の御山の裾模様　　兒玉ヨシ
うなゐ兒の影踏み鬼や十三夜　　仝　人
朝寒や裕心地の肌の色　　野村アサ
又起るホームシックや渡る雁　　藤原フジノ
朝寒や鍛冶屋の鎚の賑はしき　　仝　人
夕月や野山は秋の姿なる　　立神タヅ
日を追ふて雀散りけり引板の音　　仝　人
徒然や鳴子なぞ引く秋日和　　宮崎亮
朝寒や簽の側より猫の聲　　藤井靜子
鳴き殘る虫聞き居れば坐ろ寒　　宇都宮エン
秋の山伐木丁々瀧の音　　小川ハルエ
裏庭の柿の實赤し百舌鳥鳴く朝　　岡田トヨノ
なよ〳〵と誰招くらん花芒　　仝　人
朝寒や賤が屋に立つ細煙り　　市川コワサ
朝寒の馬引く馬子や鈴の音　　井手ヨネノ
コスモスや淋しう煙る秋の雨　　小松フサ
病む人の後れ毛なぶる秋の風　　仝　人
深山路の落葉を踏むや旅心　　林　良
咲き出でゝ主なき宿や菊の花　　本森君代
コスモスは秋櫻とも思へはそ　　今井清子

名月に手作り芋の味や見ん　兼森シゲヨ
何處やらに沈み見えけり秋日和　全　人
秋今宵月宮殿の人たらん　新田　ヒサ
港出る舟の帆白し霜の朝　福原　可代
霜の朝駄馬を引く少女十三　下川　小雪
名月は今はや森を離れたり　全　人
吉舎に寐て鴫子の音に夢破る　永井　恒子
簀踏めば爪先寒し今朝の霜　全　人
鴫啼くや赤き實こぼる何の木ぞ　武田マサヨ
朝空や星の影踏む井戸の端　久田ヲヒサ
老松や枝葉を洩るゝ月の色　全　人
小春日や猫の背圓し簀の先　全　人
柿の實に終日鳥去りも敢へず　吉岡　好
朝寒の寢床を出るや胴振ひ　栢原ミユキ

冬　雜

本科第四學年

雪の朝紅葉を散らす鳥の跡　下川　小雪
うつくまる炬燵の下の小猫かな　永井　恒子
カラコロと下駄の音冴ゆる夜寒哉　全　人
サラ〳〵と氷を磨く冬の川　植田キクノ
年の暮街に忙はし下駄の音　伊藤　ミ子
冬の月夕刊賣りの聲氷る　堺田　ミワ
小春日や南の簀の糊仕事　今井　清子
幾度も襟かき合す寂かな　本森キミヨ
枯りたる稻株殘る冬田かな　村上　ミ子
大根をすらり干したる寒さ哉　全　人
庭の雪紅山茶花の散る夕　小西　ハル
枯枝に今日を盛りや六ッの花　三井　敏子
南天の紅き實や散る雪の朝　久田ヲヒサ
霰散る街の暮や豆腐賣　宮崎　亮
点々と稻株殘る冬田かな　武田マサコ
かりそめの句ひなるべし冬の梅　兼森シゲヨ
山茶花の紅きが淋し霜日和　全　人
冬の月澄み渡りたる寒さ哉　全　人
振り返る我が影寒し冬の月　全　人
寒月や痩犬影と縺れつゝ　立神　タ子
追分や地藏の肩の村落葉　全　人
寒月や屋根から傳ふ猫の聲　全　人
朝の月茶畠三里霜白し　全　人
賤の女の冬菜あさるや霜の畠　全　人
木枯や道行く人の刻み足　藤井　靜子
病院や小春の窓に並ぶ顏　兒玉　ヨシ
新調の衣の匂ひや春を待つ　全　人
木枯や二階長屋の貸家札　全　人
庭下駄や棕櫚の鼻緒に朝の霜　全　人

○　吉野溪泉

棟梁を送る木遣や春の月
宿極めて名所尋ぬる日永哉
腰おろす茶みせの椽や藤の花

深き香が破滅のもとか野路の梅
勤めとは申すも今日の暑さ哉
寄宿舎の電燈淡し夏の月
月落て一際淋し虫の聲
鳴子曳く手に力あり稻の出來
初雪や撞くは女房か暮の鐘
遠山も物靜なり除夜の空

競點作文

餅搗

本二　兒玉千賀子

ほの〴〵と明石の浦の朝ぎりに
　島がくれゆく舟おしぞ思ふ

と昨夜人麿樣にお願ひかけて、寢た甲斐あつて今朝は珍しくも雀に樂しい夢を破られないで時計が四時を報ずる頃サラ〳〵と雨戸たゝく朝風を夢にもきいた杵の音かと、さすがに胸をどろかせて耳をすますと、早お臺所の方では『爺や』のかけ聲と共に、勇ましい杵の音はさながら子供の樂しい夢をさますが樣に傳つてまゐります。

あゝつい寢すごしたとガッカリして昨夜あの樣に樂しんで寢床に入つた妹や弟は如何とお離れから母屋の方へまゐりますと、此處は早人氣に滿ちて、樂しい笑聲は、冷くスーと袷元をなでる風朝と共にお緣の方から傳つてまゐりますので『餅搗や寢た子を起す杵の音』と誰れやらの句も思ひ出して、一人ほゝ笑ますには居られません。障子を細目に明けて顏を出しますと『やあお姉樣』といつて大喜び。けれども子供は眞に神の御子の樣に無邪氣なものです。昨夜一番樂しんでねた末の弟ばかり、末だスヤ〳〵と可愛いゝ寢息をたてゝ居りましたので『善ちやんお餅搗ですよ』と輕くおふとんゆすぶりますといつもお寢坊の弟も『あつしまつた』とばかり一氣に飛び起きて、ねむい目をこすりながら『やあお餅搗嬉しいな』と嬉しまぎれに突飛な聲でやつたので一座大笑ひ。それから寢床の中で『今日は樂しい餅搗よペッタンパッタンペッタンパッタン杵の音』と餅搗の唱歌の合唱が始まる。最初はそれで滿足してゐましたが、あの勇ましい杵の音が聞えてくると、もうたまらない樣になつたのか皆んな床をはね起きて我先にと臺所の方へ走つてまゐります。

おくどにかけた蒸籠の暖い湯氣に臺所は、霞の慢幕に鎖されて電燈の光は淡くにじみ、見馴し人の顏さへハッキリ分らない中を大混雜を極めて居ります。着物もお手も白い粉だらけになつて働かるゝ母上を初め仲店の叔母さん、出入者の『ばあや』の忙しきねむい目をこすりつゝ起きたのでせう下女は目の緣

へ白い粉を一ぱいつけて平氣でまご〳〵と働いてゐるのを妹が見つけて、お腹をかゝへて笑ひ出しますと初めてそれと氣づいて母樣や叔母さん等も思ひ出した樣な大笑。へうきん者の作三は皆んなが一齊に入つて來たので、又何時ものをかしな顏付して『ヤァ〳〵嬢ちやん坊ちやんのおね坊さんばかりが、かう早く起きられては、せつかくの餅搗に雨が降らねばいゝがなあ』とわざと外にでゝ大空をうかゞふ樣子。妹や弟はそれでも大得意『ばあや私お手傳して上げるから、これ脇へのけて頂戴』『ばあや僕お正月に食べるんだから思ひきり大いのをこしらへておくれよ』とあちらからもこちらからも攻め立るので『ばあや』は大弱り。すかさず下女は『この樣に大勢お手傳ができますと大安心でございます』と眞面目でいうたので又々大笑ひ。サァこれから一搗初めますと、煙草をくゆらしてゐた爺やが杵をとると下女は『ハィッ』といつて之に應じる。『エイヤッ』とかけ聲勇ましく打下すと『ハィッ』といつてこねる淡い闇の中を赤い十文字の襷姿がチラホラ働いてこよなく美しう映える。弟はたまらなくなつたものか思ひ出した樣に爺やの杵を横取りして顏を、眞赤にして力んで居る。

ものゝ三十分とたゝないのに、白い奇麗なお祝はズウとならべられた。皆は後じまひに忙しい事。私はツッと臺所をでゝ庭に下りると思ひ出した樣に紅山茶花がホロ〳〵とちりだしました。あゝ樂しいお餅搗も之で終つて美しい、おかちんは行儀よく春を待つてゐる。あゝ乙女十五もくれゆく今日、榮ある新春をまつ今日。最早たのしいお正月の仕度も整つたのだ。

餅搗き

本二　村上純子

『べつたらこ〳〵、ごしん〳〵。』お臺所では正月のお餅を搗いてゐる勇ましい掛聲に交つて聞える爺やの笑ひ聲のまあ實に呑氣さうなこと。私は何だか心が浮々して讀んでゐる本のわけもろく〳〵頭に這入らない、笑ひ聲に誘はれてとう〳〵間の唐紙を開けて見た。

もう大分搗けて早や大きなお鏡さへ出來てゐる小さなのも澤山に白い湯氣は濛々とあたりに漲つてゐる爺やが杵を振上げる拍子に松やがお餅をねる。餘り面白いので一心に見てゐる、若しか手を叩きはすまいかなど心配しながら……

繪でよく見るあの兎の餅搗き、あれは本當に可愛らしいが目の前に見てゐる餅搗きとその兎の餅搗きとくらべて考へるとをかしくて仕方がない。

門では松をひさぐ聲がする、とう〳〵正月は來たのだ。

『早くお餅が出來上つたらお床の間に送つて飾らうそしたらお正月はもう私達のものだ。』と待ちわびてはいつの間にか指の先で餅をいじつて見てゐるのでありました。

『ぺつたらこ〳〵。』きねの音は相變らず同じ調子でつゞけてゐる。あまりの單調にあきながらも杵の音に氣を取られてゐると、ぴたと杵は止んで何だが急にごなる樣な爺やの荒々しい聲。猫は後をも見ずに走つて水仙の垣根ごしに逃げて了つた。見ると未だ湯氣の立上つてゐる奇麗なお餅が梅の花の形にへこんでゐる。『あゝ今の猫のいたづらだな。』と思つたがだまりこんで素知らぬ顏でをる。それもあまり爺やが赤い顏をして怒つてゐるのがをかしくてたまらないので。

お餅は山のやうに出來た。

『こんなにあつては小さい口で食べ盡せるだらうか』と思ふ。

樂しいお正月が來てもお餅もいたゞけない貧しい人もあるものを、そんな人達にこのお餅を少しづゝでも分けてやつたらさぞ喜ぶだらう。

誰でも餅つきの音をきくとお正月がもう目の前にてゐる樣な氣がする。實際來てゐるのだもの、裏の山まで。

杵の音は少しも調子を變へずに『ぺつたらこ〳〵。』

衣縫ふ心

本三　加藤靜枝

スル〳〵と、あるかなきかの小さな波動を靜かな空氣に起して、細く光る糸は、大島の布の中へ氣持よく吸ひ込まれて行く。これは昨日南島の父上から、自分に縫はしたいとわざ〳〵送りこされた、軟かい反であつた。それを、裁つて、縫ふて、仕上をして自分の大きな誠心を、見えは小さい只の小包にして暖いといはれるこゝ尾道でさへ、寒氣にをそはれる今日此頃を、袷で過されるといふ父上の許へと波上を行く何十里、數日の後には、我が子の物した衣を見て、滿足氣にほゝ笑まれるを、遙かに偲んで手を動かせば、針は布の上をかいつくゞりつ。

二三年前、さうだ、この校に入學した當時は、自分の衣の總ては誰が縫つたか。それに『靜も自分の物は誰の手もからずに縫ひますから。』といはれる今日それとこれと思ひ比べると、感慨が深い。今では自分の手が一歩々々進むにつれて、自分の許りでは滿足は出來なくなつた。そして又裁縫に身を入れるを女と生れたからにはと、人々の喜ばれるのは光もとうなづかれた。この間も日曜を幸に、是非と力こぶ入れた甲斐が見えて。灯ともし頃には紐さへちやんとつけて、立派に、といつては語弊があるも知れないが兎も角も出來上つた妹の羽織。着て喜んだ者よりもより以上に自分は、嬉しかつた。と、かやうな

事を考へつゝも針持つ手は急いで、袷羽織の出來ばえは、自分ながら嬉しかつたさへあるに『まあ早く立派に出來た事。』との母上の御言葉添へに嬉しは込み上ぐるよ、双頬に。次から次と考へればまだ〳〵縫ひたいものは多かつた。放課後の際々に一枚は一枚と僅かなりとも上達して、この胸一つには多い喜びを人にも分けて喜こんで貰ひたいと思つた。白紙に包んで油紙に包んだその中から、自分の努力の少しでも途中で落ちてこぼれぬ様にと、荷作る手にも心にも十分力が籠つてゐた。

衣縫ふ心

本三　泉　隆

『まあいゝ日和だね。こんな時こそせつせとおしごとをしておくものだよ。』

母上は雛祭までにと雪子の可愛い友禪の着物を縫つていらつしやる。ほんとに今日はいつにない春日和春戸のいさら小川の薄ら氷も解けてさら〳〵と氣持ちよく流れ、どこからか、糸をつむぐ車の音が、のどかに聞える。私も母上のお側にすはつて、美代子のメリンスの袷を縫ふ。

やはらかい春の光は障子ごしに裏衣の紅絹にあたつて目もさめる様だ。この様にぢつと見つめていると目がばうとなつてきて、むゞ青や赤や紫の環が目の前にちらつくばかり。そしてぼかぼかするので遂うつとりする。

あゝ、私も早くこの着物をぬひあげやう。私は人様よりゆつくりの方だから學校でもいつもおそくなるしてろくなことは縫へない。けれどもきつと〳〵この着物こそは美代子に似合ふように可愛ゆく〳〵縫ひあげう。あの子は新しい着物さえ着れば『きれい〳〵おべゝ。』といつて、あちらこちら飛びまはるのだもの。可愛ゆくてしかたがない。あゝ早く仕立てあげたい。うしてこれをきて、ちよこ〳〵嬉しさうに歩く美代子の姿がみたい。この柄はきつとよくうつるに違ひない、私は今ではあまりうれしくないけれど、小さい時には新しい着物にきかへるのが、うれしくてたまらなかつた。よくお隣の小母さん所へいつては『小母ちやん、見てちようだいな。私のおべゝきれいでせう。これね、母ちやんに縫つていただいたの、だから、あたち、母ちやん大好。』なんて、あどけないおしやべりをして『あら、ほんとにきれいだこと、小母さんに下さいな。』つてからかはれては喜こんだものだ。さう〳〵それから、何時だつたか、雨あがりの時着物をきかへさしてもらつて嬉しくてしかたがなく、お向のお姉ちやんに見てもらはうと思つて、泥路だからと止められるのもきかずに、小さい足でふらふらと歩いて行つたが、ついすべつて、足も手も、大事の〳〵着物も、泥だらけ

やつとおきて泣きながら歸つて來たこともあつた。今から考へると馬鹿氣た樣な、なつかしい樣な、氣がする、

ならうことなら最う一度あのお河童時代になりたい靜かに考へると丁度走馬燈のように頭に浮んでくるちつとも心配なんてなく皆樣にはかはゆがられて…

『お前なにをそんなに思つているの。』

母上はきゆつ〳〵と絹糸をしごきながら、仰しやつたのでびつくり。ほんとに今私までとめどもないことを思つていた。そして手の方はお留守になつて。さあ、もうこんなことを思はずに、せつせとお仕事をして美代子にきせてやりませう。

衣縫ふ心

本四　永井恒子

庭の芭蕉に小雨しと〳〵とそゝぎて、椿の花の落つる音一つ又一つ……

我は丸窓の下に、きのふより縫ひ初めし着物をはこびて、急がはしう縫ひ初めぬ。

折柄障子荒々しう開きて、『姉ちやん』と入り來れる妹の、葡萄の如き眼みはりつゝ、『それ誰の』と問ふに『美いちやんの』と云へば、『ううん』と輕くうなづきて、うれしげにはゝ笑みつゝかたはらに座しぬ。

彼はしばし紅葉の如き手を火鉢にかざして、我が縫ふ美しき衣を見つめたりしが、やがて小ぎなれど集めて、人形作るに餘念もなし。

いつの程にか雨も小やみて、四邊音なく、たゞ、時々火鉢の櫻炭のぱち〳〵と小さき音立つるのみ。我はやう〳〵袖を縫ひ上げ、ほつと一息つきつゝ、そを妹が肩にと掛けぬ。

濃き紫の地色に、とり〴〵の色もて花いかだ染め出したる模樣一入はえて、赤き帶を立て矢に結ばせたらんにはと、その愛らしき姿のまざ〳〵と我が目に映じぬ。

やがて來ん春には、田舍におはす祖母も見物をかねて可愛き孫見んと來給ふよし。この無邪氣なる孫を如何に見給ふらん。否この美しき衣着せし妹をいかに見そなはすらんと思へば、はや小さき胸はおどりて、常にはにぶき針の運も今日は面白きまでにはかどりぬ。

衣縫ふ心

補習科、大山ナヲ

『若し〳〵龜よ龜さんよ世界のうちでお前程あゆみののろいものない……』

こんな無邪氣な歌が私の側に起りました。針もつ手をふとやめて可愛らしい春さんの姿に目をうつしました。紫紺地に枝垂れ櫻の友禪模樣、紅絹のうらが映えて一層引立つて美しく感じられます。

早く〳〵早く縫ひ上げてと、一心に針を運んでゐま

す、縁側には薄い冬の日が淋しく、霜とけの水蒸氣がかすかに見えるはかり。

『あゝまた淋し寒い冬が來るのかしら。だん〳〵鼠色の空に近づいて來てる。』と、つぶやきつゝ、彈力性に富んだ壯い時代を、來る日も來る日も一室に閉ちこもつて針もつに慣らされた自分は、籠の中から廣い空にあこがれる可憐の小鳥のやうな窮屈な思もしないでもありません。

針もつ業は婦人の任の第一とは云ひながら、毎日かうして全じやうに赤い絹糸を手繰つたり綿屑を散らしたり、細い針一つで單調な其の日〳〵を過して居るのですから、自分の身の上ながら離れた心もちで眺めやると、わびしいやうなやるせないやうな感じが頭の中へひぐくのでした。故しらぬ哀愁も覺えずには居られませんでした。しかしこの生活を捨てゝ他の境遇を求めようとも思ひません。柔らかい紅絹が時々かすかに吹く風にゆられて、糸こきの糸がかすかに耳にひぐく時は、何とも云へぬ優しさとなつかしさを感せずには居られません。早外は暮れようとして來ました。やう〳〵仕上げて火のしをあてゝゐると、『あゝよく縫へました。この位に出來れば澤山。』との母上の聲。私にどうして喜びの色をあらはさずに居られませう。心の奥に人知れず小さな誇と喜びとが湧くのでした。しかしそれも負けず性の慢心からででもありませんし、又上手に縫えたと云ふのが溢れて喜びに絶へぬと云ふのでありません。たゞ針もつ任を全うしたといふ女らしい心から、誰しもこんな場合浮かばすには居られぬ喜びであらうと信します。

普通文

五月雨

本四　立神タネ

しめやかに響き來る初夜の鐘を聞いて私は平家物語を讀むべく一人室に籠つた。

朝露のひるまのさはがしさに引かへて唯、五月雨のそぼふる音のみ聞き心を春の海と靜めて古い物語を繙く事はどんなに心ゆくものであらう。

だん〳〵讀んで行くと晝の間は意味も解せなかつた所まであり〳〵と思ひ浮んで來て趣は泉の如く湧いて來る。果ては自分も何時しか物語中の人となつて胸に千万無量の感を抱き一人兀然と一室に讀みふけつて居る自分の事は忘れてしまつた。

俄に劇しくなつた五月雨に氣付くと橘の香は室にみち〳〵て居る。靜かに眼を閉ぢると今讀んだ鵺の姿が目に浮ぶ。さうして五月雨の音と闇の色とが丁度鵺のやうになつて窓から戸の隙間から襲ひ來るやう

な氣がして思はず身をふるはした。

五月雨

本四　宮崎　亮

落花のかげに春は逝き四方の翠色したゝらんとして五月雨は靜かに訪ひ來りぬ。

夕。いと徒然なるまゝに新綠の香高き小窓に燈呼べば絹のごとき雨小止なう降りそゝぼちて青苔の上に落つる梅の實の音あたりのしゞまを破りて聞えぬ。おゝその音の如何に幽遠なるよ。恍惚として思は空にはする時机上の白薔薇風もなきにつと崩れぬ。短き夏の夜は早や更け渡りて今時計は十一時を報じぬ。詩集くる手も早厭きて窓押し開けば菖蒲の花は暗黒の裡にありて蛙の聲さびしき池の面には尺余の緋鯉の水音も聞えず。唯我一人茫然として佇める時天外はるかに不如歸の一聲漏れぬ。ゝは巾狹き水色絹をか細き手して引裂くかとも。

五月雨

本三　佐伯清子

軒の玉水！神秘を囁く五月雨よ！

吁いかなる秘め事を囁いているの？

何がゝんなに悲しくつてしと〳〵とあはれつぽい音立てゝ昨日も夜すがら忍び泣きして居たの……

吁矢張お前もーお前も妾の様に。お前は自分ばかしては無くて妾迄暗い〳〵悲しい心にさすのね……

宜しいなつてあげてよ。喜んで。

十　十　十

雨の小窓そと明けて……おゝ今のは夢ではなかつた

茫としてあたりを望めば矢張五月雨はいとゞ繁き袖を絞りて緣濃き葉櫻に囁く其の下蔭の床しの人若しも……姉さんと言つて見やうか知ら。あのみやさしきみ聲もて『ハーイ』と言つて下さるだらうか？緋の振りなつかしく眞白き腕に絡ませて桃割姿の優にやさしき方。祝緣がばつたと合つてニッコリ……あはれ未だ物言はぬいとしき君よ！なつかしの方よ！後振り向いてはニッコリと。姉さーん、思ひ切つて姉さんと言つて見やうか。だけど吁居ないのだ。美しき久方の雲居の空のお星さん……では無くつて其音床しき五月雨となつて三日も四日も妾に何か囁いてゐらつしやる、守つて下さる、おゝなつかしの五月雨。お前はほんとに姉さんの靈ではなくつて？えゝ？えゝ？

我が好める音樂

本三　泉　隆

性來私は音樂が不得手であるが趣味は持つて居て西洋日本どちらの音樂も好きである。けれども改まつてお前の好きな音樂は？と問はれて見れば直ぐにハヽと言ひ兼ねる。胡弓もよい。マンドリンもよい。何もかもよいもの盡しで何から言つて宜いやらわか

らない。笙や琵琶の床しい音を聞くと『雪月花』の中にある足柄山の夜を思ひ蟬丸の調べが偲ばれてなつかしい。三味線も賤しい人等がお酒を飲みながら騒いで居るのを見るとイヤであるが櫻のチラホラする京の春雨の夜祇園を通つて居た時賀茂川の水で磨きあげた舞子二人が奇麗にお化粧して派手な装をした姉藝者の鼓の音と共に爪弾きてお復習して居るのが何だか此の古い都の春に相應しい様で思はずシンミリとした。それから私は幼い時から教會へよく行つたものだ。秋の夜長に燈火の下で讀書して居る時命は葉末の露にも似たり、父去り姉逝き友又眠る誰をか頼みて何にか頼らん、唯神の結ぶ愛の友あり、

と教會から洩れ來る讃美の聲。思はず寄つて聲する方を見ると平和を語る青い〳〵瓦斯の光が外に流れて清い〳〵心になる。長唄常磐津歌澤等は何だか了解らないけれども花見の頃櫻の下を老翁が瓢をぶら下げて逍遙ひながら謡曲や義太夫を語るのや夜櫻の歸りに雪洞の薄い光に白い顔をホンノリと浮べて意氣な風の舞子が手を引合ひ『春雨のッンテンチン』等と口三味線で行くのも興がある。

私は少さい時から琴は好きでよく叔母様に聞かして戴いた。けれども私は田舎に來たから其を習ふ事が出來なかつた。桃の花盛りの雛祭に叔母様の家へ泊りに行つて宵の内から駄々を捏ねて寢て仕舞つた。何だかよい音に不圖眼を覺まされそつと頭を擡けて見ると叔母様の琴に叔父様の尺八を合していらつしやる。玉を轉ばす様な琅々たる清き音に雛壇の花もヒラ〳〵と飜れる。私は遂恍惚として又眠についた事もあつた。常に上手な曲を聞く度に小督の昔語を思出して深山の奥の伏屋で美しい顔に憂を含ませた局の宮人姿が燈火しめやかに彈き出す様のあり〳〵と浮んで身も心も融け入る様ないみじく妙なる音が聞きたく今なれば侍女にもなりたい心地がする。

大正博の奏樂堂で奏して居た樂隊はこゝらの者とは違つて其の美しい音を今でも時々思ひ出す。

又これは音樂でないかも知れぬが小春日和に山寺から讀經と共に木魚の音の漏れ來るもうら淋しく感せられて私は好きだ。それから未た田舎に來ない時の事だがお隣に素的にハイカラな叔母さんがいらしつてよくピアノを彈いていらしつた。其時からだん〳〵ピアノはよい物だと思つて今でも音樂のお稽古の時等には先生のソロを聞くと振ひ付きたい程である。音樂學校の音樂會は何んなによからうかと想像もつかぬが一生に一度は聞きたいものである。

我が好める音樂

本三　松本智惠

私が幼い時友の小さく愛らしい手によつて奏でられ

た妙なる琴の音を聞いてから私は不圖琴といふ物に興味を持つ様になつたのである。時は丁度去年の春雨そぼ降る夜の事であつた。私は下女の持つて居るブラ提燈の火が時時消えさうになるのを氣遣ひながらそれでも無言で餘所から歸り途を歩んで居ると右側に當つた家の二階から琴と笛との最も靜かな合奏が漏れ聞えた。私はハタと足を止めた。嗚呼其のいみじき樂の音こそは私の最も好める『茶音頭』であつた。高く清い笛の音と床しい琴の音は物柔かな濕つぽい其の夜の空氣にはホントに相應しかつた。私はそれを聞いて居ると一面が茫つと花の霞に蔽はれて居る吉野山や澄らかな川の水に美しい唐錦を織り出す所の紅葉の龍田さてはしめやかな京の町紅い燈等自づと想像されて恍惚として居た。すると即がてツンシャンと終りになつた。始めて氣がついて歩み出して『あゝほんとに今のは上手であつた。どんなに美しい人が彈いて居るのであらう。自分もどんなににしたらあの様にスラ〳〵と彈かれる様になれるのであらう。』と其様な事を思つて我家の近くになつたのも氣が付かない位であつた。其の宵の事は今も尙印象の一つになつて居る。

起床から昇校迄　本一　村上季子

『もう六時ですよ。』おやつと思つて振り向くと、間の襖から姉様の白いお顏がにつこりと笑つて居る。時計を見ると正に六時。純子姉様はと見ると、まだかすかな鼾を立てゝいらつしやる。多分今頃は樂しい御園に遊んでいられるのだらう。やれ〳〵今日は私の方が早かつたと思ふと、何となくうれしい。起きると直ぐ窓を開けて見るのが此頃の私の日課である。急いで窓を明けて見た。あゝ惡らしい又雨だ折角夕べ手を眞黒にして磨いた靴も役に立たない。お晝の樂しい遊び時間にも外へ出て、フットボールをけつたり、鬼事をしたりして遊はれない。あゝつまらない。と暫く空ばかり睨んで居たが一向晴れさうもないので、いざ學校に行く支度をしようと下におりた。揚枝を喰へて庭に出ると、まあ何時の間にか池の芝生の美しくなつた事、其中には美しい菫も交つて居る。水晶の様な露が葉の先度について居る顏を洗つてから髮を結ひ、袴の紐をしめて居ると、花やが御飯の挨拶に來た。早速お膳に向ふ。福お箸を取掛けて思ひ出した。今日は大好な音樂のある日だ。漸く樂しいお話の內に御飯がすんだ。時計を見ると丁度七時に十分前、遲くなるといけないから、お母樣のお部屋へ『行つて參ります。』と御挨拶に行く。今日はお母樣の御病氣がすつかりよいとの事。大層安心した。大勇みで玄關へ出る。雨は相變らずしと〳〵と降つてゐる。早澤山學校さしてお友達が

いらつしやる。私も其の中へ加はつて東に急ぐ。話しながら何時の間にか學校へ着いた。

仝

本一　石原しずゑ

『しずゑ〳〵』と呼ばれるので、吃驚して布團をけつて刎ね起きました。丁度私は其時、大きな〳〵御殿で、美しい天女の様なお姫様と飯事をして樂しく遊んで居りましたのを夢に見て居りました所だつたので『最うあれの續きは見られない』と思ふと、何だかあのお姫様に最う一度會いたい様な氣がしてなりませんでした。外に出て見ますと、まだ夜が十分明けて居りませんので、星がきら〳〵と瞬きをして居りました。それは眞に美しう御座いました。遲れてはならないと思つて、急いで御飯を食べ、袴を穿いて家を出ました時は、もう夜は明けはなれて居ました。田圃の麥は大分穗が出て、蒲公英はまだ色は變らず皆生々として居ります。小川の目高は白い腹を見せたり黒い背を竝べて行進したりして居ります。丁度私の体操する様でした。其の内に春子さんのお内を誘つて今朝の夢の話をしながら道を歩むと、何時の間にか長江町に來ました。それからまだ馴れない靴を穿いて學校に行くのであります。

仝

本一　藤井喜代子

チ、、、。可愛い雀の聲に、私はハツト樂しい夢路から離れました。聲する方を見ると、最う何も見えず、春の朝は靜かなものでした。折りからけたゝましく時計は六時を知らせました。驚いて飛び起きて手早く着物を着て井戸傍で冷い水で顏を洗ふと、冷りとしてよい氣持になりました。御飯には少し早いので、理科の材料を取るべく裏に出ました。心地よい春の朝風はそよ〳〵と頰を撫てました。芽の淺緣な柳の下には、黄金の波を漂はせつゝ、美しく美しく菜の花が咲いてゐました。嗚呼多くの此の花の中此の恐ろしい鬼の手にさらはれるのは孰れでせうか『今年も美しく咲いて子孫を殖すので御座ゐますから、どうかおこらへ下さい』といつた様に、身を震はせてゐました。そつと手を伸ばすと、サアッと向うへこけました。ハッと思つて手を引くと、春風はあたりを掠めて去りました。それを持つて歸つて、可愛想なこの花を眺めて居ますと、妹がお辨當を渡してくれました。それから御飯をいたゞいて、今日持つて行く荷物を用意して、妹と弟と三人『學べ子供等』の唱歌を唄ひながら、今日も亦學ぶべく家を出ました。

仝　本一　吉岡貴美子

私は、朝起きる前に、床の中で、今日一日中成す事について考へて、六時なると床を離れて二階の戸を明けるのが常であります。

晴天の日には、窓から勢のよい太陽が部屋の内を照らします。又、雨天の日には、其の趣が違つてうつとうしく、且又、靜かであります。今日も春の名殘の雨が、昨夜からしと〳〵と降つて、朝から物淋しい日であります。海の上を眺めますと、いつも勢よく風をはらんで走る帆前船も、黒煙を吐いて龍蛇の様な蒸滊船も、何となくしほれ勝ちです。でも私はこんな景色を眺めますと、氣が幾分か晴れて眠氣がすつかり直つて仕舞ます。稍々少時斯うして居まして、やがて下座敷へ降りて、口漱やら御飯やら極まり通りの日課があつて、それから母様と御一緒に御飯を戴きます。其の内にお友達の聲が致しますので『行つて參ります』と御挨拶をして、遲刻せぬ様に參ります。途中には。お友達を待つてゐらつしやる方もあり、三々五々連立つて行かれる方もありまして、道路は傘と傘とて大へんな混雜を極めます。私は少し足を痛めて居りますから、歩行も困難のせいか、尾道の町幅が大さう狹い様な感じもいたします

夕飯時分　本一　井手仲の

五月雨は惜氣もなく庭の卯の花を誘うて、絹糸の如く降る夕暮。私は二階の書齋でなつかしい机に凭れて、うつ〳〵と嬉しい夢を見て居た。誰やら自分をゆすぶる者があるので、びつくりして、今まで小さかつた眼は一度に滿月の様に大きくなつた。頭をあげて見ると、妹はニコ〳〵笑つて居る。電氣は今やう〳〵ついたかの様に見える。

庭敷ではお膳を出したり茶腕を出したりする音が賑はしい。『お夕飯だな』と思つて、眠たい目を擦りながら降りて見ると、はや仕度が出來て居る。

お膳の前に坐はると一番好きなおかず。思はず笑つた。お父様は、お甘しさうなお酒をめし上つていらつしやる。お母様や兄さんは、何ともなさらないで無暗に笑つていらつしやる。何うしたのかと思つて居ると、弟が『や、姉さんの顔眞黒だなー。』と大聲で言ふので、鏡を見ると弟の言ふ通り黒い。どうしてまあ……よく考へて見ると、二階でお習字をしながら、其の儘うたゝねしたものと見える。お母さんは『仲ちやん、どうしたの、お前紙が無いと思つて、顔へおさらへしたの。』何てお笑ひになる。私は早速顔を笑つた。それから樂しく食事をした。

おかあ様は『今日は仲ちやんが笑はしたので、いつもより御飯がおいしかつた。』とおつしやつて、いら

つしやる。食事もすんで、二階に上らうと思ふと、猫がニヤー〳〵して仕方が無い。お肴の骨をやつたら、得心したやうに泣くのを止めた。私が二階に上ると、千光寺の鐘が五月雨の中を高く低く音づれて八時を打つた。

書簡文

退學せんとする友に

本四　藤原富士野

千津さん……あなたと御二人で涼しい濱邊に漣を愛したのも早や過去の夢となつて二度茸狩の時節となりました。あちこちに英ネルの袖がヤラホラ訪るゝ秋風に輕く靡いて居るのを見ても又々去年の面白いタイムを過した事が偲ばれますの。千津さんも屹度思出されるでせう彼の時優しい調子で『此所に一つ彼所にも』つとソプラノで歌はれた御聲。歸り道で黄昏に塒に歸る鳥の聲を聞きつゝ『又來年も二人でまゐりませう』つて言はれた彼の深い〳〵印象がまだ今刻み出される様な氣がしてなりませぬの！千津さん先日は失禮しました折角入らしつて下さいましても何の興味もなくつて御免下さいまし彼の日から二日たつても三日立つても入らつしやらないでせう私の心配つたらほんとに筆にも言葉にも盡くす事が出來ませんでしたの。二人がグラウンドの隅の方に佇て居ましたのよそしたら今日先生から貴嬢の退學つていふ事を承りまして私も君さんも机に臥したばかりでしたの。千津さん……私の力落ちは一通りではありませんよゝ、へ私のみでは有りません先生もクラスの方一同ですよ　級の花と呼ばれた貴嬢のお姿をこれからルームに見る事が出來ないかと思ふと私は……

千津様、悲觀遊ばさぬ事を私は望みます、今の境遇として屹度退學の二字は貴嬢にとつては終生否未來永劫までも忘るゝ事の出來ない字なのでせう、けれとも千津様悲觀の裏面には樂觀が坐して居ますから貴嬢の様な立派な人格を備へてる方には必ず近い將來に於て樂觀が訪れるでせう。早いものです入學した時は千津さんも私も未だ短い緣毛を垂らして短い袴を着けて居ましたのに早四年の小車は回りましたよ。其間二人はお互に雨風に怠り無く學び屋にいそしみて私は何時も貴嬢よりの暖い御指導ばかりを仰いで居りましたのに。之からは誰一人を私の指導者として崇めませう。あゝ私は暗夜の燈を奪はれて以後は如何なる時を過すでせうか。私は又來る春には千津様の榮譽ある月桂冠を載かれるを樂しみにして居ましたのに……千津子様例令退學遊ばしても矢張

以前の様に友として妹として信誼を交へて下さいまし私は何所までも貴嬢を御慕ひ申すと同時に幸ある將來に於て好き實を結ばれん事を祈ります。千津子様何時かの國語の時間に塞翁が馬と言ふ事を學びましたでせう。そして二人が白楊の下で御話しましたでせう。世の常の人の言ふように何も悲觀遊ばさないで塞翁が馬の事をよく〳〵思召し下さいませ。私の様なはしたない者を親しみ下さいまして有難うよ今更の様ですが感謝致します。千津子様明日は幸日曜ですから參りませう其時に申上けませう。此の手紙を書きましたのはあの千津子様のお好きな私の書齋で他日かお土産に頂戴しました押花を拜しながらですの、四邊は淋しく何の音もしませんの唯々草むらにすだく虫の聲ばかりです電灯は皎々として室中を照らして居ますが丁度私はこの電灯を奪はれたと同じ境遇にあるのでせう！

あゝ叢にすだく鈴虫松虫よいとしの友に早く早く便りを傳へて呉れよかし

例の様に乱筆は御許し下さいませ末筆なから御両親様に宜しく　丁度唯今千光寺の鐘が眠さうに十一時を報しました

仝

本四　小西ハル

そは時雨のはら〳〵と窓に訪つるゝ昨日の朝詫びしうに秋の一曲をと琴の被ひそと取りつ笑む程の頃にて候ひき　つと弟の走り寄るを見れば御許様の玉章小さき手に持ちて候なる　日頃の面白き筆にもと封押切つて候へば　あゝ夢にて候ひきしばし茫然として御水莖の跡見つむるに唯々涙のみぞさしぐまるゝよ

退學　あゝ退學　如何に忌はしき語に候はずや　我さへ悲しく思ひつるを況してや御身の如き才媛御身の如き孝女そを子とし給ふ御両親の如何で悲嘆の情おほはれおはしまし候ふべき

我今友を失ふを思ひ候へは別離の情胸に迫り來て世の中恨めしう思はれ候さればなとで過きにし日々を心の儘に語り暮さゞりしかなど繰言も出で申候

あゝこは世の習に候ものかな　今悲しみて御身の決心を妨くるは心許なき仕業にも候べし　御両親に離れ友と別れて家のために盡し給ふ御眞心ほと〳〵感じ入申候左候てこそ我が友にも候なれ　友よ笑みて世の荒浪にもまれ給へや細き腕もて戰ひ給へや此處に御身を守る我あるを忘れ給はずに

小夜やう〳〵更け行きて秋風身に泌み虫の音も憐れに候　涙と拭きて立上がれば月光さつと流れて我が持てる御玉章を照らして候ひけり　さらば

仝　本四　小川ハルヱ

今や朝夕餘程冷氣を催して燈眞火に親むべき好季に入り草虫啷々秋のあはれを誘ひ申候其後御變りも無く故園に御靜養の趣拜承仕候私も相變らず學業にいそしみ居候間御安心下され度候さて承り候へば御許樣には第一學期の學業成績不首尾の由實に意外の感に打たれ申候折角御熱心の甲斐もなく嘸々御落胆遊はさはれ候御事と存じ眞に御同情に堪えず候乍併之がため半途御退學御決心の趣實に驚きの至りに候生來頭腦明晰なる御許樣の今回の不成績はちと受取難き義に存候之には多分深き御事情の遊はす事と陰ながら奉恐察候しかも試驗は時の運命によりて優劣有之候事世間幾多の經驗する所に候間左まで御落胆遊はし御退學にも及はぬ事と存候成敗は世の常にして一生には幾多の波風に遭ふ事これ免かれ難き天下の數に御座候之がために折角立てたる志を屈するが如きは將來に於て日本女子として幾分天下に貢献せんとする私共に於て望ましからぬ凶事と存候もしも御退學遊はさるゝならば御許樣生涯の寶を此の一小些事のために破棄せらるゝに等しく實に殘念至極と存候一時の小憤に任せて一生の大望を誤る如きは實に日本女子として致すべからざる義友情として此上無き遺憾に存候御心情は萬々御察し申上候共長き一生に比すれば何程の苦痛も寸價なしと存候人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如しとか幾多の荒き浪風は如何に一生を苦しむる事に候はん併し此の荒き浪風に遭ひてこそ種々の快樂も得らるべきに候嗚呼我が友よ我々は荒れ吹きすさぶ磯の邊に生ひたる小松のそれの如き者に候はずや長き月日の中には幾多の困難に遭遇する事も候はんされど吹く荒風を意とせずして四時の綠を保ちてこそ雪を凌き霜に堪え高き調を奏て見る人毎に仰き稱へしむる樣に相成可申候これ皆忍耐の結界によるものと存候實にこそ我等も斯くの如きものに候へば豫て御許樣御決心の通り再び學びの道に就かせられ目的貫徹いたされ候事呉々も御勸誘申上候況して今日の如き軍國の女子たるものは近き將來に於て第二の國民を作り上くる大責任あるに於ては此際一層の努力を要する義と存候區々たる不名譽の爲めに小憤を發し一身の將來をあやまり國家永遠の利害を誤算致し候樣の事有之候はゝ私共の贊成いたし難き處に御座候希はくは我が友情の十分一なりとも汲み給ひて此の燈火親しむへき好季を逸せず來らん春の四月には錦を故山に飾り給はん事を親しき御間柄とて失禮を顧みず意中を盡くし申候　再拜

寄宿舎より

本四　河野きぬ

隆子さん、今は午後の六時なんですよ。皆さんは夕御飯を戴いて運動場で遊んで居らつしやいます。春の夕月が西國寺の塔の頂に懸つて居ます。私は何と無く遊ふ氣にもなれないで室の窓から外を眺めて居ます。月の光は春のせいか薄ぼんやりと霞んで何となく憂愁の色を呈して居ます。あれ何處やらで後れて歸る雁金の聲かします。何といふ感傷的な晩でせう。大江千里は朧月夜に如くものは無いと言ひましたが母に別れてから荒みにすさんだ私の神經には斯うした晩がどんなに相應しいか知れません。御察し下さい。

因島より

本四　泉　隆

一度お出で下さいな、絹江さん、泌々と心ゆく限り語らうではありませんか？永い間お目にかゝらないのでほんとに。私も姉を失つて學校も半途退學してサ。憂世つて誰が言ひ初めたんでせう？母様の無いあなた姉様の無い私、いつかホヲ入らしつた時のあの楠の木の蔭で涙の滲むまで氣の遠くなるまでネ積りに積つたお話を仕やうではありませんか。そして私と一緒に姉様のお墓へ參つて頂戴な。それから又いつか貴嬢のお母様の御堂へも詣りませう。あゝ嬉しい。早く其の日が來ればいゝ。

文子様へ

本四　松本智恵

文子様聞いて下さいな。未だこれから幾年と續くへき學生生活を此間も大阪の從姉が來て『智恵さんも最う一年で家事に親しむんですネ大阪へいらつしやい、それとも京都ですか、あなたの美しい丸髷姿を早く見たいものです』ッて。厭ですわネー。私、世間の娘さん達の様にお料理やお裁縫には、さう言ふと何ですけれど比較的趣味を持たないの、矢張私は脫線した女なんでせうよ。文子様、もうすつかり秋になつたんですネー、今迄の綠の木々はもう皆んな紅葉して來ました、月光もだん〳〵鮮かになつて來ました、あなたのベートウベン、ネ、そら、ムーンライトソナタ、ネ、大分お進でせう、お羨しいですわ、私の從姉なども音樂會ではいつもクラスのチヤンピオンでしたの、それが昨年の春目出度い〳〵の百遍も浴びせられてプール女學校の校門を送り出されて只今では軍人の奥様、丁度春の木の芽が勢鋭く柔い風と鳥の歌聲とに育くまれながら萌え出たやうに、して見ると私達も來年は春の木の芽と一緒に勢鋭く世に出なければならぬのかも知れませんネ、併し間も無く花が咲いて實を結んで秋が來て紅葉するかと思ふと、何だか悲しくつて堪りま

せん、矢つ張私はいつ迄も學生よ。

友の兄の結婚を祝ふ文

本三　三谷ヨシコ

春も闌になりまさり申候承れば御兄君様には今度海軍大尉に御榮進遊はされ御一門の御喜の折柄新らしう御姉上様御入家との御事諒闇の雲晴れし大正の春に重ね〳〵も御目出度候御両親様はじめ美代様の御喜びの程特に姉君様は小泉の露子様とか承り候ては猶更お嬉しき事に存候私もお茶の席にて二三度お目もじ致し候其の折々優しくお言葉お掛け下され姉なき我身にはうれが如何ばかり嬉しく候ひしやら殊に上品な桃割姿すなはなお手前振りは他の方々よりも一際目立ちて美しうお見受け申候びき

美代様夏休みにお二人の御歸國が如何にお樂しき事やら私想像も出來申さず羨ましく候さりとて母なきは希望も無く樂しみもなく時々歸省する兄に下らぬ事を願つて笑はれ候申すも及ばず候共美代様私の様な憐れな友ある思召して又とないお優しい御姉君様にお仕へあらん事をそして松の緑と共に松村家の永く遠く千代八千代に榮へまさん事をお祈り申候

この品父の求めし物にて柄も色合も悪しくお恥しく候へ共お祝の印までにと父の申すまゝを

かしこ

友の姉の出産を祝ふ文

本三　兒玉千賀子

霞の深くなるまゝにうら〳〵と長閑き此頃豫て新上候御姉君様の御産の紐昨朝やすら〳〵とお解き遊ばし殊に前は男子の御子許りなるに今度は花の如き女の御子の由御祖母様の御笑顔貴女様の御喜び如何ならんと推しはかるだに心地すが〳〵しく候夕刻貴女様の『ばあや』の參り候故母も姉も私も御姉君の御容態赤ちやんの御様子などこまぐ〳〵開及び御二人とも御健かにおはします由皆々大に安心こぞりて御喜び申上候私も今更ながらも一人小き妹の欲しとて甲斐なき事を望みて笑はるゝにつけてひたすら貴女様の御喜び御羨み申候乳母の『京人形の様な御顔立』の御言葉を其儘に部屋に歸りて手箱に秘めし昔馴染の京人形うと抱きては貴女様も今頃は此様にと赤ちやんをしのびて飽かず眺め入り候されど人形のほゝ笑みもせず可愛い瞳閉ぢて眠りもしないのが悪う思はれ候一刻も早く參上致し御喜び申上げ赤様抱かして貰はうと樂みに致し明日は早々母諸共御伺ひ致すべく候へ共先々此の初着一襲御守袋を添へ御祝ひまでに差上候昨夜よりの絹絲の如き春雨の靜かに花に降り注き餘りの徒然なるまゝに未だ見ぬ可愛き人を忍びて一針毎に美しき小き紅入友禪眺めてはほゝ笑み

つゝ眞心より仕上げたるものに候
柳の絲に雨の玉ぬく日赤様のお噂しつゝ姉と二人
にて

母に代りて初端午を祝ふ文

本三　井上敏子

爛漫と咲き乱れし櫻花も名殘なく散り失せ暖氣日毎に相增さり候御皆々様如何と御案じ申候折柄御祖母君始め御一同様御揃ひ御健かに渡らせ給ふとの御事何よりもと御嬉しう存上候さて玉の様なる一郎様にはます〳〵御元氣にて早や御笑顏をも遊はされ候とや彌榮えに榮えさせおはします御家風ます〳〵御賴母しき礎をさへ得させられし御一同様の御歡び如何ばかりにやと存候て御羨ましく女子ばかりの私方には猶更是非々々一郎様の如き可愛らしき坊やが持ち度て常に御宅の御運をばめでうらやみ申候此の軍人形一組印ばかりに候へ共御子様の御初幟をほぎ奉らんと存じわざと贈り申候錦もてお美はしう飾らせ給へる御中に斯様なもの御恥しき次第に候へども御心安きまゝにと心ばかりに候御納め下され一郎様のお節句の席末に加へ給はらばこよなき幸に候先づは御祝ひ迄母の申付を其まゝ
めでたくかしく

入學を祝する文

本三　福永千代子

櫻は朱唇を綻ばして愛てたき笑を見せ麥の畑吹く風の音み空高く囀る雲雀の聲に交りて長閑に聞ゆる今日此頃御内皆様には御變りなくお健かに渡らせ給ふらんと御目出度存候さて今朝父より承り候へば美佐子様御事此の程までは御母君のお膝に抱かれおはしましゝに早や學校に入らせらるゝ御齡にならせ給ひて此程御入學遊はされ候とや如何ばかりの御悦に候はん御両親様のお嬉しさうなる御顏目のあたり見奉る様に思はれ候兎角末子は甘え子よと申さるゝは世の習ひなるに美佐子様には殊更に御父君にお似合遊ばし日頃御賢しき御生れに侍れば御成功の程今より推圖られて目出度存上候又紅きリボンに海老茶の袴着け給ひて紫紺のスカート輕く蹴り行かるゝ由子様の御手に引かれて學び舍に通ひ給ふ御姿の偲ばれて御羨ましく候私にも一人にても妹あらばあゝもしてかうもしてと甲斐なき事とは知りながら最とゞ殘念に思ひ居り候此の靴下いと荒らなる物に候へ共私手製の物に候まゝ御不斷の料になし下され候はゞ此上もなき幸に候先つは後ればせに御祝ひ申上げんとてかくはかしこ

友の死吊ふ文

本三　福永千代子

蜆賣る子供の聲も遠く消えて傳へ來る鐘の音に淋しく暮れ行く晩春の夕餘り心のやるせなきに小窓に凭りてオレンヂ色の雲を眺め御許樣のあたりを忍び居候折柄懷しき御玉章下され嬉しさの餘り執る手遲しと讀み行くまゝに手あやしう震へ胸迫り我にもあらで御文の上に泣き伏し候よあゝ!!綠樣があの惡らしい胸の御病氣のためにスクールライフを捨てゝ慈愛溢るゝ御母君の御許に御歸り遊はしてより花の朝月の夕一日として思はぬ日とては此の千代には次第におよろしきとの御報せに胸なでおろし居候ひしに圖らずも昨夜遲く花の散る如く神樣の御許に行かせ給ひしとの御事泣くに涙出でず夢?幻?夢ならば疾く覺めよ幻ならばとく消えよかしと念せし其の甲斐も無く現なる事の歎かはしき極みに候へ親一人子一人とならせ給ひしあなた樣の御歎き如何ばかりに候はんと思へば胸のふさがる樣に感じ申候これも神樣の御心におはし候事と獨り心に諦めんと自ら思ひ候へ共餘りの事に……嗚呼夕に消ゆる月よりも實に果敢なきは人の命に候よ

亡き君と野に山に將た花陰に遊びし事も甲斐なき名殘を止め今はかへりて去にし昔を偲ぶよすがと成り果て候ひぬ夜な〳〵通ふ夢路にも之よりは醒めて果敢なき君の跡のみりも繰回す事幾十度なるべき嗚呼!思へば別れの前の夕なりしか人知れず二人は庭の藤棚の下に行きて盡きぬ事共語りながら惜しき袂分ちしが今より見ればうは最後の別れに候ひき去年までは此の乙女の心にも似たる春の月を二人にて眺めしに今年は唯々一人にて實にや浮世は夢にて候おゝ何所よりか日頃綠樣の御得意の『花散り失せては……』と淸き讃美の歌の聲俱に歌ひしこの歌も今宵は最早み空にキラ〳〵と輝く星となりて歌ひ給ふらんと思ふ折しも『只神の結ぶ愛の友あり』と嗚呼!!されど〳〵君よ御心痛のあまり万一母上樣の御身体を害ね給ふなどありてはなか〳〵に亡き姉君のよみ路の障りともなるべければ此上は御自愛遊ばし母上樣をお守り遊ばさるる樣眞心こめて祈上候

盜難見舞の文

本三　脇　貞子

叔母樣昨日は松子樣克三樣お越し下さいまして私大變嬉しう御座いました千光寺の藤は今が眞盛りて御座いますから父母共に藤見にと參りました餘り美しいもので御座いますからつゐ見惚れて千光寺の六時の鐘が鳴るまで遊びましたので最う歸られると仰つたんですが餘り遲いもので御座いますから一晩だけはとお止め致しました次第で御座います叔母樣お人少に致しまして今更申譯が無いと父母共大變心配し

て居ります
午後二時頃下女が少し用事があつて叔母様のお宅の前を通つて居りますと不斷出入の少いお宅に今日は大勢の人々が出入をして居られるので一寸店の人々に聞きましたらと申して強く身振を致しましたので何か大變な事が起つたのであらうと其の次きを早く〳〵と急き立てましたらお嬢様のお宅に昨晩盜人が這入つたとて大騒になつて居りましたから奥様に一寸御見舞を申上げて歸らうと思ひましたが今はお忙しい事であらうと何も申上げないで歸りましたと申しましたので思ひがけないのに大層驚きました直ぐ母に申告げましたらお人少にして申譯が御座いませんネと父に話して居られました傍に聞いて居た竹やんが口を出して大方松下様の御様子を能く知つて居る者に相違御座いませんと言ふて居りましたそれに聞いて見ますれば特に松子様お近い内にお目出度い事がお有りなさいますので其等の御支度を持ち歸つたと申す事何より惜しい事だと思ひます又其の盜んだ者が惡らしく思ひます今日數雄を手傳にあげる積りで御座いますが丁度出店の倉が崩れましたので普請をして居りますから誰も差上ける人が御座いませんで失禮致します叔母様定めてあの着物など惜しい事で御座いませうけれども何時か元通りに歸るでせう警察もあすこは嚴重だからと父も申して居ります
私も次の日曜には御伺ひします左様なら

暑中休業日誌

七月廿一日　本一甲　安藤富惠

今日は、晴々として何となく良き氣持がする。私は此のよい天氣を幸と洗濯を初めた。着物やら、襦袢やら、おたらひに投げこんだ。かひ〳〵しくたすきを掛け、車井戸をがら〳〵とくり出した。が、四五杯程汲んだ頃には、早腕が弱つて汗がぽち〳〵と顔に落ちてくるので、少しの間休んで又汲み出した此度は有らん限りの力を振つて汲んだので、漸く水は一杯に滿ちた。此度はあらひ初めた所が、お母さんが、笑ひながら來られて、『其んなことでは垢は取れませんよ。』と、言ひながら洗つて下さつたから、喜んで干しにかゝると、あはやと云ふ間もなく、白い襦袢は眞黒になつたので、驚いて母上に云ふと『其れは竿をふかなかつた爲だ。』と、言はれて、不注意をさとつた。

七月廿二日　本一甲　山根定子

今日はお休みになつてから二日目。何だかまだ休みの様な氣が仕ない。朝御飯を戴いてから例の通り袴

を穿きにかゝつてお母様に笑はれた。いよ〳〵休業と決定して見ると、休業中の日課を定めて規律ある仕業をしなくてはならぬ。と斯う思つて机の前に坐つて沈思默考の末日課をきめた。

起床四時半　一時間は朝の散歩
朝御飯五時半　それから三時か勉強
十二時お晝飯
一時二時の間　晝寢
三時から五時　家事のお手傳
五時夕御飯　暗くなる迄夕の散歩
九時就寢　此間涼みながら家族團欒の樂みまあ斯うして日課をきめても、臨時の御用の出來る時もあるだらうし、いつまで續くやらわからないが續けるだけ續けて見やう。これも矢ッ張勉強の一なんだらう。

七月廿三日　本二甲　大久保文子

午前四時起床。揚枝使ひながら裏の小川緣徘徊す。前村は猶薄靄に包まれて鎭守の森のみはつかに其巓を表はせり。何處やらん嶺笛の聲す。六時朝食一合の牛乳に甘露の味あり。

發信、宮崎の姉、吉川さん、何れも暑中見舞なり。着信、東京の從妹芳子さんより、明日より千葉縣幕張の海水浴に出掛くとなり羨し。

十一時午餐。暑さのためにや食慾進まず。

三時。微雨至る。蘇生の想あり。

五時。夕食、少しく味あり。

八時。日記を書くに左の金言を得たり。

金剛石は齒の如く尊からず。

世の金齒を嵌入して人に誇る者三考の價値あらずや感想を記入して寢に就く。

七月廿四日　本四　佐々木豐野

東京の旧友から婦人雜誌が著いた。中に斯ういう樣な意味の事がある。

今の女學生は色彩の觀念か非常に強くつて服裝の如きもドチラかといつたら實質の良否よりは色の調和といふ方に重きを置いて居る。思想なども無暗に新らしがつてベルグソンを讀まなければ女でないの一人前で無いのと言ふ。流行語は『自由意識』で理想の夫は人格よりも手腕のある人、茶の湯生花よりも夜會といつた風である。

私はさう想ふた。大方之は女子大學あたりの風俗をいつたものであらうが、近來は東京ばかりでは無い田舍の女學校上りの新夫人にも此樣な風が大分見える。所謂ハイカラといふのであらうが、時勢の進歩に伴つて思想を清新にし風俗も改良しなくてはなら

ぬが人間墮落の端緒は斯ういふ思想の變更期などに當つて開かれるものであると預て先生から何かの時に伺つた事があるので私は餘り賛成はしたくない。此間も近所の人が來て、尾道の女學校は大分質素じやといふ事だが御結構の事だと言はれたが、質素であればこそ皆樣もお褒め下さるし墮落生も出ないと言ふものである。私共だつて色彩の觀念位無いでもない。それがなければ圖畫などてんで書かけたものではないのだから色の調和も服裝の美も知つては居るが今が女の修養時代、本末を轉倒した行は善くないと思つて居る。私が此頃金歯を入れたらお友達の方がお冷笑しになつたが之は衛生上必要なので。何處かの人の樣に人樣の前てばイヤにツンと濟まして姿見の前へ立つては頬を張らして見る樣なおかしな眞似は仕ない積りだ。其位ならまだよいが學校で習つたお料理を筆記帳と首引して、其筆記に誤りがあつた爲にお腹の工合を惡くしてお醫者樣に診て戴くなんて頓馬な事をする人とは違ふ。ハイカラさんとかいふ人が得て斯んな事の有勝なものだ。

今日の日誌の一節として雜誌を見ての感想を錄して置く。

七月廿五日　　二甲　廣川イト

虫干し

今日から虫干しを初めようといふので私は手傳ひをした。今日は母上の古い着物の土用干し、幾本も張つた綱に母の若い時流行したといふ白いびか〳〵した着物や、ゴブ〳〵する帶や、ふくめんやさては丈の短い〳〵まるで腰の邊までしかない羽織等を昔の古手屋の樣にずらりと並べ立てる。この暑いのに弟達は綿入等着て面白がつて飛び廻りながら着物を散りまく。

其の中に祖母の形見の紋附と丸帶とが出た、どうかする拍子に短い袖からガラスの古びた寫眞が二つこぼれ落ちた。何げなく拾ひ上げて見ると母を生きうつしの祖母と祖父とである。私は初めて無言の祖父母の面影を見る事が出來たのである。

すると母上は思ひ出した樣に一つの包を出された、中を明けて見ると二三の髮飾りと、數十本の遺髮である、いた〳〵しい白髮まじりの遺髮、母上の目からはいつの間にか熱い涙が溢れ出て居た。其の時緣側から涼しい風が吹いて來たので、母上は夢からさめた樣に又せつせと干物をつづけてゐられる。

七月廿六日　　本二甲　渡邊シゲノ

母　校

今日私は友の二人と懷かしい母校を訪れるのです。あれもう校門が見えます。

先生は何とおつしやる事でせう、同窓の友は何と云

つて迎へてくださるでせうか、嬉しいやうな恥かしいやうな半夢心地で校門を入りました。あれ教室に居られた先生が、こちらを見つけて窓から呼んで居られます。

つゞいて又私達が學校園も久しく見ぬ間に美しい草花に彩られて居ります。廊下づたひに教員室に參りますれば『よくまあいらつしやいましたね』と優しい師の君が。

私達はなつかしさの餘りに只々無言にて禮をするのみでした。

七月廿七日　　本三乙　小西シヅ

私の土用ぼし

私も十五になつたんだから一つ土用ぼしもして見なくてはと私の桐の箪笥の戸棚を開きました。そして私の室中に店を出しました。カステラの箱からは、毛糸が出てきました。お母様のお讓りのオリーブ色へ鳳凰のついてる蒔繪の箱へは、美しい絹糸が一杯はいつて居りました。姉樣に戴いた、金蒔繪の大きい箱には、小さい時から集めた、金蘭や縮緬等奇麗な大きなつぎを入れて居りました。どれも一杯あるけれども外の人達に上けなかつたら、どれ程澤山ある事だらうと、思ひました。弟のぼろ机も拜借してこれには又リボンを何十筋となく並べ立てました。一番巾の廣いのは兄樣の東京土產。呂と蝶の刺繍のとは、廣島、九州の花姉さんからのも姉樣とお揃に買つて戴たのも段々出て來ました。お人形のボール箱に穴が明いて居るので『鼠じやあ、ないかしら』と、ドクドクしながら開いて見ますと、案にたがはず奥樣と下女がベストにかかつて居りました。けれども三人の子供達は、どれも無事です。母樣のベストも知らないで、ニコ〳〵してゐました。人形の着物も、ほしましたが、小さい時に縫つた着物はどれも迚が中途までしかないので、思はず吹き出して失ひました。しかし、花姉樣に縫つて、貰つたエプロンや縮緬の夏物や、裾模樣の冬着やメリンスの袷せは何時までも、美しうございます。夜具も絹や縮緬更紗等は立派ですけれど、たゞメリンスのだけは虫が食つて居ました。麥藁の箱へは何を入れただらうとソーッと明けますと學校で戴た硯箱でした。それを又明けると青い種痘濟證と母樣に貰つた押繪や、かたが出ました。紙にくるまつた、大事さうな物は何かしらむと、開いて見ますと、早く逝つた父と妹の浪さんの寫眞でした、今一つ別の紙に包んであつた小さい絹張の團扇と開いても開いても出る八角の箱と、中にある水晶と硝子のとは父の形見です。この箱が強く包むであつたのはかつて私が大事の場合すぐこれだけ持つて出やうと思つてした事だと、思ひ

出して、おかしくて、たまりませんでした。そして今までそれを、實行する場合のこなかつた事を、ひそかに喜びました。　日記帖より

七月二十八日　補習科　村上下枝

今日和歌の題出だされたれば皆々作りて父上に出しぬ題は二つ蟬海邊納涼なりき小さき妹のはいと滑稽にて大笑ひをしぬ夜られ〳〵なほして頂く我れは蟬七首と他を一首よみぬ記すべき價もなけれども後の思ひ出にもと左に書き殘してん

蟬

梧桐の梢に蟬のこゑ落ちてあつさもしらぬ夏の夕かな
夏山にうちはへてなく蟬の音にねざめ涼しき朝ぼらけかな
つりどこの夢心地よしひぐらしのなく音涼しき桐の葉かげに
夕日かげうすづく丘に今日も又すゞしきせみのこゑを聞くかな
釣り床にゆられて眠る幼子の夢路を破る蟬のむらごゑ
打ちはへて松風さそふひぐらしに夏のあつさもしばし忘れて
岩間ゆく清水の音ともまがふなりこずゑをゆする蟬のもろごゑ

海邊納涼

月さえて波もあやなすうきほしにひるのあつさを拂ふ夕かぜ

七月二十九日　本三甲　岡田カッヨ

伯母樣と二人で糊付をする張板に張つては日向にかはかす見る〳〵内にかはいて行くのも面白い從弟の君ちやんのはだしになつて眞似する樣のをかしさに皆んな腹をかゝえた

午後はあまりおとなしく一人で遊んでゐるのでそつと裏へ行つて見ると自分の着物を脫いでしきりに水の中でもんだりしぼつたり又水の中へ入れたり私が行くと得意な顏で姉ちやんおべべきれいになつたと如何にも嬉しそう『君ちやんおいたがお上手だこと』と云ふと私の袖にもつれながら『お菓子丁戴』とあまへる『まあおべべをぬらしてしまつて君ちやんはこれからはだかぼうネ』とからかつてゐると伯母樣が出てきて『まあ此の子は仕樣のない子だなあ』と半分はしかる樣に半分はあまりの可愛らしさにしかりもしかねていらしやる君ちやんはうれしくてたまらないらしくはねまはる嗚呼こんな無邪氣な可愛い君ちやんの樣な時が再び來るものならばと思つたそうして慈愛深い兩親の許に大きくなる幸福な君ちやんを羨ましく思はずには居られなかつた

七月三十日　本三甲　泉　隆

間違ひ

庭をはくやら水をうつやら、勝手からは七輪あふぐ音、こと〳〵と物きる音が聞えて誰の顏を見ても忙しさう。あゝもう五時なのだ。私ものんきにかまへているわけにもゆかず、掃を持ち出して茶の間を掃きにかゝる。まあこの塵のたくさんなこと、一日に二三度は掃くのだけど子供が多いのでたまつたもの

ちあないなんて、つぶやきながらやつていると、なんだか、玄關に訪ふ聲。出てみると白い洋服をきて氣取つた船のボーイが、ぶつちよう面してたつている。そして、横柄に挨拶もせず、『おい、今に船長様がいらつしやるから、室を掃除して待つて居れ。』と大カバン一つ投出して歸つていつた。お父様のお友達がいらつしやるのかしら、それにしても變だ。なにのことやら、ちつともわかず狐につまゝれた様な心地で其のカバンを玄關の隅にかたづけておいた、夕飯もすみ、緣側の岐阜提灯には火がついたので、ゆかたがけで兄さんとその下へ行つて涼んでいるとかどの方から、なにやら、話聲。きくともなしに耳をすませば、おこる聲に詫びる聲がかはる〳〵聞えて終には、ごと〳〵と家へはいつてきたらしい。御取次にでると、まあ、いやだ、先のボーイが面目なげにつゝたつて『私は鷹取丸のボーイでございますが、先程はまことに失禮いたしました。今日入港いたしまして只今始めて上陸いたしましたものでございますから、とんだことをいたしました。船長に只今ひどく叱られまして……なにとぞ惡からず。』と前とは打つてかはつて幾度となくぺこ〳〵おじぎをする。その様のおかしさ、滑稽でもあり、氣の毒でもあり、ふきだしさうになるのかみしめてまじめに例のカバンを出してやれば這々の体で歸つていつた。あゝ、わかつた〳〵。間違つたのだ。私の家の近くに宿屋があるから。きつとさうだ。人には間違つていふことはあるけれど、あの人はよつぽどうつかしい人だ。門には何々旅館との板もかけてなければ某樓とも書ひてなく、たゞお父様の名のみかゝげてあるのに。

七月三十一日　　三甲　松本智惠

知り人少く淋しき他郷にある身は又しても尾道戀しく今日は歸らん明日は歸らんと思ふ心を制し得ず自と涙わき出づ。さりとて土産物も買はず許されし京都にも行かず歸るのはあまりに大人げなしと思ひかへして皆と千日前に行く。道幅はさして廣からねど其の賑はしき事、電燈の光晝をあざむき夜ながら人出の多き事、田舍人にはとても想像し難き程なり。又意匠をこらしたる各家には乙女の心をそゝる流行の品々美々しく飾られ誰れも彼も引きつけらるゝ如く其の門口に行きて立ずひ。我等も自分にほしき物や是は誰にそれは彼にと買ひ整へて元の道に引きかへす。道傍に賣れる虫の音のいと美しう愛らしければ其の店の小さき籠に松虫二匹買ひて歸る道すがら我家に歸りてお土産の數々をならべし時、皆の嬉ぶ有様なぞ思ひうかべては、我もほうえみたり。

八月一日　一年甲　高橋楠子

昨夜國より御客が見えた。四五日は逗留のみこみ、母上は夜前より何くれと、もてなしに忙しさうである。今朝は私も臺所にて、母上の手傳をした。客は朝餉をすまし父上と市中を見物に出かけられた。まもなく母上は御晝の仕度に取りかかられたので私も座敷の後かたづけやお使などに行つて色々と手傳をした。誠に目がまはる程忙しい。かねて大阪の友の家へ遊びに行きたいと言つた時、母上はこの暑さに泊りがけで行つては御氣毒だといはれた事が始めて氣がついた。

八月二日　三乙　吉川モト

朝顏

曉の露と共に起き出づれば垣に籬に這ひまつはりたる朝顏の美くしき繩なひたる如き昨日の姿は今朝は杯にも似通ひてうまゐの夢より覺めたる人の子に己が身の全盛を誇らしげなるいとあはれなり。紅白紫さては瑠璃なぞ常にもまして數多きさへうれしきに色々の露の玉を宿して目も覺めなんばかりなる何れを美くしからずと眺め捨てんや實に如何に巧なる畫師も寫さゞらましとぞ覺へて愛でたき限なり折柄花に心かゝりてあたら暖き夢も見果てず起き出でけん妹の笑顏も豐かによりきて紅なるをつまんとすれば露ほら〳〵と顏に散り惜し氣もなく地に滴りて聲なし。

あはれ日影をまたぬ朝顏こそさても果かなき運命かな。さはれ思へば牛に食まれ馬にふまれて榮なく永らふる野邊の雜草よりも唯束の間を華かに飾りて契りけん露と共に潔よく凋みゆくこゝろなか〳〵に望ましくなつかしけれ。

八月三日　本二乙　兒玉千賀子

お洗濯

昨夜人麿樣の御歌歌つて寢た甲斐あつて、今朝は珍しくも早く目がさめたので急いで朝飯すまし、曉の風に優しうほゝえむ朝顏の垣根のそばで、お洗濯を始めました。四時半頃起きたのさへ常でないのにお洗濯ときてゐるから、『サア』皆んなが一片の雲もない程晴れた青空眺めて、雨が降るの何のと、冷かしだしますけれど私は默つて弟の絆と私の單衣と母樣の浴衣とをたらひにつけて一釣水をヂヤーと器にうつしますと、まあ冷い事はんとに心地が好い。こんな時に一人『私は今朝早く起きました。私は朝飯後お洗濯を致しました』等と盛に英語をつかつて一人はゝ笑でおりますと、何時の間にきたのかあの惡戲屋の弟が後に立つて何がおかしいのか一人ニヨ〳〵笑ひながら『やあ姉樣、何獨言をいつてるんだい、

今朝は早く起きたもんだからまだ寝言をつづけてるんかい』と又例の悪口。ほんとに腹がたつて『自分こそ知らないくせにこれでも英語をさらつてるのよオホホ……』と云つて水をかけてやろうかと思ひましたが朝早々からけんくわをするでもないとジッとがまんして相變らずジヤブ〳〵と一生懸命に洗つてをりますと、弟も相手がなくなつたので何れへか影をけしてしまひました。やうやく母様のと私のとを洗つて今度は弟の番。今まで悪口をいつてゐた弟のでも流石に可愛くお醤油を澤山こぼした、ひざのあたりを御更ていねいに洗うてやりますと、まあ嬉しいほんとに奇麗におちました。眞白く山の様に浮いた、あわを除り清らかなのでチョイとつかんでうばの朝顔にのせてやりますとまあ美しい事濃い桃色は紅白の紋の様になつて。おしいと思ひながらも仕方なくその白雪の泡を流して又二三度冷い水ですゝいで、いよ〳〵物ほし臺に上つてさをに掛けようと致しましたが、中々重い。幾度かけても〳〵すべりおちて終には、もうぢれつたくなつた、下女達はきも輕るさうにするのに何故私には出來ないんだろうあゝこれも一種の習慣なんだ私もせめて休の中だけは日に一枚でも好いから洗ふ。洗つてみればこんなにきれいに洗へるものを、そしたらさぞ母樣は喜ばれるだろう等と色々な事を考へながら何氣なくチョイとふり返つて見ると裏の小母樣も早二三枚ほしながらニコ〳〵なさつて『お休だから御せいが出ますね』お隣の三千代樣も可愛い赤ちやんの奇麗な友禪の着物かけてゐらつしやる。こゝからはまるでお人形さんの着物の樣に見える、妹に見せたらさぞほしがるであろう等とつい一人ほゝ笑まれました。物ほし臺から下りて茶の間へ行くと母樣もニコ〳〵なさりながら褒て下すつてほんとに嬉しかつた。ばあやも入つてきて例の大な聲出しながら『奥樣ももう御安心でございますね大きいお嬢樣は早洗濯やお裁縫なさるしもう四五年致しますと私は早御用がございませんですねオホ……ほんとにこれがつい此間まで私につれられて幼稚園へお通になつたお子樣とは思はれませんよ……』等と涙をこぼさん許りに大仰山に申すので恥しい樣でしたがやはりこんな小さな〳〵仕事をしてでも心の中は無暗と嬉しうございます。お母のお顔も嬉しそう。あゝ働く程氣持のよい時はない。今度からはどんな小さな事でも實行しようとかたく心にちかひました。

八月四日　　一年甲　岩崎照子

今日は新造の利潤丸に乘り、管絃祭に詣づ。一行は機關長夫婦、宇佐樣、朝日新聞記者、兄姉姪等都合十人にして、緣樹蔭沈んで、魚木に上る景色を眺め

島舟後に追ひやれば又前方より進み來る小島を眺む遊覽の船なれば、油差も皆客なり。されば心をゆるめて、速力もゆるやかに進ませ、彼方の舟より『舟頭可哀や、音戸の瀬戸でヨウ一丈五尺の櫓がしいはるヨウ』と歌ふ聲も手に取るが如く聞ゆなり。此の自然の美しい景色を眺めつゝ食する晝食も亦一入味を增せり、呉の軍艦の數を算へ、歌の音戸の瀬戸も過ぎ、目ざす宮島に着きたるは、最早日暮方なりき空には無數の星、目ばたきしつゝ下界を眺むるなり十一時過ぎと思しき頃、幽邃なる太鼓の音を先に、お渡り舟は遙向ふより、波だになき海面を滑るが如く進みて、手を打つ音に迎へられて、西方に消えたり、今夜は甲板に莚を敷きそが上に臥すなり。

翌日一行中の六人は、彌山に上る。二王門も過ぎとある細道を右手に出づれば忽ち眼前にきら〳〵と海現れたり。岩を拂ひ、曲りくねりたる、松蔭に足を投出し、倘も流るゝ汗を拭ひつゝ、豆程の島々を眺めて、潛水艇の沈沒せる箇所を、此處彼處と論じ合へる折柄、玩具の如き船の、白絲の如き煙をはきて鏡の如き海面を滑りて行けり。耳を澄ませば、鼓の鳴くが如き音せり、滊笛の音なるべし、やがて下山し、再び船にて尾道に歸れり。

本三乙　大山芳枝

八月五日

風薫る宵

神秘のさゝやくてふ銀の星は、葡萄色の空に華やかに匂ひ出でた夕月と共に美はしい夕でございます。私は青簾に出た夕星の微笑みを懐しんで、燭の火さゆらぐ竹縁に出ました。

仰げば雲間を出た澄みきつた月は垣根の夕顔を、仄白う照して弱々しい夏草に置く白露は、さながら水晶の玉をまろばした様きら〳〵と輝いて……。

早何處やらで華やかな笑ひ聲がもれて來ます。若竹の色紙折々閃いて、笹の葉摺れの音もいと清々しう玉簾に宿る涼風に一首すらすらと書き流した美和さんは『こんな夜小町は都を落ちのびたんじあないか知ら』低い枝に結びつけながらかう云はれた。あつ一葉越に流れ星がすいと隣の方へと流れました。音色なつかしく洩れる風鈴に小さき螢の夢さめてか淡い光の二つ三つ形を落して涼風の浪立つ青田へ。寂寞なりして美しい宵!!!

誰のすさびか麥笛の音幽かに流れ來て……しつとりぬれた肩抱けば嬉しや青葉の隙に星のまたゝき!

八月六日

二乙　福永千代子

露をく朝

光り淡き殘りの月影も消えて山の端は次第次第に紅

加はり雲の色も涼しく松の數も見えたり。一面青々としたる稻田を渡る涼しき朝風は床しき香を送り來れり。向ふの賤が家には朝餉の支度するならん。かまどの烟白くゆるやかに立ち昇り折々鷄の聲しつとりと漂ひし爽やかなる空氣を破りて聞ゆるばかり、あたりはいと靜かなり。あまりの心地よさに夏草茂れる里川のほとりを逍遙すれば青葉の雫袖をうるほす。清き流れの夏の水はさや〳〵と絹ずれの如き音を立て湛碧の空をうつせり。綠濃き岸邊にはなつかしき白百合山撫子等露にぬれて一入綠を增し、叢の中より夢からさめしばかりの笑顏をあらはしつゝ匂ひをる愛らしさ小川の水のせゝらぎに夢路をたどる心地にうつとりと聞きとれゐたりしか、持ち歸りて花瓶にさしをかんとそと手さしのべて手折らんとする刹那純白の花かすかにゆれて水晶の如きつゆホロホロとこぼれて水面に小さき紋を描きぬ。

日漸く東天をはなれて美くしき光を地に投げ晴やかに輝きそむれば葉末に宿りし白露光を受けて黃金の玉とぞ變るなる。あゝ美しの露の玉よ、げに心よき夏の朝よ。

八月七日　本三乙　加藤靜枝

寢みだれし髮に櫛の齒入れて、室中を一掃すればいと涼しふなりて、心地すが〳〵し。よんべ屆きし友よりの文、机上よりとりて封切れば、『……面白の夏、君はいかに過ごします。山青く水清かなるこゝ我が里は、山尋ぬれば珍らかなる草花、海あされば君好み給ふ鮮魚多く候を、羨しくはとく來給へかし。』讀みゆく膝に落ちたるものは、未だ見もやらぬ愛らしき花片なり。なつかしき友の心やりかひ集めて側なる詩集にはせぬ。そのかへしにすべき花もがなと、庭の芝生に下りたてば、結びし露に足を濡して心地よし。柳に首撫でられて、思はず頭を擡ぐれば、あら床し有明の月一痕白ふ枝の上に殘りて……蟬未だ夢の國より歸らざるか、喧ましの聲も聞こえず、庭中靜かにして氣あくまで清し、こゝ暫し後は暑さかこつ我ならんも忘れはてぬ。

そぞろ支那夫人を偲ばしむる色彩の濃紅な夾竹桃、おくれ咲の万年かつらなんど、万綠叢中紅一點顏なるも、さして珍らしふもあらされば何がよからんと佇みてあれば、廣き無花果の葉と人の丈しのぐ萩の繁みのすれ〳〵に見ゆる、ゆかり紫に匂ふ桔梗花、この花こそと近よりて、床しき姿に手を觸るれば、をきにし露のハラ〳〵と袖に袂に散りかゝりたれば

紫の玉かと見ればホロ〳〵と
桔梗の花をすべる白露。

八月八日　土曜　晴天　本一乙　楠生幸江

空を見れば、青空がすこし白がつていた。九時頃、二階に上つて見る。瀧車は黒煙をはいて、ゴーゴーと大きな音を立てゝくる。はるか遠くで氷のカチワリ、と云ふすごい聲がきこえる。電燈會社のえんとつから。いさましく黒煙を出して淨土寺山をけむりの雲に包む。あした、大山のおばあさんに、松永につれていつてもらふのである。といわれてうれしかつた。仕度をする。

此の頃は『まつ黒けのけ』と云ふ歌がはやり出したのか、お隣の、でつち等が『安夫さんまつ黒けのけを云ふてみなしやあ』と云ふと、安夫さんは『まつこけのけ〳〵』と愛らしい聲で、かたことの『まつこけのけ』といわれてをられますので、私は一人でふき出した。

八月九日　本二甲　池田マサコ

鯛の宮

呉市につくと先づ目につくものは白き塔なりこれ即ち鯛の宮といひて佐久間艇長を祀りしお宮なり。今日りのお宮に詣でんとて電車に乗りて二河停留場にて下車し少し行くと石の門ありてそれをくゞりて長き石段をよぢのぼり漸くにして上りつむれば直ぐ左手に白き石碑あり見あぐれば石碑の表に『第六潛水艇遭難者紀念碑』と黒痕鮮かに彫まれあり石碑の周りは我等が六人集つて手をつなぎ合せて一まはりある位なり。眞すぐ進むと未だ新しきお宮なり前にゆくと白ら胸襟を正し頭をたれて艇長以下士卒の當時の有樣を胸にうかべ思はず感涙にむせぶのみなり暫くは頭をえあげざりき境内には松杉など繁茂して涼しき風はりよ〳〵と吹けり。こゝより市街を見ろせば大部分は見らるるなり。

八月十日　本三甲　大　秀子

朝からの暑さに頭痛がしだした。それでも今日は私の誕生日だといふので、母樣が何か御馳走をお拵へなさいと仰しやる。『それなら何致しませう。母樣のお好きな江戸鮓でもいたしませうか。』つて、握鮓の仕度に取蒐つた。お鮓の種子には、お卵と鯛のおぼろ、それに干瓢に椎茸、海苔もお美味しいが、鼈甲も無くてはならぬもの。何か來て居るだらう魚市場へ見にやつたら。と言ふので松やを見せにやつたら茅渟鯛の今捕り立てと言ふのが三枚、而かも目の下八寸とは、私の今日の誕生を祝つて下さつた神樣のお惠み深い樣にも覺えて、飛立つ心を押鎭めてお料理に懸つた。鱗をとるから三枚に卸してお酢の中に漬けるお溜りに漬ける、何から何まで一切私の主人

役。勿論御飯の仕度卵燒、さてはお砂糖や醬油の割方お臺所を一手に引受けて學校で教へて戴いた割烹の實地應用。母樣は少しもお手傳下さらないのでおしまいには泣き出したい位の忙しさ。暑さは暑し、何て此樣な日に私は生れたんだらうと恨めしくなつて來る。

『忙しかつたら松やに手傳つてお貰ひ。』と母樣は仰しやるけれど、松やがお料理なんか何で知つてるもんですか。それは水汲や洗流し位は手傳はせもしますが、勿躰なくも私の誕生の內祝なんだもの、泣きの涙でするからつて私の手一つで仕遂けなければ……』と、斯う思つて一生懸命、どう〳〵それでも午後三時頃までにすつかり出來上つたの。おぼろが二十、卵燒が十八、海苔卷が三本、椎茸が十五、酢の鼈甲が二十五、お醬油のが二十五。『さあお客樣方ごゆるりと御食り下さい。』銀行からお歸りになつたばつかりのお父樣は、『やあ今日は秀が誕生祝か、オヽこれは江戸鮮だな、頂戴しよう。』と仰しやつて快くお箸をおつけになる。『母樣お酢の鼈甲がおいしいんですよ。』と申上げると、『此子は、お酢の鼈甲なんて、ありやしないよ。お醬油だから鼈甲なんだよ能く似て居るからですよ。』とお笑になる。『それではお酢のは何て言ふでせう。セルロイドとでも言ふでせうかね。』と申上げると、お父樣もお母樣も御笑ひになる。何の事か解らぬ癖に松やまでか一所に笑ふ言ふた私も可笑しくなる。親子三人に下女一人。淋しい家庭も斯うした樂しい食卓の內に、やがて四時になり五時になつて、さしも暑かつた今日の日も涼風が軒の風鈴を音づれて來る。裏の泉水へは何所から紛れこんだか螢が二つ、宵の明星と光つて居る。お向ひの煙草屋では早や表に涼臺を出して例のお愛嬌のおばさんの團扇の音がパタ〳〵。

八月十一日　本二乙　村上純子

『貴嬢なんか良家の處女として純潔な家庭を持つて居らつしやるから何も申上げる樣なお話もありませんが近來の女學生上りの方には人の衣服を見てから後にお辭義をする樣なものが多う御座んすねィ。私共の考としては何といふ賤しい卑劣な精神だらうとさげすまずには居られませんねィ。斯んな風だから畢竟男子に玩弄物視されるんですね。

『先生、さうしますと其樣な方は外形ばかりで內容の充實して居ない証據でせうか。

『まあ、さうでしきや思はれまんせね、其樣な人の思想や意見は皆んな付燒刃ですね。此樣な人が自己の容姿を崩さぬために、そして又禮義や作法の上から姿態を整へるといふ事をせずに公園で目立つ樣にとか或は寄席で引立つ樣にとか表面ばかりを飾る跳上

り者なんですヨ。

『それでは丸で綿お召の様なもので廉價で上品に見える様にと心掛る所謂膚い物ですね。

オホ、、、、、

『さうです〳〵。其膚物くらわせ物が何かにつけて多くなつて來たのには閉口します。これも所詮は自己を知らないに歸するのでせう。スペンサーも『世の中に恐るべき者は大馬鹿者なり。』と言つた様な覺があります。兼護堂の言葉にも『我を知らぬ程の者は高の知れた奴なり』とあります。人間は自己を知るにあります。

『自覺といふ事ですか。自覺といふ事が自己の本分を盡くす上に於て最も大切な者であるといつて何日かも校長先生から『お前達は自己の地位を知れ』と教へられました。

『左樣ですか、先生のお教訓は慥に味あるお言葉ですねイ。自分の家に何程の財産があり又自分の父がどういふ立派な職務を執つて居るにしても、自分は唯の生徒ですからねイ。其處を万事の行の出發点とすればまあ過ちは寡からうと思ひますヨ。

『先生有難うございました。今日は久し振りで御伺して種々御教訓を得まして此樣な嬉しい事は御座いません。先生、此のお話を他日發表する樣な事があつてもお差閊はありませんか。

『發表つて、どういふ方法で

『別に何でもありませんが、私共は休業日誌を書いて學校へ出す事になつて居ますから、之を日誌へ書いて置きたいのですが……

『承知しました差閊ありません。

『難有う御座いました左樣なら。

『ヤ、又入らつしやい。左樣なら。

八月十二日　　本一甲　高橋良子

友の信書

廣島の從妹から手紙が來ました。嬉しくて封押し開いて讀みました。

良子樣お達者ですか何して居らつしやいますのお休みも最う半分になつちまいました貴女にお目に掛りたくつて仕方がないのだけれ共お母樣が此のお暑さですつかりやられて仕まつて四五日およつて居らつしやいます別段な事はありませんホンの暑氣中りです廣島の暑中は評判ものですが本年は又格別です尾道は如何私お伺ひしたくても斯ういう風ですから仕方がありません惡しからず

私は二三回繰回しました。母にお目にかけたら『まあ順子さんのいつもなから御親切な事。おつかさんの御病氣はどんなんだらう。別段な事は無いにしても暑中の事だから心配ですよ。直ぐに御見舞かたが

た御返事をお出しなさい。』と仰しやる。

御手紙嬉しく拝見しました母上様御病氣の由驚入りました御輕症とは申せ大暑の折柄十分御養生遊ばしませ當地も三十年振の暑さとか申して田畑の物は皆萎れて居ます私も暑さまけがして弱つて居ますがお目に懸りたいやら御見舞やらで近日母と同道御伺ひ致します母上様に宜しく

時は午後三時。ポストへ入れに行くと向島の山々では雨乞の火を燃すとか道行く人が話して居ました。

八月十三日　本三乙　岡田ヨシエ

農夫が眞心こめての雨乞も終に天津神の御目にとまらせ給ひてか、今朝は珍らしくも曇りて朝日さす頃より雨さえ降りいでたり、久し振りの雨に何となう心おちつき縁側に出づれば庭の面より土くさき香のにほひ來りてうれしくも亦ゆかし。

昨日まで、『水がたりない稻がやける』と心配せし百性の額の皺も、今日はあとなく消えて互に潤を祝ふ聲のみとなれり。されど今日はたゞ雨降りを祝ふに過ぎず、まだ人々の顔にはいひ知れぬ憂の色も見えたり。かの塡塞の小亂は終に全歐洲の大亂となりこれにひきつゞきての膠州灣問題。今日はいよ〳〵我通牒に對する獨逸の回答期日なり、この話は軒下に雨の小止みを待つ百姓の立話の話題ともなりて、中には、『日露戰爭の時も丁度今年のやうなひでりで私等は旅順の占領と雨降りと、どつちが早いかとまで云ふたことがあるが、今年も隨分てつた上にどうせこうなつては戰爭があるにきまつている。』『うむそうすると又物が高くなるが困つたなあ、しかし内の忰はよくやつてくれればえゝが。』など話す者もありて、未だ回答の來らざるに最早戰爭と自分で定むるもおかし、

やがて午後三時頃と思ふ頃門先に號外配達の凉々しき鈴の音、見れば例の太文字にて『日獨の國交は愈々斷絶』とあり。あゝ終に回答は來らず、先刻の話は全く事實となれり。

八月十四日　金曜日　本一乙　岡野ユッエ

今夜はカヤマチでは内でお米をひいて居られますので私も一緒に手傳てお米をひきましたその時は瀧の様に汗をながしながらやつとの事でひきましたのでお風呂に入つて妹と二人でお使ひに行つて歸て内中の者が凉場へ出て凉んで居ると早夜が更けて十一時になりましたので皆がおだんごをこしらへましたこしらへる時の有様は筆紙の及ぶ所ではありませんおこめをこねるものあんこをもむ様火をおこすものこしらへる道具を揃へるものやつとの事で用意が出來ました又暑さもかまはず汗をながしながら二時間

ばかりでこしらへましたこしらへて眺めて見ると雪の様に眞白できれいでした先づ神様や佛様へおそなへして私等も戴きました

少しの間するとあちらの鶏もこちらの鶏もコケコウコウと歌ひ出しましたすると東の方から三日月形のお月様は出で店の時計が四時うちましたのでそれについて三つの時計がなりましたので一同眠につきました。

八月十五日　本一乙　吉本喜久代

今日は旧暦の廿三日にて天神様は荒神堂の御旅所に御渡御になる日だと小供等は樂しんで居る私は夕食をすまして戸外に涼んで居ると、ワッセ〳〵ドンガ〳〵〳〵といふにぎやかな聲が宅から程遠からぬ郵便局の邊に聞えた奥に遊んで居つた房子を横抱きにして渡場まで飛出した梅鉢の提灯は眞先に二つ續いて各町内〳〵の高張數知れぬ數多の弓張提灯に取まかれて天神様の御輿は靜かにをごそかに御渡御になり御定りの天びんは其の混雑の中に廣からぬ道を右に左にうね〳〵しながら人波をうたせて進む房子はおどるが如くほねるが如く喜びくるうにつれて思はず此の御渡御の後について一町餘も見送つた

八月十六日　二甲　野津梁江

夜風すが〳〵しく袂を拂ふ八月十六日、市中には雨戸さへ閉ぢざる家も其處此處にありて、いと靜かなる眞夜中に、勇みに勇みたる足元いと輕く、母と弟妹と共に停車場に行きたり。やがて勢よく走り來れる汽車に乗りうつりしは午前〇時三十一分なりき我はぼんやりと車窓によれども、外は春の夜の如き霧うつすらと立ちこめて、眞暗の中に星チラ〳〵と輝けり。車内は唯寂として、力なき客の寝息苦しげなる鼾の淋しく聞ゆるのみ。開け放てる窓より、うら寒き風、露をふくみてヒシ〳〵と續けさまに流れ込む。四五時間も過ぐれば、夜はほの〳〵と明け離れて雀の聲も面白し。農夫は田に肥料を蒔くあり、耕すあり、又賤の男の子の野菜賣るあり、乙女の花賣に出づるあり、揚々と昇り初めたる朝日は晴れ渡りて大空に輝き出でぬ。二三十分の後姫路に着す此處にて下車し、播但線に乗れり。名所の第一に數へらるゝ姫路城を左に見つゝ行けば、車中の景色美しく、稻田は一面に青毛氈を敷けるやうなり。中にほ憩の出であるあり。熟せるあり。何處の山々を見渡すにも、杉檜生ひ茂りていと麗しく、且、涼しげなり。とかくする内和田山に着きぬ、此處は淋しき所に似ず、大なる驛あるは驚きたり。暫く休息し御辨當を頂きし後、山陰線に乗りしは午前十一時過ぎ

なりき。

山陰地方は大部分稻の穗出で〻黃金の波をうてり。先づ本線に入りて驚きしことを二三誌さん。

第一トンネルの多きことなり。我は數へ見んとて六十近くまで數へしが其の後は數ふること得はざりき出づるかと思へば又入り、入るかと思へば又出づ。りの長きこと。我等の如く汽車に醉ふ者は實に辛かりき。

第二桑を多く栽培せることなり。我が輸出品中最も產額高の多き彼の生糸を作るに要する桑。思へば我が產額高の增加すとそゞろに嬉しく感ぜり、

第三如何に貧賤なる者も、言語の丁寧なることには、驚かざるを得ず、ましてや富貴上品なる者に於てをや。

米子驛に着せしは午後六時九分なりき。それより、暫しの間、車上の人となり、米子町を左右に見ながら我家に着せしは六時半なりき。

八月十七日　　補習科　野村禧子

襖明くる音に驚き目覺むれば今朝も相變らず伯母や從姉は最早や急がはしげに働き給へるなり『あゝ今日も又寢過せしか』と時計を見れば五時と廿分。祖父樣は熱心にお燈明を揭げて念佛を稱へさせ給へり明朝は是非早起すべきものをと固く心に誓ひつゝ裏庭に步みを運べば祖父樣の御手になりし朝顏三四輪咲き初めて他は未だ眠げなる眼して我を迎へてくれたれば大層嬉しうも力強うも感じぬ

『今朝はえらい蒸し暑い』等囁きながらお茶のお仕度。漸く終れば隣保の娘達四人許りも集ひ來りて愈九時前より例の如く初めぬ今日よりは丸卓の棚物に移る『大分落ち付いた』とてほめらる。午後は常の通り生花、夏は花物乏しき爲め前日の葉蘭にて九枚を入れたり。流儀は靑山にて池の坊より自然に近く殆んど投げ入れ同樣、然もすぢみちよく立ち居れば深く心を動かしめぬ初めの內は長時間を要して出來樂え惡かりしが此節は形も稍整ひ短時間にて生け上れり。伯母樣は比頃脚氣にてお仕事をなさざれば糊付けの座蒲團を從姉と二人にて縫ひかけぬ二十枚のうち四枚づゝ縫ひ上げたれど如何にしても學校にて縫ふ程の勇氣も出でず綿密の度も薄らぎて動もすれば粗雜に流れぬ。夜は新聞を讀む此地へ參りては何だか餘り新聞に遠ざかり居れば世上の趨勢にもおくれたらむ心地す、不圖目を紙上におとせば明日午前十一時幾分の列車にて畏くも聖上陛下には日光御所に御避暑中の所、時局を御推察遊ばされ還幸になりし由大文字に記しあり、其中に聖上プラットホームより改札口へ出でさせられし時殊に雄風一入輝きて拜し奉れりと且つ奉迎臣民が炎天の下に熱せる頭を

下げて迎へ奉れりとはさもあるべきにて今後の戰亂に於て我國の態度が如何に公正に協約を確守して御處遊ばさるゝかを推し奉りて心大いに安らかとなり且つ強固ならしめぬ。

八月十八日　　本一甲　平野あゐ

姫路より

お日様の上らぬ前に床を離れ、朝風を身に浴びながら練兵場の方へ散歩に行く身のしまる樣なラッパの音を聞きながら氣持のよい風を身にうけてほんとふにさわやかな感がする

歸つたのは七時頃それより支度をして十時頃家を出る途中明石と須磨とにおりるとの事やがていくつかの驛をすぎて明石に着くかの有名な柿本の人麿呂を祭れる人丸神社に參詣する茶店によりて問へば八房の梅とか宵枝櫻とかの由來をくはしくをしへてくれる神社に詣り前の店で紀念の爲めに明石燒の花瓶をもとめてそれより海邊に行くこゝは海も深く水もすんできれいな私も泳ぎたいが時間がなければ急いで停車場に行き汽車にのり須磨へ向つて約三十分位で須磨についたのでこれから一の谷敦盛塚に行く電車道にそうて七八町行けば一の谷に來る今は其の邊一帶の雜林であるが昔は坂で前に城をかまへ海には赤い旗や舟でうづまつて居り後から義經が馬にむちあてゝかけ下りるあり樣が目にみえるやうである。なを進めば二町あまりで敦盛塚に來る墓とても名のみ古くなり石にはこけ蒸し後の方には清水がわきでゝ居る其の茶店で休み町を通つて歸路につく町でこゝさら目だつのはどこの家でもすだれをかけて居る昔からの風習とか何となく奥床しく見えたそれより十五六分にて神戸についたのは六時半くらゐであつたしばらくすると父樣も歸られたので一所に布引の瀧へ行く一二町ばかり歩いて電車に乘る二十分ばかりすると瀧に着くつけば電氣は晝をあざむくばかりに澤山につき店には繪葉書細工物色々の物を賣つてをる雌瀧につけば澤山の人でおしあひをして居る瀧は勢よくごふ〳〵とおち涼しい風は寒いばかりに吹いて來る下を見れば噴水は大きいのと小さいのとありいづれも勢よく水を高くふき上げて居るいつまで見て居つてもあかない景色であるがいつまで居つても一所であるからと店で繪葉書をもとめ又電車に乘つて歸つたあゝ今日は私にとつては忘れられぬ樂しい日であつた。

須磨浦　　本三乙　平野ゑはね

明石々々と驛夫の呼び聲に、我等はプラットホームに降りぬ。今我は御慈愛深き両親の御惠の元に、有益なる旅路にあるなり、

人丸神社に參拜せんとて、敎へられたるまゝに暑き道辿る程に、やがて着きぬ。境内に八房梅とか盲杖櫻とか云ふ珍らしき木々の植付けあり。拜殿には歌等多くかゝげありて、流石歌人の社と床しく思はる門前の茶屋に暫し憩いて汗をかはかしつゝ、四方の景を眺むれば眠りたるが如き淡路島は眼前に横たはれり。げに、千鳥も飛び出でん計り。

時間せまりつれば記念にと繪葉書等買ひて此處を出で、海岸を歩みて驛に行く、海はさなから鏡面の如く、此の暑さもかまわで浴せる人々いと多し、やがて我等は車中の人となりぬ。此の次は須磨に降りる筈、舞子、塩谷も程なう過ぎて須磨にと着きぬ、時間少ければ、名所何れもは行かれざれば、須磨寺、一の谷、敦盛塚を見んとて、先づ電車道にそひて一の谷に行く。

間もなく一の谷と立札せる所まで來る。

此の邊り、右手は一帶の雜木林にて、後方に鵯越ともおぼしき山、木々の間より見ゆ。左手は青々とせる海にて鏡の如き海原には、眞帆片帆の影も点々と遙かあなたの水平線には、黒烟はきつゝ止れる如き汽船も見ゆ。

いにし昔、榮華の夢に耽りし平氏の、聞くも勇ましき源氏のつまもの共に、かゝる要害の地も程なく陷され、汀の舟に飛び乘りてもろくも逃げ失せしか、等次へ〳〵と聯想せば、鎧兜に身を固めたる武人の今にも木の間より躍り出でん心地す。あゝ此の平和の谷も且ては屍のうづ高きをなせしが、平和の海も幾万艘の舟を浮べ紅の旗の風にひるかへりしか。

餘念もなう考うる內、敦盛塚は最早目前、苔に蒸したる此の石碑、幾百年の星霜をへしか、昔を語りて我に聞せよ。

練貫に鶴縫ひたる直垂に、萌木匂の鎧着て、鍬形打つたる兜の緒をしめ、金造りの太刀を佩び、二十四さしたる截生の矢を負ひ、滋藤の弓を持ち、薄化粧したる美しき敦盛の姿。熊谷次郎直實の『オーィ〳〵返させ給へ〳〵』と扇を揚げてさし招きたる等、幻の如く浮ぶ。

松吹く風の笛の調べも渚を洗ふ波の叫きし、さなから當時を語る心地して……

電車の響に我に歸れば、涼しき風はさーと袂をはらひぬ。

名殘は惜しけど時はせまりぬ。

須磨寺にあゝ時はなし。

再び汽車に乘ること約二十分にして我は神戸の地をふみぬ。

暫し宿にて休む內、父上も歸られしかば、共に布引の瀧に行く。ほど一丁行きて電車に乘る。晝を敷く計りの町を通りて降りし所は瀧の下。ゆかたの人は

織るが如し。其の間にもまれ〳〵て廣き所に出づれば、邊りの木々は幾百の電燈もて飾られ、涼風等云ふ字の空中高く浮べる所を通りて雌瀧に行く。一方は岩石、一方は綠樹、其の間を仙姫の素絹濯ぐ如き水は、時々赤く青く變せられ、其の面よりたへず吹き來る涼風に醉ひつゝ、憂さも汚れも流れ去り恰も此の瀧の如く清く〳〵なりて、恰も天津御國の極樂園に行きし樣。

いさゝ川の流れを足元に聞きつゝ、繪葉書、木細工貝細工等賣る店先を通りて噴水の所に行く。四つの管よりふき出す水は、勢するどく一間計りも高く上りて飛沫を散らし、螢の如き電燈の、上より下に、下より上にと消えつ燈りつして上下するもをかし。夜稍々更ければ涼みの人除々にへりそめぬ。我等も又踵返して家路急ぎぬ。

八月十九日　　本四　福原　ふの代

諏訪山に登る

夏の朝のあけがた山は綠深き木々におほはれつゝある中をさまよひつゝ直に金星臺に登つた海上やら市中を見ると通りし所に高大なる家よ廣庭なる住居よと思ひしも登臨すれば半紙一枚廣げたら其廣大なりし家も包まれそうに見える海上の大船でも唯小さいものかなと思はる人や馬も豆粒のやうに見えてゐる彼の家の中でも船の中でも人は皆それぞれ事をしてゐるであらうが彼の通行人の米粒のやうに見ゆるを五人や十人なら物指の先に掛けて拂へばとんでしまふやうである馬でも人力車でも此時自分は一番大きなものの樣な心地がして市中でも足の元にあるいろ〳〵景色を見てゐる内に氣は晴て胸中快活になる誰でもかゝることありとすれば山は人にひろき心を起さし心情を閑雅にすると思ふて此山にかぎらず何所でも折々は登りて氣を晴すべき事と思つた。

八月廿日　　本四　林　　良

私はつかれた、からだを机の前にやつとすわらしてホット一呼していつも見なれた庭をながめた

此の部屋はわづか六疊の間である然しこれを自分の部屋ときめられてからは此の部屋が可愛くてならないそれで私はいつも朝起きて食事をすますとたすき掛で毎朝大掃除をすることにして居る自分の氣に入る丈ふいたりはいたりするのであるが、掃除をして居る時は一生懸命でたゞ奇麗〳〵と思つてするから何ともないが、すんでしまふと小さいつかれが來るそれで私はいつも机の前にすはつていつも見なれた庭を眺めて氣を靜めるのが常である。

今も庭を眺めて居たが掃除をして奇麗になつたのが

嬉しくて何だか部屋中がぐるりと見まわして見たくなつたので今更の様に見渡して見た。床の間は今朝庭からちぎつて來た菊の花を活けたが何時になくよく活つた様な氣がする其のわきに亡き父上のお寫眞が飾つてあるが私を見て『奇麗にお掃除が出來て嬉しい有難う』といつて居らつしやる様でなつかしいいつの間にか私の眼はうるほつて居た床のわきの丸窓は障子をはづしてしまつたから姉上と私と二人で作つて居る菊畑が見え遠く向島が見えて海風が吹いて來て涼しい丸窓の上に皇后陛下の御尊影が黒塗のふちの額に入れてかけてある。檳ばなの障子を左右に開けた所の私の今据つて居る机の上には硯箱と、キキョーを活けた花瓶とのみが置いてある本箱の上には筆立と作文の參考書やら英語、國語の字引やらで八九冊本が置いてある其の上に柱時計がつるしてあるフト向ふでキャツ〳〵とさわぐ聲がするから見ると春ちやんと正ちやんが老松に兄さんが歸省の時荷物をくゝつて歸られた綱を取り出してブランコをこしらへて二人でさわいで居る床わきの、ふすまが眞白であるから反射してこの室が明るいくるりと見まわすと何だが氣かすんだ様になつたからそろ〳〵復習に取りかゝつた

八月二十一日　晴　本三甲　田中壽恵

今しも入港の滊笛が一しきり響き渡ると後には微かに消え行く發動船のカッ〳〵の音がするのみ机の前の簾は二ゆり三ゆり風にゆられたれど油蟬の鳴く聲は急に額の汗をにじみ出させる犬さへ庭の松影に焼きつける様な太陽の直射を避けて長くなつて居る寒暖計は九十幾度を示すと誰か奥の方に話して居る聲も聞えるバンの手をハンカチに持ちかへた時ふと氣付くと何時しか鐘つき堂に子供が二三人集つて居る桃太郎さん〳〵。もし〳〵龜よ龜さんよとしきりに歌ふ。歌ひあぐんだかと思ふと一人がたくみに号令をかける『左むき右。』『今度は僕について歌ひなさい』と又一しきり歌ひ出す立派な未來の教育者だなと靜に思つて見て居ると今度は『おさんようをしましよう』と言つて早や快活に『一から一引く?』『一から一引く十』『二から二引?』『二から二引五』……流調に眞面目に問答がかわされる次から次へとよどみなく進んで『十から十引く十一』まで言つた時小さな教師は『あはゝゝあうまいなあ』と賞揚した私はこれを聞いて思はずふき出すと急に私がここに居たのに氣づいたと見え恥かしそうにして皆走つて行つたが後に殘された一人は草履が見えないといつて大聲で泣き出した二人は後に返つて親切につれて行つた。

八月廿三日　本三　小田まつえ

今朝垣の朝顔澤山開く。八拾四を數ふ。矢張赤が勝つ。お祖父樣は柿色が可いと仰しやる。私と父とは白が上品といふ。母は傍から『紫の由緣の色が何となく昔忍ばしめる。』と仰せになる。『昔は紫色を崇んだものだ。袍なぞでも許しの色といつて天子樣の御許が無ければ百官も着る事が出來なかつたものだ』とお父樣が註釋をお加へになる。それでも私は野暮だと思つた。

夜母樣のお伴して住吉神社の花火見に行つた。陸も海も『人山の如し。』とでもいはうか。大變な人出。アイスクリームをおごつて戴いて歸つた。

床に就いてからも。ポン〳〵と落着かれぬ音に、少時は眼がさめて居た。

八月廿三日　本一　濱中瀧江

日曜日　晴　凉風少しあり。例の如く勉強。晝食後白米に虫つきたるを掃除す。少人數に多量の白米を買ひ置く事、時節柄惡し。午後三時、兒玉書店より繪本地口の卷、仝諺の卷送り來る。讀みもて行くに抱腹絶倒の裡利する處多し。久しく行水を勵行せしが今夜は大分凉しければとて風呂屋に行く。母樣妹同伴なり。入浴者極めて少し。矢張暑さの加減なるべし。夕食後父上の謠曲を聽く。熊野とかいふ女平宗盛に仕へたりしが故郷の母病篤しとの報を得て暇申して歸省する所を仕組めるなり『いかにせん都の春も惜しけれど』故郷の花の散るのもつらいとか何とかいふ歌の所にて思はず其の孝心に感じたり。今一曲をと所望したれど、左までにはとて父上固く辭ひ給ひぬ。母上は『今暫しといふに價値あり。』と仰せられければ私共も默しぬ。九時寢に就く。夢は癈都の花の邊りさまよふて熊野の面影を髣髴しぬ。

八月廿四日　本四　青野セツ

午後井手さんと向島へ海水浴に行く。淺瀨を擇みて浴場に充つ。衣服を脫きて松ヶ枝にかくれば濱風之をなぶつて羽衣の如し。海水浴衣を着る。二人共揃ひのなり。海水浴帽を被る。之も亦お揃ひなり。靜かに步を移して徐々に水に浸るに清冽氷の如く銷金の暑さ一旦にして盡く。井手さんは德利なり磯に諸手をつきてボチヤ〳〵と足ばかり跳らせ丸でヤンさんの如し。私は少々泳き得るを以て五六間沖中に出づ『節ちやんは龜の子だよ。』と井手さんは叫ぶ。半ば嫉妬の色あり。功多きものは兎角人に嫌はる。何も人に嫌はれて危險を冒すでもあるまじとて仲善く磯邊にボヤ〳〵す。やがて遊浴十五分間稍々嫌厭の氣萌す。二人は海中に浸りつゝ暫を放てば港內に出でて入る舟の或は眞帆或は庄帆猪牙舟荷足舟親船傳馬端

舟よりボートに至るまで河時も見る現象なから場所が場所故に氣分は平日と異なり。何だか美穂の浦回に浴みせる天女の如き心地しつ。折りしも多度津通ひの大滊船は毒々しき黒煙を吐きて絲崎の方より疾走し來り小歌島の北岸を掠めて今し港心に入らんとするやボーンの滊笛海山を震撼せり。『何といふ無愛嬌なる笛聲なる哉文明の利器は凡てを假つて俗化せしむ。』と女に似氣なき氣焰を吐けば『節ちやんの御苦勞樣な事。太昔しには彼の樣な無細工な物がなくて天女も結句呑氣でしたらうね。』『井手さんは最う丸つ切り天女の氣持ちですよ。』と果ては大笑ひとなり我に還れば身内稍々寒さを感じぬ。風引かぬ間にとて海を出て羽衣を纏ひ少時松の根方を散歩するに向うより櫓を肩にせる老船頭來るに會す。相顧みて訝るものあり。想ふに彼の人は土地には相應しからぬ者の何地より來にけんと怪しみつらんか。去るにても老船頭の來る事何ぞ遲きやと二人は不平たらだらに兼吉を迂回して渡舟の客となりぬ。

八月廿五日　本二乙　田阪小竹

樂しい七夕樣も今日となりました。朝早くから賣にくる、竹屋さんの枝振りのよさそうなのを、一本買ひました。私は紙屋に行き五色の紙を買つて來ましてそれを切つて何卒ぞお習字が上手になりますよう に、先にお祈して、書き始めました。かくて書き終りまして、祖母樣に手傳つて載いて、綠りの葉蔭へ結び付け、屋根より高く立つてもらひました。其の間にお母樣は御忙しう、せつせつと、何やら、七夕樣の御馳走をしてゐられました。

八月廿六日　本二乙　長尾タマ

餘り徒然なるまゝに學校より借用の俳句の作り樣《高濱虛子先生》を飜讀す。得る所無きにあらず。物は例しなりと思ひ三四句作り試む。我ながら可笑しけれど初陣日記として左に其の佳と思ふものを錄す到底人に示すべきものにあらず。

暑き日や物の匂ひの鼻につく
炎天や庭の柳に影もなし
打水に日の照りかへす暑さ哉
長上に物申しあくる暑さ哉
寢そべれは暑さに眠し午後三時

八月廿七日　本二甲　池田マサコ

木曜日。晴れ、暑し。

休業はもう四日になつたが中々涼しくならない。朝の間は少しはよかつたが晝近くなつての勉強は動ともすると眠氣がさす。そして欠伸が出るたんび柱時計が私を戒める樣である。

午餐後母の使にて停車場まで行く。日は全く天に沖して一点の蔭もない。それでも滊車の客は何所へ行くのか待合室に充滿して居る。用事はそれ〴〵あるものと見える。

三時過、金魚の水を換へてやる。生々した泳き振りほんとに可愛い。

夕飯最中妹が急に腹痛を訴へ出した。時節柄案せられて○○醫師の診察を乞ふた。暑さのために胃弱になつた處へ果物を過食した爲だ別に心配の事もないと言はれた。醫師を送りながら藥を戴きに往つた。

今夜はお友達と海岸へ散歩に行く積りだつたがこんな事でお止めにした。

十時蚊帳には入つた。蒸暑くて團扇は放されない。

八月廿八日　本四　井手よねの

最うお休みも殘り少なになつたので今日はM先生のお宅を伺つて教科以外の御卓見でも拜聽したいものだと思つて青野さんと連立つて訪問した。午後三時暑さの眞盛り。先生は能く來てくれた今日は退屈の所へ此の暑さと來て居るから晝寢でも仕やうと思つた處だ。丁度よい處ださあ話し玉へ。氷でも取らうか何澤山ですつて。さうかね、まあそれではよさう餘り衛生的でもないから。それなら冷麥でも喫りながら女の道でも研究しようかね。貴嬢等も最う半年で立派な卒業生だ。ボッ〳〵婦人道德に就て確實な意見を持つ必要がある。學校で十分修身の時間に教はりもせうが他山の石で少しは違つた思想を味はうも萬更でもあるまいよ。何ですつて、西洋婦人のお話ですつて。さうね、日本人は西洋人を褒めて我が國人を貶す癖があるね。悪い樣だが矢張比較研究といふ態度でやるのは不都合ないね。僕なんか井底の痴蛙で何も知りませんが、物の本などによると、佛蘭西の女は女といふ事を忘れない。それから英國の女は人間といふ事を忘れない。米國人もさうであるとかいふ事だ。所で日本人はどうかといふと、所謂三從七去の事だと思つて居るらしい。何、まさかつて左樣、今時の人はさうも思ひもすまいさ。併し私の見る處では日本の女は顔に白粉さへ塗れば美人になると思つてるらしいが、さうは問屋で卸さないよ。容姿の嬋娟たる斗りが女の資格でもあるまいて、そんな事をいつたら貴嬢両人はどちらの資格になるかね。アハヽヽヽ。まあネ、女といふものは第一怜悧でなくてはならぬ。第二鋭敏でなくてはならぬ。第三趣味が高尚でなくてはならぬ。第四識見がなくてはならぬ。何ね、それは女に限らず人間としての誰もが持つべき要素だつて。勿論、女だつて人間じやないか。要するにだね、男的性格に對する女的性格としての現はれである處の女の眞生活眞力量でな

くてはならぬ。解らぬ？それでは極めてやさしくいへば階子段の上り下りにも箸の上げ下げ下駄の脫ぎ穿きにも其處に女としての優美な艶やかなしとやかな處が無ければならぬ。よしかね。女といふ者は便所へ出入する處を男子に見られない樣にするだけの心掛がなければならぬ。この見地からいふと繩飛や高飛は少々怪しくなつて來るがね。何、とても先生の所謂女の資格が無い。困つた者だね。兩人共隨分お洒ねの方でもない樣だが。先生の言葉は曖昧だつて。そんな事があるものか。寄宿舍の生徒が袴を穿かない時には廣帶をしめろとか袴を穿いたら白足袋を忘れるなとかいふ學校の用意の存する所を味はつて見るがよい。僕は女の資格の一として趣味の向上といつたが、自己の趣味を高尙にするのは即がてはは家人の趣味を統一する事の第一歩たる所以である。見給へ、下等の家庭ではお芝居見物、すつと下等では他人の惡口、でなかつたら間食、此が彼等の趣味である。僕をして言はしむれば彼等の井戸端會議に制限を加べるか全く禁止するかしたら彼等は恐らく生きてる甲斐は無いといふだらう。其趣味性の陋劣や眞に憐むに堪へたりだネ。少し上等になると音樂の合奏音樂會日曜日の郊外散歩斯ういふ事を企てる此等は知らず識らずの裡に親子兄弟の溫情を互に掬し合ふ媒となるもので至極良い事だと思ふ。僕の內では親子三人水入らずであるが休日等には家に閉籠つて居ると氣がくさ〳〵するから何か知ら不用な食物を取つたり下らぬ議論に花が咲いたり子供が甘えたりして厭な一日を暮らす事になるから打揃うて郊外散歩をします。ヤごうも氣が晴々してお互の溫味が通し合ふ樣な氣持がして此上もない事と思つて居ますよ。思ふに之は主婦たるもの〻大責任であらう。何、時々見受けるつて、さうでせう、して尾道あたりでは未だ旧式だから彼是批評もするだらうが僕は偖に趣味の高尙少くとも低級趣味より脫出する一方策だと信ずるネ。若いお嬢さん方が無暗に徘徊るもよくないがネ。まあ要するに方法にもあり年令にもよるだらうが女としての資格の一として兎に角從來の旧思想より一歩踏出して時勢に適應せる生活をして貰ひたいさうするには既に陶冶性を失つた旧時代の女には求められないから今の女學生たる貴嬢方に其の心得を持つて欲しいといふのです。まあ研究して見て呉れ給へ。——やあ飛んだ長話をした。厭に暑いじや無いか。何もうお歸り。緩くりお遊びなさい。ヱ、矢張氣が置けて暑い時は閉口するそれでは又晩景にでも來てくれ給へ左樣なら。先生の氣焰を拜聽する一時間、顏に似合はぬ何時も生徒には愛嬌を飜される。私等二人は道々今のお話を味ひなら歸路に就いた。西日は赫々と學校の校僕

室を照うして今にも燃え立たんばかり。

八月廿九日　　本二甲　山本喜代

佛蘭西の王様が或貧しい農夫から手作りの大蕪菁を献上したのをお受けになつて御褒美として五百圓のお金を下された。すると或る慾張の華族様が思ふには蕪菁の様な物にさへ五百圓といふ大金を下されるのだから立派な馬を差上げたら定めしもつと大金を下されるに違ひないと思つて馬を美々しく飾り立てゝ献上した。王様は其の貴族の貪慾なのをお知りになつて卑しい根性の奴だと思召され貴重の品を褒美として取らすると仰しやつて農夫の献上した彼の蕪菁をお下げになつた。

之は私が今日或る書物で讀んだお話だが本日の花咲爺のお話も筋は丸で違つて居るが心持は此に類したものです。私達は卑しい心を持ちたくないものであります。誠の一字は何よりも尊いものであります。いつか學校で教つた野人献芹の誠といふ支那の故事も思ひ出されて打ち笑ゑますには居られません。

八月三十日　　本四　立神タヲ

いよ〳〵休暇もをはりたりとてさま〴〵の仕度に忙はし着物の衿をブラシに揮發油つけて拭き襦袢はシンガーにて縫ふ

姉上何くれと手つたひ賜はるが今日はしみじみとうれし三時頃全く終りにければ今日を名殘りにとてバイオリン習へ後ひまなれば裁物す姉上に瓜袋我かために墓口一つ縫ふ

休暇四十日實に夢なりき一滴の水の無色なるも大海のよく深藍色をなすが如く一日一日を考ふるに我さほど懈怠せしとも思はされど積みにし四十日實に返り見ればこのあひだ何ほどの事をかなしをへし安らかといへば安らかなりけんさわれいとも平々凡々なりき

時は人の天よりあたえられたる唯一の財産とかやかくも尊く尊ふべき時四十日九百六十余時間浪費せし我清盛ならねど今更に沈み行くなる日をまねき返したき心地ぞする

さるにても我か同胞三百有余今日の日のおもひや如何ならん

八月卅一日　晴天　　本三　石原タマエ

嗚呼早や永いと思つた休暇も今日限りと成つた。今日も例の様に織らうと思つたが『今日は休め』と云はれたので洗濯をした。晝ご飯をたく時祖母さんは『お前が學校に行く様になつたらご飯をたいてくれる者が無いから、丁度お嫁さんを歸らす様な氣がする。』と云つて笑つて居られた。實に私は自分ながら

『よくもあんなに働いた事』と思ふ程で一生懸命に氣に向いて織つた表が三十幾枚着物が四枚、帶三本と云ふ樣な事で是れ等は主な事である。私は生れて此の休暇位世話を燒き又父母の手傳ひをした事は今迄に無い、だから勉强する時間は隨つて少かつた。之れがたゞ一つ殘念である。こんなに勉强も第二にして一生懸命に働くのも父母の爲、又自分の身の爲とは常々思ふが、其中に我儘も出る、腹も立てゝ見た、憂き事も數々あつた。そのうちでこんな事を思つた事がある。

憶世の中では無い學校の中で私位不幸な人は有るまい。或家の事情で私は少女心に、如何に心配して居るであらうか。他人は決して〳〵推察する事は出來ない。それでも幸福な事がある、それは愚な私でも學校に通學さして戴く事で何につけ色々な事を思つて居ると一人涙がポツリ〳〵と、終には留めども無く流れる、あゝもうこんな事は思ふまい、こんな事を思つたとて仕方が無い事である、まあ此れ位の事は諦めがつく『上を見れば限り無く下を見れば限り無し』とは昔の人のよく言つた諺である。

父母の不歸旅路に出で立てられた人は如何に憂き事が多くあらう。私の樣に父も母も有つても憂き事は限りないのに、あゝ何も諦めるより外はない。早く學校に行つて旅行なされたお友達のお話が聞きたい

冬季休業日誌

十二月廿五日　本三　河野キヌエ

（クリスマスの日）

昨夜は疲れてよく眠むれたがまだ舍に居た時の習慣があるので五時過ぎに眠がさめた生憎二三日前から下女が病氣で里に歸つて居るので少し床を離れるには早やかつたがクリスマスが嬉しいので起きたまだ誰も夢を結んで居る臺所に行つて顏を洗つて居ると婆やが起きて來て私の早いのに驚いた手傳ふ事もないので皆の起きない間に庭を散步した久しく見なかつた庭の草木は皆葉も枝も私の方を向つてしかも笑顏をして『ようお歸りになりました』とでも言つて居る樣で何んとなく嬉しい氣がした池の傍にあるペコニヤの色の褪せたのが寒むげに立つて居る隅の方に山茶花が一輪咲き殘つて居た私の歸りを待つて居てくれたのではないかと思へば何んといふやさしい心ではあるまいか池面は澄み切つて底も見えてゐるが鮒や鯉は穴にでも居るのか姿を見せなかつた食事をして居ると親戚の今年四つになる從妹が大きな聲で『きぬ姉ちやん』と叫びながら入て來た見ると手も足も紅葉して居るのに昨晩お土產に與へた人形を大事さうに抱いて居た私はこんな子供が大好きでいつも歸すのが惜しい、午后今晚のクリスマスのプレ

ゼントの仕度を手傳つて居ると又朝の從妹が來た『利ちやんいくつ』と尋ねると『四つお正月が來て三つになるの』と答へたのでこんな片言をいつては皆んなを笑はせた、夕方お湯に入り早く夕食をすませて皆んなで叔父樣の家に行きたのしいクリスマスをして家に歸つて床に就くと局の時計が十一時を打つたまた明日は餅搗であるクリスマスやお正月がひつついて居るやうで嬉しいけれども忙しいのがいやだ等と思ひながらねむりに落ちた。

十二月廿六日　　本一　楠生幸江

土曜　晴天《午後より曇る》

夜中に雨が降つたのか、外は雨でジト〳〵になり、とよを傳ふ雨の音がジト〳〵と靜に土の中へ泌み込んでゆく。

午前。一点の曇なき快晴、二階の南窓を開けると、一面に暖い朝日がさしこんで、炬燵で孫の着物を縫ふて居られる、祖母樣の脊中にポカ〳〵とあたる。

床の間の遲咲の黃色な菊が、ゆら〳〵とふるふてゐる。

中食後風あり。

もち屋の提灯は、風にふかれてゆら〳〵して居る。

十二月廿七日　　本二　兒玉千賀子

雨の日

しとしとしと、と淋しい冬の雨は靜かに〳〵何處からか、そつとしのんでくる樣に降りそゝぐでゐます眞赤な紅山茶花はこのやるせない雨になやんでポタリ〳〵と花瓣の散る哀さ。

餘りの物うさにしめつぽい部屋に朝からとぢこもつて私は英習字を書きつづけました。ホッと書き終つてインクのふたをつめる指先にインクの滴がヂーとしみこむのが、冷う感せられます。こんな日にこんな靜な〳〵雨の日等に、なつかしい友から御便りをもらつたらどんなに嬉しかろうと思ひながら、私もふと筆取つて卷紙に書きつらねましたがそれにもあきたので障子を開いて緣側にでて見ますと妹は餘念もなく人形の着物をぬつてゐる。まだ髮結つてゐないので、ちやうど、幸といやがる妹をすかせつゝお緣に鏡臺持ち出して幾度かひねつた後やうやう可愛い『ちこまげ』が出來上りました。まつ赤なリボンをまげの根元に結びお姉樣の古いギラ〳〵の銀簪を深く根元にさしてやるとまあほんたうに美しい令嬢姿となりました。かう云ふと私も名手の樣ですが一二時間もかゝつたので、妹はしびれがいつたとて泣顏してゐました。が、さつぱりとゆひ上つた己れの晴姿を鏡で見せてやると泣顏はニッコリ笑顏にかは

り、幾度かうつと自分のまげにさわつて見ながら、母様にお見せ申してくるのだと云ひながら白足袋の足音も輕うチョコ〳〵と縁側を走りながら茶の間の方へ行く後姿は見ちがへるばかり美しうございます眞赤なリボンが鹿の子の代りに、緑の黒髪の根元にからみつき、それが小さな頭にわけもなう可愛ゆく見え、走る度に銀簪のビラ〳〵がハラ〳〵と輕くゆれて二筋三筋の後れ毛がほつそりとした、衿元にからみつくのです。

ほんとに可愛い後姿。私もニッコリほゝ笑んで妹の影を見送りました。櫛道具片づけるのも忘れてしまつて。

十二月廿八日　　本二　廣川イト

朝のひと時

南向きの暖い部屋でお人形さんの着物を縫ひ初めたお晝近い太陽が南面の障子に照り映えて又となく明るい、心も自然とひき立つやう、灰色に包まれた様な淋しい冬の日に、やさしい優しいお母様のやうなお日様が、温う音づれてくれられるのがどんなに嬉しからう、今縫うてゐる紅友禪の着物がパッと、美しく冴える。

一針一はり縫ひつゞけて行く手の先が大分温くなつた、チ、チ、と可愛い小鳥の影が障子にあれあのやうに小さく動いてうつる。

先程から向ふの空地で兵隊ごつこをして遊んでゐる小さい兵隊さんの喇叭の音、それに續いて足音がバラ〳〵と聞えてくる。ポタン〳〵おやお餅搗が初まつたのだな。私は色々とお正月の事に心がうつつてしまつた。

十二月廿八日　　本三　岡田カッヨ

朝早くから車が通るのでゆつくりして居られないあんな人もあるのだものと元氣よく床を離れる妹もついて起きる着物をきかへさせたり顔を洗つてやつたり隨分賑かだ余程寒いと見えてバケツに氷が張つて居た私が髪をとくと二人もとく『お姉ちやんリボンかけて』と小さいのが云ふと大きいみいちやんがミー(私)もと云ふ二人おろろいの幅廣の赤いのを掛けてやると如何にも嬉しろうに頭を振りながら飛び歩く『お姉ちやん掛けないの』『えゝ姉さんは持つてゐないの郁ちやんのを貸して丁戴』と云ふと『お姉ちやんお姉ちやんのはまだ〳〵美くしい大きいのがタコマに澤山買つてあるのママ(母)歸る時持つて歸つて下さるのネ』など云ふ

生れて以來初めて妹と云ふものを知つた今日此の頃の私は如何に嬉しいか知れない殊に外國に生れて外國にそたつた妹見たくて〳〵堪らなかつた妹なのだ

もの可愛くて〳〵仕方がない英語をまぜてえどつこで無邪氣な話をするのが何とも云へない小さい子のえどつこは愛らしいものだ

先日までは下駄や草履が脫げて仕方がなかつたのだが今日あたりはやつと上手にはける樣になつた其れが嬉しいのか無暗みに大きな音をさせて歩く二人で混せかへすので大へん賑かだ常にはさびしい喰へば秋の樣なおばあ樣の內が此の頃はまるで春の樣

午後山崎のお婆さんがお出でになる私もお忘れお婆さんもお見忘れ『ずいぶん大きくなつたこと子供の成長するのは早いものだなあ』と云つて驚かれるそれもその筈た十年以前にお目にかゝつて以來今日まで一度も逢はなかつたのだものお婆さんもずいぶんお年をめして居らつしやる久し振りでつもる物語りに夜を更かした十年來の思出でに互に時の過るのも知らなかつた妹等は見た事のない人なので一寸はづかしそうであつたがすぐになれてお婆さん〳〵と云つてなつく樣になつたお婆さん明日も明後日もその次の日もおとまりなさいなと云つてゐた。

拾貳月二十九日　本四　兒玉ヨシ

春の仕度

樂しかつた十七の年も早殘り少なになつた今日、言ひ知れぬ悲哀か胸に充ちて來て、昔の友に年賀の文書きながら、そゞろ思ひにふけりました。窓越しに見えるお庭には、高い梯子を掛けて、お祖父樣のお植えになつた御祕藏の松の木を、手入れしてゐる爺やの顏、始終笑くぼ浮べて手鋏をカチカチ音さして居ます。私の傍て峯ちやんの晴着を縫つて居られた叔母樣は、紅裏の二つの袂を縫ひ上げて、嬉しそうに重ねて見て居られます。美しくそろつた袖口や、振口から、緋裏の見えるなつかしさ、どんなにお嬉しいであらう。叔母樣はそれを横の方に置いて、又一しきり身頃に針を運ばされます。ふと、合ひの襖が音もなう開いて、峯ちやんが顏を出し、ヨイヨイと叔母樣の膝に上つて、お星樣の樣な眼で、美しい着物を見ております。次の間では買付の小間物屋さんが來て、六疊の室中荷物を擴げてそこら一ぱいに愛嬌を振蒔いて、品物を進めて居ります。お庭から入いて來た光ちやんと、靜ちやんは、祖母樣のお袖にすがつて『私にはリボンを』『私には前櫛を』とてんでに優しいお顏を見上げては、おねだりしてゐます。やがて自分のお望み通り買つて戴いて、『祖母樣有りがとう。』『お祖母樣大好きよ。』と、大喜びで出て行きました樣子。鼈甲緣のお眼金越しに、小間物屋さんを見ながら『ほんとに子供は仕樣がございません。』と、お祖母樣のお聲。そして、山の樣におつかい物を賣り、小間物屋さんは心地よいお世辭

を殘して、歸つて行きました、臺所では、明日の餅つきの仕度に大騒ぎ下女も下男も大聲に話しながら働いてゐる。かうして春待つ心せわしい日も暮れて家中に明るい瓦斯がきらめき渡りました。食事のすんだ靜な夜には、下女が臺所の長火鉢のうばで、新しい晴着を一生懸命に縫つてゐます。あれでもお正月は樂しいと見えます。待遠しいと見えます。毎夜の居眠りも今宵はかりはせずに、せつせつと針を運ばして居ますもの。

十二月三十日　本三　松本智惠

私は作文を作るにも物を暗記するにもすべて床の中でするのが常でした。でもそれが私には一番いゝのですもの。しばらくじつと目をつむいて居ると心が冷靜になつて作文を作るにしても次から次と糸を繰る様に考が出て來ます。暗記にしても其の通りです今晩もそんなにして日記を書いて居たら姉が寢れないから電氣を消せと云ひました。初めはもう少し〳〵と思つて書いて居たけれど自分一人の爲に他人が寢れない。すまない、と云ふ事が頭にあるものですから一つ事ばかり考へてどうしてもいゝ考が浮びません、どう〳〵思ひきつてやめました。私の手が電氣のスヰッチにかゝるとかちつと小さな音を立てると共にあたりは眞の暗になりました。しばらくは何も見えません。けれど隣室から電燈の光がかすかに漏れて來るので段々と物が見えてきます。唐紙が白く浮き出ました。天井も表はれました。壁もねづみ色に、皆の顏の輪廓もうつすりと。私は床に横たはりました。しばらくの後に目を開いた時はもう餘程暗にもなれてよけいにはつきりと物がうつりました。あたりもうす明るくなつて居ました。私は前の續をとえんぴつを紙に走らせて見たけれど、あゝやつぱりだめでした。暗には犬や猫よりもつまらない人間の目でした。私はノートを閉ぢて眠りました。

十二月三十一日　本三　松本智惠

早や一人の掛取が來て帳面に受取をして歸りました物の二分も立たない内に又一人來ました。そうして受取をして居ると又一人、次には小僧を連れた人、其の次には若い女の人、とそこに並んで待つて居るやうやく人影がなくなると今度はお客が來る。品物を出して見せて居ると又帳面と袋をさげた掛取が入れ代り立ち代りして來て暮の忙しさを思はせる。台所もいつもとは多勢なのでほんとにやかましい。こんな事を續けて居る内にどう〳〵夜になりました。何處の家もお掃除をして清められました。まもなく明日の事等思ひつゝ床に着く。妹等は早やかすかないびきさへ立てゝ樂しい夢路に入りました。

けれど私は思は千々にくだけてどうしても眠れません。終に千光寺の鐘は十時を報じました。と又しばらくの後には十一時も聞きました。あゝもう一時間の後には十六と云ふ年は奪はれてしまひます。なつかしい十六は。私は一分でも時のおそく立つ事を望みました。けれど何も知らない時計の針は規則正しく秒を刻んで終に最後の十二時を打ちました。其のせつなの私の感情と云ふものは云ひ表す事が出來ません。目にはいつしか熱い涙がたまつて居ました。私は十七になつたのでした。

大晦日　　本一　井上　ヒサ

今夜は最早、何處からも餅搗の音は聞えません兩側の家々の戸の隙間からは、燈火が棒の様に靜かに靜かに、道に横はつて居ます。結ひたての髪らしい御かあさんと蝶々のようなリボンのおさげとが障子に寫つて小さな話聲が洩れて居る家もあります。今夜は犬も樂しい春を迎へん爲めに、寢屋にうまいして居るのでしようか、遠吠一つ聞えません、唯々遠くに『うどんうば――』のふれ聲が寒き宵を破つて身も凍るばかりに聞えます、靜かな風は、軒の注連繩をさわ〳〵と騒がして居ます。カルタを取つて遊んで愉快でありました。

一月一日　　本三　正木　ヲサ

大正四年一月一日、金曜日、朝曇り、徐々に晴れ行き日光微に輝く。寒さは左までにもあらず。今日は私の爲には拾七歳の花の春である。いつもの年なら身分相應の綺羅も飾り新年のお目出たうをお友達と交換するのであるが國家諒闇、何事も控えに控えて世は鈍色の春寂し。況して尾道市は陰暦を用ふれば別けて寂々寥々として四隣唯小兒の嬉戯するを見るばかり。母様は妹の洋服の見積をなさる。姉様はハウプトマンの『日の出前』といふをお讀みになる正午より姉妹三人にて初湯に行く旧年の身のあか洗ひ流して心は年と新らし。商店は何處も彼處も戸を閉ちて淋しく喪章つけたる國旗も空しく春風に、戰くばかり。年賀狀黒枠付のが僅に十二三枚。に夜入りてお隣りの歌カルタ聲ねむげに聞ゆるも憂ある春の印にや。例により今日は金錢を扱はず。姉様と明日記念の寫眞撮るお約束して寢に就く。

一月二日　　本三　井出　テッ

朝　と　晩

今朝朝餉をすまして皆でこたつにあたりながらお話してゐると玄關の方で何か歌ひ聲が聞えた春駒かと出て見れば兄弟らしい二人の乞食おしりをからげた弟はたわらを持ち歌を歌つてゐた姉の方はもらひ物

であらうか着がへであらうか黒い風呂敷に包んだものをせをつてゐたそして私がお銭をやつたら二人とも出て行つた實に少し許りの小銭を集め日々の暮に苦しむ父のため母のために片腕ともなりつつ自分のなりはかまわず歩るくのかと思へばこの二人の可憐なものにたいして同情の心は起らずにいなかつた私ばかりではなくたれしも起ることであらう私は今更両親の有難さに心から感謝したのであつた

夕餉をすました時隣家のお湯へ入りに來られた弟妹どもの多い私の家に隣家の子供まで來てさわぐので子供ぎらひの私は早速書齋へ閉ぢこもつたするとしばらくしてすぐの弟も來た二人で勉強するうち時刻も大分過ぎたと見えて弟妹も寢て聲もしなくなつた唯時計のみ『こち〳〵』と云ふので今度は時計が耳さわりになるやうであつた折りしも障子のすき間から月の光が見えたので『おや何夜の月かしらん』と障子開いて見れば丁度寒月はすみきつた空にうかんで美しかつた弟は早速柱のめくり暦を見て『今日は旧の十七日です』と答えたこのよい月を見て一句ほめやうとしたが愚能のなさけなさ、、、あかりを消して書齋を出やうとした時障子を見れば月光は日光の如く庭の老松を障子にうつしてゐたのでベートーフェンが月光の曲を奏でられた夜もこんな月だつたのかと思つた

一月三日　　本一　岩井清子

日曜日　晴天

暁つぐる鳥の一聲に夢まどかなる床より起き出でてあゝ最早、新年は今日限り、と思へば樂しさいづこにやら、雨戸をくらばやと、手を、ふれば、折しもさつと、寒い北風が身にしみ渡りて、一しきり、驚きあはてて、ぱつと障子閉づ。

此の寒さをも、いとはず、木綿の着物に赤のたすきを、十字に掛けたる、子娘は、町の乙女子、あち、こち、遊ぶ其の中を、春駒舞ひ、おどりては、少しばかりの、小銭集めつゝ、歩むも、いと可憐なり。

一月四日　　本三　泉　　隆

今日は私の十五回目の誕生日だ。いつもはお友達をお招きするのだけれど今度は忙しいからお招きするのをやめて夕方家の者だけ祝ふことにする。九時頃隣村から笹子の小母さんがいらした。信ちやんと友ちやんつれて。この小母さんは先にこちらにいらしたものだからお母様を姉様のように思つてよく訪ねていらつしやる。まだ若いのに五人も小供があつて四人まで女で五人目がやうやく男の子、生れた時は大層な喜びだつた。御一諸に晝飯をいたゞいて後、信ちやん、友ちやん、とし子とおはじきや羽子をついて遊ぶ。小さい子だから、らちがあかなくて終に

はいやになる。

弟は友達あつめて二階で双六、歌留多をやつているから賞品を持つて行くと皆が『ありがたう。』『仲間にいれてあげませう』等と大歓迎。賞品係や讀手になる。男の子のより合ひだからすいぶん賑やかだ。

ついうつかりと時をすごしてしまつた。階下へおりてこたつへあたつたが氣懸りなのは作文がたくさんたまつているからそれをしなくてはいけないことだ氣が氣でない。でも自業自得、遊んだものだから天罰があたつて今頃から大困せなければならぬ。休の前にはいつも、今度こそきつと終にまごつかないやうに、なにもかもしてしまつて、その後あそばうと思ふのだけれど、思ふだけで實行したことがない薄志弱行の徒とは私のことだらう。早速机に向つたけれど中々できない。實際私にはまだ作文の作文たる所がわからないのだ。どうしてそれで作文がつくれようか。今更自分の能のないのにあきれる。だが何事も熱心だ。己の最善をつくしてやるに如くはない。やらう〳〵。

今日はお風呂をたてたがいやにけむる。それが室へはいつて目にしみてしかたがない。けれど時々燈立の掃除が悪いとこんなことがあるからあまり氣にもとめずにいた。小母さんは歸るといつて支度をしていらつしやる。少しさてお父様がお風呂から上つて化粧部屋で着物を召していらつしたが『これは大變だ柱に火がついている。早く水を持つてこい』とおつしやつたのでびつくり仰天。皆總立ちになつていつて見ると、なるほど柱の眞中五寸程眞赤になつている。これは大變と私が赤ちやんを抱いて小母さんとお母様とが水をもつていらつしやる。女中は驚いてあつちへいつたりこつちへいつたり。も少しの所で大事になる所だつた。早く見つかつてなによりだお父様と祖父様とが原因を調べていらつしやるがよくわからない。燈立の掃除は今日したし。あたりに燃え易いものはなかつたのに。明日大工にしらべさすといつていらつした。小母さんはちよつといらしてびつくりなすつて合つた話ぢあない。やうやく氣が沈まつて夕飯にする。弟や妹が『姉ちやんおめでたう。』『姉さんは今日生れたのだ。』等いふのでなんだか嬉しかつた。おや變だ。この赤飯には小豆がはいてないようだ。きつと女中がまぜそこねたのだらうと思ひながらいたゞいて居るとお母様も『おやこれは小豆がはいつていないらしいよ。』とおつしやる不思議なので女中にきいたら、どういふ間違ひか小豆の汁だけいれて小豆は取つておいたといふ。馬鹿々々しい。新參の女中はしかたがない。赤飯たいたことがないのだと思へば一度ございます……。弟が『かねは經濟家だね。なぜつて一度は汁で赤飯、

殘りの小豆でうで小豆にでもすればいいぢあないか。』といつたので私はころびながら笑つた。弟のいふ通り取つてある小豆は明日うで小豆にしてもらうことにする。小豆のはいらない赤飯!!どう考へても珍無類だ。なるほど二度用をつとめるけれど歯答へがなくてへんだ。私の誕生日にはこんなろくでもないことばかり、なにか、いやなことでもあるのではなからうか。

一月五日　　本二　三谷ヨシコ

留守する夜

青い青い月の光が戸のすきまからさしこんで障子に映つてゐる二人の影は丁度墨繪の様です。身を切るやうな木枯が吹きつけるのでたまらなくなつて戸をしめました

あれ又夜鳥の聲がふるふ様にきこえました。『姉ちやん淋しいわねー』『えゝけれどもうすぐ歸られますよ』其の矢先に大聲で歌を歌ひながら二三の濱男ががらがらと足音高うすぎ行きました。驚いたやうに妹は泣き出しましたやうやうすかして妹の大すきなかちかち山のお話をしてきかせるといつの間にかひざにもたれてすやすやと眠つてしまひます。おゝ無邪氣な顏今ごろはどんな夢を見てゐるのでせうかあの可愛い人形の世界をさまようて居るでせうか。あたりはだんだんと靜かになりましたもう自分が一人あの少女世界で讀んだ恐ろしい話はもしやこんな夜の出來事ではないかといふと恐ろしさと淋しさに身がふるひました。母樣はまだ歸られないのかしら十時はさつきに鳴つたのにたゞ柱時計がチックタックチックタックとばかり自分は淋しさに蒲團の中へうつぶしていつの間にかうつらうつらと夢を結びました夜中頃ハット思つて目をさまして見た時には私は暖い寢床の中へゐましたさうして母樣は妹を抱いてすやすやと寢ていらつしやつた』

火事

本二　村上純子

急を報ずる牢鐘の音、天地の寂寞を破る音、三萬の市民の夢覺す。

『火事よ〳〵』と叫ぶ聲、あわたゞしき足音『すは火事よ』と床を蹴て飛び起き雨戸の開くもおそしと表に出づれば早や四方は暗澹たる黑煙に包まれけり火元はまからず屋事杉野なり。恐ろしさに震うのみあれよ〳〵戸のひまより洩出づる黑煙は益々はげしく人々しきりに叫べども戸明かず。

遂に外より破られたりその倒るゝ時の音。毒蛇の舌にも似たる焰は黑煙と共にむら〳〵と躍り出で物凄き事云ふばかりなし。

バケツの人水汲む人の忙しさよ。群集の騒ぎ巡査の

靴音サァベルのすれ合ふ響折しもかけつけたる消防隊の目覺しきはたらき管より迸り出づる水は宙を飛んで火と戰ふその物凄き樣筆舌の及ぶ所にあらず實に生き地獄とやいふべからん。必死のはたらき甲斐ありて流石の火も漸くをさまり煙もうすれたり時方に三時。燒けたるは僅か一軒類燒を免れたるはいと幸なり。火事見舞の人引きもきらず。再び床に入りしが今迄忘れ居たる頭痛のはげしくなりて眠られず漸くうと〳〵とする中早や鳴出す鷄の聲。

一月六日　　本四　永井恒子

是非來るやうにとの度々の手紙に、母よりもやうやう許しを得、きのふ林さんとも色々相談し、終に今日午前七時十二分の列車にて、宮内なる佐々木樣の許へ遊びに行かん事を約しぬ。

いつもの如く朝寢坊も出來ねば、六時頃起き出で、仕度もそこ〳〵に林さんを誘ひて停車場に向ひぬ。やがて我等は福山におもむくべく三等列車の片隅に小さくなりて座しぬ。

突然人々の『あつ』とゆびさすに顏あぐれば、今し彼方のうす紫の雲を破りて、眞紅の太陽は陽々とさし上るなりき。その美しさ、神々しさ！二人はたゞ恍惚として見入るのみ。

間もなく福山に着きぬ。直ちに車にて兩備輕便鐵道の停車場におもむく。車引の『下り列車には一時間餘も間あれば』とて進むるまゝに、旅なれぬ、我等は車て宮内に向ふ。

車上は風いとさむく、耳もちぎれんばかりなるを、車引のあつしとて上着などぬぎつるもをかし。二時間許りにして佐々木樣のおうちへつきぬ。やさしき母上姉上などの厚きもてなしを受けつゝ、弟樣の無邪氣なる言語にしばし興じ合ひつ。

午後より昔備後一なりし御社に詣でぬ。社前には寒櫻の美しうさきそろひて、うぐひすに春をしのばせたる、いとめづらしかりし。

こゝよりみ池といふところへ行きぬ。池には浮草幾多浮び、岸の松が枝姿をうつして、小さきそり橋のかゝれるあたり、得も云はれず

歸れば瀧車の時間もはやせまりたれば、暇告げんとするを、母上姉上などの強ひて止め給ふにいなみがたくて、うちへは電話にてその由告げ、今宵一夜はとまる事としぬ。

夜は又歌賀留多家族合せ、はては唱歌蓄音機ヴァイオリンなどのはじまりて、夜更くるをも知らざりき

一月七日　　本一　松本よしの

私は明日から學校に行くのが何より嬉しくてならない。休みになる迄は、もう十日、五日と、待ちどうしい程であつたのに、さて、休みとなつて見れば、

今迄はあの廣い運動場で大勢のお友達と、色んな話をしては、恥しい事も忘れて、大きな聲で笑つたり或は上級生の方等と共に、フットボールをけつたり又あのなつかしい教室で、皆と一所に、學んで居た事などを思へば、最早内に居たくない。あの教室、あの廣い運動場で、今皆さんと、あの様に面白く遊び學んだなら、愉快な事であろうと、思ひつめて居た事が、いよ〳〵明日となつたので、ほんとに嬉しい。又これからさきは、雪の降る日もあれば、大風大雨の日等も度々ある。私はこんな日が一番樂しいのである。雪の降る日には、さぞ四方の景色がよいだらう。又雪投げも盛になるし、或は凍つた氷の上を靴で歩けば、すべりこける事もあろう。或は雪解の雨垂が私等の首や頭の上に落ちて、皆のひや〳〵と、驚いて、逃げる事もあるだろう。又大風や大雨の日等には、皆で授業をして居る所へ、大風が吹き寄せて來て、硝子窓ががちやん〳〵と云ふ音に驚いてあつーとびつくり顔をする事もあろう。或は小さくなつしまふ事もあろう。又大雨でざん〳〵と降る日には、教室に散り込むさあ大變と、窓をしめるやら、戸をしめるやら、ざあ〳〵と降る餘りの大きな音に、こわくなる事もあらろ。こんな事を思へば、一時でも早く學校に行きたくて、日の暮れるのも待ちどうしい程であつた。

學校彙報

自大正三年六月
至大正四年五月

學校記事

講話　六月八日、荒川代議士及新渡戸博士の講演を開く。荒川代議士は丈夫な心懸けのよいそしてよく活らく者となる事、が學校に來る目的であり又取りもなほさず忠孝の道なりとて壺阪海軍大尉及その姉キヨ兩人の幼時、貧しきが中によく孝養しよく正直を守りし話をなし、新渡戸博士は同情ある人となるべしとて愛の尊とさを說かる

講堂訓話　六月十七日、『他人のあるところを知れ』と題して(一)控目にすること(二)心持をそこねぬこと(三)親切にすること等につき話さる。

地久節訓話　六月廿五日、本日は地久節に相當すれども諒闇中に付式遠慮、午前八時より講堂に於て皇后陛下の御坤德を述べられ生徒も主義一貫の女となるべき旨訓話あり。

始業時變更　七月一日より午前六時五十五分朝會開始、七時十分第一時始業に變更。

性行調査　七月二日より性行調査會を開き一週間

にて終了。

視學官參觀　七月十日、本縣視學官三澤寬一氏栢縣屬と共に午前十時來校、設備授業を參觀せらる。

辭令　七月十四日附を以て枝廣教師解職、同日附本校教諭に任せらる。

講堂訓話　七月十七日、第一時第二時に亘りて休暇中心得及び出身小學校を訪問すべきに付ての心得に關する訓話あり。

第一學期終業式　七月廿日第一時より講堂に於て擧行。

第二學期始業式　九月一日第一時講堂に於て式擧行。

役員任命　九月四日放課後、講堂に於て一學年の級長副級長及校友會委員の任命をなす。學級主任及校友會幹事立會す。

宣戰奉告祭參拜及詔書捧讀式　九月六日、宣戰奉告祭々典長神社八幡神社に於て擧行あり。一同參拜す。同日、宣戰詔書捧讀式を講堂に擧ぐ。詔書捧讀に續いで、日獨宣戰理由並に心得、全歐大戰乱の起因及戰況說明あり。

始業時變更　九月十四日より午前七時五十五分朝會開始、八時十分第一時始業

大嘉御着輦紀念日講話　九月十五日第五時日清戰爭の原因及戰捷の根本精神を說き女子の覺悟に付き訓示、但、式は之を行はず。

參觀者　九月廿五日　西大寺高女國分教諭來觀。

講堂訓話　九月廿六日第一時、全歐戰乱に就き軍人の意氣動作の自ら日本軍人と相異れる點より母たるものの教育上の責任、訓話。

飛行機觀覽　九月廿八日西御所滑走場に飛行機を觀覽說明者の說明を聞く。

消防練習　十月五日晝飯後、消化器の構造及び使用法說明、演習す。

衛生講話　十月十日第五時大和校醫より衞生の意義につき講話あり。

閑院宮殿下奉送迎　十月十一日閑院宮殿下、同妃殿下は赤十字及婦人會の廣島支部總會に御台臨のため御西下、同十四日御歸京に付職員生徒一同尾道驛に奉送迎をなす。

詔書謹寫　十月十三日戊申詔書捧讀並に訓話あり右終て各自教室にて詔書を謹寫す。

敕語謹寫　十月三十日第五時講堂に於て敕語捧讀並に訓話、右終りて教室にて教育敕語を謹寫す。

體操演習會　十一月三日午前九時より體操遊戲演習會を行ふ。午後三時半豫定の如く終了す。

教育會講演　十一月四日、尾道私立教育會主催の通俗講演會を本講堂に於て開催。富士川片山兩博士性格の異常兒童の變質に付講話あり。

始業時變更　十一月十六日より朝會開始午前八時四十五分第一時始業午前九時と變更

參觀者　十一月十九日、西村市長、塚本學務課長授業參觀のため來校、山中高等女學校長山中正雄氏夫妻同じく來校參觀せらる。

學藝會及保護者會　十一月廿一日午前九時より正午まで講堂にて學藝會演了。午後一時より父兄懇談會を下裁縫室に開く。來會者數多く何れも滿足に終了せり。

齒科衛生講話　十一月廿五日放課後綠川齒科醫の齒の衛生に關する講話あり。

講堂訓話　十一月廿七日第一時、最後の勝利者と題して勝利を得る順序、資格及びその連鎖につきて訓話あり。

○

小泉督學官來校　十二月八日、小泉督學官藤井視學本校視察の爲め來校、放課後講堂に於て小泉督學官より生徒に對し訓話あり。女學校の目的は邦家の中堅たるべき品位ある女を作るにあり。明確なる道德律に合すべき判斷力を有する女を作るにあり。女の學者を作るに非らず。裁縫師を作るにあらず。將又、料理人を作るにあらず。されば女學校の教科はすべて品位ある德操ある女子たるに資すべき目的の下に課せられ居るなり。故に諸子は其の心して修養に務むべきなり、とは其の訓話の要項にして深き感銘を與へられたり。

○

青島攻圍軍司令官一行歡迎　十二月十日英軍司令官バーナーデストン氏一行、同十七日青島攻圍司令官神尾中將一行尾道驛通過、凱旋東上せらるるにつき、職員生徒驛にて歡迎す。

○

講堂訓話　十二月廿四日、品性陶冶の二形式につき上級下級により形より入ると心を主とすると二樣の形式はあれども、心と形と共に備はるを以て完全とするは勿論なり。希くは此の內外二方面の修養を心懸けて圓滿なる人格を築き上げよとの校長の訓話あり。續いて西村市長の御寄贈にかかる扁額『端操清靜』といふ字義につきて親しく市長の訓戒あり。筆者男爵野村素介氏の人格の人にして兼て書道第一流の人たるを說き、端操清靜の字義の解說より轉じて東西の女子を品隲し、支那印度朝鮮土耳古等概して東洋の婦女は古來小人と同一視せられ檻禁に等しき境遇におかれ、從つて卑屈となり理想も低く『端操』の點に於て欠くる所あり。歐米の女子は社會上の地位男子と同等以上におかるるが故に識見高く德操ある人乏しからざらんかなれども其の弊として『清靜』の趣は則ち鮮し。然るに獨り我國に於て女らしき『清靜』と凛乎たる『端操』とを兼備せる人その人乏しからずとて、乃木將軍夫人、小楠公の母君などを例證として、端操と清靜とを併せ體するこ

とが女子最高の理想たる旨を力說せらる

第三學期始業式　一月八日、始業式擧行。本年は諒闇中の故を以て、新年祝賀式は之を擧行せざりしと雖ども新年を迎へし覺悟は則同じかるべきなり。即ち新年なるが故に元氣を新にし、同時に學年末なれば終りを全くするの用意を要す、との訓示あり。

○お佛壇　一月十三日西川中國新聞社編輯長のお佛壇を聞く。

○婦人會臨時總會　一月十七日尾道市婦人會臨時總會を本校講堂に開く。細川益之氏（三原女子師範學校主事）の『小學兒童を有せる父兄への注意』の講演あり。餘興として琴、尺八、ヴヮイオリン三味線等の音曲あり。盛會なりき。

○小遠足　一月廿七日晝食後本校出發、防地を北して大阪を越え高須村より南折、海岸に沿ひて山波小學校を訪ひ、海岸にある吉備津彥命の史樹馬耳を見て歸校す。此日天氣快晴小春日和にて寒からず、愉快なりき。

○競點作文披露式　去る一月十六日午後一時より各教室にて一齊に競點作文を課せしが、爾來各級主任の豫選及び採點委員の第二豫選より引き續きて嚴密なる採點をなしたりしが愈々其の披露式を二月十七日午後一時講堂に於て擧行せり。校長訓示、褒狀賞品與授、優勝作文朗讀、三橋教諭の講評にて式を終る。市長助役市內各學校長新聞記者父兄の列席を得て、優勝者の光榮を添へたり。入賞の作文は別に之を揭ぐ

同窓會　二月十七日競點作文披露式を機として同窓會を開く。式後作法室にて茶菓を喫しつゝ、おのがじし歡語にふけりて解散。

○福島大將講演　二月廿四日、豫定時午後二時三十分を過ぐること一時間にして將軍本校に着し少憩の後、校庭に於て、在鄉軍人團、青年會員、官公吏、婦人會員、商業學校生徒、高等小學校生徒及び本校生徒其他有志數千の聽衆の前に立ちて——嘗て、シベリアを騎馬にて橫斷し勇名を世界に馳せたる人、日淸日露兩役に於ける殊勳者、前關東洲都督、而して今や全國在鄉軍人團奬勵のため老軀を提げて騎馬旅行を敢てせられつつある人——は徐ろに低けれども底力の籠れる聲もて語らる

近來の靑年が氣力の乏しきは邦家のため憂慮に堪えざる所なり。單に健康なり、單に知識あり、技能ありと云ふのみにては駄目なり。剛健にして元氣ある國民たるを要す。然らば如是の氣風は如何にして養成すべきか。曰く『山に登れ』登山は實に困苦缺乏に堪え健康を增進し、麥飯の握りと梅干とをして山海の珍味たらしむ。若し夫れ、山の谷間の淸水を掬ばんか、味實に千金ならむ。加之眼界頓に開けて

數十里外の山海一眸の下に聚り、氣宇廣濶、世界を小なりとするの念を養ひ得ん。斯て世界を舞臺として活動するの人たるを得べし。余の友人スコットランドに遊ぶ。一老翁あり。道に逢ふ、彼、日本の常に大國に勝つ所以を問ふ。友人答ふるに大和魂の故を以てす。老翁肯せずして曰く、日本に大和魂あるが如く露にロシア魂あり、英にイギリス魂あり、佛然り、米然り未だ俄に首肯すべからずと語を轉じて日本人の常食を問ふ。友人米の飯を說明す。彼手を拍つて曰く是なる哉、我スコットランド人は燕麥の粥オートミルを常食とす、而して英國をして日沒のなき國たらしめしは實に我スコットランド人なりと、實に味ふべき言なり、牛乳、牛肉などを以て養ひし体は豆腐の如きのみと多大の感動を與へ校長室にて少憩の後胡牛樓に向はる。

性行調査　二月廿六日より第三學期性行調査會開始三月六日終了。

民政資料展覽會　三月六日郡役所に開催の民政資料展覽會を參觀す。

講堂訓話　三月十五日第一時、女とは何かと題し女の男と異る所以の德即ち女の特徵たるべき德は一從順、二、丁寧、三、親切、四、家庭的、是なりとて所謂新しき女は誤れる個人主義より出發して極端なる破壞主義に向ひつゝある道外れなり。余は諸子が時世につれて進歩したる眞新婦人とならむことを希望する旨訓話あり。

送別會　三月十九日午後一時より送別會を行ふ、餘興とり〳〵にて盛會なりき

進級式　三月廿日進級式擧行。性行善良を以て賞狀賞品を與へられたるもの十名、學力優等を以て、同、十三名、精勤賞狀を授與せられたるもの七十一名。

卒業式　三月廿二日午後一時より第四回卒業證書授與式を行ふ。寺田縣知事臨場せらる。

終業式　三月廿四日第一時、第三學期終業式を行ふ。

學則變更　本學年度より二年以上の英語科を隨意科とし英語を修めざるものには裁縫を課することとす。

入學試驗　四月四日入學試驗施行。全五日九十六名入學許可補員三名と決定、

長澤敎諭退職　三月三十一日附を以て長澤敎諭依願退職を命せらる

新任敎諭着任　四月六日新任敎諭三木多可氏着任

入學式　四月七日新入學生九十八名の爲の午前八時半講堂に於て入學式を行ふ。

始業式　四月八日第一時より第一學期始業式を擧

ぐ。式後學級主任左の如く披露あり。

四甲、下瀬敎諭、四乙、枝廣敎諭、三甲、三橋敎諭
三乙、井上敎諭、二甲、吉野敎諭、二乙、上村敎諭
一甲、大河內敎諭、一乙、阪本敎諭

役員任命　四月九日左の如く級長、副級長任命。

（校友會役員は別項に譲る。）

四甲、小林　イサ、岡田カツヨ、
四乙、黒川美左代、吉川　モト、
三甲、村上　純子、福永千代子、
三乙、檀上ッハヨ、橋高　正子、
二甲、岩井　清子、兒玉　治代、
二乙、岩崎　照子、岡崎　淑子、

昭憲皇太后御一周年祭奉拜式　四月十一日午前八時講堂に於て　昭憲皇太后御一周年祭奉拜式を擧行す。御眞影奉安室に　故皇太后陛下の御眞影を掲げ奉り、職員生徒順次に奉拜の後、學校長の訓話あり式を終る。

開校記念式　四月二十日午前八時第六回開校念紀式擧行。

修學旅行　四月二十二日午前七時、尾道驛に參集廣島市に開催中の共進會並に敎育展覽會觀覽の爲め全校生徒の修學旅行を行ふ。豫定の如く無事觀覽を終へて午後六時十二分廣島發、午後九時廿三分尾道に歸着す。

東伏見宮殿下奉送迎　四月廿四日東伏見宮殿下同妃殿下　御通過に付尾道驛に奉送迎をなす。

大禮御發輦紀念式　四月廿七日第一時大禮御發輦紀念式擧行、

茶話會　三木敎諭歡迎の意を兼ねて廿八日午後三時より作法室にて茶話會を開く

体格檢査　四月上旬より各級体格檢査を行ひつゝありしが五月五日、大和校醫及上田眼科醫を聘して向三日間に亘りて体質及眼疾有無の撿査をなす。

講堂訓話　五月廿日第五時價値は形式により判斷すべからず内容を重ずべき旨講堂訓話あり。

級會　學級の親睦と健康增進とを目的として學級の遠足會を行ふ。第一學年は向島立花へ《五月廿四日》第三、第二學年は松永へ《五月廿九日》第四學年は向島千汐へ《六月二日》

婦人會總會　尾道婦人會總會を本校に開く。五月廿三日午後一時半開會。長谷敎諭の理化實驗、新井禪師の講演ありて盛會なりき。

講演　新井石禪師を聘して廿五日第一時より講演を聞く。全日放課後クラゲット夫人の少女救濟に關する講演あり。

海軍紀念式　五月廿七日日本海海戰戰捷紀念式擧行。チボガトフ將軍降服の時の講話あり。

長澤前敎諭逝去　五月三十日午後七時、元本校敎

長澤フミ氏逝去せらる。誠に哀悼に堪えず。翌三十一日杉野校長及三宅教諭は弔詞を述べ香を奠す。越て六月一日職員及生徒總代數十名會葬す。

朝會訓話抄

○大と小、餘りに大なるもの餘りに小なるもの共に吾人の注意を逸す。君恩、自然の恩親の恩等前者なり。行住之を思へば敬虔なる人たらん。黴菌等は後者なり。坐臥之を思へば健康の人たらん。

○努力の總和、本市出身者石原氏九十八點の平均を得て醫科大學を卒へ將來學界の權威たらんといはる氏の少年時を見るに唯快活眞面目努力等の美質の外何等驚異すべきなかりきといふ。然らば即ち氏の成功は努力を續けたる總和の表はれしのみ。道は邇きにあり。

○ポンチ繪、『暑さに勝つ人負ける人』と題せるポンチ繪を見たり。ハイカラの青年の裸にて氷嚢を戴けるものと、杖きて書籍を抱きたる老人の伯大隈に似たるとを描けり。何等意味深き諷刺ぞや。伯は實に京坂の間を奔走して炎熱百度の裡、數千の聽衆を控へて演說しつつあり

○國家と個人、昨多數の兵士が青島方面に向つて輸送せらるる列車を見たり。邦家の爲め身命を擲つ覺悟を胸に秘め乍ら安如怡々たるを見て感極りなし。誰か貴重なる身命を惜まざるべき。其の惜まざるは一に『國家』の爲めたるが故のみ。尊きかな。此の覺悟。

○噫、九月十三日、九月十三日は如何の日ぞ。先帝陛下御轜車御發引の日ならずや。大將乃木及其の夫人の殉死の日ならずや。先帝陛下前古無比の御遺業は申すも畏し。乃木將軍夫妻の忠烈は之を古忠臣に比して遜色を見ず。

千載稀に見る偉太なる實例を現實に見たる吾等は純忠と純貞との例を古き歷史に求むるを要せざるなり。願くば感憤興起、せめては小なる乃木夫妻とならむ。

○强行偵察、先日勞山灣の强行偵察を行ひ有力なる資料を得たりと云ふ。軍人皆死を覺悟すと雖ども其の死を恐れざる程度如何によりて勝敗分る。敵は此の强行に對して恐れ退きしなり。偉なる哉。決死の覺悟、

○時と場合、時と場合とに應じて進退を誤らざることは肝要にして、且、多大の修養に待つべきことなり。大和恕堂先生、舊主阿部伯危篤の報を得て東京に直行し、門前にて其の薨去を聞き、忽ち去て宮城門外に至り、軍國の際宸襟を惱まし給ふ 陛下の萬歲を祈り奉り、然る後阿部邸に入れりと、身を處す

る誠に事宜を得られたり。考ふべし。

○七福神、七福神に就きては諸傳説あり。要するに武力、慈悲、美、漁、農、等諸種のものが社會組織上必要なるを表徴せるものなり。而して恵美須神が鯛一、大黒が米二俵を擁せるは多く貪らざるを示し大黒の槌と頭巾とは怠惰の戒と知足の意とを示すものなり。働かすして金を得んと祈るとも神は納受し給はず。聾大黒、翼恵比須の名ある所以。深く鑑戒となすべし。

○皇室の懿親、昨、閑院宮殿下を送迎し奉りしが申すも恐多き事ながら殿下の御風姿の誠に御立派にわたらせられ、あたりを拂ひ給ふ程の御威風の尊さ。云ひ知れぬ難有さを覺えたり。皇室の懿親にかかる御方の坐して、

陛下御談合の御相手を遊ばさるる御事、君國の爲め何ぼう賀すべきことならずや。

○我國の赤十字、閑院宮殿下の御總裁遊ばさるる赤十字事業は多大の發展を遂げて世界にも認めらるる程となり、近く露西亞の依頼を納れて一部の人々は我赤十字社より彼地に赴く筈なり強きばかりが武士にあらず。威あつて猛からざるこそ誠の武士なれ。我國は即ち威あつて猛からざる國なりと謂ふべし。

○手入れ、寄宿舍前のポプラを見よ、既に黄葉せる樹と、尚まだ青々たる樹と二樣あるを見む。是れ前者は夏季に枝を拂はざりしものにして後者は枝を拂ひしものなるに原因す。即ち勢力を徒費せず元氣を蓄積せると否とによるなり。身心のこと亦然り。鍛錬によりて身心の老衰を防ぐことを示すべき好箇の活教訓ならずや

○小泉先生のペン軸、小泉先生を三原五雲樓に訪問して先生の御經歷を承り、感銘甚だ深きものあり。先生少年時非常の苦學をなされ四方壁の二疊の間に一年有半を過ごされ、又、自ら麥飯を炊ぎて食したる副食物は一度も口にする能はず、多くは一抹の鹽のみにして乾物、鰹節はろの比最大の御馳走なりきといふ。又、先生は十四才の時、祖父君より與へられるペン軸を三十餘年用ゐられしが、今は家寶として桐の箱に納め、以て子孫を戒むる料とせらるとぞ。吾れ人共に慚愧に堪えず。

○凱旋將軍　青島攻圍軍司令官神尾中將、凱旋の事を奏上すべく東上せらる。廣島市に於ても種々苦心して將軍を敲はんとし、中將に乞ふに嚴島に紅葉を賞せられんことを以てす。中將は陛下の御召によりて東上の途にあるものなれば遊山に類することは平に辭退する旨答へられ、大本營跡を拜觀して先帝を偲ひ奉り直に東上の途につかる。士の世に處する些事と雖ども些事にあらず。中將謹嚴意を用ゐること深し。

○榎僧正、徒然草といふ書物に榎僧正の事を載す。或寺に大なる榎あり。故に、人、其寺の僧正を榎僧正といふ。僧正之を苦み榎を切らしむ。人又呼んで切株の僧正といふ。のち切株を堀り取らしむ。人又々呼んで堀井戸の僧正といふ『人の口に戸は立たぬ』とは是の謂なり。ッマラヌことには神經を痛めぬものぞ

○福島大將　昨日福島大將の謦咳に接することを得大に欣懐とする所なり。窃に思ふに、大將若し大工となられしと假定せば必ずや棟梁となられしなるべし。何となれば事にあたりてベストを盡す人なればなり。大將は理想は大きく實際に當りては細心なりしに相違なし。全國の在鄉軍人團奬勵といふことは帝國の前途を慮りたる大理想にして。又、騎馬にて一小村落と雖ども洩れなく說き歩かるるは誠に細心なる仕方なりといふべければなり。又大將は將來を洞觀する明あるの人なるべし。大將の滿蒙西比利亞の踏査又は今回の旅行なども皆遠き將來を慮りたるに非ずして何ぞや

○接骨醫　余の知れる一接骨醫あり。非常に好評を博せり。余嘗て彼に其の秘法を問ふ。彼云ふ、何等の秘法あるなし、唯、患部の痛みて苦しむを容赦せず、十分に整へ引き延ばすにあるのみと。自己の修養、子女の敎育、等に對しても味ふべき言なり。

○部分と全體と、鎖の物を扛ぐる力は鎖を形造る環の一つ一つの力による。若し環の一つのみにても不完全なるものあらば、鎖全体の價値をそぐ。諸子自身の價値は單に自己一人に係るのみならず、學校全体に影響する所以を思ふべし。

現在職員

（大正四年六月現在）

出身學校	受持學科事務	担任職名	就職年月日	族籍	氏名
東京高等師範學校	修身教育	校長兼教諭	大正二年十月四日	愛知平	杉野三治郎
仝上	地理歷史	教務主任教諭	明治四十三年三月三十一日	兵庫平	三宅素
檢定試驗	理科地理	仝	大正三年一月十二日	山口士	下瀨精造
仝上	國語	學級主任	大正三年四月十六日	靜岡士	三橋六次郎
東京高等師範學校	數學物理	學級主任	大正二年四月十一日	栃木士	井上晫
仝上	國語	仝	大正三年四月十日	富山士	古山宗一
東京美術學校（師範科）	圖畫習字	學級主任	仝	明治四十五年四月九日	茨城士	大河内定雄
日本体育會体操學校	体操	學級主任	仝	明治四十五年三月三十一日	埼玉平	吉野賢司
津田英學塾	英語	學級主任	仝	大正二年三月廿八日	岡山平	阪本花代
東京音樂學校（師範科）	音樂	學級主任	仝	大正二年四月十一日	愛知士	上村春野
第六臨時敎員養成所	裁縫家事	舍監	仝	明治四十五年四月九日	愛知平	新帶カノ
京都府立第一高等女學校（專攻科）	裁縫家事	學級主任	仝	大正三年四月八日	廣島平	枝廣春枝

第六臨時教員養成所	裁縫	學級主任	仝	大正四年四月六日	千葉平	三木多可
廣島尋常師範學校	修身家事	舍監	助教諭	明治四十二年三月三十一日	廣島平	岡田タツ
		庶務會計	書記	大正二年二月廿八日	仝	三次隆次
東京和洋裁縫女學校	裁縫		教師	大正三年一月廿二日	廣島士	西田テル
商業教員養成所	商業		囑託教師	明治四十四年四月六日	山口士	河地大輔
池ノ坊谷本總幹事御簾ノ間	挿花点茶		仝	大正二年三月十七日	廣島平	森信常[illegible]
東京大學醫學部別科			校醫	明治四十五日五月二年	廣島士	大和三郎

生徒原籍府縣別

（大正四年五月一日調）

府縣別＼學年別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
廣島縣	九六	五七	七〇	六八	二九一
愛媛縣	〇	三	二	一	六
岡山縣	二	一	五	二	一〇
兵庫縣	一	一	〇	二	四
大坂府	〇	一	一	一	三
和歌山縣	〇	一	〇	〇	一
三重縣	〇	一	〇	〇	一
岐阜縣	〇	一	〇	〇	一
茨城縣	〇	〇	〇	一	一
埼玉縣	〇	〇	一	一	二
島根縣	〇	〇	一	二	三
北海道	〇	〇	一	〇	一
合計	九九	六六	八一	七八	三二四

生徒原籍郡市別

（大正四年五月一日調）

郡市別＼學年別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	総計
尾道市	四九	三一	三五	二八	一四三
廣島市	一	〇	〇	一	二
呉市	〇	〇	〇	一	一
御調郡	三二	一五	一九	二五	九一
沼隈郡	一一	五	一〇	七	三三
芦品郡	一	〇	二	一	四
深安郡	二	三	〇	一	六

學年別 / 族籍別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
士族	三	八	二	五	一八
平民	九六	五八	七九	七三	三〇六
合計	九九	六六	八一	七八	三二四

生徒族籍別

（大正四年五月一日調）

學年別 / 族籍別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
世羅郡	〇	〇	一	〇	一
甲奴郡	〇	三	〇	〇	三
豊田郡	〇	〇	〇	二	二
加茂郡	〇	〇	一	一	二
佐伯郡	〇	〇	一	一	二
比婆郡	〇	〇	一	〇	一
他府縣	三	九	一一	一〇	三三
合計	九九	六六	八一	七八	三二四

父兄職業別

（大正四年五月一日調）

學年別 / 族籍別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
農業	一九	一三	一八	一八	六八
工業	六	〇	一	二	九
商業	三八	三二	四〇	三六	一四六
雜業	一〇	四	五	四	二三
官吏若クハ之ニ準ズルモノ	一〇	四	四	七	二五
教員	三	〇	五	二	一〇
會社員	二	四	〇	三	九
紳商僧侶	一	二	〇	〇	三
其他	一〇	七	八	六	一九
合計	九九	六六	八一	七八	三二四

第四回卒業証書授與式

大正四年三月廿二日本校第四回卒業証書授與式を擧行す。此日天氣朗に晴れて正に是れ堯天舜日。式は午後一時杉野校長の擧式の宣言によりて開始せられ

次で勅語捧讀あり其より學事報告に移り次に卒業生四十一名に卒業証書を補習科修了生六名に修了証書を而して又優良生精勤生に賞狀賞品を授與し校長の告辭寺田本縣知事及西村當市長の告辭卒業生惣代立神タヲ子の答辭あり。次で唱歌《仰げば尊し》の合唱にて式は全く閉ちられ後來賓及父兄には別室に於て茶菓の饗應ありたり。

此日卒業生及一般生徒の成績品を陳列して來賓及父兄の觀覽に供す。

來賓の主なるものは寺田本縣知事藤井縣視學瀧谷三原女子師範學校長武繩尾道商業學校長前田仝教諭高橋尾道驛長大部專賣支所長杉本監督判事澁谷秦土屋の三小學校長藤川郵便局長等にして管理者側よりは西村市長小林助役本森收役塚本學務主任市會議長市會議員臨席せられ生徒父兄を併せて無慮一百人の來臨ありたり。

學事報告

本年度本科卒業生は四拾一名にして補習科修了生は六名なり本科生入學當時は四拾六名なりしが過去四年間に入退學の出入有つて現在の卒業者を出すに至れり補習科生は入學の初めより今日に至る迄何等變化なし本科生卒業後志望の豫定は大部分家庭にて家事の手傳實務の練習に就き其の内一名は奈良女子高等師範學校本科に一名は東京女子高等師範學校家事科に入學し五名は三原女子師範二部生として入學確定せり其他二三名は他の學校へ入學志望を有せり本年度は學年の初めより教員の手擧にて一名の異動もなかりし爲卒業生は勿論全体の生徒も本校豫定の學業を完全に修むることを得しは幸福なり從て學力其他に於ても前年度より餘程進歩の形が見ゆ本年度學業成績表に其率を高めしは勿論曩に三原女子師範にて女學校卒業者及第四學年生中にて二部生志願者の入學試驗を擧行せし際にも本校は幸之が好成績を得たり勿論此等入學試驗のみにて直に各高等女學校の學業成績全般を定むる能はずと雖兎に角に本縣内各高等女學校卒業者の學力を比較するには好き試驗場たりしなり又今回二名の女子高等師範學校入學者の出來しも多少本年度の學業成績が進歩せし証據なりと信す此等は學校全体より見れば僅かに一小部分の進歩を具体的に示しゝものなれども之に依りて生徒全体が好學心を增し且つ學べは自分も必ず其域に達し得ると云ふ元氣と自覺心とを高めしは事實なり斯くて一般學術方面に於て生徒等が各學科に興味を得進んで學ふ樣になりたり特に作文の發展の如きは其最も著しきものなり

次に德育方面に就ては昨年述べし通り此土地の風儀

が他都會の如く淫靡に流れず除程引締り居るが爲惡風に感染することなく頗る順調なり從て生徒の氣風も至て質素にして且朴直なり卒業生の半數は市內出身にて他は市外の者なり然し多年當市に居住し敎育を受けたれは一般に當市の感化を蒙り氣轉も利き融通もきく樣になり居れり是等は學校に於ても日每能く示導せし譯なれとも大部分は市の良風を感受せしものと思はる又生徒は昨年に比し時間の觀念を高め業務を勵む習慣を得て本年度皆出席にて精勤褒狀を受けし者昨年度の二倍なり又本年度は退學者至て少なく僅に拾一名に過ぎず之を昨年度の五十九名に比すれは五分一にも足らさる程なり是等は生徒が一般に學校を信用し好學心を增し師弟の間柄か圓滿なりし結果なりと思はる何れにしても此現象は本校の內容に於て一步を進めしものと認むることを得へし吾々當路者は此の好き校風の興らんとする機に乘し益々勵奮努力して以て本校の將來をして益々健全の地步に達せしめんとす

休育方面に關しては一般に壯健なり病氣欠席が著く減退し欠席の多くは家事上の都合にて止むを得さる者なり又全体としては昨年より精勤者の多きは實際に其体力の增進を示せり女子は元來男子より纖弱なるを以て本校生徒の如く体質變態時期のものは僅々數分間直立せしめても忽ち腦貧血にて立眩みするもの多く常に數名は列外に離るゝの止むを得さるものありしが本學年の初めより種々の方法を講して之が矯正を圖り專ら競爭遊戲を課して元氣を鼓舞せしが日下は一時間立たしむるも平氣となりしは之れ体力增進の結果なりと信す又本年度は肋木を使用せし結果姿勢を矯正せし者多し本年第一學年生中脊柱の彎曲せしものに付調查せしに入學當時の身長と第一學期を終りし時の身長とを比較せしに僅か百日間位にて約一寸餘伸ひ居れり然るに第二學期第三學期に於ては極僅少の伸ひ方を示せりこれ入學者當時彎曲せし脊柱が重に肋木に依りて姿勢を矯正せし結果と思はる又文部省が發表する每年高等女學校生徒の身体檢查一覽表全國平均に比して本校生徒が身長体重胸圍等何れも其れ以上に抽するを見ても如何に本校生徒の体格が良好なるかを証するに足るべしと信す

校長告辭

本科卒業生幷に補習科修了生諸子。諸子が本校に入學以來永き年月の間雨と云はず風と云はず專ら修業に志して日出度螢雪の功成り本日卒業の榮を荷ふに至りしは師弟の情として心中之に優る嬉しさはない眞に祝賀に堪へぬ次第である。諸子。諸子の今日あるは諸子が平素勤勉努力の結果に相違なきも上 天

皇陛下の鴻大なる御恩と下両親の深き慈悲とに依ることを忘れてはならぬ。又決して自分一人りで成功した譯ではない。社會を見よ。諸子の如く女子にして高等普通教育を卒へしもの幾人あるか。初等教育は重に父兄の義務教育になつて居るが中等教育は父兄が子女に教育を受けさすべき義務を有して居らぬ教育すると否とは隨意になつて居る。世の中には高等普通教育を受けたき女子多數あるべきも家庭の都合上止むを得ず就學し得ざる者も亦澤山あるに相違ない。諸子は此等の苦痛に出逢はず生れてより今日に至る迄學問の上に於ては思ふ通りに出來て居る。定めし滿足で有らう。飜て父兄の心中を察せよ。諸子が多年通學するには又多大の費用を要し中には之が支辨に困難のものもありしならん。此等は諸子の爲に拂からず苦心して居らるゝ。併し此等苦心も諸子が今日ある事を豫期して慰めて居たのである。之れ全く親の慈悲と言はねばならぬ。ゆめ忘れるな。諸子は本校所定の業務を卒へしも諸子は未だ一人前でないと云ふ事を深く心に刻まねばならぬ。今後社會に立ち一家の主婦となるべき要素を授けられたに過きぬ。漸く其の形だけ出來上つたものである。尚數年間社會上の實務につき初めて精錬されたる一人前となる譯である。故に諸子は此の点を誤らず已れは未た足らさる者として社會の長者に事へ事々物々丁寧に教へを請ふて業務に服するがよい。女學校の卒業者なりとして徒に他人に差出口をしたり無遠慮の振舞が有つてはならぬ。飽くまで控目にして高潔なる品性を保ち自己の業務を勵み聊かたりとも骨折を惜しむ等の影だに見せてはならぬ。又他人より後指さゝるゝ様な事が有りてはならぬ。斯く忠實に其の業務を勵めは必すや將來一人前の婦人として社會より尊敬を享くる身分になるであらふ。之が即がて親に孝となり君に忠となる道である。

又諸子は學問上に於て一度本校に生れ多年教を受けた娘である。諸子は今日就學の期が滿ちて卒業をなし本校を去る譯ではあるが諸子と本校との關係は或は直接に或は關接に相連關して決して因緣の斷たれた譯でない。恰も諸子が他家へ嫁しても實家との關係は絶緣せないとの同様である。諸子と本校とは二にして一の如く諸子卒業後の幸不幸は直ちに本校の幸不幸である。願くは益々人格を高尚にして立派に成功して頂きたい。之が母校を愛する所以である。此の觀念があれば擴張して家を愛し國を愛する美徳ともなる。是等は平素能く教へてある道であるが今日諸子が此の嚴肅なる式場に列して心を清め形を正し精神界に毫も汚れなき能き時期たると又今後永く別れて再ひ斯く全部會合する機少きを思ひて茲に一言した譯である。終に臨みて諸子の將來益々健全な

らんことを祈る。

大正四年三月二十二日

廣島縣知事從三位勳二等　寺田祐之

告辭

考試茲に訖り本日を以て當校第四回卒業証書授與式に濟み卒業生諸子の成業を祝するは本官の欣ふ所なり諸子は今や四星霜の久しき螢雪の效空しからす女子に須要なる高等普通の教育を卒へ將來良妻たり賢母たり得るの資格を証明せられたる者にして諸子の榮譽は勿論師父の滿足掬すへきあるを思ふ可し

凡そ一家の盛衰榮枯は其起因一ならさるへきも婦女德操の高卑に干繫するは古今其揆を一にせり彼の偉人傑士の多くは皆健全なる家庭に出つるが如き之を証して餘あるべし

夫れ學は德を明かにし智を磨き以て常識を發達せしむるに外ならす常識にして發達せんか世運の推移と自己の位置とを知得す可く而して彼の輕佻浮華の時流に泥ます理義と恩愛とを分別取捨して適從を誤らす家道を振肅し家庭を親睦し以て婦女の本分を盡くすに於て蓋遺憾なかるへし若し夫れ今日の名譽を以て單に婚嫁の一具と爲し貞淑の修養を怠り常識の運用を錯るが如くんは學はさるの人と何そ選はん諸子宜しく思を茲に潛めて造次顚沛本校教育の旨趣を發揮するに務め以て師父の恩誼に報ふる所を知るべし

諸子夫れ旃を記せよ

大正四年三月二十二日

廣島縣知事從三位勳二等　寺田祐之

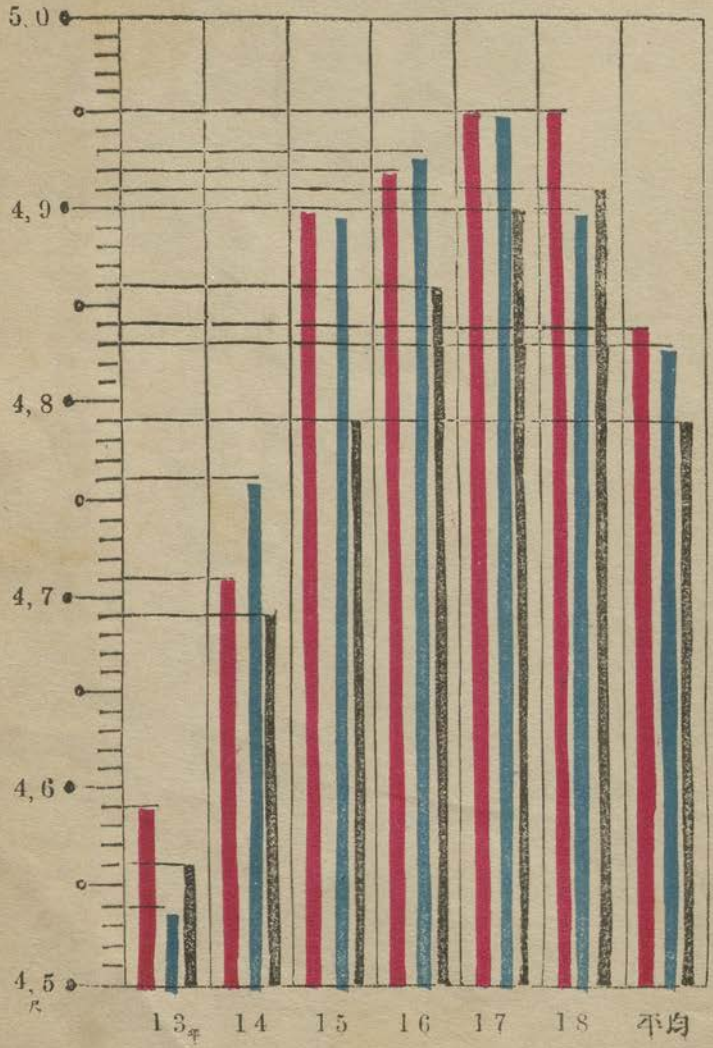
告辭

爰に本日を卜して本校第四回卒業証書授與の式を擧けらる思ふに諸孃の今日の名譽あるは平素能く學則に遵ひ校規を守り懇篤なる教師諸賢の教を服膺せられ夙夜黽勉多年螢雪窗ならさるの効にして洵に諸孃の爲之を祝せさるを得さるなり抑々本校は學科の研鑽智德の修養のみを努むるものにあらず專ら現代的婦女を出すに在れは必すや高尚の品性を備へ優美の德操を積み母となり妻となりて賢良貞淑以て複雜多岐なる世務に處し重大なる婦女天然の職責に負はさるべからす諸孃は今既に成規の課程を了はり母妻たるの資材を得是より家庭に在りて圓滿なる理想を實現し以て本校に習ふ意思を明かにせんことを期せらるべし曾て之を聞けり賢母は賢妻を產み賢實は賢子を產むと古今東西其例尠少ならさるなり諸孃は不撓不屈益々奮闘研鑽愈々努力修養冀くは果して能く社會國家の婦女に期待する所以に答へ以て今日の名譽を永遠に保持し女子最終の目的を完成せられんことを聊か所感を述へて以て告辭とす

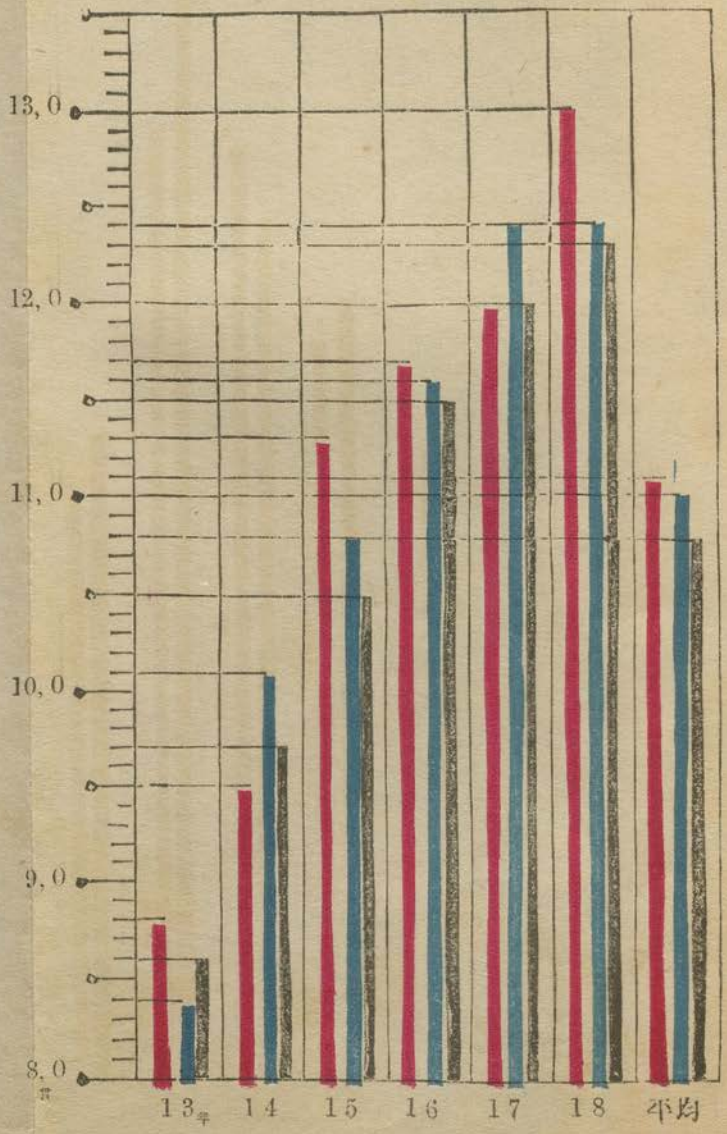
大正四年三月廿二日

尾道市長從五位勳四等　西村益三

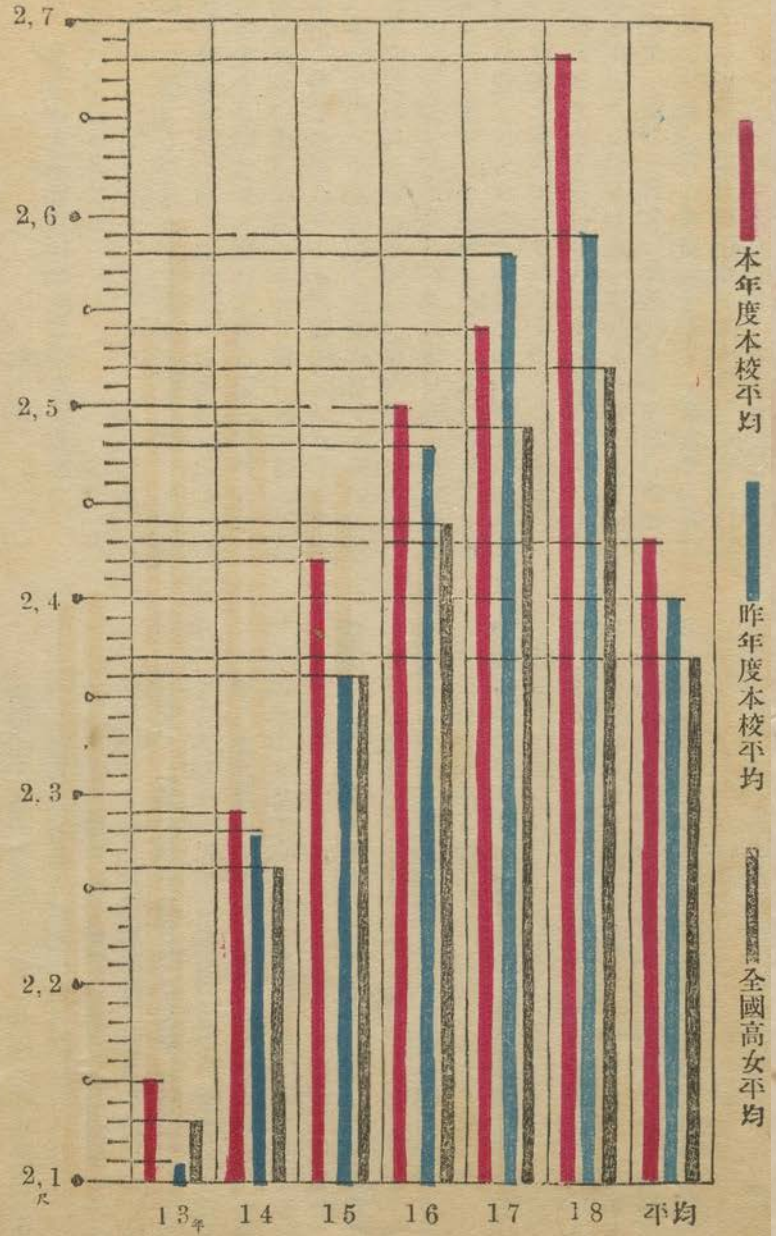
身長比較



体重比較



胸圍比較


2,7
2,6
2,5
2,4
2,3
2,2
2,1
尺
13年
14
15
16
17
18
平均
本年度本校平均
昨年度本校平均
全國高女平均

卒業生答辭

本日茲に第四回卒業証書授與の式を擧けさせられ知事閣下並に市長の君の御貴臨を恭うし加ふるに多數貴紳の臨場を蒙むる我等の光榮何ものか之に如かん夫れ國を治めんと欲せば家を齊へさるべからす而して家を齊ふるは女子自からの任すべき所なり顧みれば我等菽麥の何たるかをも解せさる身を以て本校に業を受くる茲に四年校長先生の嚴肅なる御薫陶と諸先生の切實なる敎導とに依り幸に今日あるを得たり今また知事閣下茲に市長の君を初め校長先生の御懇篤なる訓諭を賜はる誠に感激の至に堪えす惟ふに榮譽の存する所は則ち責任の存する所なり我等學尙淺く德未だ至らす而も世態煩々たるの日に出てゝ國家消長の事にあたらんとす實に自ら顧みて此の責任の完うし難からん事を之恐る謹みて畏き勅語の大御旨を仰き奉り本日賜へる御敎によりて鴻恩の萬一に報いまつらんとす聊か一言を述へて答辭とす

大正四年三月廿二日

尾道市立高等女學校第四回卒業生惣代

立神タ子

身体檢査成績

本年四月施行せる本校生徒の身体檢査の結果を統計し。之を文部省の調査に係る。大正元年度の全國高等女學校身体檢査の統計丼に本校昨年度の統計を比較し見るに。別表に示すが如き結果を得たり。

即ち

身長の平均に於て昨年度より一分全國高女平均より五分の高位を示し。

体重の平均に於て昨年度より一百匁全國のそれより三百匁多く。

胸圍に於ても昨年度より三分全國のより六分の增加を見る。

然るに十四才の平均は胸圍に於て昨年度より一分の增を見るも身長。体重は何も劣れり。全年令の者は一。二年の生徒にして一年生の劣れると且つ二年生は昨年度即ち入學當時表(十三年)に現れたる如く其の成績最も劣れる故なり。然れども尙全國の全年令者に比しては体重に於て稍々不結果なるも他は何れも優位を占む。

總体の平均に於ては身長。体重。胸圍等昨年度より何れも優勝にして。全國平均よりは尙一層の好結果を示す。

校友會記事

廣島修學旅行記

其の一。往き　本四甲　大山芳枝

花紅柳綠とりぐに織りなす錦繡の天地。げに人生の行樂は陽春を措て何日をか俟たん。いでや山明に水清き邊りをゑらびで一日の清遊を試みばやと思ふ折りしも校長先生より廣島に於て目下開催されつゝある教育品展覽會を見るべく近日旅行を企つべしとの宣告を承はりぬ。我等は欣然として之に同じ早く其の日の來よかしと待たれぬ。

時は四月の廿二日正に是れ彌生の春の花盛り旅裝も輕く學びの友の總勢三百五十人數多の教師に誘はれて七時五十分尾道驛の列車に乘り込みぬ。堤の柳は綠に煙り吹くとしも無き春風は車窓より輕らかに袂を弄ふ。高く瑠璃に澄める大空は浮雲の影だになく昨べの春雨は何地行きけん跡だになし。絲崎の友の家は彼山吹に清流の添へるあたりならんか。三原の女子師範學校の教室の窓には此の春卒業せし我が姉君達の斯くてありとも知らで此の汽車や見送り給はん。本鄉驛の伯母の家河地驛の岩越す春の水。四邊の光景に我等が胸は百千の聯想もて躍りつ狂ひつ。斯くて汽車は進み進みて今や藝東の平野にかゝれば眼界頓に開けて春光十里野や山や紅に又さ綠に陽炎うら〳〵と燃えて空に雲雀の歌も愛らし。あゝ長閑なる春の日や。車室は氣心知れる友どちのみの事とて。遠慮なく華やかに談笑する人、うつり行く春景を筆の先にとむる人。げに。心も空に浮き立ちて日頃學びの窓に明し暮し塵にうづもれ埃にまみれたる頭を今この自然の春景に一掃する事を得て身も清々しくなりぬ。海田市驛近くなる頃より携へ來れる辨當を喫し十時四十分目指す廣島にと着きぬ。我等は其れより豫て設けの幾臺かの電車に分乘して展覽會にと急きぬ。

教育品展覽會は廣島縣廳議事堂にあり。縣下各種の學校より出品されたる教授器具器械標本等より生徒成績品に至るまで。堂の樓上樓下を通じて無慮數万点。何れも職員生徒の熱血を傾注したる物のみなれば衆目を眩するばかりなるに特に我等の注意を惹きしは公私立女學校の裁縫品なり。梅櫻桃李一時に開けるが如く技工の巧妙なるには一驚を喫するを免れさりき。即がて又春風に誘はれて我等は足を共進會にと移しぬ。うら〳〵と霞む彌生の空。路もせに行き交ふ人影繁く賑はしき言はん方なし。

共進會第二會場は工藝美術品を以て滿さる。看客滿場立錐の地も無く我等は汗みどろになりて徐々に見果てず直ちに第一會場に走る。第一會場は師團練兵場の傍にあり。此處にて器械標本及農產物を一覽し次で御大禮式の模形を拜しぬ。至尊の悠紀殿に渡御遊はさるゝ御模形を拜しては其の技の巧妙なるに驚き神此處に在ますが如く自然に襟を正さしめぬ。それより泉邸に步を運びぬ。流石に淺野侯の造營に係るものとて泉石の配置得もいはれず美しく。殆と仙境を步するの感あり。汀には翠の若草もえそめて蓮華草等の愛らしき花其の間に點綴し。石橋のあたり煙る青柳に音つるゝ風微かなり。仰げば雲雀の聲雲井に聞え臥すれば鯽鮒の花水に映りて鯉魚の其の間を浮き沈む樣形容の言葉もなく身は何となく浮世を余所の心地して高韻淸雅いはん方なくをかし。我等は邸中の茶亭觀月亭といふに憩ひぬ。此處にて校長先生より邸の歷史とそれに伴ふ各種の趣味ある話を承り名殘惜くも此所を出つれば照る日の影も山の端に春く項ほひなりき。我等は停車場付近にてさゝやかなる土產物とゝのへつ六時發の東行列車に腰を下しぬ。

其の二　歸り　　本三　三谷よし子

私達の乘つたのは機關車から數へて四ツ目の列車であります。旧式の箱で便所が無いから不自由を感しました。生徒は私共三年生と二年生の方との混合で監督の先生は三橋先生であります。乘つた當座は皆さんが默り切つて淋しう御座いました。先生も今日は頭が疲れたと仰しやいました。海田市まで來ますと夕御飯を戴きました。終日の疲勞が恢復しまして俄に元氣が出て來ました。外を見ますと眞暗で何の興味も起りません。『尾道までは三時間餘りも掛るのだから何か罪の無い遊びでも仕やうでは無いか』と先生が仰しやるものですから『それが宜しう御座いませう』と早速先生の仰せをかしこみ『謎掛け』が始まりましたが車輪の音が轟々と聞えて皆さんの仰しやる言葉が明亮に聽取れませんので何か外に善い趣向は無いものかと考へ最中お隣りの室から唱歌の聲が風の間に〳〵聞えるではありませんか。こちらでも負けぬ氣になつて衆議一決直ちに唱歌が始まりました。中にはクリスチャンの方もあると見えて讃美歌も交つて出ます。小學校で習つた唱歌になると二年の方も一緒に車室も崩れんばかりの高聲で歌ひ出します。『斯んな銅鑼聲を出すと上村先生に叱られますよ。モそつと優しい女性の本分を發揮しようではありませんか』と忠告めいて仰しやる方もあつたり何かして何かは知らず二三驛夢中で通り越しました此間先生は笑つて聽いて居て下さいました。西條へ

參りますと一行の中に『お茶が欲しい嗚呼お茶がほしい。今日は一日一滴も飲まなかつた。』等と弱音を吐く方がありましたが『此んな小驛ではお茶なんか賣つてませんよ』と申上げると『其れならお蜜柑でも……』と泣き聲で仰しやるには皆さんを吹き出させました。本郷では下關直行の汽車に行合ひました。大勢のお客が皆んな窓から首を出して私共の方を御覽になりました。多分噂もなさつたでせうが寸分欠点の無い行動を取つて居りましたから惡評は無論無かつた積りです。此所でクラスの一人が蜜柑をお買ひになりましたが後の列車の方々が大抵買占めて仕舞つて私共の車窓の前へ賣子が參つた時には最う大抵皆んなになつて居りました。私は此時窓から私共の列車の連結して居たのを一眸の裡に眺めましたがマア續いたとも續いたとも普通乘客の列車に私共團体の列車がやがて拾個も連絡されたでせうか殆と長蛇の様でしたには驚きました。此所の停車は割合に長くてやがて發車しますと隣席のMさんが『私お小用に行つて來れば宜かつた』と嘆聲を漏らすではありませんか『でも行かなくつて宜かつたわ。若し乘後れでも仕やうものなら大變ですよ。糸崎まで我慢なさい。ネ。ホントに旧式の客車はこれだからいけないですよ』と慰めてあげて『心を散らす爲に又唱歌でも唄ひませう』と言つて再び唱歌を唄つたり滑稽話をしたりしてとう〳〵糸崎まで參りました此所では下車するお友達もあり停車時間も多く大驛ですから賣子も大勢來ましたから牛乳やお蜜柑やお茶等が大分其所此所で賣れたやうです。先生は時々小さな聲で面白いお話をして下され又何かにつけて注意して下さるものですから私共の室では失敗はありませんでした。又幸に一人も病人を出さなかつたのは何れもの健康体であつたのと自身注意をとつたのとによる事でせう。糸崎を發車して尾道までは海岸の風光の車窓を掠めて刻々に變化し行く有様は夜目にもそれと覺られて惡くはありません。尾道へ着いてステーション前に整列して人員檢査が行はれ校長先生からお話があつて夫々出迎の父兄に伴はれて今日一日の樂しかつた事面白かつた事可笑かつた事疲れた事等を語り合ひつゝ三々五々己が宿所へお歸りになります。私共は舍監の先生に導かれて矢ッ張今日の樂しみを銘々心に繰かへしほくそ笑みては先生に笑はれ寄宿舍へ歸りました。

第四回秋季運動會記事

委員　小川ハルヱ

今年の運動會には一般觀覽人の入場は許されませぬ又會場に於ける萬般の裝飾も省かれました、花火も

揚げず綠門も作りません。何故ですつて、國家諒闇の中にあるからです。ですから父兄の方々や來賓の方々に我校平素の体操教授が那邊にまで進歩し發展し來て居るか、勿論到らぬ点は數多い事であらう。それを忌憚なく御批評願つて他日の資に供したい。といふ目的で本年の運動會は開かれたのださうです。だから運動會で無くて体操演習會とでも言ふ譯なんです。それでも時は十一月三日といふ先帝をしのび奉る此上なき記念日ではあり秋空高く晴れて好個の運動日和でしたから午前八時半校長先生の開會の御言葉が始まる頃には父兄の方々は設けの席に溢るゝばかりでありました。プログラムに示す通り三時までに三十五番の運動は些の瑕瑾なく演せられて目出度結了を告げました。これは生徒一般の御勉強によるとは云へ其任にたづさはる吉野先生が平素御訓練の結果たるは申すまでもありません、運動部委員の方々の御斡旋も與つて力ありと存じます。斯う申すと私も委員の席末を濱して居りますから自畫自讃に陷つた嫌もありますが其處は御勘辨を願ひます。

さて運動の模様を一二掻摘んで申しますとボルカライゲン、タンツライゲン、チヤーマンランサース等は多少舞踊に屬するものではあり昨年は致しませんし樂器の音につれて歩調を整へ指す手引く手の法に適つた進退、容姿の上から見ても体育の上から見ても觀客の心を躍らす遊戲で御婦人の御見物の方には少なからず興味を惹いた様に思はれました。それから運針競爭に繃帶競爭、流石は女學生の運動じやと何處やらの觀覽席から賞讃の聲が聞えました。箱跳に平均運動これは一寸危なげな様で少しも危險の伴はぬ最新の運動で首尾よく仕おうせた時の喝采には私共も思はずほゝ笑みました。其他紅葉狩や旗返の優美なのや堡壘攻撃の時に取つて與あるのや形容して申せば千様万態蝶飛び鳥翔る有様樂屋落ちな申分ながら秋の一日をホントに愉快に暮しました。來賓の方々は市長様初め市役所の吏員それに官衙學校から御出の御方と父兄の方とを加へますと無慮千人とも申しませうか。特に卒業の姉様方の多數打集うて御出下さいました事は私共在校生に多大の感を與へました。

左に當日のプログラムを掲げます。

一、体操　一年　甲乙
二、徒歩競走　二年　甲乙
三、ボルカライゲン　三年　甲乙
四、棍棒　四年、補習科
五、ボール送り　一年　甲
六、バスケットボール　三年　乙
七、運針競爭　二年　甲
八、徒歩競走　四年、補習科
九、箱跳　二年　甲乙
一〇、球竿　三年　甲乙

一一、綱引　四年、補習科
一二、ラットボール　選手
一三、旗遊ビ　一年　乙
一四、タンツライゲン　二年　甲乙
一五、カレドニアン　一、二、三年級

晝食

一六、大弓　選手
一七、体操　三年　甲乙
一八、徒歩　一年　甲乙
一九、体操　二年　甲乙
二〇、紅葉狩　三年　甲乙
二一、キユバダンス　四年、補習科
二二、唖鈴　二年　甲乙
二三、バスケットボール　三年　甲
二四、体操　四年、補習科
二五、綱引　三年　甲乙
二六、堡壘攻撃　二年　乙
二七、平均運動　三年　甲乙
二八、教練　四年、補習科
二九、綱引　二年　甲乙
三〇、徒歩　三年　甲乙
三一、ヂルーマンランサース　四年、補習科
三二、綱引　一年　甲乙
三三、教練　三年　甲乙
三四、繃帯競争　四年、補習科
三五、合同体操　全校　生徒

以上

第四回卒業生送別會記事

委員　大山芳枝

例によつて卒業生の方々の送別會を私共三年生が主動者となつて開催しました。それは三月の十八日で姉様方は勿論同窓一同卒業やら修業やらの喜を以て滿ちみちた春のさ中で御座いました。開催した當時見た儘感じたまゝを筆記して置くと宜しう御座いましたが、例の疎懶で何共申譯がありません。今度『眞玉』の第二号が出るからと申されて先生からの御督責に、實は勘なからず何しました。漸く薄らいだ記憶を再現さしてホンの責塞を致します。

プログラムは御勘辨なすつて下さい。順序も立てずに記憶を辿つて書いて見ますと、活人畫の種々様々エンゼルに羽衣、それから孝女白菊に常盤御前、何れ劣らぬ姿態と表情、私共は多大の敬意を表しました。吉野先生が羽衣の時『千里の好山に雨忽ち晴れ』とか何とか謠曲をお謠ひなされたのと常盤御前に三橋先生でしたか『雪擁笠簷風捲袂』と詩吟をなされたのは時にとつての即興とでも申しませうか、大層好かつたと思ひました。詩や謠の文句に誤謬があつたら御免下さい。獨活人畫で牛若丸が出る、春の使が出る。牛若丸の五條橋の背景は大河内先生、春の使のハモニカの吹奏が私共同しクラスの智惠子さん。

ほんとに甘い事をおやりになると存じました。失禮よ。音樂の獨唱は『送る雁金』とか言ふのでした。之は私の大すきな楠生さん。例によつて評するだけが野暮です。卒業の姉様達の『花』といふのと『告別の歌』といふのを皆樣で合唱なすつた時は涙が頬を傳つて出ました。送る人。送られる人、目出度い目出度いとは申上げるものゝ之が又何時お目に懸れるやらと思ふと、ほんとに何と申してよいか心は千々に碎けました。御手厚い御教成しで難有かつたのは校長樣のお話と下瀬先生の琵琶南部阪でありました。此日は特別に碎けたお話振で或時は可笑しくて頤を外つすやう或時は嬉し涙に咽ぶやら興味の裡に教訓が含まれて噛んでくゝめる樣なお仕打、特に下瀬先生の獨特の隱藝には姉樣方も終生のよき思出となさるでありましたらう。假裝行列と福引は言はずもがなと致しまして當日第一等の見ものでもあり聽きものでもあつたのは『蝴蝶の舞』と『クリスマス夢の曲』にうれから最一つ『一番可愛い赤んぼ』といふのでした。何と感想を申上げてよいやら。私はまあ夢に夢見た心地になつて唯もう茫然自失しましたのです。どうして二年や一年の方であんなに甘い事をなさるでせうか、私の樣な不器用な者には習つたからつて到底出來は致しません。何でも赤白黃の三羽の蝶が花野に遊んで居ると俄雨に遭つて百合の花でしたらう其の花に宿貸せと迫る所でした。樂器に連れて唱ひながらヒラ〳〵と舞ひ狂ふ有樣、聲はよし態度はよし、樂手は先生ではあるし、何とも言はれぬ味でありました。之が『蝴蝶の舞』です。斯ういふのをオペラダンスとか申すさうです。『夢の曲』はサンタクロース爺さんが一番振つて居ると誰やらが申しましたが今でも矢ッ張目に殘つてます。『赤んぼ』といふのも面白う御座いました。何でも、さうさう、英吉利の子供スエデンの子供ロシヤの子供に支那の子供といつた風に銘々特色のある服裝で出て何やら英語で對話するのでした。皆とりどりに其の長所を發揮してほんとに面白く拜見しました。以上の三種類に就きましては何れも相應はしい立派な背景を圖書の先生に書いて戴いたのでした。此の背景がどんなに權威と優麗とを添へて場面を引立たせたでありませう。次に申上げたいのは私共主動者側の演出にかゝる對話で御座います。『心の色』といふのはハイカラな令嬢が田舍娘から教訓を受ける所で『咲き香ふ花の色香よりも心の色の美しさを取れ。人間の尊ぶべきものは寶石や眞珠や絹や錦ではない、心の錦心の寶である』。といふ寓意對話でした。泉さんの令嬢に塚本さんの田舍乙女立派に其の人になつてました。今一つのは『姉妹喧嘩』といふので松本さんの姉娘入江さんの乙娘初めは仲惡の犬と猿でし

たのが終には仲直りといふお目出度いものでした。此所へ出る小林さんの下女のお市滿場をゆるがせました。餘り褒め過ぎると最負の曳き倒しになると叱られますから感想はこれ位で御免を蒙つて置きます姉樣方に對しては多く三年少くも一年何かの御世話を戴いて居りますから盛に御送り申したい、何か面白い意匠を凝らしたいと、私共主動者側では思はぬでもなかつたでしたが、世を憚らねばならぬ愼みの時節でしたから唯昨年の例を追つて對話やら唱歌の練習英語の復習やらで何等趣向も御座いませんでしたが、幸に一二年級の方々が大に奮發して下さつて漸くあれまでに漕ぎあげた譯です。僅か半日の時日を費して姉樣方の御喜びを買つた私共一同は茲に會誌『眞玉』の餘白を借りて後日の記念となすべく委員として禿筆を執つた譯です。諸先生方も姉樣方も普く校友會員の皆樣方も此の意を諒とせられん事をお願ひ致して置きます。

第二回學級會

本二　池田マサコ

大正三年七月一日午后一時第二學年學級會の講堂で開かれました。丁度此の日から始業時の變更がありまして午前中に授業が終りましたので、二年級の諸嬢は晝食が終ると早や講堂に集まつてそれぞれ準備を整へ時間が迫るのを待つて居ります。やがて開會の時刻も間近く迫りますと他級の生徒の方々も續々這入つて參りました、綺麗に壁を飾つてある圖畫習字何れも熱誠の跡明らかに表はれてをります。誰れの筆にや、あれ、あの草花に生ける蝶の飛び來て止まり居るよと見れば此れこそ標本の蝶なりしに何れも思ひ附きに感服して居りますと場内にまで響き渡る号鈴の音平常に聽く始業時の音とは異なる心地がいたします。場内を見渡しますと演壇の右方には諸先生を始め正面に向ひ前方を主人側、後方を傍聽者と何れも今日の學級會の試みに思ひ思ひの想像をめぐらして居ります。最初演壇に現はれましたのは池田嬢、例の快活な口調で開會の辭を述べられ拍手の響の間に更に現はれましたのは野津嬢滿面に笑を湛へて一揚の談話《臆病者》を試む。對話『タイタニツク』にうつれば思はず壯絶悲絶の感にうたれ、殊に演者諸嬢の表情と態度とには拍手の響暫らく止みません。

合唱『夏野』に吾れ等は知らず識らず自然の境に誘はれ行く思ひし、廣川嬢の英語講話は發音と曰ひ表情と曰ひ其の達者な事、檜垣嬢の通譯と相俟つて聽者をして賞讃の聲を惜しめません。兒玉嬢、平井嬢の韻文朗讀小田嬢の作文朗讀は何れも深い感動を與

へました。獨唱には山本孃の『夕の鐘』に何時しか神秘の境深く引き入れられ恍惚吾れを忘るゝ思ひし井上敏子孃の『ローレライ』には肉聲の美驚くばかり賞讃の聲と拍子の響とは暫し鳴り止まぬと云ふ有樣でした。ふと氣が附いてプログラムを見ますと早や終り近くなつて合唱『胡蝶』を御名殘りとせねばならなくなりました。二年級全部から組織されました、合唱團、口々より出る胡蝶の曲、吾れ等は曰ひ知れぬ歡喜の面に溢るゝを禁ずることは出來ませんでした。講評は校長先生が御都合にて途中退出されましたので三宅先生から懇切な御批評を承りました此うして面白く樂しかりし學級會も福永孃の閉會の辞を最後として全く終りを告げました時は二時三十分でした。尙當日の番組を擧げますと

プログラム

一、開會の辞　池田マサコ
二、談話　臆病者　野津梁江
三、對話　タイタニック　高竹、田中千代乃、花咲、小林
四、合唱　夏野　乙組全体
五、英語講話　植物ニツイテ　廣川、榆垣
六、韻文朗讀　橘媛　平井淳子
七、獨唱　夕の鐘　山本喜代
八、英語對話　バースデーパーテイー　大西、木梨、武田、岡田、宮岡、井上秦、宮橋正、大久保文、那須、村上築
九、作文朗讀　初夏　小田松惠
一〇、合唱　隔てぬ影　甲組全体
一一、對話　大正博より　三谷ヨシコ、津田田鶴
一二、獨唱　ローレライ　井上敏子
一三、朗讀　兒玉千賀子
一四、合唱　胡蝶　甲乙合併
一五、閉會の辞　福永千代子

第三回學級會記事

本四　立神タ子

小春日和の空すみて峯も梢も色つき初めし神無月の十四日待わびし補四の學級會は講堂に於て開かれぬ心をこめし書畵は美しく四壁に飾られて又一入の思ひなり。其のために一日の課業を休むは本來の望…にあらされば忙はしき中に午前の授業ををはり晝休憩時間を利用なし種々の準備はとゝのへられぬ。三々伍々木蔭に集り片隅に輪をなし某孃の獨唱さては英語の話など樂しき噂に花咲せるあり。

かくて待遠しき午後の課業をおへて愈ゝ時刻はせまりぬ。職員室の大時計の二時半を示すと共に入場のベルは校内にひゞきわたり靴音肅々と一同入場す例の如く諸先生は正面の左右に他の學級生は後方に今日の主人側なる補四年生は前方に何れも笑やかに着席しぬ。正面なるプログラムは一枚はかれて補習科生の村上孃は靜かに壇上に上り開會の辞をのべらるれば漸時プログラムの順序に從ひ第一市川孃の『赤十字社のお話』軍國の今日ことに感慨深かりき。遠く思ひを走すれば博愛の權化と謳れしフロンレスナ

イテインゲールの面影彷彿たるいとうれし。次なるは唱歌、次なる英語暗誦。策新しきはミシン競爭にて見る人は思はず手に汗す。秋の夜の獨唱は我人共に待ちに待ちしものゝ一肉聲の美は遺憾なく人々は恍惚として耳傾けつ。續いてオーガンの獨奏にはその指手の働きの功妙なるに感あり。續いて朗讀、談話、皆軍國に相應はしくして味ふべきものありき。かくして英語の對話あり、頤を解きもあへず唱歌『旅の夢』には思はず悲哀の美感をおほえ書畫揮毫によりては浮き立ちし心を靜めつ。さて終りには皆この待ち設けし全体の唱歌『三つの舟』を聞く。往にし昔の快樂の世の樣も偲はれて。

かくして終に樂しかりしクラス會もをはりをつくれば杉野校長は嚴に壇上に立ゝせ給ひ一般に成功せしよし懇なる講評あり。あゝ樂しかりしも一時の夢の間に過ぎ去りぬ。講評をはるや市川孃により閉會は餘儀なくせられ再び來べき次の會を樂しみなから別れしは恰も四時過ぎなりき。

第三回クラス會プログラム

一	開會の辭	補　村上下枝
二	赤十字社の話	四　市川コヮサ
三	三部合唱　海洋の鯨望　秋の野原	四　四年全体
四	英語暗誦　今宵の晩鐘鳴るへからず	四　永井恒子、毛利エキノ　下川小雪　村上ミチ　菅野セツ
五	ミシン早縫	四
六	獨唱　秋の夜	四　末田ヒサノ
七	朗讀　貴婦人の責任	補　柏原菊代
八	オーガン獨奏　甲アーリヤ　乙フエネラルマーチ	四　宮崎亮
九	習字揮毫　明治天皇御製	四　兒玉ヨシ、柏原ミユキ
十	英話對話　三人糸ひき女	四　植田　小川　小西　豆神　佐々木　久田　林
十一	二部合唱　旅の夢	補　全体
十二	圖畫揮毫　瀧と紅葉	四　三井敏子
十三	三部合唱　老松	補　全体
十四	待賢門の戰のお話	四　新田ヒサ
十五	三部合唱　三つの舟	補　四　合併
十六	講評	校長先生
十七	閉會の辭	四　市川コヮサ

第四回學級會記事

本一　岩井滿子

人は陰暦の大晦日掛乞に年越しに忙はしといふなる此處大正四年二月十三日第壹學年のクラス會は開會せられぬ。素より準備の時間とては有るべくもあらねば平素の學業の復演と突然の意匠とによりて演せられしものと見えたり。壹年の幹事がへソの緒切つて初めての企なればお目苦しうはおはさんが姉樣方の觀覽を待受け申すの案內に誘はれて當日午後一時といふに授業も掃除も何もかも打ち終へて行きて見ぬ。

唯見る正面の幔幕紅白色も鮮かに掛け渡して其が一方には主任下瀨先生の麗筆もて番組の數々は示されたり。就中『歌劇浮れ達磨』には先づ委員の心とき

めきつ。次には校長先生の御話、いつも御聲に接する事なから其れは嚴肅なる修身の御教授此れは又幾分俗氣ある趣味的の御話ならんか。さるにても下瀨先生の御話は例の才人失禮なから詼謔の裡多大の教訓の包藏するものならし。否上村女先生の獨唱『晝の夢』にこそ預て音樂學校時代の名聲の其れを實地にうかゝふ事を得べけれ等あれやこれやに心も落ち居で同じクラスの二三と耳語するもなめげなりや。時間は一刻の猶豫も無く開會の辭に開催を告けられて『模擬合奏』に皆人の頤を解き『石童丸』に琵琶歌の一齣あらましかばの非望を抱かしめ『十二ヶ月』に演者其人よりも意匠家其人の才氣を偲ばしめぬ。案の如くなりしは先生方の出演にして滑稽なるは『おかめオーガン』なりき。『浮れ達磨』鳴呼『浮れ達磨』、何ぞ其の名の俗にして其の實の神韻なるや。ピアノの絲につれて唱ひ出つる四人の童女を見よ。苦なく邪なく更に慾望の天眞を妨くるなく全然これ天乙女の、例はゝ雲の浮島がはらふ嵐に花散りて清香四方に薫するが如く大晦日の風何地を吹くかと思はしめぬ。いよ〳〵達磨の居たゝまらず勃然として起つに及び大紘小紘相錯綜して嘈々切々なるに至りてや四人の童女は達磨を中に入り乱れて左右左、左右颯々の風に木の葉の散り布く如く舞ふ者醉ひ彈く者醉ひ看者亦醉ひ場中凡て醉ふに至りぬ。クラス會も數有りき。或は嚴正にして襟を正すの概あるあり、或は悠揚として法話を聽くの感あるありき。此の會に至りては嚴父慈母と共に夢幻の裡に演劇を見るが如かりき。眞に平日の硬化せる頭腦に清涼劑を施せるもの。斯くて又一しきりの勉強は繼續せらるべし鳴呼愉快なる學級會、面白かりし『浮れ達磨』よ。汝を以て大正三年度學級會の壓卷となす。

第四回學級會番組順序

一、開會の辭　二、鳴呼乃木大將
三、摸擬音樂合奏　四、活人畫石童丸
五、校長先生のお話　六、十二ヶ月
七、下瀨先生のお話　八、假裝行列
九、手品　一〇、インデイアン、コーラス
一一、新式おかめオルガン　一二、上村先生の獨唱晝の夢
一三、福釣り來賓お慰み　一四、うかれ達磨
一五、閉會の辭

學藝大會記事

本三甲　井出テツ

學藝大會。此の種の會合は何となく興行的に成り勝ちのもので、私達の小學校在學時代は殆ど一種のお祭りでした。さうして見ると今度の學藝大會は何といふ崇嚴な會合でありましたらう。父兄懇話會も同時に開かれましたせいか、父兄の方々は約百五拾名

それに來賓としては西村市長を初め市役所の吏員の方々各種學校長及職員の諸先生新聞記者本校卒業生の姉様達、さしもに廣い講堂も立錐の地も無い程でした。

會は午前九時立神さんの開會の辭によつて始まり拾壹時五十分清水さんの閉會の辭に終りを告げました時は大正三年十一月廿一日の事で宿雨全く晴れて極めて爽快な秋日和でした。

今番組の順序によつて私の感想を少しく述べますると、一年甲乙全体の唱歌合唱『花賣女』は未だ何處やらに稚氣を帶びてる様にも聞えまするし又それが少なからず愛憐の情を增させる様にも思はれました國語朗讀の『征衣上途』は四人の聲に各々色が御座いまして面白く拜聽しました。吉川さんの『化學實驗』におかゝりになると父兄の方の中には怪しみの目を見張つて居らつしやる方も見受けましたが一点の瑕瑾なくやり了せられたので先生のお蔭はたいしたものじやと密々仰しやるのも聞えました。本三の二部合唱これは私自身も交じつて仕た事で何其申されません。兒玉さんの『千光寺の秋』といふ自作文の朗讀には滿場感嘆と申す外は御座いません。努力といへば努力でせうが私共は只天才と驚くばかりでした。楠生さんの『獨唱』は同級生だからつて最負する譯ではありませんか恐らく校中無双とでも申しませうか。『數あて遊戲』には何だか狐につままれた様な感が致しましたが後に伺つて見れば道理も道理二人の方は甘い事をお考になつたものと感心致しました。二年合唱の『笛の音』と井上敏子さんの獨唱宮崎さんのピアノ獨奏四年の方の三部合唱末田さんの獨唱補習科の姉様方の二部合唱私は元から唱歌には頭腦がありませんから何とお褒めの言葉も考へ出せませんが獨唱をなすつた方の落ち着いた唱ひ振と天然の美聲とには羨望の念を禁ずる譯には參りませんミシン使用でエプロンの縫方を成され成績品を父兄の方と申上げるよりは母姉の方に御回覽に供へた時は彼處にも此處にも雜有いお賞め辭が寡からず發せられました。國語解釋の小西さんと松本さん一人は俳句に就て一人は和歌に就て文法語格やら作者の逸話やら何れ優り劣りの無い立派な出來榮でありますす特にお二人の態度の嚴正と言語の明晰と抑揚もあり頓挫もある演出には同級生の面目を發揚した事幾何でありましたらう。それから英語の會話『私の誕生日』と『笛吹爺』一つは二年の方の優等生一つは各級の選手であつて皆流調にやつて退けましたのには英國人既足と感服致します。一番最後の茶儀の御手前は其の落つき拂つた態度の惡くい程よく全校合唱『朋友』は一緒に唱ひながら涙が零れました。それは斯うした秋の一日の陸みも愈々これで終りかと思ふ

感慨と來賓の皆樣が唆一つなさらんで御觀覧下さつた嬉し涙とであります。猶申殘しましたが各番組の間々に書圖やお習字の選手が出てお書きになつたものを來賓の正面掲示板に貼布して其の成績をお目にかけました。之も大に衆目を惹いた樣に存します。ほんとに斯うして皆樣に見て戴いて御賞言葉を戴くと私共の骨折甲斐も有つたと申しませうか嬉しさに意中を盡くす言辭を知りません。來年若し斯ういふ企がありましたら一層奮發してもつと好い成績を擧げやうと心に期して拙き筆を執ります。今左に當日の大會順序を掲けます。

一、開會の辭　本四　立神タ子
二、唱歌合唱　花賣女　本一甲乙全体
三、國語朗讀　征衣上途　本一乙田阪、小竹、宮澤フミ　本一甲岡籔瀬子、富安豐子
四、理科實驗　塩化水素トアンモニア　本三乙吉川モト
五、唱歌二部合唱　漁火　本三甲乙全体
六、國語自作文朗讀　千光寺の秋　本二乙兒玉千賀子
七、唱歌獨唱　埴生の宿　本三甲楠生フミ
八、數學遊戲　數あて　本二甲池田マサコ山本喜代
九、唱歌合唱　笛の音　本二甲乙全体
一〇、國語解釋　俳句　本三乙小西シヅ
一一、唱歌獨唱　菊　本二乙井上敏子
一二、英語會話　私の誕生日　本二甲乙各五人
一三、樂器使用ピアノ獨奏　ソナチネ　本四宮崎亮
一四、裁縫ミシン使用　エプロン縫方　補　本四　柏原澤代、市川コワサ、久田チヒロ、毛利アキノ
一五、唱歌三部合唱　フローレンスナイチンゲール　本四全体
一六、國語解釋　和歌　本三甲松本智惠
一七、唱歌獨唱　秋夜懷友　本四末田ヒサ
一八、英語會話　笛吹爺　本四三人　本一甲乙各五人　本三甲乙各三人
一九、唱歌二部合唱　舟子　補習科全体
二〇、生花・茶儀・琴曲・作法　手前　本三甲河野キヌヱ　客　本四木森キミヨ　本三乙井上安子　琴　本四兒玉ヨシ
二一、唱歌合唱　朋友　全校生徒
二二、閉會の辭　本三甲清水キヌヨ

大正四年度學級會記事

○第一學年學級會　は五月廿四日學級主任大河内阪本の兩先生に引率されて午後一時から立花村の海岸へ遠足しました。總勢百餘人初夏の日光を浴びて立花へ着きました時は身体中びつしやり汗で濡れてました。海岸の妙見山へ登つて海洋から吹き來るオゾーンを存分に吸つて村長樣のお宅で湯茶の御馳走に預り疲勞を恢復して歸校しましたのは午後五時で御座いました。本年先登第一の學級會で私共に取つては非常な愉快で御座いました。

（本一甲　藤井喜代子）

○第二第三學年學級會　私共初めから聯合する積りでも無かつたのですが丁度松永の承天寺で寶物展覧會が開かれてる時でしたから三學年が行かうと申しますとそれなら二學年も同行しようといつた工合で圖らず聯合の形になつたのです。人の心は誰も同

しだと存じます。時日はと申しますと五月廿九日土曜日の午後からで先生に時間のお繰合せをして戴いて往きには尾道驛から汽車で參りました。松永まで往復六里の歩行は私共少女には堪へられないからであります。承天寺の寶物の中には天子樣の御宸筆や何とかいふ大家の繪書や但しは赤穗四十七士、の書翰などがあゑ、それを掛員が一々說明して下さいました。寶物拜觀の後裏の山へ登つて躑躅の花を見暫らく休憩致しました。躑躅はまだ三分程しか花をつけませんでしたが山の眺望は宜しう御座いました。歸りは高須から山波を徒歩でまはり正六時に歸校しました。一人の落伍生も出さなかつたのは自らの誇りとする處で御座いました。御同行の先生は吉野上村三橋井上の各主任と大河內古山新帶三木西田の諸先生で道中なども規律ある裡に興味もあつて好い半日の清遊で御座いました。

（本三甲　東一枝）

○第四學年學級會　三年以下の御方が松永へ行つたり立花へお出になつたりするに私達姉さん株が內にばかり引籠つても居られまいといふので突然の動議で向島の干汐へ參りました。六月二日水曜日お晝飯を終はると直く出發しました。引率の先生は三宅先生に技廣先生、お二人は主任の格で、其の他の古山大河內吉野の諸先生は遊軍といつた風で總勢百人隊伍蕭々と出掛けました。兼吉の渡舟に乘つた時の心持熟れ切つた麥畠の中を白のバラソルを揃へて行進する心持、暑い事は暑く御座いましたが何共いはれぬ喜びを持ちました。あたりの景色はこれまでに度々實驗した事とて別に珍らしくも何ともありませんでしたが斯うして同じクラスばかりて遠足に出ると又特別の氣分にもなるものです。汗が出て仕方がありませんから靑葉隱れへ參りましてはホット息をつき途中で一回の大休止を行つて約一時間ばかりで目的の干汐へ參りました。

（本四乙　瀧迫芳子）

瀧迫さん、今度は私に書かして下さい。干汐へ着くと解隊を行つて各自任意の遊戲をしました。貝を拾ふもあれば摘草をするもあり、舟に乘るもあるかと思へば岡へ駈けあがるもあつて、あちらでもキヤッキヤ、こちらでもキヤッキヤ、ほんとに女はかしましいものです。併し敎室にとぢ籠つて勉強ばかりしてた頭腦を淸新にするには斯ういふ遠出の散步に限ると思ひます。天は晴れてるし浪は穩なり遠近の島々は皆んな浮いて見えます。『あれ、あの島が百貫島、私鯛網に行きたくつて』といふかと思へば『あれが伊豫の國よ、今治はどの邊でせう』つて故郷かしらお友達かしら憧憬れて居らつしやる方もある樣です其の內に右手の磯で皆さんが大騷でしたから何が起

つたかと伺つて見ると池田さんが海に落こちたんですつて。それは小舟に乘つて居て下りる拍子に舟脚がツィと沖へ辷つて池田さんはザンブとばかり水煙斯う申すと大袈裟ですが袴の裾を一尺程も海水に浸したといふのです。私は直ぐに壽永の秋の壇浦合戰を思ひ出さずには居られませんでした。平家の女官が御座船から渚へ下りて逃げまどうた有樣の秋の竜田の川紅葉唐紅に水くゝるとでも形容した樣な圖だと大笑ひ致しました。斯くて午后四時干汐を出發して道中無事に歸校しました。第一學期級學級會掉尾の興趣は此れてお仕舞

（本四甲　岡田カッヨ）

圖書閲覽室報告

委員　瀧迫芳子

校友會の創立以來茲に四年各種の發行圖書の内で私共の讀むに適した物を先生に願つて購つて戴いて閲覽室に備へつけてあります。私共は毎日課業後此の室に適宜集まつて修養に資するのであります。そして土曜日には委員の許可を經て家庭に借出す事が出來ます。最も多く讀まれるは文學書で次が精神修養に關する書物であります。近來私共の文章の力が進歩した樣な氣持のするのと、また校友のいまわしき行などのないといふのは此の圖書閲覽の力與つて多きを致すものと存じまして嬉しう御座います。今現在備付の書籍の數と新たに購入した書目とを左に掲けて御參考に供します。

○現有書籍の冊數

科目	部數	冊數
一、修身教育	六壹	六八
一、家政	二四	二四
一、地歷	一〇九	一一〇
一、傳記	二六	二八
一、理科	二七	二七
一、文學	一二〇	一二三
一、雜	四六	五〇
合計	四〇四	四二一

○雜誌の種類

科學世界、　新女界、　少女の友、　圖書研究
ABC　中等英語、　英語研究、　實業の日本
ミツドル、スクール、ウイクリー、　音樂界、　歐洲戰爭實記

○四月以降の新購入書

現代の婦人へ、　立志立切、　怒るな働け　人生雜感
平民詩人、　英文世界風俗、　博文館偉人傳叢書
全新式作文大成、　婦人文庫、　世界少女文學
泰西音樂大家傳、　チルドレンス、フラワー
フエヤリー、テールス、　モートヴエンとミレー

校友會役員

會長　杉野校長
副會長　三宅教諭
會計主任　下瀬教諭
文藝部長　三橋教諭
運動部長　吉野教諭
文藝部委員
（四甲）松本智惠
（四乙）瀧迫芳子
（四乙）岡田ヨシエ
（三甲）井上敏子
（三甲）野津梁江
（三乙）長尾タマ
（三乙）島谷敏江
（二甲）繁村マツ
（二甲）松本ヨシノ
（二乙）上野綾子
（二乙）高橋艮子
（四甲）田中壽惠
運動部委員
（四甲）井出テツ
（四乙）小西ツ
（四乙）田中喜久惠
（三甲）岡田ハナ
（三甲）池田政子
（三乙）埜島君子
（三乙）藤井タキ
（二甲）上月庸子
（二甲）田阪小竹
（二乙）金子靜枝
（二乙）川上シメヨ

（以上大正四年四月九日就任）

同窓會報

哀悼の辭

天野千代子首尾木露子增田くまの御三方のみまかり給ひしを悼み謹みて御吊詞申上候

第一回卒業生有志

老少不定は世のならひ生者必滅のことはりはかねても知り侍り候へど三とせてふ長き年月おなじ學びの窓に身も心も一つにして樂しさも憂き事も相共にわかち文机ならべて雨の日風の夜窓らずいりしみ陸みし隔てぬ友垣に候ひしに業卒へて名殘惜しき袂わかち候てより四とせ過にし今は早呼べど再び歸りまさぬ黃泉の客となられ候ひぬと承れば〳〵も御のこりをしう限りなき悲しみにとざされ申候さてもありしお目もじの當時を思ひおこし候へば御身も御心もすぐれて健かにおはし〳〵方々なりしをいかで晨の露の如きいとゞはかなき御命にて浮世をばあへなくせさせ給ひ候ぞこれより花も咲き實をも結ふべき尊き御身なりけるをかくばかり早くも永き別離の悲みにあはんことたゞ〳〵夢の樣にておはしまし〳

頃ほひのこと夢幻の如くに思ひ出られふいには忘れがとう覺え申候さりながら一度散りにし花はふたゝび枝に返らず候を今はたゞ後の世の御冥福を祈り奉らせみ魂慰め奉らんよりせんすべもなくそれのみ只管ねんじ上候御跡吊ひ申上度久しく絶ちありしまはらぬ筆をもかへり見ずひと言かいつけてつきせぬ哀悼の意をさゝげまゐらせ候

第四回同窓會總會

大正三年一月三日母校の体操演習會を機とし第四回同窓會は開かれぬ

來會者は午前十時頃より漸次作法室に或は定めある体操場の席に各自思ひ〳〵の方向に集るやがて十二時を合圖に一同作法室にて午餐の會食をなす午后体操演習終りし后は又々作法室にて茶話會を開き互に温き談話に時をうつしゝある折柄或方の發案にて記念の撮影の相談起りぬ一同賛成事まとりて体操場にいで諸先生並に若々しき會員諸氏の面影は撮られぬ今日しも集りし方々は第一回卒業生八名第二回九名第三回二十名の多數にのぼりいともうれしき會合なりき。

第五回同窓會總會

大正四年二月十七日母校に於て競点作文披露式擧行を利用し第五回同窓會を開かる、

式后午後二時半開會先づ會長のお話あり引續き唱歌《補習科生》諸先生様々の餘興につゞきてカルタの會を催されぬ時節柄いと興ありて面白かりき必死となりて爭ふ中にも時間は容赦なく過き去りて電燈点々光を放つに驚かされつきぬ名殘を惜しみつゝも各々家路にと足を運べり春といひ秋といひ時折々の差はあれど何とはなくて心樂しく又嬉しき心地のせらるゝは母校に於る會合にこそ。

卒業生情況

卒業年月	人員 本科	人員 補習科	結婚者	產兒ヲ擧ケシモノ	進デ他ノ學校ニ入リシモノ
明治四十四年度	四五	〇	二二	七	二
明治四十五年度	三六	九	一四	三	四
大正二年度	四〇	五	四	〇	四
大正三年度	四一	六	一	〇	七

雁のつて

天野千代子　かりそめの病重らせ給ひて今春果敢なくも黄泉の客となり給ふ神に祈り醫師にはかり種々様々に心をくだき給ひし母君の御心中推しはかり參らせて同情の念に堪へず

粟村　トク　家庭にありて家事に練習とか

生酒　コト　愛兒の死後兎角健康勝れ給はざりしが當節は余程御恢復の由御自愛を祈る

稲田　サト　家庭ありて稽古事にいそしみ給ふ

井出上千代花　近頃御病氣の由御平愈を祈る

小川　その　何かと御多忙の由承る

小倉　ヒデ　御良人と共に德島縣撫養にあり先日女子御安產遊されし由いと目出度し

大崎　ハナ　健全にて家事に御熱心

大田垣マサヨ　家庭にありて諸事にいそしまる

柏原　光代　家庭にありて家事練習に余念なく居らせらるゝとか御近狀承りたし

高橋　春子　只今は澎湖島にて御良人と共に御暮し給ふ

河村　初音　小學校に御勤務遊さる

桑田　エイ　山南にありて稽古事に御熱心

桑田　キミ　今津の某氏に嫁き給ひしとか

小西　ウヲ　父君を失ひ給ひし后は兎角勝れ給はず今岡山縣病院に御療養中なり御全快御歸國を祈る

野　崎　幸　京都に御在住新家庭を作り給ふ由今秋の御大典の御模樣委くし御報知ありたし

榊原千代子　御両親の御膝下にて御稽古事に余念なくあらせ給ふ

眞田　フミ　御近狀如何承りたし

佐々木ヲカ子　家庭にありて家事にいそしまる

首尾木露子　あの御丈夫なる御生れつきなりしに病のために俄かに御かくれ給ひしとは御両親樣の御なげきさこそと推しはかり奉る

久留島カメコ　主婦として母として働き給ふ由

秋葉　勝子　大連の秋葉氏に嫁かれ此所に新なる家庭を作り給ふ

田阪　花江　家庭にありて家事御練習中

田中　ヨシ　下關の御樣子承りたし

伊達　房子　東京女醫學校に在學中

土屋フシエ　御近狀如何承りたし

富田　サカ　愛兒を失はれて兎角健康勝れ給はぬ由

折角御大切に遊されよ

堂野　エイ　相變らず小學校に通勤遊さる

中野チトセ　御近狀承りたし

長安　愛子　健全にて家事に御忙しき由

橋本　信子　廣島にありしが又佐世保に御傳住と承る家庭にありて家事に御いそしみの由ち

と御ひまのせつ母校に御出を乞ふ
野村喜代子　家庭ににありて家事御練習の由
楢崎　タマ　御良人と共に北海道小樽に
神原　久枝　姑の君に孝養深く家庭圓滿なりと
松尾　初代　小學校に御勤務遊さる
惠谷くまの　御手厚き御介抱其甲斐もなく遂に永き
眠につき給ひぬいたましき限にこそ
安長フジノ　廣島の兄君の許にて御無事の由
湯淺　熊子　鳥取縣湯淺家に嫁し給ひ家事に御熱心
の由
山下　フデ　御病氣の由なりしが昨今全く御恢復遊
されし御様子御自愛を祈る
吉岡　繁子　家庭にありて御無事の由
高田ミキノ　御健にて家事御つとめの由
伊藤　菊野　今春より東京に御轉住遊さる
橋本　キク　愛女の母として御いそしみの由
明田　ツヂ　當時大坂にありとは聞けど委しき御近
狀承りたし
黒木ノブヨ　只今は神戸に御在住或會社におつとめ
の由
村上　トミ　當時は御入嫁先に御起居遊さる今春丸
まげ姿を停車場にて拜したりと人の噂
木曾　チヨ　御自宅にて家事御練習の由今春美しき
花を母校に贈られ暫らく教員室を飾られ諸先生を慰
めたり御志の程いとうれし
粟井トクノ　廣島市段原村にあり御近狀承りたし
小林　久　日々御忙しき家業の御手傳の傍よく母
君を助けて御令妹達の御世話を遊さるゝ由
神原　滿江　家庭にありて種々の御稽古事に御いそ
しみ遊さる
末平　キヌ　目下は白江の方に御出遊す由
池田　芳子　昨年九月の頃御男兒御分娩若き母君と
して育兒の御研究
田阪　マス　先年御養子遊され睦じく御暮しの由
立上ヒサヨ　沼隈郡山波村の小學校に御在勤御熱心
に御つとめ遊さる
阿蘇カヲル　昨年御養子を迎へられ何かと家事に御
いそしみ遊さる
井上ミチヨ　今春東京の學校御卒業后は鄉里向島に
ありて家事御實習中と承る
伊藤　春江　久しく御病氣御靜養中なりしが近頃は
余程御恢復の由御自愛を祈る
池田テルヨ　三原なる御家庭にありて家事に御熱心
の由少しく母校へ御出遊されては如何
上田　靜江　御自宅にて家事にいそしみの由少しは
母校に御足を運れては如何
宇坪ヒサヨ　上海に御出遊されし様子は承りしが其
后は如何御近狀承りたし

大本　コト　御両親幷に御良人と共に日々家業に御つとめ由
大鼓　ハナ　只今は神戸に御住ひ遊さるゝ由黒木様となかよく折々御出合遊す御様子
岡　セキノ　因島にて御無事御暮し遊さるゝ由一度母校にてものごし優かなる御様子を拝せし事あり
谷本ウメノ　今春谷本家に御入嫁遊さる
川本スエヨ　家庭にありて家事御手傳の由
竹之上コチヨ　昨年竹之上家に御入嫁遊さる
高田　玉子　今春東京の學校を御卒業遊ばし今は御両親の下にて家事御練習の由御卒業后母校にて御姿を拝しぬ
井口八重子　今は若き母様となられ春の頃暫らく尾道に御越し遊し清水醫院に御通ひ遊されし事ありしが當時は全く御恢復吉田町に御歸宅の由御自愛を祈る
中川　秀子　今春目出度御母君となられ日々御愛育の由御両親は可愛き御初孫に嘸々御よろこびの事ならん
中　村　琴　先年御一人の兄君に御分れの由御淋しく居らせらるゝ事と御同情に堪へず
三坂　玄子　三坂家に御入嫁の后は只管家の爲めにと御つとめの由
平岡　徹子　御自宅にて稽古事に御熱心の由
日高　貞子　御近狀如何承りたし
松浦コマサ　只今は小學校に御出勤御事繁く御暮し遊さる
大西　タミ　先年大西家に御嫁き遊し近き内に御愛兒を御あげ遊すとか
三上　ツヤ子　近頃は一向御様子承らず如何お暮し遊さるゝや
三浦フミヨ　今は東京に御住ひの由少しは御近狀御もらし遊ばせ
村上　ノブ　東京渡邊裁縫女學校に御在學中なか〳〵御勉強遊す御様子
大泰司靜枝　昨年迄は東京に御住居ありしが御良人様御渡米の后はよく舅姑に仕へ給ひ只管家事にいそしみ給ふ只一人の御愛兒を失ひ給ひしは眞に御氣の毒の至りなり
渡邊　キヨ　廣島市にありよく御両親に御孝行遊さるゝ由
三坂　カメ　旧姓池尻當市三坂氏に嫁がれ第二回卒業の平岡玄子様と姉妹の關係を結び給ひしとは目出度し
稻田　ノブ　御両親の膝下にて家事にいそしみ給ふ
小川　ノブ　浪路へだたる故郷にて樂しき月日を送り給ふらん
大山　ナヲ　補習科卒業後母君と共に東路の旅を終へて御歸りの由お土産話承はりたし

拍原　菊代　家庭にありて裁縫の道を辿らせ給ふ
金谷　田鶴　家庭にありて御勉強中とか
河本　キヌ　京都にありて裁縫の道を深く研究し給ふ
楠生　ミヲ　昨年御大患に御なやみ遊されし由昨今は元の通り御恢復とは目出たし
栗原　フサ　昨年御結婚遊ばし海岸のお店に御夫婦なかよく暮し給ふ
兒玉喜代子　御熱心に裁縫の道を辿らせ給ふ
小山　リウ　大阪へ御出遊ばしたとか人の噂
佐藤キミヨ　御近狀如何候哉
徳山　ルイ　御地の學校へ御でましとかきく
永田　悦　裁縫御練習中
鍋島キヌエ　豐田郡河本村の裁縫所に
鍋島シゲル　府中町の裁縫所にいづれも御勉強の由
西村　憲代　お裁縫に御通ひ遊さる
納見チトセ　今春三原女師二部に御入學
野村　禧子　家庭にありて裁縫お琴などのお稽古にいそしみの由折々母校を訪つれ給ふ
林　ツ　ニ　御眼をやみ給ふとか折角御いとひ遊し早〳〵御全快を祈る
原田　千代　家庭にありてお稽古事にふけり給ふ
原田マサノ　今春御結婚の由目出度祝ひ奉る
江川ヒサヨ　松永の小學校に御奉職とか承る
壽美谷タカコ　支店の御主人としてなか〳〵御働きぶりと傳ふ
田中　竹代　近頃の御様子承りたし
田阪　幾世　家庭にありて家事御練習
谷本　壽子　先日呉の方へお嫁きの由
竹本マツヨ　裁縫琴のお稽古に余念なしとか
政池　ツナ　東京職業學校に御入學御勉強中
松森　ツヤ　お裁縫に通ひ給ふ
正木　春子　家事お手傳に日も足らずとか
三熊　小里　近頃御姉様を失ひ給ひし由御淋しく居らせらるゝ事と御同情に堪へず
三井　雅子　ちと京城の珍らしきお話を承りたし
村上　下枝　家庭にありてお稽古事にいそしみ給ふ
今春父上様御大患の由定めて御心配遊ばせしならん併し早く御全快ありしはいとも喜ばし
村上　ヤス　御近狀如何にや承りたし
村上ツルコ　お裁縫にお琴に頗る御熱心の由
村上ハルヨ　近頃の御様子承りたし
山科由己子　都の様子少しはもらし給へ
山本ツヤヨ　今春三原師範第二部に入り御勉強中
吉池　キヌ　家庭にありて家事おいそしみの由少しはお便りを
青野　セツ　余念もなう家事においそしみの由學生時代の活潑なるお姿も桃われ姿におかはり給ひしとか
市川コアサ　三原女師第二部生として只管御勉學中

なり

井手ヨ子ノ　家庭にありて家事御練習中
伊藤　ミチ　岡山の裁縫女學校にて勉學中
今井　清子　裁縫のお稽古に御通ひのよし
植田キクノ　家事御練習中とか
宇都宮エン　都の空にて御修業中
小川ハルエ　東京高師御勉強中
岡田トヨノ　裁縫のお稽古にお急かしき由
柏原ミユキ　三原師範二部生として御勉學中
村上ミツエ　旧姓熊九四月半より村上様と變り給ふ
昔のまゝに熊丸さんと呼かくる事あり
兒玉　ヨシ　東京職業學校に入學此道にいそしみ給ふ
小西　ハル　お裁縫にお琴に余念なし
小松　ふさ　お裁縫生花に御勉強の由
佐々木豐野　杉野校長先生の御宅にて御勉學中昔のまゝにまる〳〵とふとり給ふ
兼森シゲヨ　裁縫の道に御いりしみ給ふ
下川　小雪　おすこやかにて御家にありと
末田ヒサノ　お裁縫にお通ひの由
高垣シゲノ　三原女師第二部生として勉學中
武田マサコ　御自宅にて家事をつとめらる
立神　タヲ　御郷里松永にて御靜養中
永井　恒子　御卒業后折々母校にお顔を見せ給ふ
中司カツヨ　お裁縫稽古のため當地へ御寄宿の由

新田　ヒサ　裁縫のお稽古にお通ひ遊すとか
野村　アサ　御家庭にありて家事實習中
林　良　御家庭にありて裁縫の道にいそしみ折々は例のすまされし姿拜する事あり
久田ヲヒサ　其后の御消息承らず如何お暮し給ふにや
福原　ふ代　裁縫のお稽古に御熱心の由
藤井　靜子　東都なる叔父上の許にと承る
藤原フジノ　御樣子承らず少しは母校へもお出かけなされては如何
松井　エイ　家庭にて家事御練習中とか
三井　敏子　久しぶりに朝鮮なる御両親の御下に御歸りの事とて樂しき日を送り給ふらん
三次　イチ　お變りもなく家事お手傳の由
宮地　清子　三原女師第二部生として勉學中
宮崎　亮　三原女師第二部生として御入學折々御歸省なされ親しき友を訪れ給ふ
村上　かや　美しき桃われ姿を時々拜見す
村上　ミチ　家庭にありて裁縫お琴練習中
村上　ヨシ　返頃はいよ〳〵太らせ給ひてます〳〵御健康の由
毛利エキノ　何れへか御約束がすみしとか人の噂
本森喜美代　店を一手に引受けてあつぱれの働きぶりとは友の噂
吉岡好　裁縫お稽古にお通ひ遊さるゝ由

消息

長澤先生を憶いて

阪本花代

大正二年十月卅一日長澤先生が朝會の時御就任の御挨拶をなさいました時の御樣子まだ目の前にちらづいて今天國の人となつていらつしやるなんてまるで夢の樣でございます。先生の御立派な精神的御生活は今猶想ひ出の種子、御存命中に仰しやつたお言葉ははつきりと耳に殘つて居ります。『私はヲー、どんな境遇に陷つても、たとい袋を頸に下げる程の境遇になつても自分の信仰を捨てる事は出來ません』といつも仰しやつて居りました。

御病氣時々御見舞に參る度にいつも感じたのは、先生は快活に御話なさつて、御自分の御病氣を少しもお氣におかけにならないで『こんな病氣になつて神樣の御旨もよくわかり、色々御敎訓を受けました』とにつこりとして仰しやつた事です。

四月の末頃、職員生徒よりの記念品として、白茶のお召に、あやめを刺繍した帶地を持つて參りました時、『この頃病氣は余程快くなりました。信抑つてゐらいものです。先日モーだめだと思う程弱つて居りましたが、牧師樣にこの頃お話をして頂いて居るので余程氣分もよくなり病氣もおじけ込んでしまひました。……マア一度々々お見舞を頂いた上こんな立派な物を頂きまして恐れ入りますが、皆樣の折角の御志ですから喜んで頂きます。こんな立派な帶に釣り合ふ着物を、今此處に持つて來て居りません。早くよくなつて此の帶をしめませう。『先生派手になりましたらお染かへになるといゝでせう』と申し上げると』イヽエ此の記念の品……此の良い色合……私に派手になりましたら節子《お嬢さん》にしめさせます』……

この調子で病氣もよくなつて參りますと暑中休暇にはずつとよくなるでせう。お休みには御一しよに遊びませう。

と仰しやいました。

この御言葉は私にとつて先生の此の世に於ける最後のお言葉で、御永眠になりました五月三十日の朝或る方から『先生は余程お悪い御樣子で、二三日位しか持たないでせう。』と仰しやるのを聞いてびつくりして御伺ひ致しましたが、いひ急いで居りましたので女中にお取り次ぎを頼んでお目にかゝりませんでした。

翌卅一日の朝、學校で先生の御永眠のことを承つて實にあまりの事でかく早く神に召され給ふとは思ひがけもなく、未だ二三日はと思うて居りましたので、びつくりいたしました。其の日の夕方教會で御葬式が行はれ、この時は實に何とも云へない感じが致しました。讃美歌も、白い法衣をお召しになつた牧師樣のお祈り、聖書朗讀、お說教、いづれも信者の一人として又天國で御目にかゝる事が出來ると云ふ自覺を自分は確に持つて居りながら、しほらしい節子さんや御遺族の御方のお姿を見ては一しほ感じ深く涙がこぼれました。『我れはよみがへりなり命なり、我れ信ずる者は死ぬるとも生くべし、凡て我れを信する者はいつまでも死ぬる事なし。』との聖句は神の僕の光榮ある生涯の意味を現し先生は地上に於ても光の道を歩み、猶この道をすん〳〵續いて歩んでいらつしやると云ふ感じが深くなり、殊に御說教の中に御存命中『私は自分の家族の爲めには祈らないが、女學校の生徒さん方が私の樣な恐しい病氣にかゝらない樣に祈ります。』と仰しやつた御言葉は、實に美しい婦人の愛が只自分の眞人や子供即ち自分の家庭のみならず廣く家庭以外にも溢れて居る、誠に慕はしい美しい婦德の一端をしめして居るものと一層先生を敬慕する念を增しました。御臨終の時に皆樣を枕邊にお寄せになつて、『此れから參りますから行く前に一寸皆樣に御話を仕度うございます。』との先生の御言葉は、苦痛もなく恐れもなく、天の父なる神の許に行き給ふ先生の美しい信仰を現して、私もかくあり度いと思ひました。黑布で蔽はれ、花環で飾られた先生の御遺骸は、讃美歌四百六十六番の、

あいのひかりの　きえぬさとに
たえしえにしを　またもつながん
きえしほしかげ　こゝにかゞやき
うせしのぞみは　こゝにえられん
やがてあはなん
めでにしものと
やがてあはなん

を歌ひ居る內、しづ〳〵と敎會を出で燒き場に運ばれ、あゝ先生のおからだは灰となつて御良人の御鄕里本鄕に御歸りになつたのですが、まだ先生の靈は生き〳〵として、私共は精神に於て先生と共に居りいつか未來に於て花咲き薰る氣候もよく、病もない死もない、戰もない平和の神の御國で天の使に取りかこまれながら、先生の御顏を親しく見る事が出來るのです。こんな喜び希望に滿されながらも、御病中私も忙しくて御伺いしてもあまり長く御邪魔をする事も出來ず、『又ゆつくり參りまして御話を致しませう。讃美歌も歌ひませう。』と云うては御いとまし

てどう〳〵ゆつくり參る時は此の世ではないものとなり、いつも先生が『あなたと御話すると、お話が一方に許りはしりますが、罪も、けがれもございませんわァー。』と仰しやつた御言葉、私も同感で、學校での手空き時間や放課後一二時間は夢中でお話したこともございますが、モーこんな事は再び來ないので名殘り惜しくてたまりません。あゝ折りもあらば緣深いこの夏の日、『聖なるかなマリア』を表はせる白百合の花を持つて御墓を訪ひ、節子さんや進さんにも御目にかゝり度うございます。進は『一義に進む、神の道に於て進む。』といふ意味から付けた名なのですと、よく先生は仰しやつて居りました。先生の御姿はよし此の世になくても、母としての温い情は今猶消えず、坊ちやんやお嬢さんの上にあつて、神に近よれ、神の子となれ、といつも優しくさゝやいていらつしやるでせう。クリスマスが來ても御二人の可愛らしい御姿を敎會で見る事は出來ません。先生の靈は天國にて安らけく、御遺族の皆樣は御機嫌よう。どうぞ御二人の御子樣方は御丈夫で御成長遊ばしませ。

枝　廣　春　枝

皆樣が長澤先生のために夫れ〳〵感想を御書き下さる樣ですから私は方面をかへて先生の畧歷を御紹介して追憶の種に致さうと存します。

故長澤文子先生は元と江形氏と申されました。

江形家にとりては一粒種の寶に大切な御令嬢で蝶よ花よと育てられましたが先生の振分髪の頃母堂に逝かれました。幼な心にも先生は嘸哀しかつたでありましたらう。其後先生は繼母に事へて眞の母子以上の孝養をお盡くしになりましたので御両親の御いつくしみは一通では無かつたさうです。先生は最後まで眞の孝子でいらしつた事は時々其の深く清らかな御心持が御話の端にも洩れて居ります。

稍々長じ給ひて後廣島市立開成舍及び熊本師範學校附屬小學校を御卒業なされ次で同縣尚絅女學に御入學なさいました。先生は常に斯う申して居られました『私の裁縫の割合に早いのは此の學校の御陰です』つて。其れから京都府立第一高等女學校本科第三學年に編入せられ卒業後進んで御勉學三十八年家事裁縫專攻科御卒業になりました。これが先生の學生時代の最後で御座います。其の間の成績や品行はなか〳〵平凡ではなかつた樣です。

御卒業後は一時廣島市の自宅にお歸りになりましたが次で同市の山中高等女學校に御奉職なさいました此の時御良人を御迎へになりました。次で廣島師範私立日彰館女子部等に御奉職になりました。可愛い〳〵セツ子嬢をおあげになつて母としての生活にお

はいりになつたは此の時でありました。翌四十三年一月から大正元年九月迄大阪府泉南高等女學校に御奉職なさいました。此の間が先生の活動時代でありました。既に種々の經驗はお持ちになる大なる實力はお有りになる加ふるに其の頃は至つて健康でいらつしやいましたから恐らく先生の一生としては此の時代程公務に勉勵せられた時代はなかつたでありませう。此の地でお生れになつたのが進坊であります後家事の御都合で御退職になり朝鮮に御移轉なさいましたが再び御歸鄉遊はされて大正二年十一月本校に御就職家事裁縫を御担任になりました。先生は相變らず御熱誠を以て生徒を御示導遊はされまして身命を惜しまれなかつた爲か追々と健康に異變を生せられ遂に大正三年五月の末つ方から廣島市にて御療養なさいました九月頃から少々御輕快との事で御出勤なさいました。未だほんのりと遊はさないのを推して御勤めなさつた爲か又々御病氣重り給ひ本年の三月限り御辭職になり專ら御加養中嗚呼申すも涙の種であります未だ乳臭ひ進坊や第一尾道尋常小學校へ御通學中のいたいけ盛りのセツ子嬢を御殘しなされ御良人に先きだゝれて五月三十日此の世を御去りに成りました。

太く長かれと祈つて居つた先生の命は實に短かう御座いましたが穩健な先生の思想及び活動振は多數生徒の心身に深く〳〵宿つて光りをはなつであらうと存します。

斯く筆をとりながらもどうしても先生の死は信じられません。穩なる御教訓親切なる御戒は尚は聞える様に思はれまして……

思ひ出

ゆふづつ

お亡くなりなすつた、と承つたのは、三十一日の朝學校へ參るとすぐでした。かねてお惡いとは承つて居りましたが、よもやこんなに急に悲しい報に接しやうとは夢にも思つて居ませんでした。あゝ思へばあの時に親しくお話をいたしましたのが最後だつたのです、それは丁度卒業式の少し前、なんでもまだ千光寺のお花は堅い蕾の時分でした。

しばらくのお惱みで、余程お痩せになつた上におぐしを櫛卷にしてゐらしつたので、尚更おやつれのやうにお見受けしてなんだか悲しいやうな氣がしました。

『ほんとに、早くよくおなりになりまして結構でしたねー』と申し上げたら『おかげ樣で大變よくなりました、もう大丈夫ですよ、それに學校の方も安心させて頂きましたしねー、これからは氣候もよくなりますし』つて、お笑ひなさるといつもちらと見える金齒がうの時も見えました。

その時、岡田先生、西田先生等と御一緒に一つお火鉢を圍んで色々なお話を伺ひました。

『今の住居は濕けていけませんから、今度は見晴しのいゝ、それこそあなたがよくおつしやつた本の表紙でもそりかへるほど日光のよくさす家へ移りましてねー、畑のもの等も少しは作つて見たいと思つて居ますの、いつか東京から送つてもらつた草花の種もありますから、それも咲かせて見ますよ、咲いたら差上げませうね』

だれがあの時に、こんな悲しい時が來やうと思つて居たでせうか。

『えつ是非どうか、樂しみに待つて居りますから』なんてちやんとお約束までしましたのに、今はもうはかない夢となつてしまつて、

ちぎりし春はめぐれども
すみれやつひに手向草

などゝこんな悲しい歌を、亡き先生のために唱はなければならない時が來てしまひました。

お葬式の時に、牧師さんのお話には、御臨終の時皆さんを枕元へお呼びよせになつて、『これから往きますよ』つて、おつしやつたさうです。

天國とはどんなにいゝ所かは知れませんが、あんな可愛い進さんや、節子さんを、おいてきぼりにしてなど、きつと〳〵ゐらつしやりたくはなかつたでせうに、どうして先生のお胸の中を思ふと泣かずに居られませう、

大事の〳〵母樣が、天の神樣のお膝元へゐらつしやつたので、永久にお留守番をなさらなければならない、可愛い姉弟の上を思ひますと、胸がつぶれさうです、今に物心がついて來た時分『あたし達の母樣はなぜお歸りにならないの』なんて、あの可愛い兩のお目に露をやどして、お祖母樣をお泣かせになる事があるでせう。あゝお可愛想でたまりません。

まだ先生がお務めの時分、會議等のためにお歸りが遲くなりますと、會議室の窓硝子に、二つの可愛い影法師がきつと寫りました。しばらくすると、小さい方のから働き出して、カアチヤン〳〵つて、可愛い聲がするのが常でした。今から思へばあれも涙の種です。

『二人は日曜が一番うれしいのださうですよ、なぜつて、聞きますとね、それは母樣がお家にゐらつしやるんですもの、なんてこんなに思つて居るかと思へば、可愛想になりますの』。

余程前にこういふ御話も伺ひました。

ほんとに、よく〳〵母さまに御緣がない御姉弟でした、外の坊ちやん達のやうに、十分母樣にだつこもして頂けず、其上早くお別れなさるなんて、全くおいとしくてなりません、せめてこれからでも、幸福

にゐらつしやるやうにと、かげながら祈つて居ます

お葬式がすんで、御遺骸がいよ〳〵教會から去られる時、涙にむせびながら唱ひました、讃美歌の、

親は我が子に友は友に
　妹は眷にあふ文のみもとに
雲はあとなく霧は消えはて
　おなじみすがた共に寫さん
やがてあはなんめでにしものと
　やがてあはなん

といふのゝメロディーが、耳について居て淋しく暮れ行く窓に、故人を偲ぶ一人の袖を搾らせて居ます

御卒業の皆様に

多富久子

何年ぶりで皆様に御たより申上ることで御座いませう、丁度一週間前の日曜日には高師御入學の小川さんに御目にかかり久々で學校の御様子や諸先生の御機嫌御卒業の皆様のおうはさがいろ〳〵伺はれ誠に御うれしく存じて居りました處今日はまたはからず岡田先生から何ぞかけとのをほせごとを頂きこんなにありがたい御うれしいことは御座いません物にうとい私も御無沙汰にかけては人並すぐれて上手でもう大博士にでもなつてしまひさうで御座いますが今日と云ふ今日は御やさしい先生の御言葉に甘へ御目にかゝると云ふことはかなはなくともせめて筆の上になりとも皆様の御機嫌を御伺ひ申上ることが出來誠に御うれしく御座います諸先生をはじめ御卒業の皆様にはいつも〳〵御機嫌よく御いで遊す御事とふかく〳〵およろこび申上ます

丁度小雨がシト〳〵と降り出しました日夕五時何分かの上り列車で最後のお別れを申上ましてからもう三年以上もたつてしまひました今更月並のお早いのにおどろかされますさぞさぞ皆様も御み大きく御やさしいお母様にはたまた御可愛いらしい御娘子様におなり遊ばしましたろふとおうれしい想像をあれこれとめくらしてはおよろこび申上て居ります

まだ一年生の水々してゐらしつた小川さんでさへこんなに御立派におみ大きくおなりになつたんで御座いますもの私の變りやうもどうぞ皆様御想像遊ばして下さいませ只今一人の子供の母として中々いそがしく暮して居ります唱つても見たい奏いても見たいと思はないでも御座いませんが坊やのあどけない夢をやぶりたくもなくだつこの手のやすめるひまも御座いません此頃はつひ〳〵昔のおけいこもおろそかになり安う御座いますけれども体ばかりはおかげ様にて誠に丈夫で皆様と御一共に遊びました時のやうに相かわらず面白く樂しい月日を送つて居りますか

らざうぞ御安心下さいませなれとこれもといろ〳〵申上たい事ばかりで御座いますが濱の眞砂のいつつきるとも申すあてもなく今日は久々でおたり申上られまして、おうれしさをのべ皆様のお健康をはるかに〳〵およろこび申上げお祈り申上げておいとま申上げます。

八王子より　齋藤三子

久々にての御音信を戴き嬉しく拜見致し候私事も誠に御無沙汰のみ致し居り今更御詫の申上げ様も御座なく唯々恥じ入り候

さ候へば御許樣を始め皆々樣には御機嫌よく御消光遊ばさるゝ由何よりの御事と喜び居り候私事も昨今は無事學校に務を致し居り候間御安心下され度願ひ上げ候

扨て是の度第二回『またま』御發行につき私にも何か書けと仰せられ候へどももとより不文申上げ度き事はそれよりそれと湧き出で候へどもいざとなれば筆しぶりほと〳〵困り入り候殊に御返事も思ひの外におろなはり候へばも早御發行ずみかとも存じわざとさしひかへ申候

されど私も御地を辭してすでに四年當時ほんの赤ちやんなりし三宅先生の御令息も今はお足も御達者に御話も御上手のよしなど承はりては今昔の感に堪えずさすがに是のまゝ擱筆も致し難く何か申上げんかと考へ始め候

當地は東京府下にて學校も府立に候へども東京市内を距る事十二里時間は一時間餘りに候しかし汽車は往復各々十二回もこれ有候へば市内より通學もなし得らるゝ程の便利は御座候西には富士の高嶺いまだ白雪を戴き東には多摩の流れ京都の加茂川よりも清く此頃は鮎漁も開かれて市内より高貴の方も見えらるゝ樣相成候

私は目下三十名の生徒と共に寄宿舍に居住いたし居り候

此の方寄宿舍は万事普通の家庭に近く炊事より掃除風呂の水汲みも畑の耕耘も生徒と共に致し居り候昨年の春さる所より貰ひ候犬は今は大きくなりてなか〳〵の剽輕者と相成候

猫は一疋飼ひ置き候

かゝる所にかゝる生活を致し居り候ため割合多くの人々にも御目にかゝられたのしく暮し居り候

一昨年の春と覺え候第一回卒業生の伊達房子さんが尋ね來られ昨年の春には第三回の壽美谷たか子さんの來訪を受け先日は村上のぶ子さん政池さん兒玉よし子さん小川さん四人連れ立ちて御尋ね下され皆々大きくなられしに驚きもし私の變らざるに驚かれも

致し候
かりそめにも師となり弟となりし身も年月のつもるにつれて互に遠ざかり行く世の中にかくもやさしくわざ〳〵御尋ね下さるゝ事の嬉しくていつもつきぬ物語に時をうつし候
當地に參りてよりかしこき事ながら二度の諒闇を過し又昨年の本月には父母の歿後唯頼みに致し居り候兄死亡致し候ため三度の暑中休暇も餘り旅行もせずにはかに老ひ果て候様の心地致し居り候
さ候へば例の得意の旅行談も御座なく雜誌の原稿も出來ず折角の仰せなれど唯これだけにて御赦されを蒙り度候
いづれ御地近く參り候事も候はんかと存じ候へば其の節は是非皆様にも御出でを願ひ度私も自然御地にお立ち寄り申上ぐる機會も多からんと樂みに致し居り候
末筆ながら皆様御自愛の程祈り上げ候　かしこ

卒業生消息

東京より　村上のぶ

今更おわびするに恥しゆう御座いますまあ何卒これまでの失禮を平に御許し下さいませ
扨て承りますれば御校にはこの度第二卷校友會雜誌御發刊の由ついては私事の消息をもと御尋ね下され誠に有難く存じます御親切なる御たよりに對しまして近狀を少しばかり申しのべて見ましよう月日の立ちますのは早いもので私が今の學校に入學致しましてから最早三年になります女學校時代に裁縫といふものに重きを置きませんでした私に取りましては入學當時は學校の樣子さへもよくわかりませんで非常に苦しいものと思て居りましたが日が立つに從つて學校の樣子もわかり出しますし裁縫の方もだん〳〵と面白くなつて參りましたがでも一年の間は苦しいで通しました
そして二年の中頃から漸く裁縫と云ふものに興味をもつ樣になりました皆樣も御存じの通り專門學校でございますので技術の点凡ての点におきまして大變きびしゆう御座います
一例をあげて見ますれば女學校あたりでは縫上げました物を先生に出しませばすぐとお點が附いて來ておなほしなんて云ふ樣な物は御座いませんが今でございますと先づ縫ひ始めます時に縫ふべき地質と寸法とを先生に差出しまして證明の御印を戴いて縫始める時間を書いてそれから漸く縫ひ始めます出來上りますと又時間を書きまして先生から御印を戴き先生の方へ出しますとおなをしが少くとも三つ四つ出

ない事は御座いません入學當時は七つ八つも出た事は珍らしくありませんでしたそして理論の如き物も二時間續きまして先生の云はれるのを筆記して參りますのでとてもうかうかして居られませんですこうして忙がしく二年の間に和服全部りの他の雜形を終へましてこの四月三年になりましてから洋服にうつりましたが是は又まるで尋常一年生で教はる事一つ一つ皆珍らしくて苦しい中にも面白味を以つて進んで居ります過して來た二年間は苦しかつたとは申しましても自分の熱心努力を以て進んで行きますればいくらでも面白味いはゆる興味を以て進んで行かれますが、三年になりましてからの教生是には今まで經驗のない苦しみを感じました四月一日始めて人を教授して行くと云ふ位置に立ちまして實地教授を心見ましたが初陣の事とて体内の血は嚴しく進行を始めて心藏の鼓動の常でないのを覺えました教壇に上らないうちは愛育公平を第一として教授するとはよく胸に想て居ましたが教場に出ればもう生徒の方にのまれて頭の中には唯生徒にうそを教へなければとそんな事が氣になつて居りますがしかし一週間十日とたつて行きますうちには教授にもなれて參りましたが教生當時はよく夢にまで苦しんだものでございますほんとに子を以て知る親の恩とか申しますが全くで御座いますわづかの教生中では御座いましたが非常に感じましたと同時に先生の有難さがよくわかりました次に寄宿で御座いますが私の居りますのは校外寄宿になつて居りまして自治寮と申す寮舍に居ります一人の舍監の先生を戴いて三十人近い生徒が八つの室に寢起して寮名の自活この自活の精神を以て進んで居りますこの寮ではわり合自由で御座いまして外出等も毎日出來ます一つ困りますのは運動場が御座いませんので夕食後も各室に歸て机にむいて讀書する位のもので別に慰安を求める様なところもございません七時半から九時半まで自習の時間で十時消燈のリンがなつて床につきますこういふ所は他の寄宿と變りません

去る五月卅日には同窓の政池小川兒玉様等と舊師齋藤先生を八王子に訪れました先生は四年前母校で教を受けた時の先生とちつとも變りなく四年後の今日も矢張子供の様におつしやつて下さつた時私共は有難さうれしさの極みで御座いましたが一方は今までに無い悲しい事を耳にして驚いた一日が御座いました第一回卒業の增田首尾木天野様等の諸姉を失ひました事は實に殘念の至りで御座いました終りにのぞみまして母校の發展を祈ると共に同窓會諸姉様の御健康を祈上げます

かしこ

生日鴫にて

大泰司靜枝

花は褪せ小蝶はやつれて長閑なりし春も夢と過ぎて今は早新緑の蔭も慕はしきころとなりましたが師の君樣始め皆々樣には御變りもあらせられず御暮し遊ばしますか御伺ひ申上ます私もお蔭樣で恙なく打ち過ごして居りますから何卒御安心下さいまし扨て今度は日頃御無沙汰の御とがめもなく近況知らせよとの御文誠にうれしう存じます外にこれと云つて申上ます程の事もございませんが私も昨年八月初旬都合によりまして東都を辭して歸國致しましたこの時私はすでに酢いもの好む身となつて居たので御座いますくろがねを熔かす樣な夏も事なく過ごし桐の一葉に秋立ちて萩の下風うすさむう身にしむ頃私はついに母と呼ばれる身となりました產後は母親の私は日頃丈夫なせいですか肥立ちもよろしう御座いましたのに子供はどうしたものか一向はか〳〵しくは御座いませんでした十五六日頃からます〳〵樣子が變になりまして醫者も匙をなげましたされども親の欲目で何かして助けたいものとどんなに手をつくしたでせうあゝ思ひ返へせばその日は朝から秋雨がパラ〳〵と降つたり止んだりして赤くなつた梨の葉が音もなう落ちて淋い日でした手をつくして看護した幼兒は僅かに廿日の壽命にて果敢なくも萩の下家に消えましたあゝ子を失ひし親の悲しみ!! 僅か廿日の親子の緣とはいへ愛の情には變はございません胸はふさがり腸は引裂くばかりで御座いました產後の身をきづかつて下さる人々の言葉も耳には入りません寢ては夢覺めては幻に其の面影は忘れ得ずふと夜半に目覺めては小窓打つ嵐にもしや愛兒の泣聲ならんかと耳そば立てし事も幾度あつたでせう夢! まつたく夢で御座いました同じ頃お生れなすつた御子樣見るとまたしても乾いた袖ぬらします宅のも生きて居たらと……あゝ若き母の空想にて皆破れまして淚の後のまだ消えやらぬ內夫は多年の望みかなひて學術研究の爲渡米の途に着きましたよりにする夫には海山千里を隔たり愛兒には幽冥界を異にしてあとに取殘されし孤獨の淋しさ!

今は唯來ん將來をたのしみに舅姑弟妹にかしづいて居りますこゝは草深ひ田舍ではございますけれども瀨戶內海の眺めよく幽かに見ゆる四國の遠山はさながら墨繪のやうで御座います夏にもなりましたら皆樣海水浴に御出かけ下さいまし。

京都より

野崎ゆき

九十の春光も夢と過ぎ今年もはや風薰る初夏を迎へました折柄母校第二号校友會雜誌御發行のよし誠にうれしくたのしんで待つて居ります待たぬ月日は經ち易く母校を出てから三年の春秋を送りましたが未

だ此間の樣な氣が致しますわ。同窓の皆樣どんなに御變り遊ばしたでせうね私も嫁いでから一年餘となり歌筆持つた手で家計薄記入することとなり只今は仲々責任が重いからだで御座いますの。學生時代に他愛もなく人生を讃美し理想よ希望よと語り合つた事はほんとに淡いたのしい思出です。現實の生活は仲々そんな呑氣なものではありません。色々社會の荒浪と戰つて行かねばなりませんげれど又樂しい事もたくさん出來てまゐります

家庭の樂しみこそ得難い物ですわ私などは一家を一人で切りまはして行き家庭の事はみんな自分の考へで支配されて行くのですから愉快では學生時代に習つた事色々應用して見ますけれどどうも實用向の事が少ない樣ですわ家庭の事はやはり昔の習慣を踏んで行く方が良い樣です。けれど料理とか交際などの樣なものは新舊とりまぜて長所をとつて行かなければなりません中々興味はるものですよやがて何日かは母とならなければならぬ身ですもの今の內充分に修養したいと思つて奮勵して居ります。京都もよい所ですよ山紫に水淸く名所舊跡には富んで居りますし四季の行樂にふさはしい美くしい所がたくさんにあります。又今秋の御大禮は如何ばかり御盛んな事かと存じて居ります御大典準備の事業がたくさん始まつて居ります。皆樣御ひまの節は京都へ御遊びに御出下さいまし御待ち申して居ります思のまゝを長々と書きつらねてすみませんでした又來年も誌上で御話し致したいと存じて居ります末ながら諸先生はじめ皆々樣の御健康を祈ります

撫養より　小倉英子

私は昨年の春の暮れになつかしい尾道をあとにして撫養に月日を送る事となりました。

主人は中學校に奉職いたして居りますのでおひるは一日一人で家事にいそしんで居ります、當地は皆樣も御存じの通り德島縣第二の都會でありますが思つたよりは田舍で始めの內は大變不自由でなりませんでしたが住めば都とか申します通り近頃は左樣に不自由も感じない樣になりいした。

撫養町は鳴門を近み風强く
　壇やくところ足袋縫ふところ

町の樣子は大體この樣なものでご座います。天下の名物鳴門鯛鳴門和布の御馳走が皆樣をお待ちしてゐます。

最后に私は五月雨中の頃一人の娘の母となりました

さらば

神戸より　大藪花子

見る每に心の和ぐ程快感を與へて居た木々の若葉は

あの柔みのある黄勝ちの色に日一日と綠をまして近くの山々は青葉若葉の彩面白く家々の庭木にも夏の裝を見せてをりますわけて布引の瀧は當りの青木に勵まされたかの様に今迄にも勝りて水の色美はしく涼し氣にみえます

神戸にも新しい様なすが〳〵しい景色を見る頃が參りましたまして自然の景に秀でた尾道の昨今はまあどんなに心地よい眺めを造つて居る事で御座いませう恰も繪の様な中に母校は一層發展されて先生も澤山の生徒の方には樂しく御勉強遊ばすかを思ひますと御懷しくも亦御羨しく存じます私は只今難有した市を離れ布引の瀧に近く住つて居りますが山に近くて空氣も清く其上閑靜で御座いますから身体には此上も無く適して居ります毎日山を眺めたり柳の植つた布引の川端を散歩したり致します其爲か近頃は誠に健康体になりまして學校で勉強する頃こんなに丈夫だつたらと何時も殘念に存じて居ります

布引の水は水道に引きまして三十八万からの市民が飲用して居ります、時々山登りを致しますが水源地のある邊の山景は流石に好いもので其他山中には捨て難い所が御座います市中を見下します事は實に壯快で大阪の煙らしいものが見えます日は猶うれしいもので御座います餘程晴れた日には東に西の宮より大阪の煙西は須磨の當り南は淡路島も見えます當市は兵庫と神戸の二都から成つていますが兵庫は家も古いのが多く並び方が不整頓で造船所に種々の工場が多い爲煙に包まれ空さへ黒くなつて居ります神戸の方は反對に工場は少くて立派な商家多く山手の方は東の端迄お屋敷所といつた様な家ばかりならび道筋も整頓していますので山から見下しましても此差別がよくわかります是も波止場があり外人の居留地があるからで御座いませう

今迄濃艶であつた西洋婦人も近頃は薄色の輕裝で散歩して居りますがやはり華やかでよく人目につきます、山手邊の洋館の前で澤山集つて居るのを見ましたり外國の珍らしい樹木や草花を澤山見ますと自分が外國に行つて居る様な感がして一人で笑ふことが御座います一ヶ月程前に同窓の黒木様にお目にかゝりました永い間お友達に離れて居ましたので例へ様なく嬉しく度々積古の歸りに御訪ねして居ります御一緒に布引の瀧や諏訪山遊園地に遊びました何時も母校を偲び學生時代の懷舊談に時も忘れて語らひます黒木様は學生時代より驚く程丈がお高くすらりとした御姿で私は昔に變らず肥滿して居ります兩人並びましては道行く人も嘸笑つた事でせう當地の言葉お上手に相變らず快活な御話ぶりで只今は某會社に御出勤で御座います私は呑氣相だと思はれる様な生活をして居ります女學校卒業後は暫く東京に遊學し

て居りましたが病氣治療に時を費し計畫の一部も成らぬ内に種々の事情から退校して昨年の六月牢に歸省致しました歸省後は計畫の破れたのが悔しく恐しく學生生活がやめられないものの様に考へられ居したが衰弱して居た身体が恢復しますと我まゝに心づきすつかり氣分を變へて其後は家事の手傳ひ裁縫をはげみ花の道にも稽古を初め庭の手入等心から樂しく暮して居ります折々は繪筆も取つて見ますが怠り勝ちなので只退歩するばかりせめて此道の趣味だけは捨てない様にと心掛けて居ります又つとめて讀書も致しますこんな有様で變つたお話も御座いません美術學校在學當時には先生から『美術家は藝術に生き藝術にたふれなければならぬ。……藝術家は藝術家らしい生活をしなければならぬ……』等と度々伺つてをりましたが美術に志ても少しの藝術家らしい生活もし得ないのでまだ平凡な生活にさへ苦んでをります、ろれて早く樂み喜ぶ時を迎へる様にそれは藝術家らしい生活の出來る様に只今は苦みと戰つている様な次第で御座います、近い内には長崎に歸鄉が出來ますので其嬉しさに修養の足りない私には騒ぐ心を落ちつく力もなく記しました文も前後してつまらぬ事のみ書連ねましたが余りの御無沙汰故御詫の一端にもして頂き度く存じます

京都より　河本キヌエ

洛東の連山はいつしか新綠したゝる初夏の裝ひとうち變り候折柄師の君様を始め同窓の皆々様には御障りなく入らせられ候や御伺ひ申上候次に私事も御蔭様にて日々恙なく暮し居り候間他事乍ら御安心下され度候

御敎しへうけし師の君様陸みかはせし友どちと名殘り惜しき袂を分かちてより夢のうちに一年は過ぎ去り候其後御無沙汰許り致し何とも申し上様これなく御許し下され度候扨御なつかしき母校に於ては過ぎにし年には第一号の校友會雜誌發刊遊ばされうれしく雜誌を拜見致し候かへり見れば進み行く日々と共に學問も進みゆきて學びやを去りし私には今便りにするは眞だまのみに候へば朝な夕なに繰り返しては拜見致し居り候處引續き益々御發展の趣き嬉しく御目出度う存じ候

私も昨年の四日二日上洛致し候てより二三日を見物に暮し五日より當家に寄宿し裁縫其他の遊藝等の敎しへを受けつゝ日を送り居り候所の變り候ひし爲言葉の發音節などの異なりて土地の方の笑種と成りしことも澤山に御座候近頃は大分分る様に相成候當家は飯田呉服店の仕立を致し居り候大方は子達の御召し物に候へば美くしき品のみに候らへば目の御正月

だなど〻申し候ひては嬉び居候折々先生や御師匠様の御供を致し名所旧跡等を見物致し候四月の中頃にお花の家元なる大覺寺に參り候ひし時に旧嵯峨御所を拝観致し候其時には敎室にて先生より南北朝時代の御話しを伺ふ心地していろ〳〵のこと思ひ起されて追懐の情胸にせまり候先日圓山を通りぬけ知恩院様へ參詣致し候名高き知恩院の傘を見むいて邊りを見渡し候ひしも見あたり候はず遂に田舍の團隊さんの後より行き候ふて漸くわかり候歸宅後其事を話し大笑を致し候日々の仕事と申し候ふは終日針のお尻を押しながら呑氣な話しを致しては笑のうちに日を送る位のことに候同じことのみ繰返し居り候拙き言葉をつらね候て誠にお恥かしきことに存じ候
末筆ながら母校の繁榮と校友會諸姉の御健康を祈り上げ候

三次町より　金谷田鶴

久しく御無沙汰いたし誠に失禮致し候
私事昨日廣島よりかへり候處なつかしき同窓會よりの御玉章遲かりきと云はぬ斗りの風情にて机上に待ち侍り候ひき私の近狀とか文中に仄めき居り候へども私事も社會の荒波に船出せんと準備のため叔父の内に泊り居り候て別に變りたる暮しも致さず候へば義務として旅行日記を笑ひ草までにものし候

廣島旅行の記

頃しも彌生の半にて櫻花爛漫として野山に乱れ咲き世はおのづと春めきていづこの里よりか佐保姫の緒琴のつまねの誘ふが如く覺ゆるころほひ藝備鉄道も開通し併せて廣島市共進會開催ときく此機はずさじと故郷の旅を思ひ立つ志和地停車に到れば瀧車見物の人黒垣をきづき赤毛氈の老爺古寺の老僧出征軍人紳士商人學生とり〳〵に待合所を埋むそが中には生死の境の如く泣き別る〻者喜ばしたる女兒新奇を好む男兒無事を祭ずる老人の様面白き活動寫眞のそれの如く感じたり定刻きたれば黒烟焚して汽笛一聲レールを辷る車窓に映ずる四方の景色は綠色濃くはた薄く黄なる白き赤きこきまぜて鉄織り出勢り車上の人となりたる心地は過ぐる母校在學時代の恰も二年生の春三宅先生山田先生に引率され廣島に遊べる折の思はれて所かわらねど師の君なき、友のなき今日の旅しばし淋しの想に捕はる再び無邪氣に集ひし時のめぐりかへしてよと心の糸のもつる〻ものからガヲスにかわる景色も何となく悲しみの色溢れて無明の暗に入る心地ぞする今に流る〻月日に關守なく滔々汨々として四十の友の東に西に袂を別ちしは此間の如く思はるれど早一星霜學び舍を去る時は悲しみの内に希望の光のほの見えて樂しかりしものをと過ぎこし方を夢みつ〻いつしか『東廣島』『東廣島』と

よぶ驛夫の聲に足もしどろにプラットホームに下りぬ迎ふるお叔母の喜び一重ならず三ッ重ねられし齡なるにいとわかやかにぞおはします電車の通ひいと繁く人の行きかひの少きこと又いみじ便利なる都人の幸を思ひやるだに急し市中を歩む女學生を見ては過去を思ひしとやかなる婦人を見ては將來を想ふ出合ふ人々のふるまひを見てはげに田舍に住める吾れ人の手本とも見せまほしかりき在廣中は夢中に過してなりしも比治山に登りしこと宇品に行きし事活動に入りしこと等胸の内に殘り盡きぬ名殘を振りすてゝ昨日歸宅せりあゝ面白きは師と友との旅よ、私事旅行中深く感じ候は時間の經濟せざるべからざる事愽く讀書する事に御座候

云ふまでもなく諸先生より御教訓給はりたる事には候へ共胸の底にをさめ置き候下らぬ事のみ申し候へ共早硯の花も匂ひ出まで筆の香りの失せ候まゝこれにて筆を止め申し候

最後に諸先生及び諸姉の御幸福を祈り居り候。

あら〳〵かしこ

尾道市より　小松ふさ

早いもので皆樣方とお別れ申して早や三月近くになりました、在學中はそんなに思つて居りませんでしたのにさていよ〳〵卒業して見ますと樂しかつた學生時代がなつかしく毎日たのしそうに通つていらつしやる母校の皆樣方を見ますとどんなにうらやましいでしよう。二階の窓から母校の方を望んでは白いパラソルや海老茶袴のチラ〳〵するのを見てはたのしかつたあの當時をしのんで居ります。やはらかい新綠に包まれたる校庭の一すみで親しい友と語る折柄講堂の方からひゞいて來るピアノの音に幾度若き血潮は舞つた事でしよう。ああそれもみんなはかない夢と消へてしまつたんだと自覺する此頃はやるせないまでにあの頃がなつかしうございます初夏の庭に色はへた白つゝじもやう〳〵散り行く頃は終日窓側で針持つ業に親しんで居ります。毎日朝から灯ともし頃までし用仕事のみくり返し何の色彩もない變化もない單純なる日を送るのが何だかあじきなく小さい心のひびきをも親しい友に語ろう期もなくて、學校を出たならばあゝもしよう。こうもしやうと、心に豫想して居た事が半分も實行されない樣な氣がしてズン〳〵過ぎ行く月日を夢の樣に送つて居ります。終になりましたが諸先生はじめ皆樣方の御健康をお祈り申します、

田園より　粟村トヅ

淺い綠の梢に燕の飛び交ふのか見られるやうになりました、私は恁うした春から夏に移る時の氣持を愛

します。あつさりとまた。青葉のすがすがしい氣分は濃烈な春の次には最もうれしいのみか輕い單衣に薄つぺらな帶をくつついた樣にしめた時の輕快さといつたらありません。尙こんな場合私は什麼勞作も厭はぬほど元氣旺盛です。この頃の恰度此麼緊張した氣持になつてせつせと家事に務めながら、修養一大事とはげんでおります。

神石より　松浦小政

文して聞え上げまゐらせ候
とかく多忙を本意と致し失禮のみ重ね何とも申しわけも御座なく候私事昨年八月高田郡小田尋常高等小學校を退き候てしばらく自宅にて家事にいうしみ居り候が此の四月より又當校につとめる事と相成り足はぬ我身を教育事業の一部に加へさせて頂き日毎兒童を相手にあそびくらし居り候
會誌御發行の趣きは早早承り候も常に多忙に多忙をかさねる身の事とて誠におそく相成りましてくはしき事も記しかね候
何卒平に御許し下され度く候

今津より　村上ミテ

いつしか春も暮るる頃とは相成りました師の君始め同窓の皆樣には如何御凌ぎ遊ばされますか御伺ひ申上ますさて此の度幹事の方より目下の樣子を知す樣にとの事で御座いますが御なつかしい皆々樣と御わかれいたしましてより何分永だ日も淺く經驗とても乏しくただ無事とのみ申上るより外御話も御座いません此の節はお琴や生花の師匠が時々來て呉れますのでお稽古をいたして居ります、其の時々にはお裁縫をしたり御台所のお手傳をいたして居ります、外出とては時折福山の耳鼻にかようばかりですかくて平凡に其の日其の日を送つているやうな有樣で誠にお恥しく存じます何卒時節柄師の君始め同窓の方々御自愛遊ばされたく祈り上ます先は近況御報知まで

かしこ

机上より　小西ハル

皆樣
夏がまゐりました樂しい。夏が。先生や在學の皆樣方は新しい光、明い色に包まれて愉快にお勵みの事でございませう。御羨ましう存じます。袴を捨てて後の私は夏の長い一日中お針やら、お手傳ひやらすいぶん忙がしいのでございます。私の生活——こうした單調な、平凡な一日でございますけれども其のつまらない中にも温かい、美しい云ひ知れぬ輝がありますもの私はそれを味はずにゐられません。だけれども、あの綠のポプラの茂みとともに樂しか

つた學校生活は私の胸からはなす事は出來ません。どんな苦しい、悲しいことがあつたにしても!!!妹の登校姿を見、靴音をきいてもたまらなくゆきたくなります。いつも妹から快活な母校の生活ぶりを聞きます。先達も荷物から『母校のポプラよ』つて出してくれた一葉どんなにうれしかつたでせう。ひつきりなしに話を持ち出すとお終りには『今に眞ねはが出るのに』など云つて本なんかよみ出しますほんとに御本を頂かれるのもすぐです。お姉様たちの御消息も伺はれますけれども、それは學生としてでなく夏のお休みも去年のやうには過せません。先生方、お姉様たち、母校の皆様、では御機嫌よく樂しい夏をお過しなさいませ。

神戸より　黒木のぶゑ

私は此頃でもやつぱり朝六時に起床して掃除をすまして八時半頃出勤します。山手から傾斜した道を鐵道側へ降りてそれからアスファルトで固めた元町を東へ一丁目まで行くと電車道を境界線として居留地になります。西洋館の立ち並んだ居留地の街路の両側には濃綠の青柳やポプラの木立ちがあつて馬車や自動車や異國人等の濶歩して居る處は丁度外國の市街の樣な感があります。私達の樣に女でありながら毎日恁麼處へ來なければならないのは不幸福だと思ふと情けなくなります、けれども、なあに自分は今洋行してロンドンかパリーの市街を歩いて居るのだそうすれば級中では一番自分がコユースだろう等とまけ惜しみを言つてはスタ〳〵と暑くても寒くても通勤して居ます家から會社までは十分程かゝります。給仕が奇麗に掃除してくれた席について本箱をあけたり出勤簿へ印をついたりして暫らく新聞を讀みます就職時間は九時ですけれども皆揃ふのは九時半頃です朝早い時には給仕と遊園地へ行つて海岸を散歩する事もあります帆柱の林立した遠くの海は水も濁つてあまり奇麗ではありませんが沖の方は初夏の日光を受けて石英の樣にギラ〳〵と光つて紀州の岬や淡路島の山影は籃青の空と水との間に雲か烟のやうに浮いて見えます海から吹いて來る柔らかい風にセルの袂をなぶらせて清く澄んだ空氣を胸一杯に吸つて會社へ歸ります恁麼日にはスックリとした氣分になつて仕事もよく捗ります私の仕事は外國の再保險會社へ送るスリップを飜譯してタイプを打つたり保險金や保險料の計算をしたり記帳したりするのですこんなに飜譯と申しますと大仰ですけれども契約者や所有者や地名等はローマ字で年月日や金額は數字ですから唯保險について居る建物の構造やら品名を飜譯すればいゝのです退社時刻は午後四時ですが此頃はすこし忙がしいので五時にわたることもありますし

夜業することもあります歸宅しましてからは夕飯後九時まで裁縫して其の後は書物をしたり讀書したりして十一時頃就眠するのが常です一昨年來逆境に落いつて心身に非常な打撃を受けましてからは他の人々の様にぞろ〳〵と活動よ芝居よと出歩く元氣なく日曜日等も終日家に引きこもりて讀書でもするのがせめてもの心遣りなのです。

糸崎より　兼森たげこ

師とうやまひ母と慕ひまつりし事こゝに四年同じ學び家の朝夕に暖きみ手に教へ導れし事もわれ今は儚なき夢と暮れ果てゝ逢なは別の初めとの言の葉の今更ながらひとしほこの身に感せられ申候日頃むつび暮せし同窓の皆々様にもさぞかし母校の榮えさせらるゝ事と共にいよ〳〵御健に文の林深う御いそしみの御事と蔭ながらおよろこび申上げ候いつも何かと勝手ばかり致し誠に御禮の申上様も無之候常々皆様の事や母校に就て聞きたく且つなつかしく存じ候へ共實際は左様に度々消息を得る譯計りにも參り申さず唯一の期待は只會誌に有る事とのみ存じながら待ち居候

御蔭様にて私ことも其後はいとすこやかに家事につとめかたわら茶の湯生花の業にいそしみ居候間乍他事御休神給わりたく存じ候これと申すも常々學校にて身を心と愚愛の深き君にきたへられたる結果とよろこび居候長閑な春の日も物淋しく暮れ行く夕べ一人語ふ友もなく田舍の濱邊に立ちて寂しき落日を眺めつゝ辿る追懐に更けり申候書きたき事は限りなく御座候へ共とこしえに御見すてなく折にふれてはこの氣を思ひ出し給ひて御指導給りたく一重に願あげ候末筆にて恐れ入り申候へ共母校の御繁榮を祝し奉ると共に諸先生をはじめ同窓の皆々様、この上ながらも御自愛遊ばされ度く祈りあげ候

誠に取急ぎ乱文乱筆は幾重にも御ゆるし下され度く願上候　かしこ

尾道にて　阿蘇かをる

濃艶なる櫻花に憧れし春もいつしか夢とすぎ去りて世は若葉の匂床しき初夏を迎へ申候折柄母校の師君様始め同窓の皆々様にはいよ〳〵御けしきうるはしく渡らせられ候御事と此上なく目出度賀上候次に私事はお蔭様にて日々不相變無事に過し居候まゝ何とぞ御安心下され度候げに待たぬ月日はいと早きものに候て離れがたき母校を離れ候てより早二星霜の春秋を送り申候一別以來は空に漂ふ浮雲のごとく西に東に別れ〳〵て中には御目にすらかゝる事も叶はざる様な御方も有之候へ共心に忘るゝひまとてはなく今頃は如何にと過させ給ふらむと春の花のながめに

秋のみ空に澄うてる月の影にもはた雨につけ風につけ先づ皆様の偲はれぬ日とては御座なく候へども日々何かと雑事に心とりまぎれ候ため心ならずも絶えて御無沙汰に打すぎ何とも御わびの申様も御座なく誠に相すみ申さず失禮のだん幾重にも御わび申上候さて母校もとしふる毎に榮え榮えて益々御隆盛におもむき極りなき御よろこびと存じ候

過ぎし送別會の其砌幾久しくとも契りてし言の葉も今は忘れしには御座なく候へどもとかく出身後は思ふに任せず御様子わかぬ迄御無沙汰申上候處昨夏美しき校友會雑誌御發行相成り皆様の現今の御くらしぶり等も具に伺ふ事を得誠に幸福と存じ居候これも偏に師君様其他諸姉様方の一方ならざる御心づくしの結果と深く御禮申上候、毎々の話に候へども卒業後はとかく學校時代程なつかしき物は無之ある時は暖き御教の下に文開きみし昔を思浮べ言しれぬ昔戀しさの感に打たれ三々五々心あふ度に打つれそぞろ歩きの打とけたる談話はては庭の木かげに學びし歌口荒みつゝ遊び過ごせし事ども今尚心中を去りやらずそれよりえと思ひ出し候ては皆様の又なつかしく紀念のうつしえどもとり出で候ては心ゆく計りながめ入る事も度々に候

これとて申上ぐべき事も御座なく候まゝ筆に任せていつも變らぬ事のみに候へども種々取まぜてくだらぬ事かきつらね清き紙上を汚し申し候末筆ながら師君様同窓の皆々様追々暑さに向ひ候もゝ一入御身御大切に遊され度祈上候終りにのぞみ母校の御繁榮を壽きまつると共に併せて校友會の發展を祈上候

かしこ

逝く春の一日都より

兒玉ヨシ

なつかしい母校や諸先生と別れ、直ぐ又故里の皆様と重い袂を分ちましてから早二月余り、ほんとに夢の様に過ぎてしまひました。やつと卒業したと思つてゐた私は忘れもしない四月の十五日東京の地を踏んでから七日目に又一年生となつて神田一ッ橋の女子職業學校に入學致しました。丁度四月頃の事とて道にうふたお堀には櫻の花が薄紅の影を寫して咲いてゐました。入學以來四十日毎朝五時半起床六時半頃に家を出て三十町余りの道を通學致して居ります余り好きでもない電車に四十分ばかりもゆられて一朝の電車は隨分込んで居ります。初めの中は『須田町、、、須田町でございますお下りの方はありませんか』といふ車掌の聲をきくとあゝモウ四ッ目の停留所で下りるんだとこんな事ばかり心配して田舎者はオチオチと腰もかけて居られませんでしたが此頃では大分なれてまいりまして安心して乘つて行ける

やうになりました。學校は隨分大きい建物ではございますが、母校のやうに廣い運動場もなければ四季を飾る美しい草木もございません、私立家庭科の一年生は階下の一室、高等商業、私立の音樂學校、小學などの見える所で毎日七時間づゝ勉強致して居ります。學課は主に裁縫、並に家庭教育、修身、家事割烹等でございますそして隨意科として刺繍などを致して居ります。女學校と違つて學課の方はそんなに心配ではありませんが裁縫の方は裁目が多いので中々急しうございます。生徒が皆大きう御座いますから皆んな人におくれまい人より早く進まふと一生懸命、教室内は活氣が滿ちて時間中お話などする人もなく只カチカチと鋏や物さしの音がするばかりで御座います。時には一日中裁縫ばかりの日がございます、そんな時に音樂學校から漏れるピアノやオルガン等の澄んだ音が窓越しに聞えてまゐりますと皆んな言ひ合した樣に一寸仕事の手をやめて聞きとれます。修身教育等は私等の主任の鳩山春子先生から面白く習つてゐます。歸校の時など千五百人からの生徒が皆一度に方々の教室からはきだされるやうに出ますから昇降口の所は大混雜、そこをやつと切りぬければ又門の所でお連れを待つてゐる人が山の樣に立ちどまつておられます。門の入口には門番がゐて朝晩一人〳〵の胸の徽章の有無を見てゐます。この學校に來て何より嬉しかつた事は同縣の方の多い事でした。私等の組ばかりでも五六人いらつしやいます。余りのお懷しさにまわらぬ筆で長々とかきました。末ながら校友會、母校の發展と諸先生、皆樣の御健康を祈ります。

尾道にて

村上下枝

日一日と濃くなつてゆく若葉の影心地よい晨の風にさら〳〵と音たてる櫓のさゝやき、昨日今日大路に聞える金魚賣りのこゑ、野にも山にも活氣にみちて夏はまゐりました私達が垣根の隅に漸やく芽ざした名もない小さい双葉にも名殘を惜しみつゝ學びやを出ましてから夢の間に二ヶ月は過ぎてしまひました思えば早い月日よと今更のやうに驚くばかりで御座います今年の春は父がはからぬ大患をいたしました上に私も風邪や何かで兎角勝れませんでしたため花の千光寺もとう〳〵見すに過してしまひました、二ヶ月は充分かゝらふと思ひました父の病もお蔭樣ですつと早くなほりましたし私もこの節ではまた元の通り元氣になりましたので家事の手傳ひのかたはらお裁縫をしたりいろ〳〵の稽古をしてたのしく月々の暦を一枚〳〵うすくして居ります夜は皆で代り〳〵に人道講話とか教訓とかの書物を讀む事になつて居りますが大へんにたの

しみで御座います
これによつて少しでも精神の修養をつみたいと存じて居りますけれどもそれとても容易では御座いませんあの登山の秘訣とかいふ『休まずに急がずに』と云ふ言葉は私共日々の修養の上にも丁度好い言葉だろうと思ひます
月の清い晩などは同胞と打集ひまして何事も忘れて唱歌を口ずさんで時を過す事も御座います日曜日などには朝早く妹たちと吉和の花園に出かけてまいります手づから培ふ草花が日毎に大きくなつてゆくのを見ますと嬉れしさに心も躍ります紫に紅に黄に白に一面に咲きみだれた様あゝこれを畵がく筆があつたら詩にうたう力があつたらと今更口惜しい様で御座います
何かに付けだいぶん家庭の人といふ生活にも馴れましたけれども朝夕學びやに通ひ給ふ人々を見ますとやはりたまらない様になりますせめては日々妹が物語る母校のおとづれを何よりの心やりとして居ります
仰せらるゝまゝにくだらない事を長々とかきつらねましたこれから又梅雨の時も參ります皆様くれ〳〵も御自愛遊ばしませ。

大阪より　橋本キヾ

花に霞に夢見る様な春の大空も雨の多くして今年の春は去つて仕舞ひました皆様にもお變りなさいましたでせう昨年より御誌を御發行下さいましたお蔭で皆様の御様子も一層よく伺はれる様になりまして誠に嬉しう存じます延引ながら御禮申上げます
こちらへ來りました當分は夕べ嵐嶺の櫻をたづねあしたに琵琶の湖上に一舟を浮べ修學旅行に樂しく語つた事などを思ひ出し昔を戀しがるなど只わけもなく其日〳〵を過して參りましたが此頃では最早小供も居りますから見物どころでは御座いません日々用事に追はれて今日は洗濯今日は掃除と子供の守をしながら下女を相手に縫物や仕立物を急いで居ります日曜日も以前の様には出來ませんから時々近くの中ノ島公園にゆき半日を樂しく遊んでまいります他にこれと申す事も御座いません只子供の日に〳〵智惠づき無事に成長してくれる事を樂しんで居ります今度は同窓會をお開きに成る時一度歸國致して先生方にも皆様にもお目にかゝりたいと存じて居ります
末筆ながら以後益々御發展の程祈り上げます

因島より　小川のぶ

新緑の頃と相成候處諸先生をはじめ參らせ皆様へは日頃申上げやうもなき御無沙汰いたしまことにおは

づかしき次第に御座候諸先生皆様は如何に遊ばすならんと思ひ居候折柄まちにまちたる第二回校友會誌御發刊の御こときれにて皆様の御様子承はることを得候とうれしう〳〵ぞんじ居候私事母昨年以來病氣の爲に常に家にのみ居候て看病いたし家事の手助炊事のかたはらお裁縫の稽古を致し居候田舍の事とてたゞ〳〵自然の風景を友と稽古事なども皆宅にて致居候間自づと世の進歩に後れ行くやうな心地致されつとめて讀書致す樣心掛居候へども種々と家事におはれとかく意にまかせ申さす候在學時代只徒らに遊ぶことのみ考へ候ことの返す〳〵も口惜しく居存候甲斐なきことをくり返すも度々に御座候へども只今となりて如何ともなしがたく今はたゞ一心に母の看病を致し居候終りにのぞみ母校の隆盛と諸先生幷に皆様の御健康を祈り奉り候日頃の御無音は何卒〳〵御許し下され度御願申上候

尾道市にて

佐々木豐野
林　良子
永井恒子

春のウラーラーの……
高いソプラと低いベースとがよく調和して餘韻が森のあなたにかすけく〳〵たゞようた

この春學校を出た三人をはからずも二ヶ月目にあつた、そこは小さいポッポ船が絶えず休にも似合はぬ音を立てゝ通るのも船頭の呑氣な舟歌に和して白く銀の樣に光るかひもみんな手にとるやうに見えて心地のいゝ小高い所であつた、すぐ下の庭は雜木のまだ露をふくんですが〳〵しい初夏の日光が夢の樣に浮きたつて居た、おゝ丁度去年の今頃だつたあのなつかしい母校の若葉の下で彼等四人がコーラスしたりの樂しかつた時は……

そして再び若葉のシーズンは來た然し彼等はもう女學校ではなかつたそして一年後の今日はもう彼等は三人しか集まる事が出來なかつた急に三人は何かもの足りない樣な眼を見合せて互に沈默を守つた、そして來年の今頃の事などを考へて居た『金魚ェ……』

下の庭の方から初夏の靜けさを破つてすき通るやうな美しい呼び聲が流れて來た、三人はおばしまによつて再び歌ひつゞけた、そうしてたのしかつた學生時代の追想にあえてふけらうとするかの樣に見えた御茶がはこばれた、玉露の香心地よう部屋にみなぎつた、そしてそれをすゝりながらたのしさうに語り出した彼等は學生時代とちつとも變りはなかつたりの言葉もみなりもそしてその親しみは勿論のこと……折々ホゝと樂しさうに笑ひ聲の若葉の外にもれる事

もあつた、又何かコーラスをはじめてゐた、快活な靴のひゞき!!すぐ向の道に白いパラソルが二つ三つ三人の目は異様に光つたりしてぢつとその後姿を見送る眼には次第に又落膽の色が浮んだ、歌はそれぎりにやんだそして三人は思ひ出した様に學校へ行きたいと言ふた

あゝ彼等の若葉の乙女の日はたのしかつた

尾道市にて

生酒よし子

あゝ育兒日誌!!先年橋本信子様の日記の一節を見て子供が居りますと樂しいものと思ふていましたのでいづれ私も母になる身だと思ふて大層興味を持つて拜讀致しました又他の皆様よりお産なさつた事を聞くと私もお産が待ち遠しくてならなかつたのがやつと二月九日の朝初産をして不思議な程やすく女の子を産みましたまへから私の考へますのにクラスの方々がたいていには女の子ですから私も女の子だと信じて眞赤な模様のものをえらんで縫ふておきました處が生れた赤坊は思通りの女の子でしやう嬉しくて〳〵お話にならない位です。毎日早く大きくなつてくれゝば早く笑ふ様になればと日の立たない赤坊を見ては一人將來の事のみ考へて居りました

私は赤坊が生れても恐ろしい様な氣がして何一つ世話をしてやる事が出來ませんたゞ時間毎に御乳を與へるのが毎日の仕事だつたのです名は市子と付きました此市子は私にとつては何よりも大切な可愛くてならないものであつたので御座います平常から大變寢坊な者が夜中でもいつとはなし子供の泣くまへに眼がさめて居りましたこんな風でもう赤坊の事より他に思ふ事はなく唯一日も早く大きくなるようにと祈つていました効もなく無情の風に誘はれて三月八日午後市子は生れて一ヶ月立つか立たないかに高度の熱にて歸らぬ旅へと赴きましたあゝ若き母のなげき近親よりなぐさめる言の葉知人の悔のべる等聞けばきく程かなしさを增す斗り冷たくなつて美しい花模様のおふとんの中へ寢てゐても若しや暖かい呼をふき返しはすまいかまたとぢたる眼を開く事はないだらうかとうたがふては小さきなきがらにさわつてみました子供は罪がないとか斯うはかなくなつてもやすんでる時とちつとも變らぬ顏よけいに思はれますでもとうしてこれがもとへ返りませうか後世日余りはお乳がはるのに困りましたりれからと云ふものは他様の小さい子供を見ると涙が先にたちますして赤い友仙の産着をきせて宮詣りなどは若しや市子ではないかと云ふような考へが起きて思はず走り出ていつ迄も後姿を見送つてます我ながらなせこうも氣がよわくなつて來るのかと不思議に思ます、かれこれ二ヶ月余りになりますがとかく雨につけ風につけ

浮ばない事はありません箪笥に收めてある友仙の着物等一人手を通して見ては涙にくれて居りますそれでございますから此節は何も心にとめてする事はなくいたづらに日を送つて居ります、去年の眞玉が出來ました時こんな事思ふてました明年の誌上には必ず皆樣に私の經驗した事をお話して上げようと存じてましたのに返つてつまらないぐちのみ申ました何卒諸先生樣又同窓の方々樣平素はお詫びの申上ようもなき御無沙汰をいたし居りますが平に御容赦下さい氣候も追々と暑さに向ひますから御身御大切に遊ばしますよう祈つて居ります。

府中より　松尾初代

花に結びし胡蝶のゆめ未ださめ申さず候に木々は一入色をましせみのこゑさへ加はり申候をりから同窓の皆々樣には何の御變りもなく種々なる方面に御發展遊され候御事と喜び申上候次に私事もおかげ樣にて相變りなく草深き田舍の學校に通ひ居り候まゝ憚りながら御心安う思召下され度候

さて承はり候へば校友會雜誌第二回目のもの遠からずして出來申候由誠にうれしく存じ一日も早く皆々樣の御樣子うけたまはり度千秋の思ひして待ち居り申候

ほんとに近時の消息のみかひつまんで申上候かしこ

萩生より　伊藤春江

謹啓先日は御端書給はり有難く存じ上げ參らせ候御懷しき師の君樣始め同窓の諸姉や校友會の方々には御機嫌よくおらせられ候や降て私事も恙なく家事の練習をし乍ら單調なる田舍生活を營み居り候まゝ他事乍ら御休心下され度候別に珍らしき事變つた事もこれ無く四月始めより十日餘りの間讃岐の方を旅行し四月下旬には一里許りなる佛國山瑞應寺に授戒會之有り入會致し散會の日より四五日經てより該寺に於て神相學の講習一週間ありて是れを受け申し候琴も三月半より半ヶ月斗り稽古し候のみにて施行了へて歸宅後は師匠が遠方に旅行したる爲め其の後は中止に御座候

先づは右近況御報知迄斯の如くに御座候

あら〳〵かしこ

滿洲にて　秋葉かつ子

お寒さの嚴しい滿洲もやう〳〵春深くなりポプラの若葉アカシヤの新芽が初夏の日射しにふるへてりよ風のまにまにいと床しい薰を漂はせる樣になりました內地は早余程お暑くなりました事と遥に御察し致して居ります扨諸先生樣を初め皆々樣には御機嫌よくいらつしやいますか私は誠に申しわけも無い御無沙汰致て居ります第一回御發刊の時も失禮申上まし

たし此度はしつかり面白い御話でもと存じますれどもやはり之とて申上程の事も御座いません只つまらない近況の事を少しばかり御知らせいたします扨私は皆様と御名殘惜しい御別れいたしましてより田舎に暫く暮しそれよりすぐ七月に朝鮮へ一奮發いたしました京城は内地とちつとも變りません家屋も只温突が御座いますだけにて日本造りばかりで御座いますす丁度廣島を少し大きく致しました位の所大變暮しよい所で朝鮮人は實に優長極まる人のいゝ人間所謂お人良しなので御座います此土地に丁度一年半余り暮しまして先月四月三日より當家のものとなりましたなほ〳〵遠い滿洲の大連迄來りました益々皆様に御目にかゝるのがむづかしくなつて何んとなく心細い様な感じが致します大連はかねて齋藤先生からよく伺ひました通り町は扇形をして居りまして規律正しくさすがは露西亞人の經營いたしましただけ誠に立派な町でございます家は寒さのために御座いましよう皆石や煉瓦造り計りで如何にも外國へまいりましたやうで私の如き田舎者は只キヨロ〳〵計りいたし他から見ましたら隨分おかしい挌好だつたろうと存じます何卒お想像下さいませ只今まで少しでも朝鮮の土地をふみましたおぼへが御座いますので異國の念味ふもさほど心苦しとも感じませんしかし何と申しましても日本から三百五十余里も離れて居りますので内地のことを一寸知りますにもなか〳〵の日數を費します郵便など三四日位かゝりますのでほんとうにつまりません氣候は御承知の通り冬分は御話にもならないそうで御座います丁度一ヶ月計り違いますので花笑ひ鳥歌ふ彌生の頃も當地はまだ青葉少ない山を眺むる計りであちらこちらの花だより只々御羨らやましゆう存じます物價はすべて高い方で御座いますけれども魚は馬鹿にお安い方で何より結構と存じて居ります東京にも御座いませんほどの大きな〳〵市場が御座いますので時々出かけて居ります支那人の者のうります物は大變上手に買ひませんと大變なかけねをいたします私等は馴れないもので御座いますから失敗計りいたして居ります先達の日支問題の時隨分騒動いたしました地方あたりの居留民は皆我がちにと避難にいたしまして私の家には四人程同宿いたす様の見積りでございましたがよい都合で早く解決がつきましてまづ〳〵安心いたしました當地はもう大丈夫と承知いたして居りましたもののやはり何んとなくよい氣持はいたしませんでむやみに支那人がおろしうてなりませんでした

大連の近邊には日露戰爭の古戰場がたくさん御座います旅順へは一度まいりました途中のけしき内地とは一種異つて支那造りの家があちらこちらの山蔭から一つ二つ見へましたのは又なか〳〵すてがたいも

ので御座います此あたりもすぎし昔は血の海となり又血の河となつた實に慘膽極まる所であつたであろうと思ひまして何んとも云われぬ感が致しましたあの有名な二百三高地へは得まいりません又これからおい〳〵見物いたすつもりで御座いますから又次号にてめづらしい事が御座いました時お話し致しますくだらないことばかり書きつらねましてどうも失禮いたしました。末筆ながら母校の御繁榮と諸先生の御幸福又皆樣の御健康とを祝つて居ります

驛前より

齋美谷多賀子

岸うつ波もいと靜かなる、こゝ故里の我家に歸つて來てからもう、かれこれ一ヶ月程に成ります。煙たい無意味な、騷音に閉ざされた、煩雜な都會を辭してこうした自分の家に歸つて、毎日父母の愛を、ほしいまゝにしてゐることが、私にはどんなにか懷しく・嬉しい事でせう。驛の前の海岸通を半町ばかり歩いて、一寸右をむくと、其處に少さい洋酒果物店があります、ろこが私共の家です。家があれば家族がなくてはなりません。家族といつて母に兄、それから私に下女が一人と三人の寶子と合計七人です。長閑なろして何處にか淋しい、はかない哀れを含む靜かな行く春は此の家の庭にも、訪れて來ます。

朝四時に起るとすぐ井戸端に出ます、冷たい水道の無趣味を知つた私にはこの玉の樣な美くしい、暖みのある井戸の水が大變なつかしいのです。朝四時といへばまだ四方は薄暗く森として淋しゆう御座います。私は此薄闇の中で洗面して、我家に歸つて驛に行く支度をします。支度といつて別にこれといふてはありませんけれど、衣服の整理や帳簿の調べで、かなり時間を取ります。停車場に來てから賣店の戸を開いて、いろ〳〵と飾り附けをするまでには、どうしても三十分間はかゝります、そうして新聞を大阪朝日と毎日とを讀むのが一時間程、ろれで丁度六時頃になります。七時には交代が來ます。私は後の一時間を大底編物に費します。向ふの旅館の屋根の上の有明月がだん〳〵薄らいて行く頃四時の下の關行き汽車は來るのです。朝の四時五時の冷たい汽車の窓から、寢らぬ客が顏だけ出して不思議げに四方を見てゐる樣は朝ならでは見られぬ光景であります ろうして此停車場から多くの客のはみ出される時、各々の旅館の門口は一人二人の客引が、我一ちにと旅客を引き初めます。

ひとしきり、客の乘降で賑はつた構内も、滊車が出て客が出た後は、誠にひつそりと致します、そうして明るい電燈が、だん〳〵と消え行き、目映い日光が店頭を差し初むる頃私の交代は來ます。毎朝の事ながら、私はこの交代がくるのが、待ち遠ふしくて

なりません交代がくればもうこれで私の一日中の第一の義務がすむのです。歸つて來ればもう茶の間には皆のお膳が出てゐます。ですから私は歸るとすぐ茶の間に行きます、母も大底此時に來ます、私の內はすべてが時間仕事ですから、時間の合間に何事もしてしまはなければなりません、ですから一寸でも其時間に他の仕事でもしてゐようものなら、うれこそ食事が一時間もうの上もおくれます。食事が終れば母は勝に行き、私は稽古をしたり裁縫をしたり、いろ〳〵と家事向の事を致します。兄はいつも私が褌がけでどう〳〵としてゐるのを見て『風ばかりいかにも忙しさうにしてゐても何んにも出來てはしないではないか』とか『おや〳〵お嬢さまの御料理は食はれやしない』とかいろんな事をいつて、私を赤面させます、うんな時にはいつでも、學校時代の呑氣な割烹が思ひ出されます、うして樂しく教はつた割烹室がしきりに懷しくも、又不熱心であつた自分が淺しくもなります。あゝ割烹室、教室、テニスコート、これ等一つとして、私の血を沸き立てぬものはありません。まして五月雨鬱陶しい頃に教室にあつて歷史の講義など聞いてゐると、雨を通してしめやかなピアノの音と清い肉聲のゆたかな聲が聞こえて來ます、何んと詩的ではありませんか。こういう詩的な事が、どうしてうの私の境涯に湧いて來ませうか。次はテニスコートと、雨の降らぬ限りは、私は大底テニスコートに立つてゐました、さうかといつて決して上手ではありませんでした。下手の横好とでもいふのでしたらふ、ほんとうにテニスは大好でした。うんなに好きだつたテニスが、どうでせう學校を出てから一度もラケットを握つた事すらありません、時々他の學校の校庭や郊外でこのテニスをしてゐらつしやる皆さんを見ると、自然に涙がにじり出ます。しかし運命の神は最早私にラケットを握らしたり、コートに立たしめないでせう。

好き嫌は誰にもある事です、中でも私の様な不勉強な者は試驗が大嫌いでした。うのくせ試驗後の心持は今に忘れる事が出來ません。愉快な様な不愉快な様な、安心な様な不安心な様な、何ともいひ様のない心持になりますが私の様な者には、自由に筆であらはす事は出來ません、けれど一度此道を踏んだ事のある唯でもは經驗して來た事です、あれや、これやと、樂しい夢跡を探つてゐると、何んだかうの自分が、つまらない様な氣がして來ます、けれどすぐこれはうちこわす事が出來ますそれは、私の心の奥には常にこれでも社會の一員だ、無意味に一日でもすごしてはならぬ、自分の活動期はこれからだ、世に出たからには意義ある生活を成さねばならぬ。みだりに過去に執着して、過去の夢ばかり追ふでな

いと反省します、實にこれからが私共の動く時です家の爲、社會の爲に、ぞしぞし進んで倦むことを知らぬ者に、ならねばならぬと思ひます。

夕方いろ〳〵の仕事が一段落着いてほつとした時私は裏に出て日沒を眺めます

おだやかな波の上を、靜かに行きかう舟を眺めたり悠々と海上に舞ふ鳶の姿を見つめたりします。時には月を待つて友のハモニカに耳をかたむけたりします。月清く澄み渡りて金波銀波の波の中に、墨繪の様に浮んだ、向島や、小歌島に消えては光る二點三點の星を散らし、自らが繪の中にあると知らで、友の調べに魂を月の世界へ飛すなど、あゝ其調べすら今は私には、聞く事が出來なくなりました、なせならば、私の親しい〳〵同窓の友は母校や私を後にして東都の人となつたからです、しかし月だけは春が逝つて又秋が來ても貴賤貧富の分めなく同樣の情を與へてくれます、其月を見て嬉こんでゐる人もあるでせう、歌をよんだり、かなしんだりしてゐる人もありませう、世を怨み、人をうらんでゐる者もありませう、いづれにしても月は只一つです月に對して各々の面の、異なる如く、その情緒や感想も異つてゐます、したがつて其生活も境隅も、私等こそ父母の膝下にあつて今は變化も動搖もなく時と共に平行してゐます、けれど互に校庭で春の曙、夏の夕を無邪氣に睦みあつた乙女子も、一度袂を分かちて、後は出でゝ人の妻となり、母となり、師となり、其生活境隅は瞬く間に一變してゐます、つい先日の事ですが、同級であつた某女に、あひました、處が彼の女は早人の奥樣で且母樣であつたので、其事を聞いた私は一度ならず、二度までも驚きました。

かの女は面白い大變子供〳〵した無邪氣な方であつたゞけに今度久しぶりであつた私はりの、あまりに大人びてゐらつしやる言語動作に面喰つてしまひました。

しかし時が流れ、世が移り變るに從つて、何事も變つて行くのが自然です、常です、何の不思議がありませう、まして女の身上程、變り安い者はないと云ふではありませんか。

同窓の誰彼に多少の變化を、見るのは、あたりまへだと思ひます。

今早五月の末です、もう四五日もすれば白衣の人を見る事が出來ます、妹は衣更をするので早く一日の來るのを待つてゐます

鬱陶しい梅雨も來ます、これからが家庭にある私共の世話しい時です洗濯物は山程出來ました、私は是等を皆片付けて行かねばなりません、是も平常怠た賜でせう。

私の此頃の生活はまあ、こんなものです、藥師堂にいれば友達も多くありますが此方にはとんとありません、正木さん位でせう。

あれ〳〵今大道藝人が東から三味と尺八とを合せて流して來ます、辻うら賣の、蠟聲もまじつてゐます

今汽車が着いたと見えて、旅舘の家々ではしきりに客を引いて居ります、行く春の日はこうして更けて行きます……ではさようなら（五月二十五日午后十二時）

京城にて

池龜琴

ひま行く駒の足はやみ東と西に悲しき袂を分ちまるらせ候てより早三度の夏を迎へ申し候處其後御なつかしき師の君はじめ同窓の皆様には別に御變りもいらせられず御暮し遊ばされ候や御伺ひ申上候此度『眞たま』第二号御發行に付き數ならぬ私にまで近況御たづねにあづかり誠に有難く存じ候

私事先月下旬父母の進めにより雙三郡三次町なる池龜と申す家へ嫁ぎ申候て目下朝鮮京城に住居いたし居り候おかげ様にて何の變りもなく暮し居り候間他事ながら御心安く思召し下され度氣候は内地と大した相違之無く朝晩は涼しくしのぎよく候

何處を見ても朝鮮人多く外に知人とてなく誠に淋しく内地の空のみなつかしく思ひ居候

結婚後日淺く家事經驗談も御座なく候只々皆様の有益なる御話うけたまはり度く今より會誌發行を樂しみ居候何卒よろしく御導き下され度願上候今處これとて取り立てゝ申上ぐべき事も御座なく候間これにて筆とめ申候

暑さの折柄師の君はじめ皆様御身御大切に遊ばされ度終りにのぞみなつかしき母校及び同窓會誌の永久に榮へん事を祈り入り候　かしこ

會計報告

校友會會計報告

大正三年度決算

收入之部

一、前年度越高	四八、一九四
一、會費	三三一、六〇〇
一、利子	一〇、七一二
合計	三九〇、五〇六

支出之部

一、運動部	七四、二六五
一、文藝部	一五二、九二〇
一、雜費	六八、三二〇
合計	二九五、五〇五
差引殘高	九五、〇〇一

大正四年度豫算

收入之部

一、會費	三七二、〇〇〇

支出之部

一、文藝部	一七七、〇〇〇
一、運動部	九五、〇〇〇
一、雜費	九〇、〇〇〇
一、豫備費	一〇、〇〇〇
合計	三七二、〇〇〇

同窓會々計報告

一金百七圓九拾四錢五厘　前年度繰越金
一金八拾五圓貳拾五錢　第一、二、回卒業生會費
一金八拾貳圓　第四回卒業生會費
合計貳百七拾五圓拾九錢五厘（總收入）

一金參拾圓貳拾五錢　眞たま第一号代
一金六圓四拾九錢　郵稅料
一金六圓九拾錢　辨當菜菓料
一金四圓七拾參錢　菜菓料
一金六錢　雜費
合計四拾八圓四拾參錢（總支出）
差引殘金貳百貳拾六圓七拾六錢五厘也

皆樣あまり御忙しくて會費をお忘れ遊ばせし御方もある事と存じ未納者の御氏名此處にかゝげ候まゝ御納め下され度候

第一回卒業生
小倉　ヒデ　大崎　ハナ　河本　キミ　田坂　花江
土屋フジエ　野田　光　吉岡　繁子　中野チトセ
齋藤　幸　增田クマノ

第二回卒業生
井上ミチヨ　宇坪　壽子　大藪　ハナ　栗井トクノ
黒木　信惠　中川　秀子　日高　貞子　大四　タミ
三浦　文代　三上　ツヤ子

大正四年六月

附　錄

同窓會員名簿

アイウエオ順

第一回卒業生

	現住所
天野千代子	尾道市保久保町防地
粟村トク	沼隈郡高須村
生酒コト	尾道市長江町
稻田サト	尾道市長江町
井出上千代花	安藝郡中野村
小川その	尾道市土堂町
小倉ヒデ	德島縣撫養町
大崎ハナ	尾道市十四日町
大田垣マサヨ	尾道市久保町
柏原光代	尾道市久保町本通
河村初音	比婆郡東城町
伊藤菊野	東京牛込區二ノ八
佐々木サカ子	芦品郡宮内
來島カメヨ	尾道市土堂町
桑田エイ	沼隈郡山南村
河本キミ	沼隈郡今津村
小西ウラ	尾道市久保町
野崎幸	京都市上京區御靈前
榊原千代子	尾道市久保町
眞田フミ	御調郡糸崎町
首尾木露子	御調郡糸崎町
秋葉勝子	滿洲大連賀茂川町門區四十号地
田阪花江	尾道市土堂町
田中ヨシ	下關上田中町
伊達房子	東京市女子醫學專門學校
土屋フジエ	御調郡栗原村
富田サカ	尾道市久保町

死亡

旧姓生酒　稻田サト
旧姓宇佐　井出上千代花
旧姓小倉　町旧姓小倉　大崎ハナ
旧姓金丸　伊藤菊野
旧姓末田　桑田エイ
旧姓桑田　河本キミ
旧姓齋藤　野崎幸
榊原千代子
旧姓高木　秋葉勝子
旧姓富田　富田サカ

御調郡市村
賀茂郡竹原明神町
兵庫縣上郡町
廣島市大須町
尾道市米場町
尾道市藥師堂町
大阪市北區上福島
北海道小樽花園町
尾道市十四日町
芦品郡府中町
御調郡向島東村
廣島市三川町
島根縣濱田町
尾道市土堂町
尾道市土堂町外濱
神戸市布引町三丁目
澎湖島媽宮公學校內
大阪市東區和泉町　青木方
第二回卒業生
現住所
尾道市長江町
向島西渡場
御調郡三原西町
愛媛縣居新郡中萩村
愛媛縣三ツ濱堀川
尾道市久保町
上海
尾道市土堂町
神戸市葺合旗塚通六丁目
御調郡因島三庄村
福山町宇下市藥店
御調郡吉和村
御調郡向島宇川尻
御調郡向島
廣島市段原村六九ノ一

旧姓永井
旧姓永井

旧姓橋本
旧姓平田
旧姓福島

旧姓増田　死亡

旧姓吉原
旧姓川崎

旧姓山路

旧姓阿蘇

旧姓谷口

旧姓梶田

旧姓木原

堂野エイ
中野チトセ
長安愛子
橋本信子
野田光
野村喜代子
橋本キク
檜崎タマ
神原久枝
松尾初代
惠谷クマノ
安長フジノ
湯淺熊子
山下フデ
吉岡繁子
高田ミキノ
高橋春子
門田ツ子

阿蘇薫
井上ミチヨ
池田テルコ
伊藤春江
池田芳子
上田都江
字坪壽子
大本コト
大藏ハナ
岡セキノ
谷本ウメノ
川本スエヨ
木曾千代
村上トミ
栗井トクノ

神戸市北長狹通五丁目
尾道市長江町
尾道市久保町
御調郡美郷村字白江
尾道市久保町
尾道市久保町
尾道市土堂町
高田郡吉田町
尾道市久保町
朝鮮京城御成町
尾道市中濱
尾道市長江町
岡山市上西川町
神石郡仙養村
尾道市久保町
御調郡生口村
尾道市久保町
東京市小石川區原町得能內
御調郡美郷村白江
東京裁縫女學校
嶋市金屋町
第三回卒業生
現住所
尾道市中濱
尾道市久保町
御調郡因島土生村
尾道市十四日町
尾道市久保町
比婆郡東城町
京都市柳馬場万壽寺下ル笠原方
尾道市久保町
尾道市土堂町
尾道市十四日町
尾道市久保町
神戸市兵庫永木道七丁目三好醫院內

旧姓田阪

旧姓豊田
旧姓中川
旧姓中村
旧姓平岡

旧姓槇
旧姓横山

旧姓山本

旧姓池尻

旧姓栗原

黒木ノアヨ
小林久
樽原滿江
末平キメ
田阪マス
立上ヒサヨ
高田玉子
井口八重子
中川秀子
池龜琴
三阪玄子
平岡敬子
日高眞子
松浦コマサ
大西ヌミ
大泰司靜江
三上ツ子
三浦フミ
竹之上コチヨ
村上ノア
渡邊キヨ

三阪カメ
稻田ノア
小川ノア
大山ナチ
柏原菊代
金谷田鶴
河本キメ
楠生ミチ子
栗原フサ
見玉喜代子
小山リサ
佐藤キミヨ

沼隈郡松永町
尾道市海岸通
下關市上田中町
尾道市土堂町
尾道市久保町
豊田郡瀧戸田町
御調郡栗原村
尾道市久保町
豊田郡川源村森本實業學校
芦品郡行藤村
尾道市久保町
三原女子師範學校
尾道市土堂町
尾道市十匹日町
尾道市久保町
尾道市土堂甲
東京共立女子職業學校
尾道市土堂町
尾道市土堂町
尾道市久保町
朝鮮京城水川坊雨覆審法院官舍
尾道市土堂町
尾道市久保町
尾道市土堂町
沼隈郡高須村
東京市京橋區木挽町一丁目
三原女子師範學校
御調郡三原町
第四回卒業生
尾道市土堂町
三原女子師範學校
尾道市十四日町
御調郡吉和村
尾道市久保町
尾道市尾崎町

江川ヒサヨ
寿美谷ダカコ
田中竹代
田阪幾世
谷本壽子
竹本マツヨ
德島ルイ
永田悦
鍋島キヌエ
鍋島シゲル
西村憲代
納見チトセ
野村祿子
林クニ
原田千代
旧姓原田
原田マサノ
政池つな
松森ツヤ
正木春子
三熊小里
三井稚子
村上下枝
村上ヤス
村上ツルコ
村上ハルコ
山科由巳子
山本ツヤヨ
吉池キヌヨ
青野セツ
市川コウサ
井手ヨ子ノ
伊藤ミヨ子
今井清子
植田キクノ

尾道市久保町
東京女子高等師範學校
尾道市十四日町
三原女師範學校
御調郡糸崎
尾道市中濱町
東京職業學校
尾道市土堂町
尾道市久保町
尾道市土堂町
杉野校長御内
尾道市東御所
三原女子師範學校
御調郡栗原村
向島東村
沼隈郡松永町
尾道市久保町
御調郡向島西村
尾道市土堂町
尾道市十四日町
尾道市十四日町
御調郡八幡村
尾道市久保町
尾道市十四日町
安藝郡上瀧刈島村
尾道市十四日町
朝鮮京城水川坊覆審法院官舍
御調郡木庄村
三原女子師範學校
三原女子師範學校
尾道市久保町
沼隈郡今津村
尾道市十四日町
御調郡三庄村
尾道市久保町
御調郡吉和村

宇都宮エン
小川ハルエ
岡田トヨノ
柏原シユキ
兼森シゲヨ
村上ミツエ
兒玉ヨシ
小西ハル
小松ゑを
佐々木豊野
下川小雪
末田ヒサノ
高垣シゲノ
武田マサヨ
立神タネ
永井恒子
中司カツエ
新田ヒサ
野村アサ
林瓦
久田チヒサ
福原ら代
藤井靜子
藤原アツノ
松井エイ
三井敬子
三次イサ
宮地清子
宮崎亮
村上カヤ
村上ミチ子
村上ヨシ
毛利エキノ
本森喜美代
吉岡好

旧姓熊丸

大正四年七月十五日印刷
大正四年七月十九日發行

（非賣品）

編輯兼發行者　岡田タヅ
廣島縣尾道市立高等女學校內

印刷者　山野佐一
廣島縣尾道市十四日町百九番屋敷

印刷所　三秀舍
廣島縣尾道市十四日町百九番屋敷

發行所　校友會
廣島縣尾道市久保町尾道市立高等女學校